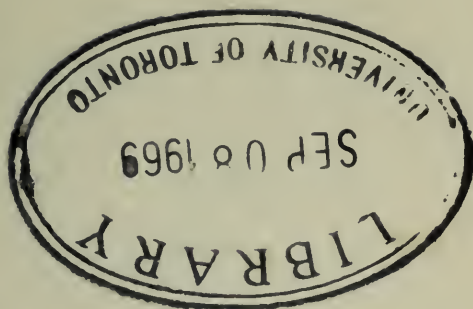
海野昌平著

實生活に及ぼす

國語と文字の波紋

發行　東京　桑文社

緒　言

本書納むるところのもの二十五項、之は大別して二つとすることが出來る。即ち、前半は日常見聞する國語的常識を拾集して趣味的に解說を加へたものであり、後半は同じく文字について誤謬を正し正確なる使用法について說明したものである。しかし、兩者とも日常接する處の手近いものゝ中から材料を求め、之が知識を一步前進せしめ、或はより廣く敷衍せしめようとした意圖は全く同じであつて、著作の目的も此の一點にあるのである。

我々が常識として知つて置かねばならぬことは、之を國語とか、文字とかといふ範圍に區切つても、多々ある。又、已に知つてゐる事でも、今少し深く廣くしたいものも多いし、さうする事に依つて、新しい興味を覺える事も少くない。例へば「年中行事」の項に述べたことや殊に「國名の起源」等は、知らずに過せばそれまでゞあるが、疑問を挿んで探究すれば、幾多の興味ある發見を得られるのである。文字に於ても同じである。外國語とは違つて、字數から云つても苦しむ事が多いのであるが、可及的に正しき理解と使用を期したい。本書の著眼は此處

である。

しかし、決して學問的、研究的の書ではない。執筆にあたつては、あくまで平易簡明を旨としたので、机上に備へて、適時引用されるのみでなく、「肩のこらぬ書」として繙いて戴けると思ふ。たゞ、以上の目的で出來た此の書が、そのすべてを網羅したのではない。頁數の關係で他日に割愛したものもある。

題して「實生活に及ぼす國語と文字の波紋」といふ。波紋とは波の模樣である。我が國語と文字が、古來いかなる波紋を描いて來たか、その跡を、讀者諸賢と共に靜かに再考三思しようといふ意味である。

昭和十二年新春を迎ふる日

著　者　識

実生活に及ぼす　國語と文字の波紋　目次

目次終り

一、年中行事の話

年中行事といつても、土地により時代によりいろ〳〵である。それ等の總べてを網羅することは煩雜でもあり、又、部分的の興味ともなるので、此處には主なものをあげて解說した。しかし、御佛名や荷前の使等は昔、宮中の重要な行事であつた。今は行はれないが、參考のため入れた次第である。其の外にも興味あることは、一部に限られても解說を試みた。

又觀櫻御宴、觀菊會、陸軍記念日、海軍記念日、靖國神社祭、鮎漁、狩獵等よく知られてゐて、起源等についても述べる要もないのは省略した。

五節供も年中行事の一つであるが、之は一つにまとめて說明することにした。

正　月

鳴雪の句に「元日や一系の天子不二の山」といふのがあるが誠によく元日の情趣を詠じた句

である。山川草木、何の異るところもなき景觀ながら、元日に見る富士は常より秀麗であり、宮城前にたゞづむ時、瑞雲棚びく大內山を拜して、何となく莊嚴の念一層胸にせまるものがある。早曉、神社に詣でる人も多いが、掃き淸められた神域も、昨日に變つて敬虔の感、一しほである。

「正月や家にゆづりの太刀はかん」の句も亦よく正月の風習をあらはしてゐる。新しい着物新しい下駄は昔で、今は新調の洋服、帽子であらう。年始廻りの新しものづくめの人々の姿が門松をたて、國旗のひらめく中に續く樣は平和の吉兆であり、又和やかな極みである。

この朝、配達された年賀郵便を廻禮から歸つた夜、靜かに讀み行く時、別離以來幾年、稍々記憶から遠のいた知人からのを見ると追憶の念新たなるものがある。この賀狀について虛禮などいふ聲があつても交誼をあたゝめる意味からはうるはしい習慣といはねばなるまい。

一月を正月といふのは何故であらうか。「正月者、立春之氣節也。本爲二政月一。秦皇帝以二此月一仍名レ政。遂改爲二正月一」等とあるから、支那でも古くから呼ばれてゐたのである。一年の始めの月で端月であるが、端も正も正しい月といふ意味から名づけられたやうである。又、孟

陽、上春、開春、献春、首歳、發歳、初歳、肇歳、華歳などゝもいひ、元日の朝を元旦と言ふ外に鶏旦、元朝、歳旦、歳首等ともいふ。

世の中が忙しくなり、打算的になるにつれて從來の行事の中には中絶されたり、簡略化されたりするものが多いが、この新年だけは最も多く舊態を傳へてゐると言はれよう。以下、主なものについて解説しよう。

門松

門松は松飾とも言つて我が國特有の風習である。これは神前に榊を供へる處から、神を祭ることの多い正月には松をたてるやうに變じたものと思はれるが、松は常盤木で古來愛重されてゐたので、一年の始めに松を飾るのは誠に意義深いことである。

飾り方にはいろ〳〵あるが、本飾といはれるのは、一丈の松を心として葉のついた三本か五本か七本の竹を新しい繩で三ヶ所を七巻き、五巻き、三巻きとし、下の方に二つ割の松の薪を並べて繩で巻き上げ、根の方は地面に圓く太い繩を張つて此の中に砂を敷き、更に左右の松に

長い竹を立て、上は横にも竹を結びつけて鳥居の形にする。この横に渡した竹には注連をかけ蝦や橙、裏白を結びつけて飾る。これが徳川幕府の本丸に飾つたものである。地方に依つては根のついたまゝの小松を門柱や入口の左右に打ちつけて、軒には裏白を澤山に結んだ注連をさげる處もあつて、いろ〳〵である。

門松は舊年内に飾つて、十四日の夕方まで飾つたが、江戸時代から七日の朝に取り去るやうになつた。この七日間を「松の内」と言つてゐる。

門松の始めは何時頃かといふ事はよく分らないが、土佐光長が書いた繪があるので、大分古いらしい。堀河天皇の御代に藤原顯季が門松を詠じた歌がある。

玉田玉敎の「稔中古事記」に次のやうな文が見える。

日神（天照大神）、天岩窟へ入り給ふの古例にて、鳥居に擬へて往昔は榊を立てしなり。日本書記神代卷に曰く、「天香山の眞坂樹を根こぢにして」とあり。松の訓は「祭木」の略なり。又、千歳經て霜雪にいたまず、孔子も是を賞せり。竹の訓は「高」なり。又「長」なり。一年に長じて堅きこと木にまさる。直き事並ぶものなし。

昆布（こぶ）

昔は廣布（ひろめ）と稱した。この音が「ひろめる」と似通ふので飾りものとし、又「こんぶ」が「よろこぶ」とも通じるので愛用されたのである。松前昆布といつて、北海道から產するものが良質で、「蝦夷松前の海岸の砂上、家の上、往來の道に至るまで一日乾すこと實に錐を立つるの隙もなし」とか、「家の屋根を昆布にてもふくなり」等とあつて、彼の地に限られたやうである。

これを食用としたのは續日本記に依ると、元正天皇靈龜六年の條に祖先以來採取してゐる記事があるので、古くからと思はれるし、喜延式や土佐日記に元日に用ひたことが見えてゐる。

交讓木（ゆづりは）

「高丈餘、似二柿葉一。霜後染レ葉可レ愛。東海諸島、除夜以二此樹葉一懸二於門戸一祝。」と支那の本

にあるが、東海諸島とは、我が國を指すのである。この葉は春まで古葉がついてゐて、新年になり若葉が出てから落ち散るので、讓ると云ふ意から名づけられ、又親が子にゆづるやうだといふので、親子草ともいはれてゐる。家の系統の祝福をこめて飾り物とされたのである。「十二月晦日に亡き人の食物にもしき、春の祝にも用ひる」と枕草子に出てゐる。

裏白（うらじろ）

これは齒朶と書く。齒は年齢の意であり、朶は長くたれ下る意である。即ち命が長く延びてしげるといふ所から祝ひものとしたのであるが、冬にも枯れないので「飾二元旦嘉祝之物一蓋取二長生不老義一」ともいはれる。

穂俵（ほんだはら）

「ほだはら」を延して讀んだのである。これは馬尾藻（ばびさう）といふ海藻を俵の形として使用したので穂俵と稱した。尤も關西では束ねて俵のやうにしたが、關東ではそのまゝにしてお供の上にかけたりした。

この海藻は枝が細く出てゐて馬の尾のやうである處から馬尾藻と稱したが、又一つには「な

のりそ」ともいふ。それは小さな浮き袋のやうな實がついてゐて、食べる時にぶつ〳〵とつぶれる音がするので喧しいから「名なのりそ」と制止する意である。藥草で、若いのは食用にもしたといふ。

橙（だい〳〵）

この實は冬に熟して黄くなるが、其のまゝ又青くなつて、四五年も落ちずに大きくなるのがある。そのため「回靑橙」ともいはれる。春の飾りとするのは、代々榮える意である。これをだい〳〵と稱したのは蔕（へた）が二つ重つてゐるからだといふ。

勝（かち）栗（ぐり）

勝栗は搗栗と書くが正しい。勝つといふ音から祝物に用ひた。出陣の時に用ひるのもその意味で、勝栗、昆布、熨斗（鮑をのしたもので、廣める意。）を三肴と稱した。

注連繩

これは正月に限らず、神社や、神を祭る時に用ひる。今、古書に見える註釋を示さう。

貞丈雜記に

しめ縄のこと、藁にて左縄になふなり。なひながら、所々に七五三の藁を下ぐるなり。三筋下げて間を置きて五筋下げ、又間を置きて七筋下げ、又間を置きて七五三と下げるなり。縄の兩端をば切りそろふ事なく、そのまゝに置くなり。これ取りつくろはず直なる姿なり。七五三の藁の間にはゆふしでを下ぐるなり。ゆふしでは紙に切れ目を入れて眞中を取りて上へ折り上ぐるなり。紙二枚重ねて切るなり。細き紙四つ下ぐるなり。

とある。日常見るものではあるが、古人の解説によつてその形が明らかとなつて面白い。又世諺問答といふ本によると

縄の端をそろへぬものなり。左は清淨なるいはれなり。端をそろへぬは、すなほなる心なり。されば天照大神の天の岩戸を出て給ひし時、しりくめ縄とてひかれたるは、今の注連縄なり。淨不淨を分つによりて、神事には必ずひく事侍り。賤が家居にひく事も正月の神を祝ひ祭る心だてなるべし。

とある。

正月には此の外に環になつた環飾を用ひる。

串柿

柿は嘉來と合せて緣起を祝つたので、澤山の嘉が串で刺したやうに來るといふ意である。

祝箸

正月三日間（除夜にも用ひる）用ひる箸は兩端は細く、中は太い。これを太箸等ともいふが雜煮等を食べる時に箸が折れるのを不吉とし、武士の間では、落馬の前兆だと思つてゐた。足利義勝が幼にして將軍職を繼いだ處が、或る年の元日、箸が折れたが、その秋に落馬して亡くなつたので、義政の時は家臣達の取計ひで、折れぬやうに太いものを用ひた事が見えてゐる。

柊(ひゝらぎ)

柊の葉には澤山の刺(とげ)がある。これで刺されると痛む。「ひゝらぐ」とは疼痛で、木の名もこゝから出來たのである。「枸骨樹」「剛穀樹」「猫兒刺」「鳥不立樹」ともいふ。四季、葉が落ちず、又葉の上に雪が積らぬといふ。神前に供へるのは此のやうな意味からである。

梅

梅花を賞することは、古來詩歌に詠まれたものが非常に多いので明瞭であるが、正月の床の飾りにもなくてならぬものである。古書に

梅は、其の花、色香もこと木に勝れ、百花に先立つて雪中に開き、君子の操あり。實にも又味ことにして藥となり食品とす。

とある。

この梅は

熟實（うむみ）といふに似たり。凡そ木の實、うめるにあらざれば食ふべからず。それが中に殊に熟めるをもて佳とする者は梅と瓜との二つなり。されば。漢土にても、たゞ此の二つを熟梅熟瓜などいひて、熟をもて稱し、我が國の俗にも、ウメといひ、ウリといひてウといふ語をもて呼びしもの、この二つなり。

とある。

南天

紅の實、綠の葉、幹の形は、いかにも正月らしい。しかし、たゞそれに止らない。貞丈雜記

の中に

南天を常に見れば、災を拂ふといふ。又軍陣の時の禁厭(まじなひ)などに用ひて災を拂ふといふこと、南天に災を拂ふべき効能はなく、南天といふは、難轉(なんてん)と同じ音なる故に、難を轉ずるといふ心にて用ふるなり。災難を轉じて吉事にするといふ意なり。

とある。誠に正月にふさはしい木である。元來、この木は昔から藥用として廣く用ひられたのである。

海　老

蝦とか鰕とか書くのが正しいので、海老は、古來吉事の飾り物とされたので宛てた字である。これは海老といふ字のやうに鬚が長く腰が曲つてゐるところから長壽者にたとへられた。支那でもその目がとび出し、角が出たり、殼を負うてゐる形が「似二小龍一」等といはれてゐる。それで、かういふ芽出度い者を床等に飾るやうになつたのである。

餅

もちはもちいひの略音で、もちは「ねばりある物」の意である。いひは「飯(いひ)」である。これ

を「かちん」といふのは「搗つ」即ち「搗く」意であらうが、又いろ〳〵の話をつけ加へてゐる。その一つは閑田耕筆の中にある記事で能因法師が伊豫國の三島で祈雨の歌を詠み、その驗があつたので、里人が喜んで餅をついて饗應したから、「歌賃」の意だといひ、又、朝廷御衰微の頃に川端道喜といふ者が毎日餅を献上したが、この道喜が褐色の服を着てゐたので、女官達が「かちんはどうしたのか」と尋ねた處からともいふ。

餅を食べたのは古くからの事で孝謙天皇の御代に、餅を作る役をやめさせた等といふ記事が見えてゐるから、この頃以前と思はれる。

餅には、三月三日の草餅、五月五日の柏餅、櫻餅、寒餅、土用餅、菱餅、大佛餅等多いが正月に用ひられるのは鏡餅と熨斗餅である。

鏡餅は上が圓くて下が平で、二つ或は土地によつては扁平のを三つ重ねるのもある。二つとするのは日月にかたどつたのである。普通「お供」「おすわり」等といふ。これは鏡の形をしてゐるところからの名である。昔、宮中で用ひられたのは上は紅で下は白であつたと傳へられてゐる。これは正月に限らず、神を祭る時に作り神德餅とも稱へたが、正月には三寶に

のせて飾つた。この飾つた餅は後に說くやうに期日が來ると割つて食べたのであるが、切るといふのは正月早々忌むべきであるとして、双物を使はずに缺き割つて、缺き餅とした。これを「鏡開き」と稱してゐる。この「開く」といふのも緣起から來た言ひ方である。後には「缺き餅」は別に海鼠形の餅を薄く切つて乾したものをいふやうになつた。

正月に鏡餅を何故飾るかといふことは、

歲暮に鏡を作りて鏡餅と稱することは、日神、岩戶にこもらせおはしける時、その御像、鏡に鑄奉りて祈り申しけるに、再び岩戶開き給ひしといふ佳例にとりて、新玉の年たちかへる春の初めを、かの當時より又しもうつゝに開け明けぬる嘉慶になんたぐへつゝ祝ひける

と、成形圖說にある。

飾り方は、三寶に大奉書を二枚重ねにして四方に敷く。その上に裏白、交讓葉を二枚重ねて四方に並べる。そして紅白の鏡餅を載せ、その上に大麥葩を十二重にのせ、大長昆布二枚を重ね、尙、穗俵二把と串柿二本と砂金餅と海老とを紅白の水引で結んだものをのせる。三寶

の周圍には、柚子、柑子、橘を二十づゝ、かやの實、勝栗を二合、密柑、白柿を二十づゝこれが宮中の飾り方であるが、これを本として武家等ではいろ〳〵に飾つたのである。

熨斗餅は「延し餅」である。手で延し廣げたのである。これは雜煮の中に入れて食べた。尙鏡餅は「一と重ね」と數へるが、この方は一枚と呼んだ。

餅は何れも芽出度いものとされて、いろ〳〵の祝儀の時に搗いて祝ふのであるが、古書に次のやうな話がのつてゐる。

豊後國球珠郡に廣い野があつた。大分郡に住む人が此處にやつて來て、家を造り田を耕して住んでゐたが、次第に富んで行つた。或る日、酒に醉つた時に、弓を射ようとしたが、的がなかつたので、餅をくゝりつけて的として射ると、餅は白い鳥となつて飛び去つた。それからは次第に衰へて、蓄財もなくなり、遂に又もとのやうな荒れ野となつた。天平年間に速見郡に住んでゐた訓邇(くに)といふ者が、こんなに荒れたのは惜しいと思つて、此處に移つて田を作つたが、苗は皆枯れてしまつたので、あきらめて二度と作らなかつたといふ。これは餅は福の神の源となるので、この神が去つたゝめである。

とある。福生菓などと稱してゐたこともあつた。

雜　煮

餅といろ〳〵のものを雜ぜて煮る。處に依り、家に依つてその作り方もまち〳〵である。そして中に入れる結び昆布は結び喜ぶ意、八つ頭芋は子供が多いやうにとの意等いろ〳〵に言はれてゐる。

牛　蒡

この根は深く地中に入つてゐるので、この根のやうに家の基礎も張り擴がるやうにといふ意から用ひられる。

豆

正月に用ひられるのは、多くは黑豆、隱元、大豆である。人の身の丈夫なのをまめといひ、忠實なのをまめといふので、正月にこれを食するのも「まめで働け」といふ意味からである。

田作（ごまめ）

之も豆と同じ意である。田作と書くのは百姓が五月頃に稲の苗を植ゑる頃に一番食べるからと言はれてゐるが、又乾しかためたものは田畑の肥料ともするからといはれる。

鯛

この音が「芽出度い」と似てゐるので、正月に限らず、吉事に用ひられる。「形色倶（トモニ）可レ愛。在二水中一則紅鱗動レ光。自レ古供二宗廟之紀一薦（ススム）二至尊之膳一。」とあるやうに形が上品で、色彩も晴れ〴〵してゐるところから用ひるのである。

鰯

「弱し」から轉じたので、捕へられると直ぐ死に、又傷つくので、國字「鰯」と名づけたのである。これが正月の食膳に上るのは、鯛を王とし、鰯を家來とする意味からだと言はれる。

數の子

節分の夜にこれを柊の葉と共に家の入口にさして置くと、その年に惡鬼が來ないと言ふ。
鯡（にしん）は「かど」と言つたので、その子は「かどの子」である。それが、無數にあるので、「數

の子」と書くやうになつた。それは、その名によつて家門繁昌を祝ふ意である。正月ばかりではなく、出產、婚禮等にも用ひられるのはこの義からである。

鰊と書くのは、「東海に出づる故なるべし」とある。

屠　蘇

屠蘇は正月になくてはならぬものゝ一つである。紅帛の嚢に入れて味醂につけて飲むのであるが、之を酌む時いかにも正月が來たやうな氣分になるものである。

一體、屠蘇はどんな物を調合したかといふと、いろ〳〵に言はれてゐるが、防風、白朮、桔梗、大黃、川烏頭、附子、菝葜、細辛、麻黃、山椒、蜀椒、肉桂、桂心、茱萸、赤小豆等十數種の草根木皮を適當に混じたものであるが、我が國では白朮、桔梗、蜀椒、桂心、大黃、烏頭、菝葜、防風の八種であるといふ。これについて面白いのは、この藥を酒に浸して飲むと「變レ老爲レ兒、變レ異爲レ常」とか「一人服レ之一家無レ病、一家飲レ之一里無レ恙」等といつて元氣を恢復し病疫を避けるといはれてゐるが、支那の調劑の中の烏頭、附子等は毒物で、酒の中に長くひたして置くと毒素が澤山に出て、飲用したゝめ倒れた事等が書物に見えてゐ

る。今の屠蘇には勿論、烏頭や附子は含めてゐない。

屠蘇は屠蘇とも書いてゐるが、之は屠の字の尸が「しかばね」で、正月にふさはしくないので尸と書いたのである。屠蘇の語源は數說あつて定め難い。

一、屠蘇庵の意で、この庵に住んでゐた孫思邈が毎年屠蘇酒を作つて人々にも飲ませた。

二、この酒は邪氣を屠つて元氣を蘇らせるから。

三、昔、支那では貴人は正月には屠蘇といふ帳の中に一家の者が入つて酒を酌み、邪氣を拂つたといふ。

昔は飲み方にも規定があつたので、大晦日に井戸の中にさげて置き、元日早朝とり出して四角の嚢に入れてあたゝめた酒に浸し、家族の者は東面して坐し、幼少者から順に飲む。これは幼い者は年を重ねるので先にし、老者は年失ふから後にする。又禮記といふ本にある說によると、藥を與へる時は臣下が先づ飲用して君に進め、子供が飲んで親に進めるものとされてゐる。これは所謂毒味といふ意味であらう。

この屠蘇が正月に用ひられるやうになつたのは、五十二代の嵯峨天皇と傳へられてゐる。

四方拜

四方拜は四大節の一で、古は此の四方拜と朝賀の禮、元始祭、新年宴會は元日に行はせられたのであるが、今は五日までにそれ〲分けて行はせられる。この朝、主上には神嘉殿に設けられた玉座に出御あらせられて、伊勢神宮始め天神地祇、神武天皇御陵、先帝の御陵（大正天皇）埼玉縣の氷川神社、賀茂神社、男山八幡、熱田神宮、鹿島、香取兩神宮を遙拜あらせられて、太平と寶祚の隆祥、庶民の幸福を祈らせられる儀式である。この朝は四時に準備をなし、五時出御せられて御拜。それより賢所を拜し給はれるのである。

これは宇多天皇の寛平二年に始つたと傳へられるが、當時は淸凉殿の本庭で行はれ、降雨の時は弓場殿で行はれたといふ。この座には屛風を立て廻し、北向に玉座を設け、前には白木机に香、花、燈を供へる。陛下は洗髮沐浴の後、黃櫨染（くわうろぜめ）の御衣を召され、劍を捧持する近衛府中將を從へさせられて出御、藏人（くらうど）は屛風の傍に笏を奉じて侍す。主上には先づ北極星を拜せられ、次で天地四方山陵を御拜あらせられるといふ。

この儀式は、上皇及び攝政關白家でも行はれたが、足利時代の中頃から宮中の諸儀式が廢されるやうになり、この四方拜も中止となつたが、應仁の亂以後再興し、(後土御門天皇の文明七年)將軍からも献上物を奉つたといふ。

元日節會といふ事が昔は行はれたが、之は今は五日に新年宴會として行はれる。この節會、卽ち宴會は、陛下が紫宸殿に出御あらせられ、百官群臣を召して行はれる宴で、その始めは神武天皇の御代と傳へられる。この宴に「三献の儀」といふ事が行はれる。之は、第一に國栖歌、笛を奏し、第二に群臣に酒を賜はる御酒の勅使の儀、第三には立樂といつて、日華門、月華門から樂人が春庭樂を奏して入り來り二曲を終つて退くのである。

若水

元日、五時前に汲む水である。水は萬物を成育させるもので、若水を神前に供へ、それ〴〵に用ひると其の年の邪氣を拂ふのである。昔は

今の世に正月元日初めて汲む水を若水といふは誤りにこそ。古は立春の日に汲む初の水を

若水といふなり。

とあつて、立春の朝のものであつた。之を汲むのは歳男の役で、麻の裃をつけて、新しい手桶に龜と鶴の字を草書にして、その年の年號と一月元旦の文字を書き、輪飾をつけるのである。

元日には午前十時まで掃除をするものではないとされてゐるが、これは新しく來る陽氣を拂ひ捨てずに靜養する意で、昔は一日中しなかつたやうである。尤も支那では五日まで「糞土を除かず」といはれてゐる。そして五日になると、車を引いて野原に行き石を載せて歸る。これは寶物を拾つて歸る意としてゐるのである。

書初

元日には筆をとつて今年の書き初めをする。これも昔は吉方に向つて赤い紙に吉福の文句を書いて歲德神に供へた。元旦試筆と言つて、若水を汲んで墨をすつて書いたが、二日の朝に書くのが普通である。地方によつては十五日に、これをどんど燒の火の中に投げ入れ、その燒け片が高く上れば字が上手になる等ともいつてゐた。

初夢

二日の夜である。以前には東京でも二日の夕刻になると「お寶〳〵」と呼んで寶舟を賣りに來たものであつた。これは正月氣分のするもので、子供等は早速買つたのであるが、今は玩具屋の店頭に並ぶ位のものである。この寶舟とは半紙に七福神の乘つた寶舟の繪が書いてあつて、その上の方に

なかきよのとをのねぶりのみなめさめ
　　なみのりふねのおとのよきかな

といふ歌が書いてある。此を枕の下に敷いて寢るとよい初夢を見るといふのである。
これは買ふべきものとは限らないので、各自書く人もあつた。
さて、此の歌は上からも下からも同じに讀めるのであるが、分るやうに書くと、
長き夜の十の眠りの皆目覺め
　　浪乘舟の音のよき哉

となる。「十の眠り」とは佛教の十界（佛界、菩薩界、緣覺界、聲聞界、天上界、人間界、修羅界、畜生界、餓鬼界、地獄界）で、長い夜の眠りの中に十界を流轉し來つて、こゝに初めて解脫の境地が開けるといふ意である。

しかし、寶舟の繪には、金銀財寶を澤山積んであるところを見ると、そんな精神的な淸い意味ではなくて、もつと功利的なものと見られるが、中にはそんな物を積んでゐない繪もあるので、初めは去年の惡夢を流して新年を祝福しようといふ意味ではあるまいか。

この歌は誰が作つたかは分らぬ。

それではどんな夢を見ればよいのであらうか。それは昔から三つの吉夢を數へてゐる。即ち一富士、二鷹、三茄子（なすび）である。これがどうして吉夢であるかは分らないが古人はこれについていろ〳〵の解說をしてゐる。

笈埃隨筆によると

この三事、夢の判にあらず。皆駿州の名產の次第をいふ事なり。富士はさらなり、二鷹は富士より出る鷹は唐種にて良なり、こまかへりといふ。三茄子は此の國第一に早く出す處

の名産なり

とある。

元　始　祭

一月三日に行はれる。元始祭としての制度が定つたのは明治五年である。昔はこの名称のもとに特に行はなかつた。古事記の「元始綿邈」といふ語から名づけられたのである。

鏡　開　き

一月十一日の行事である。前にも記したが、鏡餅を下して割つて汁粉として、神前に供へ、又家内の者も食するのである。

昔は、

二十日に鏡を祝ふは初顔祝(はつかほいはひ)といふ詞の縁をとるなり

とあつて、二十日に行はれた。又、

二十日と刄柄と訓同じ。二十日を祝ひしは刄柄を祝ふといふことのよし、俗にいひ傳へなりともある。これが十一日となつたのは、承應三年正月二十日、四代將軍家綱が薨じたので、以後、忌日を避けて十一日となつたのである。

又、今は小豆を煮てゐるが、昔は武士の家では小豆を煮ると、ふくらんでさけるので腹切りを聯想して忌み嫌つてゐた。

小豆粥

十五日に行はれる。小豆を煮て飯を入れ、又粥柱といつて餅を入れる。これには支那に傳說がある。

黄帝の時代に唐の國に蚩尤といふ惡人があつた。黄帝と戰つて大敗し、斬罪に處せられたが、首は天に上つて天狗となり、胴體は蛇靈となつて人を苦しめたので、黄帝はその命日である十五日に小豆粥を作つて祀つたといふ。

小豆粥の起源は此處にあるといはれてゐるが、十五日は、昔なら月は滿月で望である。この望と餅とが混同されたともいはれる。正月が無事にすませた感謝の意のための行事である。世風紀といふ本に、

小豆粥を煮て天狗のために庭中案上に祀る時、其の粥凝る時、東の方に向ひて再拜長跪して服すれば、年を終るまで疫氣なし

とある。

又、小豆を煮る時、枝を削つた木でかきまぜ、女の尻をたゝくと男の子が生れる等とも傳へられてゐるが、根據はない。しかし、足利時代には、將軍まで妻の肩を三つづゝ叩いたといふ。

守貞漫稿に次のやうな事が見える。

正月十五日、十六日、俗に小正月といふ。元日と同じく戶を閉す。又三都ともに今朝、赤小豆粥を食す。京阪はこの粥に聊か鹽を加ふ、江戶は平日粥を食はず、故に粥を好まざる者多く、今朝の粥に專ら白砂糖をかけて食すなり。鹽は加へず。又、今日の粥を餘し蓄へ

て正月十八月に食す。俗に十八粥といふ。京阪には此の事なし。

藪入り

商店に働いてゐる者や雇はれてゐる者が、一月十六日に暇を貰つて、遊びに行つたり、親の家に歸つたりすることは、近頃は定休日が毎月あるので昔ほどに賑はゝなくなつたが、それでも各所の盛り場には、新しい着物に角帯しめて鳥打帽かぶつた姿は見受けられる。

三才圖繪に

按ずるに正月十六日、庶民の子女及び奴婢、此の日を以て閒暇となし、父母の家に還り、自在に遊戯し、或は寺院に詣づるを免さる。近年、七月十六日も亦然り。蓋し此は盂蘭盆たるを以て慈愛より出で、終に春秋二度となる。俗に之を藪入りといふ。

とあるやうに、元來は正月だけのことであつたのが、元祿頃から七月にも行はれるやうになつたのである。

この藪入りの語源については諸說あるが、二三主なるものを記すと、

1、「和俗の言（我が國の一般人の言葉）に凡庸の者をやぶと稱する例多し、奴婢の故郷草深くむさとしたる土地に入るとの意にて卑下の詞なるべし」と年中行事大成にある。

2、「宿入り」から轉じたのである。

支那では「走百病」と稱して、この正月十六日には寺詣りするのであるが、之は外に遊びに行つて元氣を養ひ、百病を走らせる意であらうが、この習慣が渡來したものと思はれる。

又、我が國では、昔その前年中に嫁に行つた妻が此の日に里に來ると、餅を搗いて祝ひ、その餅を十六餅とも、略して六餅ともいつてゐたのである。

明治以前は主人は雇人に仕著として、縞の綿入に、小倉の帶、白足袋、晒の下帶、手拭一本、鰌鼻緒の雪駄、扇子一本を與へ、又當日の小使錢として、主人から三百文、內儀からは二百文、その他、平常使つてゐる番頭などからも與へたといふ。

閻魔詣

正月十六日に行はれる。閻魔といふのは地獄にあつて、常に十八人の將と八萬の獄卒を從へ、

てゐると傳へられる。そして人が死ぬと、この王の處で生前の惡事を審判し、その輕重に依つていろ〳〵と苦しめて再び犯さないやうにするのだといふ。

十六日は亡者を苦しめることも止めて、靜かに休ませるので、「地獄の釜の蓋が開く」日として、勸善懲惡の意をふくめて、寺院を參詣する者が多い。

これも一月十六日に限られたのであるが、後に七月にも行はれるやうになつた。丁度、藪入りであるので、閻魔堂のある寺院は參詣者に露店や見世物で賑ふのである。東京で有名なのは淺草寺、下谷の世尊寺、深川の八幡宮境内、芝の增上寺、四谷の太宗寺、目黑の不動尊境內等である。閻魔堂に參詣すると地獄の苦しみを避れるばかりではなくて、いろ〳〵のよい事があると傳へられるが、十訓抄にある話は面白い。

晴遠といふ者は代々還城樂といふ舞を舞つて宮中に仕へてゐたが、まだ人に傳へない前に死んでしまつた。そこで、家人は棺を柞森(はゝそのもり)の下に置くと二三日經つて側を通つた者が呻く聲を聞いたので、怪んで遺族に傳へると、妻子親族が急いで行つて見た。すると晴遠は生きかへつてゐた。家に連れ戻つて、介抱すると、次第に元氣を取り戻して言ふのには「閻

魔王のもとに行つて罪を定められた時、一人の者がいふのに、この者は、まだ還城樂を傳へないのに死んでしまつた。それは惜しい事だから、許してやるからもう一度戻つて、よく傳へてからにしようと相談すると、他の者も賛成して、歸されたと思ふと息を吹きかへしたのである。」と語つた。人々は、「誠に靈驗あらたかなことである。」と言つて非常に喜んだが、それから此の舞を季高といふ弟子に傳へて死んだ。

廿日正月

正月と言つてゐるうちに日は過ぎてしまふ。最後の正月を心から樂しんで別れようといふのが、廿日である。この日は「初（はつ）」といふ訓に通じるので祝ひ日としたのであるが、和漢三才圖繪に次の意味が書いてある。

京師の俗、正月廿日には家毎に赤豆餅を食ふ。思ふに小豆は赤色、紅縷に準ずるのであらう。但し、天を祭らず、口を祭るだけである。其の他、近畿地方の民俗は、此の日に糯米に小豆を混ぜて蒸し、强飯を作つて食す。

京阪地方では新年の祝ひに鰤を食べるので、この頃になると食べつくしてしまふから、骨を煮出して食するために「骨正月」とも言つてゐるといふ。

正月の其他の行事

元旦詣

元日の早朝、氏神や主なる社頭に詣つて、新年を祝し長久を祈るので、今では除夜の鐘が鳴つて十二時を過ぎると先を競つて參拜する。

惠方詣

金曜星の方向は大凶三年塞りといつて嫌ふので、その反對の方に當る寺社に參詣して幸福を祈るのである。惠方はその年によつて異るのである。

歲德神

歲德神は神道では豐受大神と素盞嗚尊であるが、佛教では、牛頭天王の妻である婆梨女とか牛頭天王であるとか、いろ〳〵にいはれてゐる。

家の中の吉方に棚をつり、注連を張り、小松を立て、燈明と供物とを供へて祭る。この棚を恵方棚ともいふ。

寒　詣

寒垢離（かんこり）とも稱して寒中の夜に白衣に白鉢卷をして神社佛寺に參詣して祈念する。

寒　念　佛

僧侶が寒中に念佛を誦しながら町を歩く。

寒　稽　古

寒中に武道の稽古をするのである。早朝、武道具を持つて道場に通ふ勇ましい姿は此の頃は見られなくなつたが、稽古に行く者は多い。

初　　荷

二日に問屋から華客（とくい）の店に初めて荷物を運ぶ時に、美しく着飾つた人々が、美裝した車をひくのは春らしい情景であるが、都會では少くなつた。

初　　寅

正月の最初の寅の日で、この日には毘沙門詣をする。

初　卯

最初の卯の日で、この日に參拜する神社では、惡鬼を拂ふといつて、繭玉(まゆだま)や卯杖、卯槌のついた玩具を賣つてゐる。

初　巳

最初の巳の日にあたる。この日には辨才天のある寺や稻荷神社に參拜する。此の日のお守を特に巳成金(みなるきん)と呼んでゐる。

初　亥

最初の亥の日である。この日には摩利支天へ參詣するのであるが、それは、水火の難や盜難、毒虫の難を免れると傳へられてゐる。

七福神詣

松の內に七福神を祭つた寺社に參拜すると幸福があるといはれてゐる。

追儺

今では追儺と節分とを一つにしてゐるが、節分とは「季節の分れ」で、冬が春になる日のことである。その夜に行はれるのが、追儺で、「豆まき」「鬼やらひ」等とも呼ばれてゐる。舊暦では大抵の年は一月一日から春であるから、その前日の十二月三十日に行はれたのである。

昔はたゞ「儺」といひ、之を我が國では「なやらひ」或は「鬼やらひ」と讀んだのであるが後に追を加へたのである。勿論、支那の風が傳へられたので、彼の國では、「撃レ鼓、驅レ疫」等といつて、周の代には四季とも行はれたのであるが、冬が最も盛んであつたといふ。

我が國で行はれるやうになつたのは、文德天皇の慶雲三年、諸國に惡疫が流行し、澤山の百姓が死ぬので土牛を作つて初めて大儺すと傳へられてゐる。これから宮中の行事となつたのである。この土牛は土牛童子の像で、陽明門待賢門は靑色、美福門朱雀門は赤色、談天門藻壁門は白色、安嘉門偉鑒門は黑色、郁芳門皇嘉門般富門達智門は黃色に塗つてある。それは靑は春で東の門に、赤は夏で南、白は秋で西、黑は冬で北といふ意である。この土牛の高さは二尺、

板にのせて立てた。大寒の日に立てゝ立春の前夜に除いたといふが、これが何時の頃からか、次のやうになつた。

この夜午後八時、大舎人の役人が方相氏（鬼のこと）となつて黄金の四つ目の恐ろしさうな面をつけ、上は黑、下は朱の衣裳をする。又、侲子といつて廿人の者が紺の着物をつける。この人々を役人が連れて承明門の外に來て、中務省の指示を待ち、東の宣陽門、南の承明門、西の陽明門、北の玄暉門の四つに分ける。十時になるとそれ〲門を叩いて「儺ふ人等率ゐて參入」「某宮親王門に候す」と奏すると、方相氏を先として親王以下がこれに從つて中庭に並び儺祭を行ふ。これが終ると方相氏が聲をあげて戈で三度楯を打つ。一同がこれに和する。それから桃の弓に葦の矢をつがへて四方を射、桃の杖で惡鬼を追ひながら宮城の四門を出る。それから〱郊外まで京都の役人達が追つて行く。この方法は支那で行はれてゐたものを基としたやうである。この儀式は武家時代になつて廢されてしまつたが、今では豆撒きが行はれてゐる。

豆撒きは何時頃からの事かは分らないが、宇多帝の御代から等と傳へてゐる。これには面白い傳說がある。

鞍馬の奥、僧正ヶ谷の美曾路池の側に一丈四方位の穴があつて、その中に藍婆惣主といふ二つの鬼神が住んでゐた。時々都に出て亂暴するので、毘沙門の御示現で、鞍馬寺の別當が朝廷に七人の博士を集めて七々四十九の家から物を取つてこの穴を塞ぎ、三石三斗の大豆を炒て鬼の目をうつと、ために目はつぶれて捕へる事が出來る。又、鬮鼻といふ鬼を捕へるのには、「この鬼が人を食はうとする時に、鰯を串にさして燒いて家の門に差して置けばよい。」と奏上したので、直ちにこの鬼を捕へたといふ。

又、京都の郊外に豆塚といふものがある。これにも面白い傳説が鹽尻といふ本にある。寛平の御代に惡病が流行したので貴船神社を祭つた。それから除夜にその地の人は神輿をかついで池を廻り、炒り豆を枡に入れて四方に撒き、殘りの豆と枡を地中に埋めたのが豆塚である。

今は各寺院で歳男を招いて盛大に行はれてゐる。一般の家でも「福は內、鬼は外」との呼聲で玄關口から各部屋に撒き、人々は自分の年の數だけ拾つて食べるといふ習慣になつてゐる。

節分

節分は季節の分れであるが、たゞ節分といふと立春の前日のことである。この夜の豆撒きの事は前に述べたが、この日に民間では鰯の頭を柊にさして入口に打ちつけるのだが、それについて年中故事要言に次の文がある。

古は鰯にあらず、なよしの頭なるにや、貫之の土佐日記に、元日の下に「今日は都のみぞ思ひやらるゝ。小家の門の端出の縄なよしの頭柊等いかにぞとぞいひあへる」と書かれたり。今の世、節分の夜に鰯の頭を軒にさす事、閻鼻といふ鬼の人を食はんとするを防ぐ術なる由（中略）

初午

二月第一の午の日の行事で、稲荷神社の禮祭であるから稲荷祭ともいはれる。稲荷神社は、倉稲魂神、猿田彦神、大宮女神の三神を祀つたので、京都の稲荷山にあるのが最も古く大きく

官幣大社であるが、衣食住の守護神であるといふ處から、全國に祀られるやうになつた。京都の稲荷神社の祭禮は四月に行はれるのであるが、初午として何故に二月にも祭るかといふと、稲荷山に神を祀つたのが、元明天皇の和銅四年二月十一日（七日とも九日ともいふ說あり）で、その日は二月の初めの午の日であつたからといふ。

この日には、その年の福運にあづからうとして、稲荷神社に參拜し、子供達は小屋を造つて太鼓を鳴らし神樂のまね等をする。

土地によつては、この日、神社の前で穀物の種を賣つてゐる。この種を買つて播くとよくなるといふからである。

元來、稲荷は稲生の意、卽ち稲は飯のもとである。その稲が「生る」といふ處に緣起を結びつけたのである。しかし、稲荷神社を祀るのは農家ばかりではない。

衣食の神にて、百姓は種芋をいのり、商人は賣得を願ひ、工業は鍊磨をねがひ、公業武事といへども此の神の利益を被らざるといふ事なし。されば往古は天子諸侯といへども、膳に向ひ食事の時は、匕箸をおろさゞる先に、少し飯をとりて膳のかたはらに置き、この神

に備へ給ひきとぞ

とあるやうに、信仰者は職を問はない。

稲荷神社には、どんな小さな社にでも「正一位稲荷大明神」の幟を立てゝある。これについて面白い話がある。徳川時代に寺社奉行の阿部備中守正術が藤森社司にその理由を尋ねて、

「天慶三年八月二十八日に従一位に昇進した事は見えてゐる。何年から正一位となつたか」

と問ふと、社司は返答が出來ず、日延べを願つて一萬日になつたといふ。成る程、古來、攝政關白の人でも生前、正一位になつた者は少い。神に位階のあるのもをかしいが、馬琴は兎園小說の中に、平田大角の言を引いて、

古、三位を授け給ひし後、日本國中に神社、おしなべて一階を昇せ給ひし事、宇多天皇の御時より總べて四ヶ度あり。されば速くに正一位にておはすこととなり。さる故をば、いかでお答へ申されざりけん

と藤森社司を抗擊してゐるが、よく分らぬ事である。

稲荷神社には狐がつきものであるが、稲荷山に狐が多かつたので、使者としたので、八幡社

の鳩、熊野の烏と同じ意味である。夢の代といふ本に

その地に多き故に、民是を言うて崇敬する故に集まるなり。或は社前に土偶の狐を献じ、だん〳〵と多くなりたるが例となる。遂に一轉して、凡俗は狐を以て稲荷の神體と思ふやうになりたり。これよりして稲荷社ごとに狐を祭る。諸所の鎭守或は狐の子を生みたるを見つけて祠を立て、稲荷の神職に告ぐれば、忽ち稲荷大明神の神號を送り、幟幢を立てゝ尊敬す。

とある。

針供養

二月の八日に行はれ、「おこと」「事納め」とも稱してゐた。折れた針を集めて淡島社に納めて、今までつくしてくれた禮心(れいごゝろ)を表すのである。

この日には裁縫を休んで「おこと汁」を作つて食べたといふが、それは、小豆、牛蒡、芋、大根、豆腐、燒栗　くわゐ等を入れて作つた味噌汁のことである。

紀元節

二月十一日の紀元節は、神武天皇が大和國橿原宮に御即位の式を擧げ給うた日である。この最初は明治五年一月二十九日であつたが、七年になつて新暦となつたので、日本書紀にある、

辛酉年春正月庚辰朔、天皇即帝位於橿原宮、是歳爲天皇元年

といふ記錄によつて、御即位の年を紀元元年正月一日とし順に數へると二月十一日に當るのでこの日に定められたのである。天皇が御即位になつたのは五十二才であらせられた。御即位せらるゝや、論功行賞を行はせられ、道臣命（みちのおみのみこと）には築坂に宅地を與へられ、大來目命を守護に任ぜられ、其の他の功臣もそれ〴〵國造（くにづくり）にし、天富命をして鳥見山（とみやま）に天照大神の御恩を奉謝せしめ三種神器を奉祀あらせられた。我が國にとつては誠に意義ある日で、近來この日に建國を記念するため、建國祭が行はれるやうになつた。春まだ淺き此の朝、瑞雲たなびく大内山を拜する時、國内を平定し給うて大和の地に御即位の式を擧げさせられた神武帝の御姿が尊くも思ひしのばれるのである。

この日、宮中の賢所、皇靈殿、神殿で御親祭が行はれ、夜は御神樂が奏せられる。豊明殿に於ては御祝宴が行はれる。又、各神社に於ても祭典を施行せられ。御陵には勅使が派遣せられる。

涅槃會

二月十五日は釋迦の亡くなつた日である。涅槃とは「消える」で、死ぬ意である。

釋迦が亡くなつたのは八十歳、この夏に弟子の阿難と共に二人で吠舍釐國拘尸那揭羅城に向つたのであるが、その途中で純陀といふ者から給せられた食物で腸を害して痛苦に堪へられず、路傍の沙羅雙樹の蔭に入つて休み、阿難の看護も効なく、十五日夜半に死んだのであつた。この時、頭は北に、右脚を西に向けて居つたと傳へる。そして、沙羅雙樹は根が八本あるが、二本づゝ一つになつてゐた。この木が如來の死を悲しんで白く變り、枝葉は屍に蔽ひかゝり、空も悲しみ哀聲が何處からともなく聞え、大海湧き上り、川の流れは涸れ、日月も光なく黑風が吹いて草木が折れた。その様は傳によると極りなき悲しみであつたやうである。

諸天哀しみ號びて天の香華をふらし、天の音樂を奏す。唱へて曰く、「苦哉〳〵、如何ぞ一旦慧日滅沒すや。一切の衆生慈悲の父を喪ひ、所敬の天を失ふ」と。或は佛に隨うて滅する者あり、或は心を失ふ者あり、或は大きに叫びて胸に槌つ者あり。或は悶絶して大地に倒るゝ者もあり。

と書いてある。人々の追慕の涙にくれる樣が誇張して記されてゐる。遺骨は八國に分つて供養した。

この時の樣を書いたのが涅槃繪であるが、今に傳はるものゝ中で高野山金剛峯寺にあるのが最も有名である。この繪を飾つて法會が行はれる。

我が國で行はれたのは平安朝時代の初期に山階寺で壽廣が行つたのが最初で後に宮中でも行はれるやうになつた。現今は各寺院だけである。

祈年祭

二月十七日に行はれる祭典である。これはその年の五穀豊穰を宮中三殿、伊勢神宮初め諸神

に祈念する儀式で、「としごひのまつり」とも稱し、秋の大嘗祭と共に古來各神社で大祭として行はれる。

一時、廢絶の形になつてゐたが、明治天皇は明治二年再興せられ、神宮を始め全國の官國幣社に幣帛を供進せしめられ、大正二年からは府縣社にも祈年、大嘗の兩大祭には奉幣せしめられることゝなつた。特に伊勢神宮には勅使を御差遣あらせられるのである。

二月四日に宮中で班幣の儀を行つて、各神社に獻進の幣帛を班たせ給ふが、之を祈年祭班幣といふ。そして、伊勢神宮には勅使を、官國幣社には所在地の地方長官を、府縣鄕社には之に準じて地方官、町村長を遣して供進せしめられる。宮中の三殿の式典は、一時、皇靈殿は四日賢所神殿は十七日に行はせられたが、今は皆十七日に改められた。

この式典が行はれたのは天武天皇の御代で、公事根源に、

天武天皇四年二月に始めて此の祭あり。

と記され、また

天武天皇四年二月甲申有二祈年祭一。

とある。文武天皇の大寶令にも制定してあるが、詳記されたのは、淸和天皇の貞觀儀式、醍醐天皇の延喜式である。

當日は、京畿から、白鷄一隻、近江より白猪一頭を献ずるのであるが、之は御歲神に供へるのであり、左右の馬寮からは各々神馬十一頭を献ぜられた。この馬は伊勢神宮を始め二十二社に献ずるのである。

雛　市

雛人形をはじめとして三月三日のお雛祭に必要なものを賣る市である。昔は二月二十五日からと定められてゐたが、今は二月に入るとそろ〳〵その聲を聞く。

德川時代から、東京では日本橋の十軒店で行はれるのが最も有名であつた。兩國橋の畔では露店の市が開かれたといふが今は廢れてしまつた。

潮(しほ)　干(ひ)

海水の干潮になるのは毎日あつても、舊暦三月三日前後が大潮と言つて最も干滿の差が大きい。恰もそろ〳〵暖氣も加はるので、一日を出でゝ貝取りに興じるのであるが、昔は取つた貝や小魚はその場で料理して食べるのであつた。

古來、この名所として傳つてゐるのは

堺住吉浦凡そ三里ばかり干潟となりて見物の男女沖に出で、蛤を取るなり。又、所の人は多くとりて見物の人へも賣るなり。すべて潮干は入海の分は何方も同じ事なり。然れども堺浦、住吉浦の潮干その名高し。尼崎浦の潮干甚だよし。砂海にて貝類をとること自由なり。江戸にては品川の潮干賑やかなり。此の浦では比目魚多くして、鹽のたまりに居るを見物の人とりて樂しみとす。

と、山海名物圖繪に記されてゐる。

地　久　節

皇后陛下の御誕生を祝ひ奉る日である。

この起源は明治七年五月二十八日、昭憲皇太后の御誕生日に御祝儀を行はせられたのが始めであつて、この語の起りは天長節と同じやうに、老子の「天長地久」とあることから出てゐる。

彼岸（ひがん）

春分と秋分とを中心として、その前後七日間を彼岸と稱して、寺院に詣り墓所に參るのである。大抵、春分は三月二十一日、秋分は九月二十一日で、此の日を「彼岸の中日」と言ひ、第一日を「彼岸の入り」、第七日を「彼岸の明け」といつてゐる。

彼岸といふ語は佛語で、生と死の間に大海がある。この煩惱の大海を越えて、涅槃に達するのが彼岸で、即ち此の眞如の世界、涅槃の世界を指していふのである。菩薩は生の世から、此の岸に渡す役を努めるとされてゐる。

この日にお寺で讀經、法話をするのが彼岸會であるが、これは我が國特有の行事で、印度や

支那にはないことゝいはれてゐる。これについて和漢運氣指南に、

此の時、天氣和暖に、晝夜等分にして、萬民農業隙ある時節なれば、寺院に詣で信心を進め、作善をもなさしめん爲めに、立置いて諸人を敎化するなり。

とあつて、三月も九月も時候もよいので寺院を參詣して後世安樂を願ふ人々の心から始つたことらしい。そして、此日は太陽が正しく西に沒するので、西に極樂があるといふ僧にとつては說明し易い時なのであらう。又、七日と定めたことについても、草茅危言に、

天竺（印度）の法は、上下四方（東西南北）中と立て、七類あるより何事も七を以て紀とするなり。これ、豈、暦算に干渉あらんや。

と言つてゐる。

この法會は、何時頃から行はれたかといふ事はよく分らないが、延暦二十五年二月に諸國に命を下して金剛般若經を讀ましめたとあるが、之が起源のやうである。

この日には「お盆ぼた餅、彼岸團子」といつて、團子を拵へる習慣である。また、時候の上でも一つの區切りとして、「暑さ寒さも彼岸まで」といふ。

皇靈祭

春分の日と秋分の日とに行はれる。聖上親しく皇靈殿に出御あらせられて、歴代の天皇、皇后、皇妃の靈を祀り給ふ日である。

現今のやうに春秋二季皇靈祭を行はせられるやうになつたのは明治十二年からの事である。明治二年に東京に御遷幸と共に神殿を建て給ひ賢所と共に天神地祇を始め皇靈を鎭められて、翌三年正月三日に祭典を行はせられた。しかし、この神殿は六年に火事のため燒け、赤坂離宮を假御所とせられて神殿も御移しになつたが、二十二年皇居新築と共に宮城に賢所と隣りして建てられたのである。

この式典の起源は遠く神武天皇に始まると傳へられる。即ち四年二月、大和國鳥見山に靈時（まつりのには）を建て給ひ、皇祖を祀り、

我皇祖之靈也、自レ天降鑒、光ニ助朕躬一、今諸虜已平、海內無レ事、可下以郊ニ祀天神一申上ニ大孝一者也

と仰せられたのである。

この皇靈祭と共に宮中では、神殿祭が行はれる。神殿には舊く八神殿に祭る高御魂神、神魂神、生魂神、足魂神、玉留魂神、大宮乃賣神、大御膳部神、辭代主神の八神と天神、地祇を祀り奉るのである。これも、明治十二年の秋から親祭あらせられることになつたのである。

花見

四月陽春の候に咲き出す櫻ほど、古來人々の心を動かしたものはない。花にもいろ〳〵種類はあつても、たゞ花といへば櫻を思ふ程、我が國の人々にとつては離れられぬ親しさ懷しさ樂しさを持つてゐる。加之、一時に咲き出し、又忽ちに散る花吹雪は誠に我が武士の心に似てゐるので、戰場に千軍萬馬を指揮する武將も、この花を見ては、うたゝ感激の情の湧き出づるを止むべくもない。さういふ櫻について、こと新しく述べるまでもないが、二三話題を拾つて見よう。

櫻は神代からあつたといふ。大山祇命を木花咲耶姫ともいふのは、天上から櫻の木に下られたからの名であると傳へられる。

履中天皇が宮中の池に舟を浮べて御遊をせられた時に、御手にして居られた酒盃に散り來る花びらが一片落ち來つて浮んだので、皇居を「若櫻の宮」と名づけられた。

花の御宴は、嵯峨天皇が弘化三年に神泉苑に行幸あつて、詩歌を作らしめ給うたのが最初である。

紫宸殿の階下の兩側に橘と櫻がある。櫻は桓武天皇遷都の時は梅を植ゑられたのであつたが承和年中に枯れたので、仁明天皇が櫻に植ゑかへられた。その櫻も貞觀年中に枯れて元から纔に芽が出てゐたので、坂上瀧守に命ぜられて保守せしめられると、枝葉が延びて繁つたといふ。その後も幾度か植ゑかへられた。橘はこの地が橘本太夫の舊宅であつたので、この人の家にあつたものをそのまゝ植ゑ置かれたのである。

神武天皇祭

四月三日は、神武天皇が御即位後七十六年目の三月十一日崩御あらせられた日である。御年百二十七才。九月十二日に畝傍山東北陵に御埋葬申上げた。崩御の日は新暦で四月三日に當るのである。

此の日、御陵には勅使を遣はされて幣帛を献ぜられる。尚、御生前の御名は、神日本磐余彦（かむやまといはれひこの）尊（みこと）と申し、後に諡號を神武天皇と贈り奉つた。

灌（くわん）佛（ぶつ）會（ゑ）

四月八日は釋迦の誕生日である。各寺院では釋迦の像をかざり、甘茶を灌（そゝ）ぎかけ、又この甘茶を參詣者に飲ませるのである。この甘茶を貰つて歸つて、硯に入れて墨をすり、

千早振る卯月八日は吉日よ、かみさげ虫を成敗ぞする

と書いて、柱や壁にかけて置くと虫除の呪となるといひ、又、

八大龍王茶

と書いて天井に貼つて置くと雷除となる等と信じられてゐた。

釋迦の降誕について佛教に傳へるところによると、母の摩耶夫人の胎中に在ること十ケ月、舊暦四月八日の日に母夫人が當時の印度の習慣として生家に歸つてお産をするので、歸郷の途中、花園を逍遙し、無憂樹といふ木に登りかけると、車のやうな大きな蓮華の花が生じた。その時、釋迦は母の右脇から生れ出てその無憂華の上に落ち、歩くこと七歩で右手をあげて天上天下唯我獨尊と稱したといふが、その聲は獅子の吼えるやうであつたと傳へてゐる。その時、四天王は衣でつゝんで澤山の寶の上に置くと、帝釋天は蓋をとり、梵天王は拂子をとつて左右に侍した。九つの龍が天にあつて清淨水を吐く。

その一は冷水、他は溫水であつたが、この水が釋迦に灌がれる。そして釋迦はこの水の中にあつて大光明を放つと、三千世界に輝き渡り、天からは音樂が聞え、花が降つたといふ。

この行事が始つたのは推古天皇の十四年四月であつて、丁度、元興寺が建立され一丈六尺の釋迦の像の開眼式が行はれたが、聖德太子が此の式に臨ませられ供養を行はれた。その夜にこの佛像が大光明を放つて家の內外まで照したと傳へてゐる。これが朝廷で行はれるやうになつ

たのは、仁明天皇の承和七年で、公事根源では、その日の樣を次のやうに記してゐる。
御殿の母屋の御簾を垂れて日の御座を撤して、その跡に山形をたてたる佛の産れ給ふ氣色を作りて、糸にて瀧を落し、いろ〳〵の造り物あり。北の方に机を立て、鉢五つに五色の水を入れらる。公卿參り集りて殿上に侍ふ。女房の布施どもいろ〳〵に結ひたち華につけて風流などあるを、衣箱のふたに入れて臺盤所より出さるれば、藏人とりて殿上の臺盤の上に置く。上達部我が布施の舟づゝみを持ちて御殿の上なる白木の机に置きて、次に座につく。御料の御布施は紙を置かる。不參の人の布施、藏人置く。御導師の僧參り上りて佛前の作法を終りて鉢の水を一つに汲み合せて、先づ御導師灌佛す。公卿次第に進めて笏をさし膝行して、ひさごをとりて水を汲みて灌佛して後禮佛す。導師布施賜りて退く。この佛生會は推古天皇より始まる。釋迦如來の倶毘藍城にて生れ給ひける時、天龍下りて水灌ぎて釋尊にあぶせ奉りし事を申すなり。
昔、この日には戴餅といふものを作つて祝つたといふが、これは蓮の形をした團子のやうなものである。

天長節

天長節は誰も知らぬ人はないが、今上陛下の御誕辰の祝日である。此の日には宮中では、賢所、皇靈殿で御祭典があつて、觀兵式に行幸せられ、次で皇族以下百官の御參賀、豊明殿の御宴が行はれるのである。天長といふ語は、老子といふ本に、

天長地久、天地所二以能長且久一者、以其不自生、故能長生

とある語から出たので天地の長久であるやうに天壽もまた長久ならん事を祈り奉る心である。その始めは支那で唐の太宗が祝つてから代々行はれ、玄宗の開元十七年には、

秋八月、以二帝生月一、爲二千秋節一

とあつて、千秋節と稱したのを、「天寶七載八月、詔改爲二天長節一」とあるやうに、改めた。これは、我が聖武天皇の御代に當つてゐるが、續日本記によると光仁天皇の御代に、寶龜六年九月、勅して十月十三日は、是朕が生日なり。此の辰の至る毎に感慶兼ね集る。宜しく諸寺僧尼をして毎年是の日に轉經行道せしむべし。海内諸國も並びて宜しく屠を斷

つべし。内外百官に酺宴一日を賜ふ。仍て此の日を名づけて天長節と爲す。

とあるから、この時から始つたのである。この年は支那の天寶七年から二十七年目に當つてゐる。それから代々宮中でも盛大な祝宴を行はせられ、庶民の幸福をはかられたのであるが、皇室の御衰微と共に簡略になつたのを、明治元年八月二十六日布告を下されて、

九月二十二日は聖上の御誕辰相當につき、毎年此の辰を以て群臣に酺宴を賜ひ、天長節御執行相成り、天下の刑戮を差停められ候。偏に衆庶と御慶福を共に遊ばせらるゝ思召に候間、庶民一同に於ても御嘉節を祝し奉り候樣、仰せ出され候

とあつて、玆に天長節を再興せられたのであつた。九月二十二日は舊暦で、之を太陽暦に換算して十一月三日とせられたのは明治六年からであつた。尚、この佳き日に陸海軍が祝砲を發したのは、明治三年であり、觀兵式を行はせられたのは明治五年である。

八十八夜

立春から八十八日目であるから、新暦では大抵毎年五月の二三日頃になる。霜もこの夜で終

るといふので「忘れ霜」と呼ばれてゐる。しかし、この夜限りで降らないとはいはれない。和漢運氣指南に、

此の節は穀雨の中にて土用なり。春の木氣終りて地氣旺し。夏の火氣に變化する界にして陰陽相擊ちて地氣上に迫り、濕陰極りて霜を生ずる事あり。年の氣運によるべし。又、八十八は米の字の形なれば、此の時、苗代を營み、秋米の基を致し、且は穀雨の節なる故、農家殊に此の日、秋を祝する事あるか

とある。

霜の降るうちは春といつても、ほんとによい氣候とはいはれない。霜がなくなればいよ〳〵草木の延びる時季で、農家にとつては大事な夜であるわけである。

葵祭

五月十七日、京都の賀茂神社の祭禮は葵祭ともいひ、又石淸水八幡が南祭といふのに對して北祭とも稱せられてゐる。この祭禮は歷史も古く、祭事もいかにも京都らしい風雅な趣を持つ

てゐるので、昔から詩文につゞられてゐる。

明治十七年以來、五月十七日と一定されたが、それ以前は、卯月中酉、元明天皇和銅七年に山城の國司撫祭して、年ごとの祭たるべき由、鳳詔を下さる。（加茂祭繪詞）

とあるやうに、舊暦の四月中旬の酉の日に行はれたのである。

これを何故に葵祭といふかといふと、勅使以下の祭に關係する者が葵の蔓を懸け、その他の道具や裝飾にも葵を用ひたからで、この事は公事根源といふ本に、

加茂の葵葛は、昔神の夢に告げ給ひし謂れ深しといへり。加茂松尾の社司より方々に祭の日進むるに、二葉の葵を長く連ねて柱の枝につく。御簾諸道具などにもかけらるゝ事とぞ。尋常の葵に異にして、之を結ぶにも口傳あることなり。

とあり。尋常の葵に異るといふのは、

昔より君と神とに引合ひて、今日の葵は二葉なりけり。

と記されてゐる。又一書に、

加茂の祭にかくるは諸葉草とも言ひてその形の如し。このこと秘事とす。昔、瓊瓊杵尊、此の日本の從はざる神を平げ給ふ時に、加茂建角身命の神功多し。故に褒め給ひて、今より以降、臣神の列にあらず。縱へば諸葉草の左右の如く覺さんとの御誓によりて君臣合體の切に、此の草を賞すといへり。

とあるやうに、この社の祭神たる加茂建角身命の功勞を賞せられたことに起因する。

いつ頃から始まつたかといふと、欽明天皇の二十八年に風雨の禍のために人民が苦しんだが之は加茂神の祟であるといふので祭祀を行つたが、前にも記したやうに元明天皇の御代には山城の國司が主催し、足利時代には一時中絶されたのを、明治十七年に再興されたのである。

田植

田植は處や氣候で相違はあるが、大體は梅雨の前後である。五月雨で田に水が滿つる頃である。本朝食鑑に、

蒔レ籾、至ニ三四十日一、既生レ苗七八寸、或尺餘。采レ之、移ニ種于田一此レ稱ニ早苗一、又謂レ采ニ早苗一

而歌人賞レ之。

とあつて、農業國の日本にあつては、古來風雅なものとして秋の收穫と共に歌や俳句に詠ぜられてゐる。尚、同書に次のやうにある。

本邦種レ苗者、大略農婦及娘子、此稱ニ早乙女一。而男子之種者少。無ニ婦娘一者男亦種レ之。或請ニ他之早乙女一而種レ之亦有。惟男常勞ニ田事一、無レ遑レ種レ之乎。

古來、女の仕事とされてゐた。そして不淨者は忌み、老練な者が指導して植ゑないと、よく熟さないといはれてゐる。この時に歌ふのが田植歌である。菅笠をかぶつた乙女の口から漏れる自然の歌は、たゞ民謠だけに止らず、人々の心に印象づけられ、やがて宮中にも取り入れられ、田舞ともなつた。この田植歌は各地によつていろ〳〵に異つてゐる。

田植の時に行はれるのは田植祭である。和歌童蒙抄に、

田舍に田作る折に國の神を祭るとて、幣を五十はさみて、田の畔に立て祭る。

と書いてある。

伊勢神宮では六月二十四日に行はれるが、六月十四日の大阪の住吉神社の祭も有名である。

梅雨

梅雨は黴雨とも書く。これは梅の實の熟する頃の雨であるから梅雨と書いてゐるのである。六月中旬から七月初旬まで、約一ケ月の間晴れた空も見えず糸のやうな雨が降つたり止んだりで陰鬱な時季である。

この現象は、支那中部から來る低氣壓がとゞこほるためと氣象學上ではいはれてゐるが、昔の本には、

梅雨は霧なり。正月より四月まで陽氣のぼる。五月に一陰生ずる故に春よりのぼりし陽氣くだる時、長雨ふる。たとへば、こしき（せいろう）の下に火をたきて氣のぼる時は、釜の上の水氣、下へおちず。火をたかざれば、のぼる氣なくして、こしきの上より水氣くだりて露となるが如くなれば、五月雨をつゆといへるなるべし。

とある。新しい學說の上からどうであらうか。

入梅は芒種（二十八宿の一つ）の前の壬の日、出梅は小暑の後の癸の日と本草綱目にある。

又、この梅雨の雨水を大瓶に入れて貯へ、茶を煎じると美味であり、衣物を洗ふと灰汁の如し等と日本歳事記に見えるが、今から考へれば却つて害をなすであらう。

和漢三才圖繪に面白い話がある。

京都の烏丸中立賣下る町と大德寺の門前の人家の後の庭に梅雨の穴といふものがある。毎年、この時期になると水をふき出し、明ける頃には涸れてしまふといふ。

大祓

六月と十二月の晦日に行はれる。六月のは水無月祓とか名越祓とか呼ばれてゐる。

元來我が國民は清淨を尊び罪穢を忌むのであるが、しかも病疫とか汚濁とかの形の上のものばかりではなくて、心の穢れも忌んだのである。汚れた時は少しでも早く淸くしようといふ美しい風習がある。このあらはれが祓である。

それ故にその起源は遠く、伊弉諾尊が、亡くなられた伊弉冉尊の後を追つて黃泉國に行かれ、穢はしきものを御覽になつて引き返されて、筑紫の日向の橘の小門の檍原で祓ひをせられた

のが始めである。そして、神武天皇が橿原に御即位せられる時に天種子命に祓をするやうに命ぜられた處から、この命の子孫たる中臣氏が祓の詞を述べるやうになつた。

かく祓は時期を定めず必要なる毎に行はせられたので、一般人民も之にならつたが、之を定期的に年二回と定められたのは天武天皇の三年六月晦日に行はれたのが起りであるといふ。この時は百官一同、朱雀門に集つて行はれた。かくて年二度の祓によつて罪科を淸めるのであるが、勿論この外にも適宜行はれた。

民間では今は、各氏神から紙で作つた人形(ひとがた)が配られる。これに各自の氏名、年齢を書いて神社に持つて行くと、まとめて祓をやつてくれるといふやうに簡單に行はれてゐる。

この祓の時に麻苧を榊につけたものを用ひるが、之を大麻(おほぬさ)といつてゐる。

この他、神社參拜の時などにも行はれるが、御手洗場で手を洗ひ口を漱ぐのも祓の意味である。

蟲 お く り

七月末から八月頃に農家で行はれる行事である。神社で稲虫拂ひの祓をして、夜になると一同は松明をともし、先頭には藁人形を馬に乘せ、紙の旗を持ち、「虫追ひ」と叫んで螺貝をふき鉦や太鼓をならして、田の畦を巡つた。

農作物の虫はいろ〳〵あるが、最も多いのは蝗(いなご)である。

これについて古語拾遺に傳說がある。大地主神(おほとこぬし)が田を耕してゐる百姓に牛肉を食べさせたので、御歲神(みとし)が立腹し、田に蝗を放つたので忽ちに稲の葉を食べられて、篠竹のやうに枯れたとある。

蝗は稲子である。

八朔

八月一日の祝ひであるが、今は名だけのやうである。これは「たのむの祝」とも稱して人に贈物をするのである。八月に限らず每月一日は、新月の無事幸福を願ふ心から祝ふのであるが舊の八月は稲も熟するので「田の實」にかけて特に祝つたらしい。元來は、主人に賴みをかけ

るといふ意味から、早稲の米を土器に入れて贈つたのが始りで、農家では大事な祝事とした。

古今要覽に、

八朔の祝儀は武家より事起りて公家に及びしものなり。その始めをたづぬるに、年紀さだかならずと雖も、建久の末に鎌倉より出で來りたりしよし言ひ傳へたり、公家にては後嵯峨院の御宇より行はれし。

とあるから、民間で行はれた行事が宮中にも及んだのである。しかし、江戸幕府では正月と同じやうに、諸大名は白の帷子長袴、閏の日は染帷子で登城して祝儀を述べた。

草市

七月十二日の晩から翌朝までお盆に必要な品物を賣る市のことで、盆市とも言つてゐる。品が精靈祭の品だけに稍〻沈んだ氣分もするが、初夏の景物にはふさはしい。どんなものを賣るかといふと、

麻殼　蓮の葉　眞菰　猿坂　鬼灯　鼠尾草　蓮華燈籠　角燈籠　土器　供養膳　茄子　瓜

等であるが、昔は

太鼓　手拭　金銀箔の紋所　作髭(つくりひげ)　奇特頭巾

等の盆踊に必要なものまで賣つたといふ。

盂蘭盆

七月十三日から十五日まで三日間行はれる。「精靈祭(しやうりやうまつり)」ともいふ。

釋迦(しやか)の弟子目蓮(もくれん)は修行して悟りを得た時に僧の安息の日に、その父母の恩に報じようとして未來の樣を伺ひ見ると、亡母が餓鬼の苦しみに會つてゐる。そこで何とかして救はうとして鉢に飯を盛つて供へると、飯がまだ口に入らないのに火炎と化して食べることが出來ない。彼は非常に悲しみ涙を流して、どうすればよいかと佛に教を乞ふと、「お前の母は生前の世に於て非常に罪をつくつたので、お前一人の力では救ふことは出來ない。それ故に十方の多くの僧の力に依つて脫れるやうにする外はない」と。そこで、目蓮は七月十五日法會を營んで供養したところが、母はその功德によつて脫れて極樂に行つたといふ。

これは盂蘭盆經にある話であるが、起源はこゝにあるのである。即ち此の日に父母の壽命を祈り七世前までの祖父母の冥福を祈り、又一般死者のため百味の飮食、五菓を供へ、燈明をともして供養するのである。元來、盂蘭盆といふ意味は「救二倒懸一」といふ事で、冥土にある亡靈が地獄で倒さまに懸けつるされた苦しみを救ふといふことである。

それで十二日の草市で買つた飾物で、精靈棚をつくり、眞菰の莚をしき、正面の左右には小さい笹竹を建てゝ柱とし、これに横へた竹や繩には素麵　粟の穗、干柿、榧の實、稗の穗、茄子、瓢簞、鬼灯等を飾り、正面の下にはませ垣を作り、亡魂が乘つて來たり、又乘つて歸るといはれる茄子や瓜や眞菰で作つた牛、馬を並べる。さうして十三日には門口に、迎火といつて麻殼を焚いて精靈を迎へる。次で、岐阜提灯や白紙で作つた切子燈籠に火をつけ、十四、五日には僧を迎へて讀經するのである。「まざ〳〵とゐますが如し魂祭」といふ句はよくその日の様を描寫してゐる。十五日には精靈が歸る日であるから門前では、送り火といつて麻殼を焚き、飾物等は川に流すのであるが、處によると夕方に「お迎へ〳〵」といつて飾物を買ひに來るものに渡して一緒に流してもらふ。

この事は支那では梁の武帝の大同四年に始めて行はれたが、我が國では齊明天皇の三年十五日に印度にある須彌山(しゅみせん)の形を飛鳥(あすか)寺の西に作つて盂蘭盆會を行つたと日本書紀にあるが、聖武天皇の天平五年に供養が行はれてから、一般民間にも行はれるやうになつたといふ。それから毎年行はれた儀式でこの日、陛下には淸涼殿の晝の御座の中央に位置せられて三度合掌、拜禮せられる。

この頃に暇な夜を夕涼みがてら行はれのが、盆踊りである。又、この十五日は「中元」といつてゐるが、これは支那で「三元」といふことがある。卽ち、一月十五日を「上元」、七月十五日を「中元」、十月十五日を「下元」といつて、中元は人の罪をはらす日といふのが佛敎のお盆と混同されてしまつた。

尙精靈祭は十二日にも行はれたことが見え、

中世には七月と十二月のみ祭りしを、それを兼好（室町時代の人で、徒然草の著者）の頃には、はや盂蘭盆にのみ此の事をなして、十二月は京都のならひには祭らざりけるが、田舍にはまだ殘れる由見えしも、今江戸を初め見わたるわたりには、その事ありとも知らず、

定めて遠國にては今もこの事あるべけれど、未だ定かなる事は聞き出で侍らずとあつて、いつしか行はれなくなつた。

この頃に行はれる盆踊、月光の下に夜凉を追うて廣場に木蔭に響く太鼓の音は人の心をそゝらずには措かない。頬冠り姿で踊る樣は田舍にとつては、最大の娯樂とも言へよう。惡風を除き正しい民衆娯樂として更生するなら、平常無味乾燥な農村に與へる慰安は他にはないであらう。

中元

舊暦の七月十五日であるが、多くは新暦七月十五日となつた。しかし盆と同じやうに舊暦七月十五日に行はれてゐる地方もある。

これは三元の一つで、三元とは

上元――一月十五日

中元――七月十五日

下元——十月十五日

で、支那では人の罪を拂ふ日とされてゐたが、我が國では盂蘭盆と一緒にされるやうになつた。今は廢れてしまつたが、昔は「生靈祭」と言ひこの日には蓮飯といつて糯米の赤飯をたいて蓮葉に包んだものを作り、鯖を煮て兩親に献じ、親戚の間にも贈り合つた。

今は商店で大賣出しをやり、知人の間に進物の贈答を交すにとゞまる。

土用

土用といへば今では夏の事とばかり思はれるが之は四季各々にあるので、多少その年によつて前後はするが、

春　四月十七日頃から立夏まで
夏　七月二十日頃から立秋まで
秋　十月二十日頃から立冬まで
冬　一月二十日頃から立春まで

である。これは何れも新暦によつたもので陰暦になると一月位おくれて數へるわけである。何れも十八日間である。

夏の土用は、いよ〳〵土用になる日を「土用の入り」といひ、三日目を「土用三郎」といふ。この十八日間は「暑中」で、「三伏」ともいつてゐる。三伏は三分して、「初伏」「中伏」「末伏」とし、土用三郎は寒四郎、八專二郎、入梅太郎と共に四大厄日とされてゐる。即ち、此の四日が平穩だとその年は豐作だといはれる。

土用の丑の日には昔から鰻や鰌を食べることと定つてゐるが、それはどういふ起源か明瞭でないが、次のやうな傳說もある。

東京の「神田川」といふのは有名な鰻屋であるが、江戶時代に家運が衰へた時に、狂歌師として有名な太田蜀山人が、「明日土用丑の日」といふ看板を出させると、これが人々の注意をひいて繁昌したといふ。又、鰌屋の「春木」といふのが、土用の丑の日に鰻を壺に入れて地中に埋めたが幾日たつても腐らなかつたので、これが傳つて鰻を食ふやうになつたともいふ。

何れもたゞ傳說ばかりのことである。

土用に食べるのは鰻ばかりでなく、土用卯、土用蜆と言つて暑氣にあたつて健康を害はぬ食べ物といはれてゐる。

二十六夜待

舊暦で七月二十六日夜の月を見る行事であるが、今はたゞ名ばかりとなつた。この夕、海の見える高臺や海邊で月の出を賞するのであるが、江戸では神田明神の境内、九段坂上、品川の濱、深川の洲崎等で、酒宴の中に月を待つて詩歌を詠じたのである。

この夜の月の出は、水蒸氣のために三段に分れて見えるので、佛教の阿彌陀、勢至、觀音の三尊の形であるといはれてゐるが、闇の曙といふ本によると、「これ跡方もなき虚妄なり」といひ、尚この作者は、江戸では七月廿六日だけだが、遠州では正月と七月の二度としてゐるし河内では十一月二十六日、京都では全く言はない。月は同じであるのに、處によつて別の日に見える理由もないといつて、極力否定してゐる。

又、燕居雜話には「了譽上人は二十七日に死んだので、そのお逮夜(たいや)である。上人を世人は一

つに上腊人といふ。それは、額に腊の形があるからである」等ともある。上人の墓は東京の小石川の傳通院にあつて、額に弦月の形があつたので、一つに三日月上人と呼んでゐた。應永七年に八十歳で亡くなり、毎月廿六日の夜は了譽待とも稱して法會があるので、或はこれとそれとが混同したのかも知れないが、夜を通して海邊で歌を詠じて涼風の中に月を待つたのは風雅な遊びである。

これは十五夜と同じく、月を賞する行事であるから、新暦でも舊暦に相當する夜でなくては意味のない事である。

二百十日

立春から數へて二百十日目は最大の厄日として、殊に農家では氣遣ふのである。この日と次で來る二百二十日さへ無事であれば豊年だとして、早くも豊年祭の準備にとりかゝる所もあるといふ。

この二百十日が暦の上に記されたのは餘り古い事ではなくて、徳川時代に貞享暦を作つた安

井春海が漁師から體驗上の話を聞き、初めて知つて記したといはれてゐる。勿論、二百十日は決定的の日ではなく、大體その前後といふ意であつて、

日限定らずと雖も、多くは處暑の節より八月白露の節に至りて暴風あり。强弱は同じからずといへども、必ず此の時分、風常に變りたる氣色あり。七八月は申酉にて金氣（秋の氣のこと）至大なる時なり。處暑の殘火、白露の凉金を尅して、金氣怒擊によりて强風發生す。

と、和漢運氣指南にある。

放生會

九月十五日に京部の石淸水八幡宮で行はれるのが最も有名である。しかし、放生會といふ名は明治元年に廢されて、中秋祭といふ名で今も行はれてゐる。

之は佛教の殺生戒から起つた事で、生のある普き鳥獸魚類を放ちやる法會である。

起源については、元正天皇の養老四年九月に大隅、日向の兩國に叛亂が起つた。朝廷では宇

佐八幡宮に平定を祈られた。すると、此の神社の禰宜辛島勝波豆米が軍を率ゐて討伐した。この戰に澤山の死者を出したので、神託に依つて諸國に放生會を行はしめたのが最初である。

次で、後三條天皇の時に石淸水八幡で行はれ、後醍醐天皇の代には世の亂れと共に神事も疎略になつたが、延寶七年から再興し、毎年八月十五日に行ひ、次で葬式や死者の命日、佛事の日等にも行ふやうになつた。

これについて、今昔物語に面白い話が記されてゐる。

天曆年間に粟田山の東、山科の北の方に藤尾寺があつた。この寺の境内にあつた堂に一人の尼が住んでゐた。尼は年老いてゐたが、蓄財もあつて、樂な生活をしてゐた。若い時から石淸水八幡を信じ、常に參拜してゐた。或る時、自分の堂の近くに八幡社を建てゝ、毎日參拜しようと思ひ立つて、直ぐに宮殿を造り宮を建てゝ崇め尊んでゐた。所が、八幡の本宮では八月十五日に放生會といふことをするから、自分も法會をしようと、毎年本宮通りに僧を招き樂を奏して行つた。財產もある事で、費用をかけてやつたので、遂には本宮の方より盛大となつたので、本宮の人達は自分の方が衰へたことを歎いて、使をやつて、

「八月十五日の放生會は、神託によつて昔から行はれてゐるので、人が考へ出したのではない。然るに此方に盛んに行はれるやうになり、自分の方は衰へた。そこで、此方のは十五日以外にしてほしい」と申出た。尼は、「放生會は八月十五日に定つてゐるから變へる事は出來ぬ」と答へた。之を聞いて本宮の神官は大いに怒つて、直ぐに行つて宮殿を壞し御神體を取返して本宮に安置しようといふ事になり、若干の神官が出かけて尼の御神體を取返して護國寺に鎭め申した。かくて、尼の放生會は絕えてしまつた。尼は朝廷に申出て許可を得たのではなかつたので、訴へることも出來ずに、人笑ひとなつた。他の日に行へば今でも盛大に行はれたであらうに強く拒絕したので却つて自らを亡ぼした。

秋季皇靈祭

九月秋分の日に行はれる宮中の儀式であるが、民間でも「お彼岸」と稱して墓詣りに出かける。

皇靈殿には、代々の皇靈、皇后や皇妃及び皇子の靈を神殿では天神地祇の御親祭で、春季皇

靈祭と同じやうに行はれる。

十五夜

芭蕉は「名月や池をめぐりて夜もすがら」と詠じ、貝原益軒も

秋のもなかになりぬれば、一年を經て待ち得たる月あきらけきは凡そ天地の間にならびなきついでひとつの見ものなれば、よろづの麗しき景色は皆其の下なるべし、

と賞し、又

月々に月見る月は多かれど
　　月見る月は此の月の月

とも歌はれてゐるのは十五夜である。これは陰暦八月十五日の宵であるので、「仲秋の月」といひ、「三五の月」「望の月」「芋名月」とも言はれてゐる。十五の團子や芋、枝豆、栗、芒等を飾つて一夜を明月と共に明かすのは誠に風雅なことである。

この事は支那の季唐の頃から盛んであつて我が國では宮中に月見の宴のあつたのは醍醐天皇

の御代寛平九年で、後水尾天皇の御代に、「八月十五日、名月御杯、帝の御所にて參る。まづ芋、次に茄子を供す。茄子をとらせまし〳〵とて萩の箸にて穴を明け、……御杯參りて後、御前のを撤す。淸涼殿の庇に構へたる御座にて月を御覽あり、かの茄子の穴より御覽じて」とある。

此の夜、月を祭るには十五歲の女を主人とし、その夜が明月であると幸福であると稱し、或は女子は此の夜の月明りで針の孔に糸を通す事が出來ると、裁縫が上達する等とも傳へられてゐる。

佛教では月宮殿には三十人の天女がゐて、十五人づゝ白衣と靑衣を着てゐる。十五日には白衣の天女十五人が殿中にゐて仕へるので滿月となる。十六日からは一人づゝ減つて靑衣の天女がそれだけ代り、三十日になると靑衣十五人になるので月が見えなくなる。一日には靑衣十四人、白衣一人でそれにつれて月も少しづゝ出て來るのであると傳へられてゐる。

古來、我が國で觀月の名勝地と稱せられてゐるのは、明石、須磨、吉野、初瀨、嵐山、石山寺、松島、姨捨山等で初瀨では檜が多かつたので、その樹間から輝く月を「檜林の月」と稱し、

眼下に琵琶湖を見下す石山寺もよかつたであらう。特に此處では紫式部が源氏物語を書いたと言はれてゐるので、今に殘る源氏の間に昔をしのぶ者が多い。姨捨山は昔は信州といふ都から離れた地ではあつたが、この山上に立つ時、幾段にもなつてゐる山腹の田に滿つる水面にうつる月影は田毎の月といはれて絶景である。

異鄕にあつた安部仲麻呂が春日の山の月を思ひ浮べて故鄕を慕うたのも有名な話である。

守貞漫稿に興味あることが書いてある。

江戸と京阪大小異同あり。江戸にては机上中央に三寶に團子數々を盛り、又花瓶に必ず芒を挾みて之を供す。京阪にては芒及び諸花共を供せず。手習師家に此の机を携へ行き、此の引き出しに、筆、硯、紙、手本等を納め、京阪の如く別に手文庫を携へず。京阪にても机上三寶に團子を盛り供すること江戸に似たりと雖も、その團子の形、小芋の形にとがらすなり。然も豆粉に砂糖を加へ、之を衣とし、又醬油煮の小芋と共に三寶に盛ること各々十二箇、閏月ある年では十三箇を盛る。

この十五夜の月が萬一曇つてはといふので、その前夜の月を賞することがある。それを「宵

待の月」といつてゐる。

十三夜

醍醐天皇の延喜十九年九月十三日、淸涼殿の南の隅に御溝水（みかはみづ）が流れてゐるが、その水の音を聞かせられながら月卿雲客を集めて宴を催させられた。

又、

九月十三夜、今宵雲淨月明、是夜寛平法皇、明月無雙之由被二仰出一、乃我朝以二九月十三夜一爲二明月之夜一

とある。寛平法皇とは宇多天皇が上皇となられてからの御稱號である。これから此の夜を「十三夜」として十五夜についで、觀月の宵となつたのである。そしてこれは支那ではない事で、我が國固有のものである。

十五夜に對して「後の月」「栗名月」ともいふ。

お會式

日蓮宗の開祖である日蓮の命日たる十月十三日に行はれる法會である。「報恩會」「御影供法會」とも呼ばれる。お會式は十月八日から十三日まで、各日蓮宗の寺院で行はれるが、十三日が最も盛大である。

日蓮は鎌倉物語に、

日蓮上人は聖武天皇の末孫、姓は三國氏、名字は貫名、本國は遠州、生國は安房國小湊の浦なり。御母は淸原氏、常に朝日を念誦し給ふ。日天胸を照すと夢に見給ひて懷姙し、貞應元年二月十六日に誕生、御童名を藥王丸と申し奉りし。十二才にして淸澄山へ上り、十八歳にして出家し給ひ、御名自ら日蓮と改め給ひ、八宗顯學して、卅二才建長五年三月下旬の頃、初めて南無妙法蓮華經の七字を唱へ、安房の國より鎌倉へ移り給ひて名越の松葉ケ谷に小庵を結び、毎日名越坂へ出で妙法の首題を唱ふ。

とある。入寂は弘安五年十月で、十二日の夕六時頃から東京の池上本門寺の御座に北向に坐し

平常から自愛の大曼陀羅をかけ、前に机を置き、香華を供へ燈明をともし、靜かに遺言をし、翌十三日の八時頃に方便品、壽量品を誦し、衆僧も唱和したが、壽量品の半頃まで誦して息切れたと傳へられる。時に年六十一才。

東京では、池上の本門寺が最も參詣人も多いが、雜司谷法明寺、堀の內の妙法寺等も有名である。

神嘗祭

十月十七日に行はせられる儀式で「かむなめまつり」「かむにへまつり」と言ふ。昔は九月十七日に行はれたが、太陽曆になつてから十月十七日と定められた。

元正天皇の養老五年九月十一日に使を遣はされて幣帛を伊勢神宮に奉られた事が見えてゐる。

今では十六日に豐受大神宮、皇太神宮には十七日、勅使を遣せられて幣帛及び荷前の調絹を奉らせられる。これも、昔は神宮附屬の神田から收穫された新穀と、そして荷前の調絹も諸國か

ら奉献せられたものを用ひられたが、今は神宮司廳で適當の新穀と、命じて造らせられた生絹を用ひられる。

この日、宮中では神嘉殿の南の庇に御屛風二雙を立てられて其の中に簀薦を敷き、午前十時に出御あらせられて御遙拜せられ、次で賢所御前にて御親祭を行はせられる。

べつたら市

十月十九日の夜に主に東京で行はれる市である。べつたらとは淺漬大根のことで、この夜の市にも之を賣るのである。この特殊な名が興味を引いて、江戸以來なか〳〵繁昌したのであるが、市が立つのは日本橋區の大傳馬町を中心としてゐた。

翌二十日は惠比須講なので盆の前の草市と同じやうにその必要なもの即ち、夷子、大黑、器物や魚類等を賣るところから起つたのである。

惠比須講

十月二十日であるが、正月十日にも十二月二十日にも行ふ。正月のは十日夷といつて區別してゐる。この日の樣を永代藏といふ本の中に西鶴は、

諸商人萬事をやめて我が分限に應じ、いろ〳〵魚鳥をとゝのへ、一家集りて酒くみかはし、亭主つくり機嫌に下々勇みて、小唄、淨瑠璃、江戸中の寺社、芝居、その他遊山の繁昌なり。

とある。

この惠比須神とは何であるかといふ事は明瞭でない。が兵庫縣西宮市の西宮神社は、古來夷の宮と言はれてゐる。その祭神は大國主命である。所がその御子の事代主神をいふとも傳へる。それは大國は大黑と音が同じ所から大國主命が大黑樣で、事を「代」といふ緣で事代主神を夷としたといふ。

しかし、又一說では「エビス」とは、何でも常に違つてゐるといふ意味で、少彥名神は身長が小さかつたので、御名もそこからつけられたので、この神をいふとも傳へられる。

結局は前の說がよいやうで、「以釣魚爲樂」ともあり、「出雲國三穗崎に遊行して、魚を

釣り給ふ御姿をかたどる」とも古書に見える。
廿日とか十日とかに定められたのは、市の日取であつたからである。

甲子待

甲子に當る日は一年に六回ある。その中で十一月が最も盛んであるが、甲は十干の初め、子は十二支の初めである。で、此の日を祭つたのである。しかし、これに大國主命の話を結びつけてゐる。即ち、大國主命は大黑で、或る時、命が荒野で火にかこまれた時、鼠によつて救はれたといふ。大黑は農家にとつて、五穀豐饒の守護神であるので、この夜はその使者の鼠が來るのを「子」に言ひかけて祭つたのが「甲子祭」であり、深夜まで一家が團欒し雜談に時を過すのが「甲子待」である。

待つといふ意は「その時になるまで眠らで居るといふ」とある。甲子待について日次記事に、

凡そ一年中、六甲子の夜、禁裏（宮中）子を祭らる。大乳人、小豆粥を御前に献じ、並に

殿中の男女を饗せらる。甲子毎に民間にては燈心を買ふ。俗に子燈心といふ。その中、十一月甲子を以て最と爲す

とある。

明　治　節

明治節については此處に說明するまでもない。明治大帝の御代四十五年は誠に新日本の基を固められたのである。

大帝の御偉德、御遺業をしのぶ心は期せずして明治節制定となり、第五十二議會は滿場一致を以つて可決、御裁可を仰いで決定を見たのである。

同日、又代々木なる明治神宮では大祭が行はれる。

亥　の　子　の　祝

十一月の亥の日に餅をついて小さく作り祝ふのである。これが亥の子餅である。この月に亥の

日が二回あれば二度作り、三回あると三度作るので、順に一番亥、二番亥と呼ぶ。
この起源は貞丈雑記に

亥の日に祝ふことは、猪は子を多く産むものなる故、それにあやかるための祝にて、子孫繁昌の祝なりといふ

とある通りである。

いつの頃からといふ事は明らかではないが、延喜式にも記されてあるので大分古いことらしい。三才圖繪には攝州能勢郡の土民である門太夫といふ者が、毎年亥子餅を献上すると記されてあり、或る年、献上が遲れると御使をやつて御尋ねなされた事もある。

昔、宮中ではこの餅を陛下が御手で取つて臣下に賜つた。その時は公卿には黒餅、四位は赤餅、五位は白餅と定つてゐた。

餅は、大豆、小豆、大角豆(ささげ)、栗、柿、胡麻、糖の七種の粉を入れて拵へたものである。

鞴(ふいご)祭(まつり)

舊曆十一月八日である。鞴は吹革で、鍛冶屋や石工や飾屋が炭火をおこす道具である。それ故に、その祭は平常から鞴を使ふものゝ行事である。

この起源は、昔、三條に住む小鍛冶宗近といふ者が、刀を鍛へるのに、或る時、稲荷山の土を持つて來て刄をやいたところが、非常によく切れる刀が出來た。それからは常に稲荷社に願をこめ、土をとつて鍛へたことに始まると傳へられてゐる。

この朝早くから、業を休んで鞴の掃除をし、注連をはつて赤飯をたき、神酒や御馳走を供へる。そして稲荷の神を祭る。附近の子供達が集つて來て「鍛冶やのびんぼう」と呼び騒ぐと、二階から「あな、かまや」と言つて澤山の密柑を投げる、子供はそれを爭つて拾ふ。拾つてしまふと投げてくれた數が少いことを罵りながら子供は別の家に行く。

この子供が集るのを、一つに「ほたけ」といふが、それは「ほたけ〳〵」とも叫ぶからと傳へる。しかし、この事は明治中年からは行はれなくなつて、たゞ家の中で祭るばかりのやうである。

酉の市

十一月の酉の日、鳥を祀つた神社で行はれる祭であつて、東京で有名なのは

下谷　鷲　神　社
深川　富岡八幡神社
四谷　須　賀　神　社
新宿　花　園　神　社
品川　大　鳥　神　社

等で、その外にも隨所に行はれる。これは、元來は武神である天穗日命と、その御子の天鳥舟尊を祭る大鳥明神の祭禮であるのが、何時とはなく商人に福を與へる神事となつてしまつた。

一と月に酉の日は二度或は三度あるが、その最初のを初酉（はつとり）、次のを二の酉、三度目のは三の酉と言つてゐる。大抵の年は二度で、昔から三の酉まである時は大火があると言つて恐れられてゐるが、勿論これは根據のない一種の迷信である。

一體、酉は「取り」で取り集める、即ち今年は殘りも僅かとなつたが、來年は大いに搔き込んで儲けようといふ緣起を祝つたもので、各神社では社名の紙をはさんだ小さな熊手(くまで)を神授する。これを神棚にさしてお守りとして來る年を祝ひ迎へようといふのであるが、境內には店を張つて、五寸位から六寸、八寸、大きいのは三尺位の熊手を賣る。この熊手の寸法は柄の長さではなくて、普通骨と言つてゐる熊手の爪を標準として計るのである。そしてこれに七福神やおかめや大福帳、千兩箱、寶船、こばん等を飾りつける。

二の酉、三の酉は十一月も末に近い頃なのでそろ〳〵正月も近づくから、寒風に吹きさらされる。この祭も暮の景氣を見せる第一步を思はせて參詣者は多い。

七五三の祝

十一月十五日に行はれるが、昔は十五日から末までの中で吉日を擇んで行はれた。男兒は三歲と五歲に、女兒は三歲と七歲とに新しい衣裳に着飾つて產土神(うぶすながみ)に參拜するのである。これは元來、七五三の祝とは次の三つの祝から起つたのである。

髪置（かみおき）　男女とも三歳になると、菅糸（すげいと）で白髪を作つて子供を吉方に向はせて之を冠らせ、櫛で左右の鬢（びん）を三度づゝかく祝。

袴着（はかまぎ）　男兒が五歳になると碁盤の上に立たせて袴着親が袴を着せるので、大人になつて袴をはく時に歩きながら着る癖を防ぐためだといはれてゐる。徳川時代以前には三四歳から六七歳までの間で行はれ、女にもあつた。

帯解（おびとき）　女子が七歳になると行つたといふが、男子も五歳から九歳までの間に行はれた。これは今まで着物に附紐がついてゐたが、それをとつて帯をしめるやうにする儀式で、附紐のことを「附帯」といつた處から「帯解」と稱したので、「帯直（おびなほし）」「紐落（ひもおとし）」とも稱した。十一月中の吉日に行ひ、その子供を吉方に向はせて廣蓋（ひろぶた）に入れた附紐のない着物と帯を、今までの附紐のある着物と脱ぎかへさせる。この時に脱ぎかへの役にあたるのは子供の多い夫婦の者で男子の時はその夫が、女子の時はその妻があたる。

この三つの祝が丁度、七、五、三の歳の時なので七五三といふやうになつたが、今はこんな

に嚴重な儀式は行はないで神社參拜だけですませてゐる。

鎭魂祭

十一月二十二日に行はれる。「ミタマシヅメの祭」ともいつて、離れ去つた魂を招いて身に鎭めまつるための祭事である。宮中の綾綺殿で行はれ、天皇、皇后、皇太子の御魂を鎭め奉り御齡の長久を祈願するのである。これは天の岩戸に天照大神がお入り遊ばされた時に八百萬の神々が御相談の上で、天鈿女命が岩戸の前で踊つた故事からといはれてゐる。

新嘗祭

十一月二十三日に行はれる。宮中の行事として重要なものとされ天皇御親祭のもとに崇嚴に行はれる。これは「にひなめまつり」ともいひ、神武天皇御即位の年に行はれたと言ふ。但し、御即位の年には特に「大嘗會」即ち「おほなめまつり」と稱し、盛大に行はれることになつてゐる。

此の日に先立ち十一月十日に伊勢神宮に勅使、各官國幣社にはその地の地方官を遣はされて幣帛を献ぜしめられる。二十三日午後二時に神嘉殿を装飾し、四時になると式部職員が着床して神座を設けられる。五時四十分になると忌火を點じ、庭燎を焚いて準備がとゝのふと、六時に親王以下諸員が着床してお待ちする。陛下は黄櫨染の御衣を召されて出御遊ばされると、神樂歌を奏する中に神饌を並べる。やがて陛下には本殿に進ませられて御手づから神饌を供へ給ひ御告文を奏せられ、次で各府縣の有志から献納の米と御苑で出來た米とを混じて造らせられた白酒（白米の酒）黒酒（玄米の酒）を聞し召される。かうして神饌を撤すると陛下は入御あらせられて、夕の御祭典は終る。翌二十四日午前一時からは、又陛下出御のもとに同様の儀を行はせられるのである。

昔はこの後に盛大な御宴が催され、之を豊明節會と言つて舞樂等も行はせられた。

乙子の朔日

十二月一日の行事である。乙子とは弟兒の意で、一月は第一の月であるから太郎月といつた

のに對して、十二月を乙子月と稱するのである。

今はすたれてしまつたやうだが、昔は

朔日、謂二之季朔一。人家爲レ餅食レ之。謂下季朔食レ餅無上レ陷二溺之妻一也。

とあつて、此の日に餅をついて一年最後の月を祝つたのであるが、之を乙子の餅、川浸餅、川渡餅など〻稱した。又、この日に異裝をなし雀躍りをして錢や米などを貰つて歩いたこと等もあるらしい。

川渡餅といつたのは水上を祭るからといはれ、この餅を食べると水難を除くとされてゐた。

御佛名

これは今は廢されたが、昔は宮中の行事の一つとして行はれてゐた。十二月十五日から三日間であるが、後には十九日から三日間となつた。一つに「佛名懺悔」といつて、清涼殿に仁壽殿から佛の本尊を移して御帳の中に懸け、南の額の間に机を置いて彿像や塔形を置き、庇には地獄繪の屛風を立て、導師に佛名經を誦し、過去、現在、未來の三千佛の名號を唱へさせて罪

障を懺悔するといふ法會である。これは寶龜五年十二月、光仁天皇の御代に始まり、仁明天皇の承和の頃には此の三日間は諸國の殺生を禁ぜられたこともあるといふ。

荷前の使

今は行はれないが、昔、十二月中の吉日の日に十陵八墓に勅使を遣はされて奉幣する公事でその使に行く者を「荷前の使」といふ。「荷」は「諸國から奉献する貢物の荷」といふことで「前」は「お初穂」といふ意である。先づ十二月十三日に使の任に當る者を定められるが、これは納言、參議、三位、四位、五位などを以てした。

當日になると、陛下には建禮門に出御せられて禮拜を行はれ、各使は大藏省から幣物を受けて參向するのである。この時の幣物は絹、綿、染糸、木綿、晒布等で柳の筥に入れ、尙漆の櫃に納めてある。

淸和天皇の御代には十陵四墓であり、叉十陵五墓となつたが、後に十陵八墓と定められた。これは次のやうである。

十　陵

近陵（天皇から等親の近い陵）の稱で、清和天皇の貞觀の初めに近陵、遠陵の制を定められ山階の陵（山科の陵。天智天皇、山城宇治）・田原東陵（光仁天皇、大和添上）・柏原陵（桓武天皇、山城紀伊）・楊梅陵（平城天皇、大和生駒）・深草陵（仁明天皇、山城紀伊）・田邑陵（文德天皇、山城葛野）の六天皇と田原西陵（田原天皇—天智帝の第二皇子施基、大和添上）・八島陵（崇道天皇—光仁帝の第二皇子早良、大和添上）の二追尊天皇陵、並びに大枝陵（光仁帝皇后—桓武帝母后、山城乙訓）・長岡陵（桓武帝皇后—嵯峨帝母后、山城乙訓）の十陵を近陵とし、その餘は皆遠陵と定められた。貞觀十四年大枝陵を除いて後山階陵（仁明帝皇后—文德帝母、山城宇治）を置かれた。光孝天皇即位後、田原（西）陵を除き、中尾陵を置かれた。醍醐天皇延喜の制には、後山階・楊梅の二陵を除き、後田邑（光孝、山城葛野）・小野（宇多帝女御—醍醐帝母、山城宇治）の二陵を加へられた。朱雀天皇の世、田邑陵を除き、後山階陵（醍醐、山城宇治）を置き、村上天皇の世、中尾・長岡・楊梅の三陵を除き、宇治の三陵を置かれた。宇治は歴世母后の陵であるから、後に、その親疎に因つて廢置された。

その後十陵は加除一定しないが、山階・後田原（田原東陵）・柏原・八島・深草・後田邑・後山階の諸陵は歴世除かれない。

八　墓

近墓（天皇から等親の近い外戚者の墓）の稱。清和天皇貞觀の初め、多武峯墓（藤原鎌足）・宇治墓（同冬嗣）・次宇治墓（冬嗣妻）・愛宕陵（外祖母源氏）の四墓を近墓と定め、貞觀十四年に後愛宕墓（外祖父藤原良房）を加へて五墓とされた。陽成天皇元慶元年、次宇治墓を除き、深草墓（外祖母藤原氏）を加へられ、光孝天皇の世、愛宕・後愛宕の二墓を除き、拜志墓（外祖總繼）・八坂墓（同上妻藤原氏）を置かれた。醍醐天皇延喜の制、宇治・深草二墓を除き、高畠墓（宇多天皇の外祖仲野親王）・河島墓（同上妃當宗氏）・後宇治墓（藤原基經）・小野墓（外祖高藤）・後小野墓（同上妻宮道氏）を增置して八墓とされた。歴世その親疎に依つて加除されたが、多武峯墓だけは除かれない。

歳の市

いよ〳〵正月が迫つて來るのでその飾物や神祭りの道具から臺所品、或は羽子板等の遊びものまで並べて賣るのが歳の市で、十二月十四日から始つて大晦日までつゞくのである。あはたゞしく忙しい中にも早くも新年らしい氣分があふれるものである。

冬至

今の曆では十二月二十二三日の頃にあたるが、舊曆では十一月である。、日本歳事記に、

冬至は十一月の中なり。三至とて、一には陰極の至り、二には陽氣始めて至る、三には日行南に至る。この故に至日ともいふ。冬至の前一日に至りて陰氣長ずる事きはまり、日の短き至りなり。又夜長き事もきはまれり。日の南に至ることもきはまれり。今日一陽來復して、後陽氣日々に長じ、日もやうやく長くなる。

とある。

この日に柚子を切つて風呂をたてゝ入ると風邪に犯されないといふのは、菖蒲湯と同じことである。

煤拂ひ

年もいよ〳〵押しつまると新年の準備として煤拂ひが各家で行はれるが、今は別に日を定めずにする。しかし、太田蜀山人の半日閑話には江戸幕府の記事をのせて、

十二月十三日朝六つ時前、御年男登城、御奥より御案内あつて通る。御煤竹は毎年御代官所より上る。御寢間、御座の間兩所之を拂ひ、それより御次は、殘らず御下男は麻上下著し之を勤む。右相すみ御目見、御吸物御酒下され退出仕り候。右の御下男頭御使にて御年男へ下され物、白米一俵、鹽いなだ三尾、薄緣胡座三枚、赤椀三つ組三具、山折敷三枚、右の通り宿所へ遣はさる。この品を元旦御年男夫婦、家司一人、上下三人にて之を祝すといふ。

とあつて、十三日を定め、一般も十三日に行ひ、若し當日風雨の時は十五日に行はれた。

定つた吉日に行ふことは、鎌倉時代の嘉禎二年からといはれてゐるが、その事は吾妻鏡といふ本に記されてゐる。吾妻鏡は幕府の記錄であるから、朝廷ではどう行はれたかはよく分らな

い。しかし、行はれた事は事實で、「常の御殿は四位五位の殿上人と藏人が勤め、御緣側は靑侍が勤める」等とある。現在は、この外に春秋の大掃除があるが、迎春の準備の煤拂ひは、慌しい中にも春のよろこびを感ずるもので、

煤拂ひ顏を洗へば知つた人

等といふ川柳もある。

晦日蕎麥

晦日蕎麥は商店に始まるといふ。即ち、一年の決算で仕事は徹夜しなければ終らない。そこで夜食として出すのが蕎麥であるといふが、一般にも食べる習慣となつた。

三日とろゝに晦日蕎麥

といつて、昔は毎月三日にはとろゝ汁を食べ晦日には蕎麥を食べたのである。

除夜

一年の除かれる夜である。「除夕」とも稱したが、「おほみそか」といへば我が訓讀の名である。新年の準備と一年の決算とで何となく慌しく感ぜられる。しかし、床の間の飾りも終つて一年の回顧にふけりつゝ過すのは、哀れの中にも新春のよろこびを感じてなつかしい。

宮中では除夜祭が行はれる。これは夕方五時、賢所、皇靈殿、神殿の飾りをなして神饌を供へ祝詞を奏して終るのである。

夜半十二時からは、各寺院で百八つの鐘を撞く。これを除夜の鐘といふ、日本歳事記に、

一年の終る夜なれば、つゝしみて心を靜かにし、禮服を着、酒食を先祖の靈前に供へ、自らも配食を食し、家人奴婢にも與へ、一とせを事なくてへぬる事を互に歡娛し、座して以て旦を待ち、舊を送り新を迎ふべし。

昔は此の夜に追儺（つゐな）の式が行はれたが、新暦となつてからは二月立春の前に行はれる。これは舊暦では季候の上でも冬はこの夜までゞあるからである。

又、この夜に東北の風が吹くと新年の五穀は大豐年となり、犬が吠えないと新年に疫病がないと傳へられ、繼ぐ身にことよせて鶫（つぐみ）を食べたといふ。

二、五節句

節句は節供である。即ち「せちく」で、その季節の物を供へて、神を祭り、又自分からも食べて、邪氣を拂ひ齡を延べようといふ意味から生じたのである。

これは支那からの傳來であるが、支那人は陽の數（即ち奇數）を尊ぶので、これが月が日と重つた日をその日とした。我が國では昔は必ずしもさうとは限らず、例へば「上巳」といへば三日でなくても、三月最初の巳の日に行はれたのであるが、後では日を一定するやうになつて今に傳つてゐる。

昔から節句は五つと定められてゐるが、次のやうである。

一月七日　人日
三月三日　上巳
五月五日　端午
七月七日　七夕

九月九日重陽

この中で一月は一日であるべきだが、一日は元日で已に佳節であるので七日とされた。

これは前にも述べたやうに支那傳來のものではあつても、やり方や、また人々の心持は我が國固有の風俗習慣や思想を十分汲み入れてある。それは現行のものについて考へて見れば直ぐ諒解される。

この五節句は明治六年になつて、天長節、紀元節等が新しく制定せられたので、公式には廢止されたが、このうるはしい日本人の樂しみは今に行はれてゐる。我等はこの良い習はしを昔をふりかへつて知ると共に長く續けて行きたいものである。次にそれ〴〵について起源や儀式の樣子などについて述べて見よう。

一月七日

五節句の第一である。正月の樂しみも七日となるとそろ〳〵落ちついて來て職につき、學校の休みも終りとなる。門松もとれるし、平常に戻るのであるが、この日に七草の粥を炊いて食

べる風習は都會では次第に見られなくなつた。舊曆時代は正月は文字通り新春で、寒もあけ吹く風ものどかに草も生ひ出る頃であるが、新曆の今は新春とは名ばかりで、寒さはこれからである。であるから、昔朝廷で行はれた「子の日の遊び」等は寒くて出來るものではなく、寒風に吹きさらされる凧揚げや追羽子も震へながらの事である。しかし「七種」は聞くだけでも何となく懷しい風雅な感じを起すものである。

元來、この日を「人日」と言つてゐるが、これは支那で、一日を鷄とし、二日を狗、三日を猪、四日を羊、五日を牛、六日を馬として七日を人としてゐる處から起つた名稱である。そして「七種の節句」、「若菜の節句」とも言ひ、昔は朝廷では前にもいつた「子の日の遊び」をしたのである。

我が國では古來面白い說話を織り込んでゐる。その一つは次のやうである。

七種の草を集めて柳の木で作つた盤に載せ玉椿の枝で六日の夕方六時から始める。先づ酉の刻（六時）には芹をたゝく。次の戌の時（八時）には薺、亥（十時）には御形、子（十二時）には田平子、丑（二時）には佛座、寅（四時）には菘、卯（六時）には鈴代、辰（朝八時）

にはこの七種の草を合せて東方の井戸の水を掬んで若水と名づけ、この水ではゝがゝ鳥といふ鳥の來ない前に食べると一時（今の二時間）には十年の齢を延べる。七時には七十年若くなつて、それから八千年壽命が延びるといふのである。

次には六日の夕方から七日の朝にかけて鬼車鳥、又は鬼鳥といふ惡い鳥（みゝづく？）が空に飛び廻るので其の災禍を拂ふために各家で門をたゝき戸を打つのであつて、それからこの七草を打ちたゝくやうになり、尙此を食べると長命を保つといはれたのである。そして、敲く時に「七草七づな唐土の鳥が（とゝもいふ）日本の國に渡らぬさきに」といひながら七つづゝ七度、即ち四十九度敲くのである。この四十九といふのは七曜、九曜、二十八宿、五星といふ合せて四十九の星で、此の星を祭る意味であるといふのである。

兎に角この行事は古くからのことであるらしく、醍醐天皇の頃には已に實行されてゐたやうである。江戸時代には七種を靑菜と薺の二つに略し爼板の上に火箸、擂木、庖丁、杓子、薪の五つを並べて數だけを七つとして敲いた。

尙、朝廷では公式の行事ではなかつたが、武家では實行し、殊に德川氏は五節句中の第一と

して嚴重盛大に行ひ、諸大名は熨斗目、長裃で登城して祝儀を述べたといふ。

また、「七草爪」といふ習慣があつて、之は鬼鳥は人の捨てた爪をとるといふ傳說からこの鳥にとらせてはならぬといつて、鳥を追ふために敲いた七草を水に浸して、その水で爪をぬらしてきるといふのである。

「子の日の遊び」といふのは、昔我が朝廷で行はれた行事で、後廢れてしまつたのでたゞ歌や文章の上に見るばかりとなつてしまつた。これは最初子の日に行はれたのが七日と定められたのであるが、春風和やかなこの日、野邊に出て小松を拔きとつて遊び、千歲の齡を祝したのである。歌や詩を作り宴も催されたのは勿論であるが、いかにも暖き日を待ちこがれた當時の大宮人らしい遊びである。松の芽生えを拔きとるのは子と根の音が同じなので根ごと引拔いた。

春日野の飛ぶ火の野守出でて見よ
いまいく日ありて若菜摘みてむ

これは若菜摘む日の待ちきれぬ奈良朝の公卿の心持を詠じたのであるが、小松曳く樂しみも

ささそと思はれるが、又霜雪にいたまぬ松は、古來千年の壽を保つ木とされてゐたので門松と共に正月には誠にふさはしいのである。七草の七種についてはいろ〳〵に言はれてゐるが

芹、薺、御形、蘩、佛の座、菘、鈴代、

これぞ七草

といふ歌が一番知られてゐる。

三月三日

「上巳の節句」といふ。この讀み方は「じやうし」、或は巳を訓にして「じやうみ」ともいふ。これは昔は三月最初の巳の日に行はれたので三日と定つたことではなかつたのである。上巳は即ち上の巳の日といふ意味から名づけられたのである。三日と日を一定するやうになつたのは支那の宋の頃からとも、魏の頃であるともいふ。日を定めたので「重三」といふやうになり、又此頃は桃が咲くので「桃の節句」と稱し、一般に雛祭りをするので「雛の節句」ともいはれてゐる。舊曆では春もそろ〳〵末、新曆でもこの頃からは日増しに暖くなつて春の訪づれとして

桃が咲き出すのでいかにも長閑な、又いかにも女の子にふさはしい遊びである。

この日、朝廷では「曲水の宴」が行はれたといふが、之は勿論支那から傳つたことで、その起源については、周の武王が暴政をふるつた殷の紂王を滅して洛邑に城を築き、流水に盃を泛べて天下統一の祝宴をはつたといはれてゐる。又、「上巳の祓」等といつて身や心のけがれを修祓する事が行はれてゐたので、それに附隨した宴として趣向をこらし行はれたともいはれてゐる。

我が國でも文武天皇以來行はれた。誠に風流な御遊である。御苑の池に水を流し、その上に酒盃を泛べて文才のある公卿が畔に並び、それ〴〵自分の前に盃が流れて來るまでに詩や歌を作つてその盃をとつて飲んだといふ。靜かなあたり、清き水と對していかにも我々日本人にふさはしい宴である。

しかし、一般には雛祭りの方がより以上盛大に行はれた。屏風を奥に赤い毛氈の上に並べられた雛人形の前に女の子が集つて樂しむ様は、やがて嫁いでからの甲斐々々しい姿がしのばれてうれしい。雛を祭る事は我が國固有の行事で、可成古く行はれてゐたやうだが、元來女の子

が人形を翫ぶことはその性質から誰でもやることであるから、昔はその程度であつたらう。それが雛祭りとして上巳の節句の日に行はれるやうになつたのは、足利時代の中頃といはれてゐる。人形の作り方や衣裳等も時代が進むにつれて人々の要求にともなつて行つた。徳川時代からは一層盛大に行はれるやうになつた。尙また前に言つた「上巳の祓」には今でも六月や十二月にするやうに紙で作つた人の形をしたものを用ひたので、これと混同して三月に飾るやうになつたのだといふことである。

ついでに祓には今でも紙の人形(ひとがた)を用ひてゐるがこれは紙雛(かみひな)(神雛ともいふ)が人に代つて災厄を引受け、そして幸福をもたらすと言ふ信仰から用ひられてゐるのである。

五　月　五　日

端午の節句と稱せられてゐるが、重五の節句、菖蒲の節句等ともいふ。端は「もの丶初め」といふことで五の日の最初であるので「端五」と稱した。「五」を「午」と書くのは音が同じであるからである。又、一說には「五月に入つて第一の午(うま)の日」で、元來は五日に限つたこと

はなく最初の午の日をあてたのを五日に一定したともいはれてゐる。三月が女の節句であるのに對して、五月は男の節句として颯爽たる初夏の空に鯉幟を飜して菖蒲を軒端にさし粽を食する等、季節からも飾りつけからもいかにも男らしい潑剌たるものがある。

これも勿論支那から來た事であるが、これには面白い傳説が織りなされてゐる。

屈原といへば楚國の家老として有名な人である。懷王に事へて世を治め、學問も廣かつたが讒言されて江南に左遷された。彼は赴任の途中「懷河の賦」といふ詩を作つて汨羅といふ川に投身してしまつた。それは五月五日であつた。楚の人々は之を憐んで毎年此の日には竹筒の中に米を入れて水中に投げ入れ彼を弔つた。漢の武帝の時に長沙の歐回といふ者が河の畔を通ると見なれぬ者が來て、「自分は三閭太夫といふ者だが、毎年祭つてもらふのは嬉しいがこの淵の中には蛟龍がゐて、折角の供物も食べられてしまふ。それ故にこれからは葦の葉で包んで五色の糸で縛つてくれ。さうすれば葦や五色の糸は蛟龍の嫌ふものだから食べられない」と。この話を聞いた屈原の妻の嫈が、所謂粽を作つて投げ入れたといふ。事の眞僞は別としていかにも支那らしい說話である。

粽は惡鬼に象つたもので、之を切つて食べるのは惡鬼を降伏させる意だといふ。菖蒲は藥草で、之を湯に入れて浴すのは惡病邪氣を拂ふのである。軒端に菖蒲の葉や蓬をさすのも災難を避けるためであるが、こんな話もある。

平舒王が臣下を殺した時、その靈が毒蛇となつて禍をなした。その時に智者が「蛇の形は頭が赤く身は青く菖蒲に似てゐる。それ故に菖蒲を切つて酒に入れよ」と。その通りにすると蛇は姿をかくしたといふ。これは一つの精神作用であらう。

柏は古昔神を祭る時に供へたので柏餅を食べるのも邪氣を拂ふ意であらう。鍾馗は支那で疫鬼を拂ふ神といはれてゐる。唐の玄宗が病氣になつた時に、夢の中に小鬼が現れたのを藍袍を著た大鬼が捕へて食つた。玄宗がその名を訪ねると、「自分は修南山に住む鍾馗である」と。夢から覺めると病は全快したので、呉道子にその姿を書かしたといふが、大きな眼、長い髯、黑い冠をかぶつて長靴を穿き拔劍した姿は勇ましくも凄い。吹流しは徳川時代から始つた。鯉幟は爽快である。殊に鯉は昔から出世魚とされ、男子の立身榮達を祝する意とされてゐる。幟は昔は紙で作つたが布となつた。冑人形も最初は蓬で人形を作り、紙で作つた冑をかぶせ

たりし、或は眞菰の葉で馬を作つたのである。又、端午の飾りは幟が最初に行はれたので、それも外に飾つたのが、座敷幟といつて室内に飾るやうに小さく作つた。

我が國では仁徳天皇頃から行はれてゐたやうである。中古時代、朝廷では三日に六衛府から藥玉にする菖蒲や艾（もぐさ）を上ると、四日の夜に主殿寮（とのもづかさ）の役人が所々の殿舍の軒にさす。五日には此の日の藥玉などを作る糸所（いとところ）から菖蒲縵（かづら）を献ずる。陛下はその縵をつけられて武德殿に出御せられて宴會を行はせられ、群臣も縵をかけて御馳走をいたゞく。それから馬場で騎射を行はせられた。そして柱にかけた藥玉は九月の重陽の日に菊と取替へるまでかけて置いた。

武家や民間でも一般に行はれ足利時代には菖蒲酒を飲み、菖蒲湯に入り、又粽を贈答し合つた。德川時代には益々盛んで、染帷子（そめかたびら）に長袴で登城し祝儀を言上した。大奥ではお目見え以上の者は參殿して祝賀を陳（の）べて柏餅を献上し、又三家三卿等將軍家の姻戚からは粽を上つた。將軍家に嗣子の誕生があつた年には玄關前に幟を飾り與力同心が警衛した。

七月七日

綠滴る竹の枝に赤や黄や紫等の色紙に天の川とか俳句や歌を書いて結びつけ、軒端に飾るのは夏の空にふさはしい情景であり、又いかにもすが〳〵しさを與へる風趣である。まだ明けきらぬ曉に芋の葉や草葉に宿る夜露をコップや茶碗に集めて硯をすつて、筆を走らすのも風雅なことであり、衣裳や吹流しを作るのも樂しいものである。飾つた竹に風が吹き來つて葉かげにゆれる色紙はなまめかしい。それも都會では次第に見られなくなつて懷しい思ひ出とならうとしてゐるが、仙臺では今も變らず盛大に行はれてゐる。丁度此の頃は晝の暑さに弱りはてた人々が、夕日の沈むのを待つて涼を求めて外に出る。すると晴れた空にくつきり一條の天の河が見える。何かしらそこに幽遠な思ひにひきつけられる。一生を旅に暮した德川時代の俳人松尾芭蕉が江戸を離れて幾月か、北陸の海岸に泊つた夕、この天の河を見た時、さすがに旅の寂しさがひし〳〵とせまつて

荒海や佐渡に横たふ天の河

をよんだ心持もよく思ひ知られる。

支那の傳說に依ると牽牛（彦星ともいふ）、織女の二つの星があつた。織女星はもと天帝の

女で、年々天帝の衣を織つて暮し、年頃となつても容姿をかまはず仕へた。帝はその獨居を憐んで天の河の西にある牽牛星に嫁がせると、それからは織女星は機織を怠つたので天帝は怒つて河の東に歸らせ、一年に一度會ふことを許した。それが丁度七月七日の夜で、鵲が翼を並べて橋を作り、川を渡つて會合させたといふ。そして星の光が明らかな時は天下泰平、光が暗いと兵亂があるとされてゐる。星を祭る處から星祭、織女祭とも云ひ、又女の手藝に上達するための祭といふので乞巧奠とも稱せられてゐる。

起源は古く、明瞭ではないが、支那の漢代には實施されてゐたといひ、我が國へ渡來したのも相當古いやうである。

宮中でも定つた儀式として行はれ、淸涼殿の東庭に莚を敷き朱塗の机を置き、梨や桃、大角豆、大豆、瓜、茄子等から酒を供へ、また女の手藝に要する針などまで供へたやうである。そして一晩中、番をして夜明け頃には管絃を奏したといふ事である。

江戸幕府でもいろ〳〵の供物をして祭り、供物は、翌朝、品川沖の第三臺場附近に運び出して捨てたといふことである。

飾り方についてはいろ〳〵あるやうで、今でも机に茄子や團子を供へ香を焚いて星を祭る風習の傳る地方もあるやうである。徳川時代に作られた羇旅漫錄を見ると、京都の七夕は小さい提灯を澤山に竹の枝に結びつけ、子供は手習の先生の家の前に持つて行き、夕方は加茂川に流すのであるが、二條と五條の河原と定められてゐるので、提灯を持つた人が何百人となくつゞいて、丁度星が飛ぶやうであると書いてある。いかにも夏の宵にふさはしいではないか。

一體、七夕は棚機と書くのが正しいので七日の宵である處から七夕と書いて「たなばた」と讀むやうになつたのである。棚機とは機織りの道具に棚をわたしたやうなものがあるところから出たので、はた織る女を「棚機津女」といつたのを「つめ」を略し、又織女と書いて讀むやうになつたのである。

此の夜の鵲については次のやうな傳說がある。

昔、支那に遊子と伯陽といふ夫婦があつて健康な身で長生したが、遊子が九十九になつた時に妻の伯陽は死んで行つた。夫は心から嘆き悲しんだが、なすべき法もないので、せめてはと二人が眺め樂しんでゐた月を一人眺めて淋しくも自ら慰めてゐた。

然るに或る夜、いつものやうに月を眺めてゐると、死んだ筈の妻が一羽の鵲にのつて空を飛びゆくのを見た。遊子は見ない中であるなら兎に角、一寸でも見てからは一層傷心は加つて遂にそのため百三才を最後として死んで行つた。彼は死ぬと自ら星となつて鵲に乘つて伯陽を追つたが、悲しいことに、妻は天の川の彼方に行つてしまつた。

しかし、七月七日の夜だけは鵲が翼を橋にして二人を會はせてくれるといふ。

九月九日

九月九日は「重陽の節句」と言はれてゐる。魏の文帝が鍾繇に與へた文の中に、「歳往キ月來リ、忽チ復九月九日。九ハ陽數ト爲シ、而シテ日月並ビ應ズ、故ニ重陽ト曰フ」とあつて、奇數は陽、偶數は陰としたところから、その九の陽が二つ重るので重陽といはれた。支那では重九、九九等といつたが、丁度その頃に菊が咲くので「菊の節句」、栗が出る頃なので「栗の節句」、ともいつたのであるが、之は勿論陰曆の九月初旬で、新曆では菊や栗には早いのである。

その起源は明らかではないが、支那で漢代の初期から行はれて、山に登つて詩を賦したといふが、我が國に傳來したのは天武天皇の御代といふ。

宮中では此の日、天皇南殿に出御あらせられ、御帳の左右の柱に茱萸の袋をかけ、花瓶に菊花を挿して御殿の縁側に置き、公卿を召され、文學に秀でた者に探韻（漢詩を作るときに韻字を探つて分ち取ること）を賜つて詩を作らしめ、後、氷魚と菊花酒を賜つた。茱萸をかけるのはこれは邪氣を除き寒さを防ぐからといひ、菊花酒を酌むのは黄菊の花片を酒にひたして生命を延べるためと稱せられてゐる。尙又、八日の夕方、菊花に綿を著せ置いて夜露にしめつたものを九日に取つて、之で身を拭いて老を拂ひ菊の露で身をしめして千年の齡を延べようと祝つたといふ。

菅原道眞の有名な「去年今夜侍ス清涼ニ」と太宰府で作つた詩の去年の今夜とは何時かといふと、大鏡といふ本の中に「內裏にて菊の宴ありしに」とあるし、日本紀略には、「昌泰三年九月九日甲午、重陽宴、題云、寒露凝、十日乙未、公宴、題云秋思」とある。これに依ると重陽の宴の時には「寒露凝」といふ詩を作り、十日の夜宴には「秋思」を作つたが、時の帝、宇多

天皇の御感にあづかつて御恩賞を賜つた。しかし、翌年には草深き筑紫の里に流謫の身となつて重陽の夕を迎へた時、彼の感懐はいかにや。思ひやるさへ愁傷の極みである。

武家でもこの日を式日とし連綿として重視されたが、殊に徳川時代には諸大名は出仕登城して献上の事があつた。大奥では此の日は命を延べる吉例として御祝の杯に黄菊の花片を浮べて飲み、女中達にも料理に酒や丸餅を添へて賜つたといふ。

民間でも祝ひ、菊酒をくみ栗飯を食ふのが風習であつた。

支那の傳說にかういふことがある。汝南といふ處の桓景といふ者が費長房に學んでゐたが、或る時「丁度九月九日にお前の家に災難が來る。それ故に嚢を縫ひ茱萸を入れて肩にかけて山に登つて菊酒を飲むと逃れることが出來る」と。桓景はこれを信じてその通りにすると、家の雉や犬、牛、羊等は盡く死んだ。長房はそれを聞いて「お前の身代りになつたのだ」と。これから出たのだと傳へてゐる。

三、暦の話

暦には二つある。太陽暦と太陰暦とである。

現在使用されてゐるのは太陽暦で、今は世界各國とも之に依つてゐる。略して陽暦とも呼んでゐるが、之は太陽が緯度を一周するのに要する時間を一年として計算したものである。我が國で陽暦に改められたのは明治五年からで、之については解說の要もあるまい。

太陰暦は、明治維新前まで我が國でも使用してゐたので、古い書物を讀む場合にはよく理解して置かないと意味が分らない事がある。茲に說明するのも此の太陰暦の事についてゞある。

一體、暦は支那から傳來したものであるが、何時頃かと云ふと、佛敎が初めて傳へられた欽明天皇の御代で、御卽位十四年目に百濟から、醫學や卜學と共に暦學も傳つて來たので、暦學の博士が來た事が古書に見えてゐる。しかし。まだこの暦を使用するまでには至らなかつた。

推古天皇の御代には、更に百濟から勸勒（くわんろく）といふ僧が、天文や地理の書物と共に暦の書物をも

持つて來て、我が國の人々によつて大いに研究され、二年目の十二年正月から暦法が使用されるやうになつたのである。この暦は太陰暦、即ち略して陰暦である。

陰暦とはどういふのであるかといふと、太陽の周行には關係なく、月の滿盈、即ち月が出はじめてから、月がかくれてしまふまでを一ケ月とするのである。之は正確に言ふと

二九日三・五〇

となるのであるが、小の月を二十九日として切捨て、大の月は三十日として切上げるのである。かくて、月の滿盈は一年に十二回であるので、從つて十二ケ月としたのである。

然るに、このやうにすると、一年、即ち十二ケ月では

三百五十四日

となつて、餘分が出て來る。と云つて十三ケ月とすると

三百八十四日

となる。一年は

三六五日二四・二二

であるから、十二ケ月にしても、十三ケ月にしても丁度とならず、差がある。そこで平年は十二ケ月とし、その餘分を集めて一ケ月を増し十三ケ月とした。これが閏月で、大體五年に二度で、十九年間に七つの閏月があれば調和する。この閏月は今の暦のやうに二月に限らず、どの月の後へでも入れる。例へば正しい二月がすんで次に閏月が入ると、「閏二月」と稱する。「閏七月」といへば、七月の正しい月の外に、もう一度、七月をくりかへすわけである。

陽暦を使用する現今でも、農家などは却つて陰暦の方が農事とよく適合して都合がよいので暦には兩方が記されてある。

現在の四季は誰でも解るが、昔は陰暦とよく合はせて稱したので、次には此について説明しよう。殊に季節などは陰暦の方がよい。

萬葉集に

睦月たち春の來たらばかくしこそ

梅を折りつゝたぬしきをへめ

といふのがあるが、睦月は正月であるが正月になつて春が來たといふことは、今も新春などゝ

用ひてゐるからよいとして、梅の枝を折るといふのは花の咲いてゐる枝であるのは言ふまでもない。温暖な南國ならば兎に角、東京あたりでは正月に梅はまだ咲かない。

水無月の頃になりぬれば端居の風したしく、わらふだ敷きて居るも快し。

これは貝原益軒の文であるが水無月は六月であるから、六月に縁側に出てゐると風が涼しいといふのも一寸諒解し兼ねる。

かういふやうに昔の文を讀む時、よく注意しなければならぬのは季節と月とが今とは異ることである。これは太陰暦からとつたゝめであつて、昔の暦では正月といへば眞實に季節も新春であつたのである。即ち暦の新春と季節の春とは一致してゐた。そこで一年十二ヶ月を四季に分けると三ヶ月づゝになるのである。

それ故に現在では正月になつてから更に大寒となり寒さが加はる。そして二月初旬に寒が明けて季節は冬に別れてほんとの春となる、所謂節分であるのである。この夕方、今でも豆まきを行ふが昔は大晦日の夕に行はれたのである。

月	名	季節
一月	―孟春、新春	春
二月	―仲春	
三月	―季春	
四月	―孟夏、初夏	夏
五月	―仲夏	
六月	―季夏	
七月	―孟秋、新秋	秋
八月	―仲秋	
九月	―季秋	
十月	―孟冬、初冬	冬
十一月	―仲冬	
十二月	―季冬	

今「新春」といつても暦の上だけで、季節ではない。又、「仲秋」は八月であるべきのに、今は九月（即ち舊暦では八月）をいふ。

　年の内に春は來にけり一と年(とせ)を
　　去年(こぞ)とやいはん今年(ことし)とや言はん

これは有名な古今集の中の歌である。どういふ意味をいふかといふと、前にも述べたやうに閏月等の關係で年内に立春が來た時の歌である。

舊曆では、太陽が黃道（太陽の視軌道で、赤道と二十三度半の傾斜をなしてゐる）上にある位置に依つて、一年を二十四氣に分ける。一氣は更に三つの候に分けるので、一候は五日となるわけである。

昔は二十四氣は曆の上の日とよく適つてゐたが、前にも記したやうに新曆には適合してゐない、又小寒から穀雨までの間に咲く花を順に記して、古人はその花の咲くのを曆を見ながら樂しんでゐた。之を表に示すと次のやうになる。

二十四氣	太陽曆日取	節氣	七十二候	花信
立春	二月四日	正月節	東風解凍 蟄虫始振 魚陟負氷	迎春 櫻花 望春
雨水	二月十九日	正月中	獺祭魚 鴻雁北行 草木萠動	采花 杏花 李花

啓蟄	三月六日	二月節	桃始華　倉庚鳴　鷹化爲鳩	桃花　棣花　薔薇
春分	三月二十一日	二月中	玄鳥至　雷乃發聲　始電	海棠　梨花　木蘭
清明	四月五日	三月節	桐始華　田鼠化爲鴽　虹始見	桐花　麥花　柳花
穀雨	四月二十一日	三月中	萍始生　鳴鳩拂其羽　戴勝降桑	牡丹　酴醾　楝花
立夏	五月六日	四月節	螻蟈鳴　蚯蚓出　王瓜生	
小滿	五月二十二日	四月中	苦菜秀　靡草死　麥秋至	
芒種	六月六日	五月節	螳螂生　鵙始鳴　反舌無聲	

節氣	日	月		候
夏至	六月二十二日	五月	中	鹿角解　蜩始鳴　半夏生
小暑	七月八日	六月	節	溫風至　蟋蟀居壁　鷹始擊習
大暑	七月二十三日	六月	中	腐草爲螢　土潤溽暑　大雨時行
立秋	八月八日	七月	節	涼風至　白露降　寒蟬鳴
處暑	八月二十四日	七月	中	鷹乃祭鳥　天地始肅　禾乃登
白露	九月八日	八月	節	鴻雁來　玄鳥歸　群鳥養羞
秋分	九月二十三日	八月	中	雷始收聲　蟄虫坏戸　水始涸

節気	日付	月	七十二候
寒露	十月九日	九月節	鴻雁來 雀入水爲蛤 菊有黃華
霜降	十月二十四日	九月中	豺乃祭レ獸 草木黃落 蟄虫咸俯
立冬	十一月八日	十月節	水始氷 地始凍 雉入レ水爲レ蜃
小雪	十一月廿三日	十月中	虹藏不レ見 天騰地降 閉塞成レ冬
大雪	十二月八日	十一月節	鶡鳥不レ動 虎始交 茘挺出
冬至	十二月廿三日	十一月中	蚯蚓結 麋角解 水泉動
小寒	一月六日	十二月節	雁北鄕 鵲始巣 雉雊

梅花
山茶
水仙

大　寒　一月二十一日　十二月中　（鷄亂　瑞香／征鳥癘疾　蘭花／水澤腹堅　山礬）

四、昔の時間

時間の話と言つても、昔我が國で使つた時間の數へ方といふ事である。

今では世界各國が時計に依つて時間を言ひあらはしてゐるので、時計さへあれば、分らぬ人はないのであるが、時計のなかつた昔は、時間はほんの大體のものであつた。

昔は時計がなかつたので時間をどうして計つたかといふと「漏刻（ろうこく）」と言つて時間をはかる道具があつた。これは大きな器の中に水を入れて置き、下部に小さい穴があつて、その穴から常に一定量の水が漏出するやうになつてゐる。その水量で時間をはかるので「水時計」ともいひこの方法をよく心得てゐる者を「漏刻博士」と稱した。

支那でやつてゐた事であるが、之が我が國へ傳來したのは齊明天皇の六年であるといふ。藤

原時代には二人の博士の下に二十人の役人があつて測定してゐたが、後には廢れてしまつた。

漏刻で測定された時刻は鐘や太鼓を打つて一般に知らせたが、これは別表のやうに夜十二時に九つ打ち、一刻に一つづゝ減じ、正午には又九つ打つたのである。

鎌倉、足利時代は漏刻もなかつたので、たゞ大體の時間を知るばかりであつたらしいが、家康は夜明六時と夕暮六時に太鼓を打たした。秀忠時代からは鐘を打たせた。

そして一晝夜は十二支に從つて十二分したので、一刻は今の二時間に相當する。十二支の方では一刻を更に四分して「一つ」「二つ」と數へた。例へば「子一つ」といへば十二時半である。又數の方でいふ時間は「半」といふ語を使つて一刻を半分した。「九つ半」は一時である。

「草木も眠る丑三つ時」とは三時半頃である。しかし「丑滿つ」といふ意で「丑に滿ちた、即ち丁度二時だ」ともいふが、實際午前二時頃の方が靜寂な感がひとしほするやうである。

「更」とは夜の時間をいふので、八時から四時までを五つに分けてゐる。それ故に丁度、夜中になることを「夜が更ける」と更の字をあてはめてゐる。

今の時間のやうに一定されたのは明治六年一月に暦法改正と共にされたのであつて、時計の

ある現在から昔を思ふ時、どんなに不便であつたらうと推察される。

次に時間の對照を表示する。

午前			
○時(夜)	九つ	子ノ刻	三更、丙夜
一時	九つ半	子二つ	
二時	八つ	丑ノ刻	四更、丁夜
三時	八つ半	丑二つ	
四時	七つ	寅ノ刻	五更、戊夜
五時	七つ半	寅二つ	
六時(朝)	六つ	卯ノ刻	
七時	六つ半	卯二つ	
八時	五つ	辰ノ刻	
九時	五つ半	辰二つ	
十時	四つ	巳ノ刻	
十一時	四つ半	巳二つ	

午後			
○時(晝)	九つ	午ノ刻	
一時	九つ半	午二つ	
二時	八つ	未ノ刻	
三時	八つ半	未二つ	
四時	七つ	申ノ刻	
五時(夕)	七つ半	申二つ	
六時	六つ	酉ノ刻	
七時	六つ半	酉二つ	
八時(夜)	五つ	戌ノ刻	初更、甲夜
九時	五つ半	戌二つ	
十時	四つ	亥ノ刻	二更、乙夜
十一時	四つ半	亥二つ	

五、干支の話

十干十二支は支那の太古、黄帝が作られたと傳へられてゐる。即ち帝は大撓といふ者に命ぜられて時を正されたのである。大撓は陰陽五行說を基とし、北斗星を中心として甲乙を作り日に名づけて「幹」といひ、子丑を作つて月に名づけて「枝」といひ、幹と枝とを組み合せて六十日を作つたのに始まる。

このことが應神天皇の時に百濟から王仁といふ者が來た時に、丁度その年は百濟では乙巳であつたので、日本でも初めて乙巳の年である事を知り、推古天皇の時に曆を作られたので此の幹枝を用ひ、大化時代に至つて年號まで初めて出來たので、これから一般に行はれるやうになつたのである。この幹枝が干支と改められたのである。

五行說といふのは、天地の間に常に循環してゐる五つの元氣があつて、これに依つて萬物は育成するといふので、此の五行に方角、四季をあてはめると次の如くである。

木　東　春　育成
火　南　夏　變化
土　中央　　生出
金　西　秋　刑禁
水　北　冬　任養

合性といふ事をいふが、之は木から土、土から金、金から水、水から木を生じることで、木と土、土と水、水と火、火と金、金と木とは相爭ふので相剋といつてゐる。現在、人の生れた年にこの五行を配してその性とし、合相の男女が一緒になれば和合し、相剋の男女が一緒となると不和であるといふのは、こゝに起因してゐるのである。

この五行には陰と陽とがあつて、陽は「兄(エ)」、陰は「弟(ト)」である。そこで五行は十となるが、これに十干をあてはめ、そして我が國では音讀をせずに訓讀にしてゐるのである。

木(キノ)｛エ——甲　きのえ
　　　　｛ト——乙　きのと

火（ヒノ）エ——丙　ひのえ
　　　　ト——丁　ひのと
土（ツチノ）エ——戊　つちのえ
　　　　ト——己　つちのと
金（カノ）エ——庚　かのえ
　　　　ト——辛　かのと
水（ミヅノ）エ——壬　みづのえ
　　　　ト——癸　みづのと

以上のやうで「えと」とは「兄弟」、即ち五行の陰陽の事であるが、一方に「十二支」といふものがあるので之とつゞけて十干十二支を「えと」と稱するやうになつた。

十二支は前說のやうに黃帝が作らせられたのであるが之を禽獸の名にあてはめたのは漢時代であらうといはれ、佛教の說からともいはれてゐる。十二支の夫々は一年間に於ける萬物の成熟から收穫までの意をあらはしたので、十二ケ月の名として用ひられたのが始めで、年や日や其他にも用ひられるやうになつた。今その意味や禽獸との關係を表示すると次のやうになる。

子　鼠　子は滋とか孳といふ意で、すべてのものが地下に滋る。即ち一月にはまだ草木の芽は出ない。鼠はあとをかくすものなのであてた。

丑　牛　丑は紐で春の氣分が天にあつてまだ地には來ず、やがて紐で結ばれてあるので訪れる。牛は子牛を可愛がつて慈愛をたれるからである。

寅　虎　萬物が陽氣を迎へて螾然始まるので寅といつた。虎の性は亂暴なので之にあてた。

卯　兎　卯は茂る意である。兎はものに感じても激することはないのであてた。

辰　龍　辰は伸で萬物が延びる頃である。龍は風雲に乘じて活動するからである。

巳　蛇　巳は陽氣が最高點に達した時である。蛇は龍についでいろ〳〵に變化するからあてはめた。

午　馬　午は陰と陽とが混る時である。馬はよく走るのであてた。

未　羊　未は味で萬物成熟して味があるから名づけた。羊は跪いて乳をのみ、禮を知る故にあてはめた。

申　猿　申は身で萬物が皆一つの體をなすのである。猿の黠の性質からとつた。

酉　雞　萬物が老熟する。日が西に入つて門が閉ぢる時である。雞は兎に比べて元氣でも物に動かされない。

戌　犬　戌は晲で萬物つきはてる。犬は靜かなものなのである。

亥　猪　亥は核でものが皆堅くとざゝれて陽氣が下にかくれてしまふ。猪は犬より一層靜かなものである。

この十干と十二支とを組み合せて、年や月や日にあてはめる。干は十、支は十二であるから二つゞつ餘るので、従つて六十種の組合せが出來る。

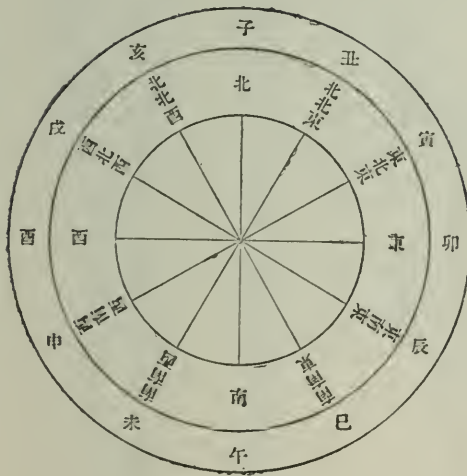
	第一年目	第二年目	第三年目
木	甲子（きのえね）　甲戌（きのえいぬ）	甲申	甲午
	乙丑（きのとうし）　乙亥（きのとゐ）	乙酉	乙未
火	丙寅（ひのえとら）	丙子　丙戌	丙申
	丁卯（ひのとう）	丁丑　丁亥	丁酉
土	戊辰（つちのえたつ）	戊寅	戊子
	已巳（つちのとみ）	已卯	已丑

金｛庚午（かのえうま）
　　辛未（かのとひつじ）
水｛壬申（みづのえさる）
　　癸酉（みづのととり）

かうして六十種、即ち六十年たつて六十一年目は、又もとに戻つて「甲子」となるので、之を還暦といひ、年齢でもこの年になると祝ひをするのである。

十干十二支は、年月日に用ひたのが始りであるが、之をいろ／＼な事に利用した。別記の昔の時間にも用ひ、又方位などにも次のやうにあてる。

庚辰　辛巳　壬午　癸未

庚寅　辛卯　壬辰　癸巳

六、月日の名稱

我が國民性の一つに風雅といふことが數へられる。この風雅は自然を愛する心から生れて來る。櫻が咲けば花を見に出かける。月の輝く宵には月を眺めて樂しむ。そしてたゞ見たり眺めたりだけでは滿足出來なくて歌に詠ずる。

かういふ處から同じ一つのものでもいろ〳〵風流な名をつけて樂しむ。十二ケ月のそれ〴〵に異名があるのもこのためである。

左に舊暦で言はれてゐた名をあげて解說を加へよう。

一月　睦月

正月は人々共に遊び樂しむので「相睦ぶ月」であるといふ。又、我が國では稻の成熟は重大な關係をもつので、其の稻の成長に依つて各月の名をとつたのであるともいふ。これに依ると正月は「實月」といふ意で、この頃に始めて稻の實を水に浸すからであるといふ。

二　月　如月（きさらぎ）

この頃は暖くなるので綿入から袷にかはるが、又寒い日もあるので再び冬の着物も着なければならないといふので、「衣更月（きさらぎ）」或は「着更着」といふ意味であるといふ。しかし「萠揺月（きさゆらきつき）」の意で、草木が生ひ出る月であるともいはれてゐる。

三　月　彌生（やよひ）

草木がいよ〳〵生ひ出て來るからといふが、又一月に浸した稻が生ひ延びるからともいはれてゐる。何れにしても今の四月に相當するので暖氣と共に花は咲き草も木も茂り行くのである。

四　月　卯月（うづき）

卯の花が咲く頃であるからだといふ。卯の花は空木（うつぎ）といふ木に咲く花で、この木の幹は中がうつろで然も堅いので、昔は木管として用ひられた。五六寸の穗のやうな先に五瓣の白い花が初夏の頃に咲くので、四月は舊暦では初夏であるし、その晴れ〳〵した處に白い花なので人々の注目を引き文や歌によくとり入れられてゐる。「卯の花月」ともいふ。

又、「植月」で稲の苗を植ゑるからであるともいふ。

五　月　皐月

「早苗月」の略であるといふ。早苗を植ゑるからである。これは今の梅雨の頃で、毎日雨模様の空は暗いので「五月闇」といふ句もある。晴れるのは珍しいので「五月晴」といふ句もある。

六　月　水無月

さすがの梅雨も晴れていよ〳〵夏である。雨も夕立位で、そんなに降らないといふので「水がない月」。暑熱が劇しくなつて水が枯渇するからである。一つには、「田水の月」で田に水を湛へる月の意といふ。

七　月　文月

稲も延びてそろ〳〵早いのは穗を出し始めるので、「穗含月」といふのが略されたといふ。又、「穗見月」であるといふ說もある。支那では七月七日に曝書といつて書籍を虫干するので文月と稱したといふ說もある。

八　月　葉月(はづき)

これにはいろ〳〵説があるが、稲の穂が張る月、即ち穂が大きくなつて垂れるやうになる月といふのがよい。「葉落月」で、木の葉が散り初めるからだともいふ。

九　月　長月(ながつき)

舊暦では秋も終り、燈火親しむ候で夜が長くなつた。「夜長月」といふ意である。多感な人々はこの頃に、讀書に物思ひに、しみ〴〵と夜のふけるのも知らないのである。又稲の穂が長くなつて刈り入れに近い頃といふので「穂長月(ほながつき)」であるともいはれてゐる。

十　月　神無月(かんなづき)

一般には諸神が出雲國に集るので神がゐなくなるからといはれてゐる。それ故に、特に出雲ではこの月を「神有月」と呼び、神在祭といふ祭事まで行はれてゐる。

しかし、この月に諸神が出雲に集るといふ話が古書の中にないので、いつ頃からこんな話が始つたか、神在祭の起源がどういふところかは明らかでないやうである。まだいろ〳〵の説があつて、雷が鳴らなくなる、即ち「雷無月」と言ひ、又「釀成月」で、十一月の新

嘗祭の準備に新米で酒を作るからともいはれてゐる。「雷無月」が一番あたつてゐるやうである。

十一月　霜月

霜が降り出すからであるが、又一つに、新嘗祭が行はれると共に一般にも新穀を食べるので「食物月」が略されたといふ。

十二月　師走

極月とも書く。歳が極てるといふ意であるとも言はれ、又一年中のいろ〳〵の事を「爲総す」意ともいふ。この後の方がよい。

以上最も廣く用ひられ、舊暦で言ふのであるが、今も準用されてゐる。此の外にも優雅な名を用ひられてゐる。

一　月――さみとり月、初春月、初空月、霞初月、上春、首歳

二　月――梅見月、雪消月、小草生月、早緑月、雁歸月、仲陽

三　月――花見月、櫻月、春惜月

四　月――夏初月、花殘月、得鳥羽月、麥秋、立夏、小滿、純陽、仲呂、正陽、淸和
五　月――さくも月、たくさ月、賤男染月、橘月、月見不月、五月雨月、鳴蜩
六　月――常夏月、風待月、鳴雷月、松風月
七　月――秋初月、七夕月、女郎花月、文披月、相月、桐秋凉月、親月
八　月――月見月、紅染月、秋風月、木染月、桂月、仲秋、素秋、淸秋、塞旦、秋半、深秋
九　月――いろどり月、寢覺月、紅葉月、小田刈月、彌寢月、竹醉月、季秋、高秋
十　月――小春、神去月、初霜月、時雨月、陽月、上冬、初冬、始氷
十一月――神歸月、子月、雪待月、霜降月、寒月、葭月
十二月――弟月、年よつむ月、春待月、極月、臘月、玄冬、窮月、梅初月、三冬月

ついでに、舊暦は滿月の日を十五日とし、月が出始める日を一日、なくなつた日を三十日又は二十九日として作られたものであるが、この語の意味も味ひあるものである。

一　日　朔日

これは日が西の空に入つた後に月が微かに見え初める日で、月が出始めるので「月立」と

いつたのが音便で「ついたち」となつたのである。

十五日

この夜の月を「望月（もちづき）」といつてゐる。この「望」といふのは、月は滿月で日と同じ形となり．西に日が入ると同時に東からは月が出るので、同時に相望むことが出來るからであるといふ。

三十日　晦日（つごもり）

小の月では廿九日になる。「みそか」といふのは「三十日」を和訓で讀んだのである。十五日を過ぎると月は一日は一日と缺けて、一ケ月の末には全くなつてしまふので「月がこもる」といふので名づけられた。「晦」は「暗」といふ意で宛字である。

所謂三日月は弓に弦を張つたやうな形に見えるので、「弓張月」といつてゐるが、七、八、九日頃のは上を向いてゐるから「上の弓張」又は「上弦の月」といひ、二十二、三、四日頃のは下を向いてゐるので、「下の弓張」「下弦の月」といふ。

又、十六日以後の月を次のやうにもいふ。

十六日　十六夜(いざよひ)の月

「いざよふ」といふ語は「ためらふ。行かうとして行かず、留まらうとして留らず」といふ意で、日が西に入つてから少し後に出るので「いざようてゐるうちに出る月」といつたのである。「望」が過ぎたので「既望」ともいふ。

十七日　立待(たちまち)の月

十六日より遅くなるが、まだそれ程でもないので立ちながら待つといふことである。

十八日　居待(ゐまち)の月

出方が大分遅れるので「居(すわ)つて待つ月」といふのである。

十九日　寝待(ねまち)の月（臥待(ふしまち)の月）

之は大分遅くなるので立つたり坐つたりでは待ちきれぬから、寝て待つといふのである。

二十日

廿日(はつか)月といつて、その形から、殊に木の間から輝くこの月はもの凄いとして歌等によく詠まれてゐる。

七、國名の起源

我が國では現在は府縣となつてゐるが、昔は六十八ケ國に分つてそれぞ〳〵名をつけた。これは今でも用ひるがその名の起源は興味深い理由があるのである。次に簡單に解說する。

山城（やましろ）　古くは「山代」「山背」と書いたので、「山うしろ」といふ意である。

大和（やまと）　「倭」と書くのが古く、四方が山にかこまれた地といふので「山間處（やまと）」といつた。

河內（かはち）　「凡河內（おほしかはち）」「大河內」といつたが、國名は必ず二字といふ定めになつたので、河內と書くやうになつた。大川が西北を繞り流れるといふ處から出來た。

和泉（いづみ）　今の大阪灣は茅渟（ちぬ）海といつてゐた。即ち和泉灘である。そこで西はこの灣に接するので「茅渟國」といつて河內に合してゐたこともあつた。これを和泉といふのは、神功皇后が新羅を征せられる時に、淸い泉が湧き出てゐたので名づけられたといふ。

攝津（せつつ）　「攝」は「かねる」といふ意である。攝津とは官職の名で、難波と津國（つのくに）とをかね治める役を置かれた。それが國名となつた。此處は淀川が海にそゝぐ地にあるので「津の國」ともいひ、仁德天皇が都を置かれて「高津宮」と言はれたのは、岸が高かつたからである。

又、「難波」といふのは「浪速」とも書くやうに「なみはや」で、神武天皇が吉備國高嶋に宮を立てられ、次で東征のため御乘船になつて瀨戸內海を進み、此處まで來られると浪が速く流れてゐたので、「浪速」と仰せられたのが名となつたと言はれてゐる。

近江（あふみ）　「淡海（あふみ）」と書いて用ひられてゐたが、これは琵琶湖のことで、「淡」とは鹽分を含まないから淡海といつたのである。後に濱名湖も「淡海」とし、之は都から遠く、こちらは近いので「近つ淡海」と稱したが、二字として「近江」と書き讀み方は淡海とした。これに對して「遠つ淡海」は「遠江」と書き讀み方は「とほつあふみ」が訛つて「とほとふみ」と今のやうに讀むやうになつた。

伊賀（いが）　大化改新の時は之は伊勢に合せられたが、天武天皇の九年に復活したので、起源に

ついては二説ある。その一は崇神天皇の皇女の伊賀津媛の御領であつたからといひ、他は猿田彦神の娘の吾峨津媛が居られたので、吾峨の郡といひ、この「吾峨」が訛つたのだといふ。

伊勢　神武天皇の臣に天日別命といふ方があつたが、勅命に依つて數百里の東に入ると村があつて、治めてゐる神があつた。この神は伊勢津彦といふ名であつたが、初は命令に叛いたが、後には從つて領土を献上した。この神の名から起つたといはれるが、まだ外にも説はあつて、川が多いので、「八十瀬」といふと言ひ、「五十鈴」をつめて出來たとも言はれてゐる。この地は伊賀と共に平氏の根據地であつた。

志摩　伊勢島といふ意味で、元來は伊勢に屬してゐたのであるが、後に分れたのである。その國は答志崎といふ處が半島のやうに海中につき出てゐるから伊勢の島の國と名づけられた。壹岐國に次いでの小國で今は志摩郡といふのが一つしかない。

紀伊　素盞嗚尊の三人の御子が苗樹をこの地方にお植ゑになつたところが、非常によく成長するのでそのまゝ長く住まれたといふ。「木ノ國」といふのを國名は二字の定めによつ

て延してキイといひ、紀伊とあてた。

淡路 淡路は「淡道」と書いてもよいので對岸は四國の阿波であるから、「阿波に行く途上」の島であるといふ意味で名づけられた。

丹波 昔は旦波又は田庭と書いて丹後と合せて一國であつた。四道將軍の一人である丹波道主命の姓から出た名である。

丹後 奈良朝の和銅六年に丹波から分れ丹波後國と稱したのを、國名は二字との定めで、丹後と改めたのである。

但馬 多遲麻とも田道間とも書いたが、垂仁天皇の頃に新羅の王子の天日槍といふ者がこゝに土地を賜つて住し、その子孫を但馬といつたといふ。その中で田路間守といふ者は遠く南の熱帶地方から初めて蜜柑の實を持つて來たといはれてゐる。「たぢま」といふ意は山路が多くて馬でないと通行が出來ないので、達馬から變つたといはれてゐる。

播磨 いろ〳〵の説がある。最も簡單なのは針を産したので「針間」といつたといふ。又萩原といふ處に井戸があつて、一晩の中に萩が生え一丈ばかりになつたので「萩原」とい

つたのであるが、この萩は榛のことで、「榛間井」から起つたといふ。又この邊の海岸は屈曲が甚しく「張弓」のやうであるからともいふ。

備前　昔は此の邊一體を吉備國と稱した。神武天皇御東征の時に滯在せられた高島宮はこの國にある。應神天皇が秋に此の地に行幸せられた時に御友別が兄弟や子孫を膳夫として御馳走を献上したので此の地を割いて封じ吉備氏を稱したといふ。この御馳走は黍であるので、國名も黍に關係があるといはれてゐる。孝靈天皇の第三皇子彥五十狹芹彥命は四道將軍の一人で、この地に來られ吉備津彥命と稱せられてその子孫は國守として永住せられた。この吉備國を三分したのは天武天皇の時といふが、備前は「吉備國道之口」で入口にあたるので備前と稱した。

備中　「吉備國中縣」で中にあるので稱した。

備後　「吉備國道乃之利」で最奧にあるからである。

美作　元正天皇の和銅六年に備前から分れた。その時國境に美和といふ處があつたので、「美和境」といつたと言ひ、又「三坂山」（頂上からは十州を望まれるといふ高い山）か

らともいふが、一說に「甘酒」で古く酒のとれた事は歌にも詠まれ、この國に美甘といふ地がある。

因幡　昔は「稻羽」又は「稻葉」と書いた。稻がとれるからと傳へられる。

伯耆　箒から出たともいひ、或は伊邪奈美命を此の國と出雲との國境の比婆山に埋葬し奉つたので「母君の國」と稱したともいひ、又稻田姫が八頭蛇に呑まれようとした時に母が來たので「母來國」といふ處からともいはれる。

出雲　素盞鳴尊が須賀に宮を定められた時に有名な

八雲立つ出雲八重垣妻ごみに
八重垣つくるその八重垣を

といふ歌を詠ぜられたので四世の孫に當られる八束臣津野命が此の「八雲立つ出雲」からとつて國名と定められたのである。この歌は雲が八重にかさなり立つた眼前の景に感ぜられてその有樣を詠じて雲が出た、卽ち出雲とつゞけられたのである。

石見　この邊の海岸は岩が多い、殊に唐崎の岩屋山が最も甚しいといふ。そこで「岩群」

「岩見」である。

隠岐（おき）　「奥」の意で伯耆や出雲等の沖にあるから稱した。

安藝（あき）　神武天皇が御東征の時にこの地に留ませられたので「我君（あぎみ）」から出たといふ。併し又一方には、仲哀天皇が行幸せられ渟田（ぬた）の門（と）といふ所で船を止めて食事をなさると魚が船の周圍に集つて來た。そこで皇后が酒を投げ入れると魚は醉つて浮んだので澤山にとれた。皇后は、「これは陛下が一番御好きな魚である」とよろこばれたが、これから此處の魚は毎年六月になると「傾浮（あぎとう）」ことが醉つたやうだといふ。この「傾浮」から起つた名だと稱してゐるが、この魚は櫻鯛であるといふ。

周防（すはう）　「周芳」と書いて周波宇とよませた。語源はよく分らないが、次のやうな傳説もある。建御名方（たけみなかた）神が出雲國より此の地に遁げ來つたのを建御雷（たけみかづち）神が追ひ來つて攻めたので須波（すは）と驚いて信濃へ去つたからだといふ。

長門（ながと）　孝德天皇の代までは「穴門」と書いた。本州と九州との間の海峽で、穴のやうな水門があつたからといふ。この海峽は古の人の說にも兩沿が山で崖が崩れ落ちた形から陸つ

ゞきで、下に穴があつて海水の通る道があり、船が往來してゐたと書いてある。

阿波　「阿波」は「粟」である。粟は昔は各地に澤山作つたので、特によく出來た國であるから名づけたのである。

讃岐　古は「紗拔」「讃吉」「讃藝」等と書いた。手置帆負命といふ人が茅の竿を作つたが、後には之を朝廷に献上した。そこで「竿調國」といつたのをヲを略し、ノツをつめたのである。

伊豫　いろ〳〵の説があつて、「伊豫二名洲」といつて四國の總名として用ひられた。伊は言ひ出しの語で、豫は湯で温泉があるからといひ、又昔の鎭護神であつた伊豫部彦、伊豫部姫の名からだともいはれる。尙一説には本州についで二番目に出來たから「彌」の義だともいふ。

土佐　土佐といふ地、葛木一言主神を祠つた土佐大神があつたので地名が出來たが、この地を土佐といつたのは、舟が入る水門があつて、非常に狹いので「門狹」と稱したからであるといふ。これは今の浦戸港に當るといはれてゐる。

豊前、豊後　共に「豊國」と稱したのを、文武天皇の時に分れて豊後國をたてた。「豊國」は字の通りで、「ゆたかに富み榮える」意である。景行天皇が此の地に行幸あらせられた時に「十二年冬十月、到二碩田國一、其地形廣大、亦麗、因名二碩田一」とあつて、碩田は實に豊國の意に適してゐる。

筑前、筑後　二國を合せて「筑紫」と稱した。筑紫は一國の名にも用ひ、又九州全體の名稱ともした。此の地には古く太宰府を置いて九州を鎭護せしめたので「西國を鎭す」即ち鎭西が筑紫の別名としても用ひられた。筑紫國が二つに分れたのであるが、筑前といふ名が見え出したのは文武天皇の時代、筑後は天智天皇か天武天皇の頃といはれてゐる。さて「筑紫」とはどういふ意かといふと、之には四説がある。

（一）形が木兎に似てゐるから。

（二）兩國の間に高山があつて、乘馬で通行する時に餘り急なので鞍が摩りきれるので、此の地方の人が「盡の坂」といつたからといふ。

（三）兩國の境に荒猛な神があつて、通行人が半死半生の目にあふ者が多いので甕依姫が

之を憂へて祭りをしたところが、その害がなくなつた。人命を盡す神だといふ。
（四）又、死者を葬るためこの山の木で棺を造つたので、木が盡されようとしたから。萬葉集によると「馬之爪都久志」とあつて、我が國の西端にあるから「盡」だとある。德川時代に貝原益軒は、異國から賊兵が來襲するのを防ぐために海岸に石垣を築かせたので「築石」といつたからといふ。古は「竺志」とも書いた。

肥前、肥後　合せて「火國」と稱した。景行天皇の御代にこの邊に打猴、頸猨といふ二人の者が百八十餘人を率ゐて天皇に叛いた。そこで健緒組といふ者を遣して討伐せしめられた。天皇は國内を巡視し八代郡の白髮山に登られると日が暮れたので泊られた。その夜、空から火が見えたので健緒組は急ぎ陛下の御前に至つて、「刀に血ぬらずして强賊を誅するを得ましたが、これは一つに御威光によります。今、天空に燎火が見えますのも吉兆でせう」と。陛下はお喜びになつて、「見たこともない不思議な火だ。この火の下の地を火の國と言はう」と。そこで健緒組に大君健緒純といふ名を賜ひ、この國をも下されたといふ。一つには天皇が船で葦北から來られた時に海上に火があつて舟航の目標を誤らなかつたか

らともいふ。この火は所謂「不知火」である。此の國が二つに分れたのであるが、肥後は古の火國でも肥前は火海を距てゝ前に海を控へてゐるから、「火前國」と稱した。

日向　景行天皇が此の地に行幸せられた時に「此の國は日の出る方に向いてゐるから日向と言はう」と名づけられたが、「ひむか」である。又、天孫降臨の時にも「朝日が直ぐさす國、夕日の照る國」とある。神武天皇御東征の後は熊襲の一族が住し、襲國と稱したが、景行天皇が西征に來られて名づけ給うたのである。昔は薩摩、大隅も日向に入つてゐた。

大隅　日向國の內で西南の隅に差出してゐるので「大隅郡」と稱したのを、元明天皇の和銅六年に肝付、贈於（熊襲隼人のゐた地）、大隅（大角隼人のゐた地）、姶良の四郡を合して大隅國とした。

薩摩　語源は明瞭でない。或は「幸濱」で、このサチは「得物」とか「獵」の意であるといふ。又「陜間」で、連山の中が絶えて狹い地といふのだといふ。古くは日向國の一部であつた。天孫降臨の地であるが神武天皇御東征の後は政權の中心は畿內に移つたので、遠く王化及ばず、熊襲の一族が勢を得て、「襲國」、「隼人國」とも稱した。景行天皇が討伐

に下られた時も此の國には入られなかつたといふ。

壹岐 數說ある。

（一）朝鮮に渡る舟が一時「息」をやすめるところ。

（二）此の島に神を祭るための「齋忌」があつたから。

（三）「雪」で、よせてくだける波が雪のやうに白いから。

（四）「鯨來」の略で、勇魚（大きい魚。又は鯨のこと）が來るので「勇魚來」である。

對馬 これは「津島」である。「海津之中所レ有之島也」とある。朝鮮に往來する舟が泊る津の島で、津は港のことである。この津島を支那人が聞きちがつて對馬とあてたことが魏志といふ支那の本に出てゐる。これを我國でも用ひるやうになつたので、「對馬島」は「津島島」と島が二つ重なるやうになつてしまつた。

若狹 「若々しく狹い」意と傳へる。昔、この國に或る男女が夫婦になつた。年とつても容貌が少年のやうに若々しかつたので、人はこの二人の年齢を知らなかつた。後にこの二人を神として祠つたが、今の一宮神社がそれであるといふ。或る人は「稚櫻部」から出

たといふ。即ち履仲天皇の代に膳臣余磯といふ者が稚櫻といふ名を賜つたと傳へる。

越前、越中、越後　越前、越中、越後、加賀、能登、出羽等を總稱して「越國」といつた。これは「高志國」とも書いた。その語源は諸説あつて一定し難いが、この地に入るには角鹿といふ坂を越して行くからといひ、又蝦夷に越え行く道だからといひ、尙外國から貢物を持つて來る時に越して來るからといふ。角鹿は今の敦賀で古昔は三韓との交通の要地にあたつてゐた。天武天皇の時に三つに分れ、「道の口」であるから越前と稱した。越後は京都からいつて最奥であるから名づけた。

加賀　弘仁十四年に越前の二郡に他の郡を合せて出來た國である。此の地は廣く人が多いので「ひらけた國」即ち「赫國」である。又、こゝからは鏡磨師が澤山出るから、「鏡」からとも傳へる。

能登　明瞭でないが、能登部村といふ土地があるので、この地名が國名になつたのであらうといはれてゐる。「と」は水門。海門の門に當つて、入りこんでゐる處である。能登部村附近の七尾灣は海が深く陸地に入りこんで咽喉のやうであるからといふ。

佐渡　數説あるが、「さはと」の意で「さは」は多いといふ意、「と」は港で、この國に港が多いので名づけた。又、狹渡でこの島に舟が入る處がせまいからともいふ。

美濃　「御野」とも書いたので、この地方は廣い野原があつたので、之をほめ稱して「眞野」といつたのが訛つた。又一説に各務野、靑野、賀茂野から出來たとも傳へられる。

飛驒　「挽手人」から起つて國名となつた。代々飛驒工といつて工匠を出して朝廷に仕へたのである。即ち「木を挽く人」である。飛驒は昔は「斐陀」、又は「斐太」と書いた。

尾張　「尾羽張」といはれる劍は、先の方が巾廣くなつてゐるが、草薙劍もその一つで、熱田神宮に此の劍を祠つてあるので「尾羽張」から出たといふが、それ以前からあつた名前であるといふ。さういふ人達は大和の葛城の高尾張といふ處から移住したのだといひ、或は「尾張の山田郡の小治田連藥といふ者が尾張といふ姓を賜つた」とあるところから、「小治田」の田をとつて字を改めたのだとも傳へられてゐる。

三河　男川（大平川）、豊川（吉田川）矢作川の三川があるので名づけられた。男川はこの上流に山神がゐて白髮の明神であるといふ。豊川の上流は民家が澤山あるので豊川とい

ふ。又矢作川は日本武尊御東征の時に河邊で矢を作つてゐる者が多かつたので名づけられたといふ。

信濃（しなの）　この國には「木が品々ある故、品野（しなの）」であるといひ、又日本武尊御東征の時に此の國に來られると山嶽重疊、谷深く翠嶺萬里であつた。そして坂が多かつたといふ。そこで「級坂（しなさか）」といふ意からで、シナも坂の意だといふ。しかし、シナは科で栲（たへ）の木である。この皮は白い。それをとつて諏訪神社の御用にしたこともあり、又級布紙（しなぬの）、多布布（たふぬの）等を出したこともある。今も地名に更科（さらしな）、埴科（はにしな）、仁科（にしな）、蓼科（たてしな）等といふのがあるので、この科の生えてゐる野といふのが當つてゐる。

甲斐（かひ）　「山の峽（かひ）」ともいふが「飼（か）ふ」意で、「甲斐國より神馬を献ず。馬身白髮」などゝも古書に見えるし、「有㆓牛馬之牧㆒、每年貢㆓駿馬肥牛㆒」ともあつて、飼養してゐた意味からである。

遠江（とほたふみ）　近江の處に說いたやうに「遠い淡海」である。この「淡海」である濱名湖は今は海とつゞいてゐるが、以前は獨立した湖水で、濱名川によつて海に注いでゐた。それが明應

七年の大津波に依つて陷沒し、一時この川は入江となつてゐたが、それもなくなつて海につゞいたのである。「今切」といふ地名もそこに起因する。

駿河　「尖川」の約で、この國の川は山から出て海に流れ入る水流が烈しいので、川波が強く、よせる勢が烈しい處から名づけられた。又「駿河有二三大河一、濤勢如二駿馬駈一千里一、故爲二國號一」ともある。尙また次のやうな說もある。

富士川の下流に駿河といふ村があつた。これは西の方で、今の御殿場の近くの駿河は駿東郡といふ郡名でも分るやうに東にあつた。富士川の下流の地名の駿河がやがて國名となつたのであるが、富士川は天下の急流で、ともすると水量が增して岸の波が川邊にゆすり流れるのでユスルガといつたのをユスがつまつてスルガと讀むやうになつた。ユスルは鳴り響くことをいふので、カは處といふ意である。

伊豆　二說があつて、その一は伊豆は「いづる」といふ意で、東の相模と西の駿河の間に出てゐる半島だからといふ。もう一つは「出湯」がつまつたので、天孫降臨以前に大己貴尊と少彥名命が我が國人が若死する者の多いことを憐まれて、入湯の法を敎へようと溫泉

を造られた。之が箱根の元湯であると傳へてゐる。

相模（さがみ）　語源は明瞭でないが、こんな傳説もある。足柄明神は狩人であつた。その妻が死ぬ時に鏡をさして「自分の死後、若し自分を慕つてくれるならばこの鏡を見てくれ」と。死後その鏡に寫る姿が亡妻そのまゝであつたので、その鏡を祠り、その地を「さがみ」と稱した。この「さが」は姿で、「み」は見るであるといふ。

武藏（むさし）　一般に傳へられてゐる語源は秩父の山は高く聳えて勇士が怒り立つてゐるやうに見えるので、日本武尊が此の山を賞し戰勝の祈禱をせられて武具を岩の洞の中に藏められたので武藏といふといはれてゐるが、それは誤りであるともいふ。　賀茂眞淵は「牟邪斯」でむさは俘囚といふ意。三韓や蝦夷の俘虜をこの邊に置いたからだといつてゐる。

安房（あは）　神武天皇が國內を統一せられた時、太玉命（ふとだま）の孫の天富命（あめのとみ）が阿波の人々を率ゐて此の地に移住したからであるといはれる。

上總（かづさ）、**下總**（しもふさ）　「總」（ふさ）は麻のことである。安房と同じやうに天富命が來られて麻を植ゑたところが非常によく生じるので「總國」（ふさのくに）と稱した。大化改新の時に之を二つに分けて、「上（かみ）つ總

國」、「下つ總國」としたのを約して讀むやうになつたのである。

上野、下野　上野と下野とを合せて「毛野の國」と稱した。「毛」は「土地之所レ生爲レ毛」と古書にあつて木や草のことで、「野」は木草の地を意味した。この邊は一體に草木が多かつたので毛野國といつたのを「兩國中間有二二野一、曰二佐野、笠懸野一。其野中有二一河一、號二渡瀬一、又有レ川、曰二佐野中川一、以二渡瀬一爲二兩國境一」とあつて、二つに分けて上毛野、下毛野と稱したのを二字と定められた時に毛は省かれたが、讀み方は毛を殘して野は發音せずに、みを音便にして「かうつけ」といつたのである。

常陸　これには諸說がある。

（一）日高見路で東北の總稱である。これは朝日の直刺といふ意から出來たので、この日高國へ行く道といふ意だといふ。

（二）東海道から「ひたつゞき」に陸がつゞいてゐるからである。

（三）海邊に沿うて國道がつゞいてゐるからといふ。

陸奥　今は青森縣だけをいふのであるが、昔は東海道と東山道の奥にあたるので東北地方

一帯即ち磐城、岩代、陸前、陸中、陸奥を總稱した。之を五ヶ國に分割されたのは明治五年である。陸奥は「みちのおく」即ち「道の奥」といふ意で、之を「みちのく」、又略して「むつ」と讀むのであるが、何故「むつ」と讀んだかといふ事については「陸」と「六」は音が同じであるので「六」を「六つ」とよんだのだといふ。

羽前、羽後　陸奥の中の「出羽國」を明治初年二分したのである。出羽は和銅五年に陸奥と越後との一部分を合して置かれたので、出羽は「道の奥より出端國」といふ意である。

陸前、陸中　二國とも明治初年に名づけられた國で「陸奥」の陸の字をとつたのである。

磐城　養老二年に磐城、磐背の二國を置いたが、後に陸奥に合併され、更に明治元年十二月に分れた。

岩代　明治初年に名づけられたが、昔「岩背」の地であつたので「いはうしろ」と讀み、これを更に「いはしろ」とつめて「岩代」の字をあてたのである。

八、二十四孝の話

支那の元時代の郭居業の作として傳へられてゐる。史上に傳はる孝子の中から二十四人を撰出して、その事蹟を述べて賞揚したのであるが、その說話は何處までが事實であるかは分らないが、德川時代に子弟の教育には非常な善い影響を與へた。二十四人を撰んだのは、六曲屛風に一曲に二人づゝの肖像畫を描いて贊をしたからであると傳へられてゐる。

次に各人についての事蹟を略記する。

虞舜

母に死別して繼母に事へたが、この繼母に象といふ子供が生れると舜を憎んだ。或る時、舜が歷山といふ處で耕してゐると、大きな象が來て耕す手傳ひをしてくれた。これは天の神が舜の至誠を以て繼母に事へた孝心を賞するためであつたが、母は益々舜を憎んで、或

時、殺さうとまでした。それでも、彼は少しもかまはずに孝をつくしたので、遂に此の事がその時の聖天子堯帝の耳に入り、堯の信任を得て太子となり、帝位に登つて舜帝と稱するやうになつた。

漢ノ文帝

高祖の子の文帝は母の薄姫に孝をつくした。常に食事の時は先づ自ら試食してすゝめた。天子の位につくやうな高貴の方が自ら試食せらるゝ事は感激の至りである。多くの臣下達も之を賞し、遂に兄もあつたが推されて皇帝の位についた。此が、即ち孝文帝である。

曾參

孔子の弟子で、孔子の命で孝經を作つた人である。家が貧しかつたが、よく母に孝をつくした。或る時、參が山に薪拾ひに行つてゐる留守に友人が來た。貧家とて、何の饗應も出來ず、留守居の母が困つて指を嚙むと、山にゐた參は胸騷ぎがして、急いで家に歸つた。之は、平素の孝心から、遠く離れてゐても母の心が參に通じたのである。

閔子騫

孔子の門人で、閔損といふ。子騫は字である。繼母のために虐待された。或る冬の寒い日、二人の異母弟には溫い着物を着せても、損には薄いものしか與へなかつたので震へてゐた。父がそれを見て事情を知り、この後妻と別れようとすると、損は「若し、そんな事をすると、今度は二人の弟が寒さに震へなければならない。自分さへ怺へてゐれば、弟共は暖いのだから止めてほしい」と願つたので、繼母はその孝心に感じ、それからは損を大切にするやうになつた。孔子はこの孝心を聞いて、「孝なる哉、人。その父母昆弟の言に間せず」と賞した。

仲由

これも孔子の門人で、字を子路といふ。貧しかつたので日傭人足となつて、米を運んでやつて賃金を貰ひ、母を養つた。後に役人になつたが、母を亡くした。貧乏の時を思ひ浮べて、「いくら貧しくて人のために米を背負ふやうな仕事をしても、母が達者でゐてくれた方がよい」と述懷した。

董永

漢の千乘の人である。子供の時に母を喪ひ、父に事へたが、家は次第に貧乏になつた。そこで、永は小さい車を造つて毎日田を耕しに行く時に父を乘せて行き、田の畦に置いて働いた。父が亡くなると葬式費がないので、人に「若し返金出來なければ、あなたの奴となら う」と誓つて錢を借りてすませた。その葬式の歸り道で、一人の婦人と會つた。婦人は「妻にしてくれ」と願出た。永は承知して連れて歸つたが、それからは婦人は一ヶ月にならぬうち、絹三百疋を織つたので、永はそれで借金を返すことが出來た。その時、「自分は實は天女である。あなたの至孝の心が天に通じ、天の神は私を下して機を織つてあなたを助けさせたのである。借金も返せたし、これで、もう用はなくなつた」と言つて、天に昇つてしまつた。

剡子（えんし）

兩親が年とつて眼病になつた。この藥には鹿の乳がよいと聞いたので、彼は鹿の皮をかぶつて山に入つてかくれ、鹿を捕へようとした。その時、狩人が、ほんとの鹿と見誤つて射殺さうとした。子は急いで皮を脫いで理由を話すと、狩人はその孝心に感心して、牝鹿を

射て與へた。

江革（かうかく）

漢の臨淄（りんし）の人である。子供の時に父に死別し、一人の母を養つてゐた。或る時、叛亂が起つたので、母を背負つて避難した。ところが、運惡く其處で賊に出會つてしまつた。革は老母のあることを告げて、見逃してくれるやうに賴んだ。その言葉は非常に哀愁に滿ちてゐたといふ。賊も遂に感動して去つた。人々は孝子として賞したが、間もなく母は死んだ。革は墓側にあつて着物さへも着かへずに悲しんだ。後に、家老にとり立てられた。

陸績（りくせき）

吳の人である。六歲の時に、袁術のところに行くと、袁は橘の實を出して饗應してくれた。績はこの實を三つ、そつと懷中に入れた。いよ〳〵歸る時に、落したので、袁は怒つて、「お前をこんなに御馳走して優遇したのに、盜みをするとは何事か」と。績は、「あまりおいしさうなので、母に持つて歸つて上げようと思つたのだ」と答へた。袁は孝心を賞して與へたが、大きくなつてから正直であつたので、郡長にとりたてられた。

唐　夫人

雀南といふ人の妻である。姑によく事へた。姑が年とると、ものを食べるに不自由となつたので、自分の乳を與へた。姑は臨終の時に人々を集めて、「お前達は唐のやうに孝をせよ」と。

呉　猛

晉の濮陽の人である。八才でよく親に事へた。貧しくて夏になつても蚊帳が買へないので着物を脱いで親に着せ、自分の身には蚊を集めて血を吸はせた。

王　祥

晉の臨沂の人である。繼母の朱によく孝をつくしてた。或る冬、母が病氣となり、生魚を食べたいといつた。祥は川に行つたが、厚く氷がはつてゐたので、着物を脱いで氷上に座つてゐると、解けて中から二匹の鯉が躍り出て來た。これは天の神がその孝心を賞したのである。後、晉公になつた。

郭　巨

漢の隆盧の人である。母に孝をつくした。母は巨の子、即ち孫を可愛がつて、食物を常に半分わけてやつた。巨は妻に言ふのに、「母が食物を皆食べないのは子供がゐるからだ。子はまた生れる。母は再び得られない。母のために子を殺さう」と、土を掘つて埋めようとした。三尺ばかり掘ると、地中から黄金の釜が出て來た。そして「この釜は天が郭巨に賜はるものである」と書いてあつたので、政府でもどうすることも出來なかつた。

揚　香

魯の人である。父がゐた。十五才の時に父と共に山に行くと、虎が出て來て飛びかゝらうとした。香は父をかばつて、「自分を食つて、父を助けよ」と頼むと、虎も感じてか、そのまゝ逃げ去つた。

朱壽昌

宋の時代の人。字を唐叔といふ。三才の時に父が楊州の長官となつた時、父は母を出してしまつた。壽昌は年長じて母のない事を悲しみ、母を慕ふあまりに役を止め、刀を指に刺して血を出し、金剛經を書いて天に祈つて母との再會を願つた。五十の時に漸く陝州で母

に會ふことが出來た。母はその時は七十であつたが、共に非常に喜び、家に連れ歸つて養つた。他の役人達は之を聞いて賞し、詩を作り、有名な文章家の蘇東坡は、その序文を書いて送つた。朝廷も之を知り、又復職させた。

庾黔婁

南北朝時代の人で、孱陵縣の縣知事となつて赴任したが、十餘日、急に胸騷ぎがしたので父が病になつたと思つて急いで歸ると、果して重病であつた。父の糞をなめて見ると危篤の狀態であることを知つて、北斗七星を祭り、自分が父に代らうと祈つた。しかし、その効なく亡くなつたが、墓側に侍して事へた。

老萊子

周時代の楚の人であつた。彼が七十才になつた時、兩親に年を忘れさせようと、子供のまねをして慰めた。又、五色の着物を着て堂の上に上り子供の泣くまねをして樂しませた。楚王が之を聞いて任官しようとしたが受諾しなかつた。そして蒙山の麓で靜かに生活してゐたが、孔子も激賞した。

蔡順

漢の汝南の人である。父に別れて母を養つてゐたが、王莽が漢に叛いて亂を起したので國内は亂れ、饑饉がつゞき盜賊が拔扈した。順は母に供する食物がなくなり、熟した桑の實を進めた。丁度、そこに盜人がやつて來て、順がうまさうなのを選り分けてゐるのを見て感動し、米二斗と牛の足とを與へた。

黄香

漢の人である。九才の時に母に死別し、殘つた父に事へ、夏には床の側で扇ぎ、冬は自分の身で床をあたゝめた。その縣の知事の劉護が賞して門下生とした。

姜詩

漢の人である。母によく事へたが、その妻も姑に對してつくした。母はよく川の水を飲み川魚の膾を好んだので、妻は六七里の道を出かけて買つて來て與へた。或る時、暴風雨のために歸るのが遲れたので、詩は怒つて妻を離縁した。それでも怨まずに膾を運んで與へたので、詩は感激して妻を入れた。これから二人は心を協せてつくした。或る朝、雨戸を

あけて見ると、庭に水が湧き、二匹の鯉が飛び出した。これは天が二人の孝心に感じてしまつた事であると言ひ傳へた。

王褒（わうはう）

三國時代の人である。父は文帝に事へてゐたが、忠言したことから遂に殺されてしまつた。それからは褒は文帝を怨み、假りにも文帝のゐる方に向つて座らなかつた。父の墓側に柏の木があつた。褒は、毎日墓参りに來て、この柏によりかゝつて泣いたので、柏は涙のため枯れてしまつた。母は雷が嫌ひであつた。母が死んでからは雷の時は、その墓に行つて、「私がゐるから安心して下さい」と言つた。或る時、詩經を讀んでゐるうちに親の事を書いた處に來ると、涙を流して止まなかつた。門人達は心配して、そこを切りとつて見せないやうにした。

丁蘭（こいらん）

漢の河内の人である。幼い時に母に死別し、悲しみのあまり、母の木像を造つて生前と同じやうに事へた。蘭の留守の時に隣の張叔が蘭の妻に金を借りに來た。妻は木像に向つて

尋ねると許さないので拒(こば)んだ。その人は怒つて、木像を罵り杖で首を打つた。蘭は歸つて木像を見ると、不快な顔色なので妻からこの話をきゝ、怒つて叔を打つた。そこに役人が來て蘭を捕へた。すると、木像は涙を流してゐた。此の事を聞いて郡長は天子に傳へるとその孝心を賞し、木像の繪を書き寫して献じさせた。

孟　宗

呉の江夏の人である。母が病のため食慾がなく、何か珍しいものを食べたいと言ひ、冬であるのに筍がほしいと言ひ出した。宗は竹林に行き雪の中に泣き叫んで天に訴へた。その心が通じてか、筍が拔き出た。後、役人となつて他國に行つたが、母の訃報に接して役を捨てゝ歸つた。無斷で役を捨てるのも孝心のためなので罰せられなかつた。

黃(わう)庭(てい)堅(けん)

宋の詩人である。山谷(さんこく)と號した。母の病氣の時に、他人の手をかりずに自分で糞便のことまで世話をして看護につとめた。

九、忌み詞

目出度い時に不吉な言葉を云ひ、不吉な時にめでたい言葉を用ひることを嫌ふのは人情の當然である。更に、これが進んで不吉なことや、めでたい意を聯想させる言葉をも使ひたくないものである。婚禮の時に「歸る」と言はずに、「お開き」といふのは、「嫁がかへる」といふ意を聯想して忌み嫌ふのである。又、「四日」を「四日(しにち)」といへば、「死」に音が同じなので「四日(ようか)」と呼んでゐる。葬式の時に「今度は」とか「重ね〲」などいふのを嫌つてゐる。

これが忌み詞であつて、今でもよく言はれるところである。これは前にも記したやうに、一つは人情からでもあるが、又、言葉はその人の品性をあらはすものなので、さういふ意味からも忌み詞が出來た。下品な言ひ方を避けて品よくといふのは我が國民性の一つで、便所を「御不淨」といひ、もつと婉曲に「御手洗」とも稱してゐるのなどはこの類である。漢語では「淨房」「閑所」等と稱する。

我が國の武士は敵に負けることを恥としてゐた。苟くも負をとることは武士としては死よりも嫌つた。それで、敵に冑を射られながら、「射させた」と使役的にいつてゐる。これは軍記物によく見るところで、武士の面目が躍如としてゐる。即ち、こゝにも忌み詞があるのである。同じことでも「射られた」と受身にいふよりも、「射させてやつた」といふ方が、どの位勇壮に聞えるか。武勇を尊ぶ我が武士が、このやうに、言葉の端まで心を用ひたことは誠に感激の至りである。

忌み詞は平安朝頃から始つたらしいが、その始めは伊勢神宮に奉仕せられた皇女方や賀茂神社に事へられた女王方が使はれたのにあると傳へられる。神につかへるのであるから主に佛教上の言葉を忌み嫌はれたのである。

伊勢神宮に御奉仕の皇女、即ち齋宮の忌み詞は、古書に七つあつたとある。

延喜齋宮式に

凡忌詞、內七言、佛稱二中子一、經稱二染紙一、塔稱二阿良良岐一、寺稱二瓦葺一、僧稱二髮長一、尼稱二女髮長一、齋稱二片膳一。外七言、死稱二奈保留一、病称二夜須美一、哭稱二塩垂一、血稱二阿世一、打稱レ撫、宍稱レ菌、墓

称レ穢。又別忌詞、堂稱二香燃一、優婆塞稱二角筈一

と記されてゐる。右の中、「髪長」は髪のない僧侶を反對に「長い」といはれたのである。「染紙」は經文は多くは黄色に染めた紙に書いてあるからである。「瓦葺」は神社の屋根は多くは檜皮で葺いてあるが、寺院のは瓦である。「死」は反對に「なほる」といひ、「病」は「やすみ臥す」意である。この外に、

葦――葦。「悪し」と同じだから忌んだ。

米――米が正しいが、「死」と通ずる。

十四日――「四」は「死」と通じるから。

大幕打ち揚ぐ――武士の間に用ひられたので、「引き張る」といふと、退却の「退く」を聯想される。

ありの實――梨。「無し」と同じ音を嫌つた。

笏――笏と讀むのが正しいが、「骨」を思はせるので、長さを計る「尺」をとつた。

横笛――横笛の字音が「王敵」と聞えるので、かりにも口にする語でない。

卯の花——豆腐糟。「から」は下品なので、美化した。又、「得の花」とも聯想される。
當り箱——硯箱、硯の「する」は損をする意と同じく聞えるから、反對に當る（まうかる）といつた。同じやうなのに次のごとくある。
當り鉢——摺鉢。
鬚を當る——鬚をそる。
あたりめ——するめ。

一〇、いろは歌留多と俚諺

俚諺は作者は誰か傳はらぬ。それは、傳はらぬ程、名も知れぬつまらぬ人が作つたものであるからである。作つたといふよりも、偶然言ひはなつたことが、廣く言ひはやされるやうになつたのである。それだけ人情の機微を捉へ、世態の眞髓にふれてゐる。卽ち折角作つても人々が成る程と首肯出來なければ、その時だけで忘れられてしまふ。首肯することは人々が常に思ひ

感じてゐる事を言ひあらはしてあるからである。

今に傳はる俚諺の中には自己修養の一助ともなるべき名句が多い。たゞ俗間に作られ、俗間に傳つて來たゞけに表現がいかにも素直であり、又中には稍ゝ下品なものがある。これは、眞の意味の平民文學であるから致し方がない。

俚諺の中でよくまとまつて最も知られてゐるのは、「いろは歌留多」である。正月の遊戯の一つとして行はれてゐる此のカルタは徳川時代の文政七年に尾張國の小山駿亭が作つた「教訓伊呂波喩諺歌」をもとゝして多少の訂正をして文政の末頃に出來上つたものである。

一體、このカルタは今のが一つだけといふわけではなくて、多くの人によつて種々に作られた。その一番初めは伊勢の人の南勢南叟が「兒童教訓伊呂波歌」といふものを安永三年に作り、宇治山田の講古堂といふ本屋の主人が世話をして、京都の菊屋喜兵衛から出版し、翌四年一月に下河邊拾水が繪を書き添へて、「兒童教訓伊呂波歌繪抄」としたものだといはれてゐる。それが現在のものに一定するまでには、いろ〳〵の人の手に依つて作りかへられたのである。

幾分、下品なところがあり、又現代人には不向きのものもあるにはあるが、よく世態人情を

洞察して眞理を捉へてゐる點は敬服の外ない。靜かに再誦三考する時、津々たる興味を覺えると共に自己の言動に深き內省を促される。之を新文化のみを謳歌する聲に誘はれて、一途に棄てゝ顧みないといふことは餘りに無謀である。深き修養の鑑としたい。

一般の俚諺の中には支那の故事に基くもの、又歐米の格言に依るもの等が混つてゐるが、こゝには我が國固有のものを主として廣く行はれてゐるものゝみをあげた。殊に故事に基く種類のものは可成の解說を必要とするので、一括して別書に述べたい。

一、いろは歌留多

犬も歩けば棒に當る

ぢつとしてゐれば何でもないが、犬でも歩けば棒にあたるので、事をなす者は困難に遭遇するのは仕方がないといふのであるが、今はそれを更に進めて、ぢつとしてゐてはだめだ、何でもすれば思はぬよい事に出會ふものだといふ意味にとる。

論より證據

議論をするよりも證據になるものを見せるのが、より以上に力があるといふこと。

花より團子

これはいろ〱の意味にとれる。花を眺めて歌や詩などを作るよりも、腹の足しになる團子の方がよいといふ實利主義の意にもなる。華を去つて實につけといふ意にも用ひる。

憎まれ子、世にはゞかる

憎まれ子はいろ〱の經驗を體得して成長するので、却つてしつかりした處があるといふ意がよいのであるが、それを、憎まれ子は世の人々から排斥されるやうになるとも解してゐる。

骨折り損の草臥儲け

勞するばかりで何の効もない。いくら一所懸命に働いても認めてくれず報酬もない。

屁をひつて尻つぼめ

これは下品な句であるが、よく眞理を穿つてゐる。人の目を偸んで不正をしながら、ごまかして分らぬやうに彌縫する例はよくあることである。

年寄の冷水

老人が冷水を飲むのは身をこはすもとである。身分や位置を考へずに不相應な事をするのは愼しみたい。

塵も積れば山となる

「塵も」といふのは「塵でさへも」である。塵はつまらぬものであるが良い事の方を考へたい。

律義者の子澤山

正直で眞面目な者は却つて子供が澤山に出來ると皮肉にいつたのであるが、皮肉とのみとりたくない。

盗人の晝寢

盗人が晝寢をするのは夜働くためである。何でも目當てがあつてするのである。

琉璃も玻璃も照せば光る

裝飾に用ひる寶石が琉璃で玻璃は硝子。この二つは異つてゐても光を與へれば輝くといふ

ので、凡人も勉強させ、適した業につければ一人前となれる。

老いては子に從へ

年とつてからは子供に世話になるのであるから、子供のいふことに從へと、頑固な親を戒めたのであるが、これは支那の禮記に書いてある、「女は家にあつては父に、嫁しては夫に、夫に別れては子供に從へ」といふ婦人の三從の誡から出たのである。

割れ鍋にとぢ蓋

似たもの夫婦といふ意。拙い男には又似合ひの醜女がある。相應に皆夫婦になる。

かつたいのかさ怨み

これは極端な言ひかたである。ものには程度がある。上を見れば限りがないが、又下にも際限がない。身分や地位に常に滿足して、安らかな生活を送ることは出來ぬものであらうか。同じ醜いながら、まだあの人の方がよいと怨むは人の情とはいひながら餘りに聞き苦しい。

葭の莖から天上のぞく

天上は廣い、その廣い天上を細い葭の管から覗かうとしても一小部分しか見えるものではない。小智を以て廣大なる眞理を極めんとするのはあまりに無謀である。

旅は道づれ世は情

旅行では道連れがなくてはならぬし、世を過して行くには人情をかけ合つてゆくのが大事であるといふ意。よく眞理を言つてゐる。

良藥は口に苦し

「諫言耳に逆ふ」といふ句があるが、同じ意である。苦くとも身に良く効く藥は服用したい。自分のためになる他人の忠言は耳に聞きにくゝとも、良く聞いて欠點を改めてゆきたい。

總領の甚六

長男は大樣で智意の足らぬものだといふ意であるが、これは偶然さういふ場合があつたので、作者が一部を見て作つたのであらう。

月夜に釜をぬく

大丈夫だと思つてゐるものを奪ひとられる意で、月夜は明るいし、釜は大きくて目立つものである。誰しも捕られる等とは思はず油断してゐる時に盗まれる。「ぬく」とあるけれど「拔かれる」といふ意。

念には念を入れ

心を入れた上に心を入れよといふので、何事もよく注意することが必要である。

泣き面に蜂

一つの不幸にあつた上に更に別の苦しみが加はる。泣き顔に蜂がとまつたのでは更に泣かねばなるまい。

樂あれば苦あり

樂しみと苦しみ、これは常に循環して一方にとゞまることはない。この句は樂の時に苦にならぬやうによく用心せよと戒めたのであるが、苦しさに堪へれば、やがて樂もありと慰めの意にも用ひる。

無理が通れば道理引込む

理にない事が通用されゝば道理は却つて無理のやうに見えて引込んでしまふ。無理を通さんとする者を戒めたのである。

嘘から出たまこと

初めは冗談のつもりが、いつの間にか眞實になる。

芋の煮えたの御存じない

世帯なれない妻のこと。尚、一般に世間を知らない者のこと。

咽喉元すぐれば熱さを忘る

熱いものを呑むのも咽喉を通るまでゞ、それからは感じなくなる。一度は懲りても直ぐ忘れて再びくりかへすやうになるのを誡めた。

鬼に金棒

強い者を一層強くする譬。強い鬼に金棒を與へればどうする事も出來なくなるのである。

臭いものには蓋

汚い物ではあるが、單に物質ばかりではなく、精神的のものでも蓋をして人目につかぬや

うにせよとの意である。

安物買ひの錢失ひ

安値なものもよいが自ら限度がある。却つて錢を失ふ結果にならぬやうに用心せよといふこと。

負けるが勝

他人と議論などをするに當つて、一時の不滿を忍んで負けても、それは眞からの負けではない。却つて器量をあげて立派である。

藝は身を助く

職を失つたり、財産をなくしたりして生活に困るやうになつた時に、身に覺えた藝によつて收入の道を得て行く。こんな時に曾つて遊び半分に習得した藝がどんなにうれしく思はれることか。

文は遣りたし、書く手は持たぬ

文盲者の嘆きを譬へたのである。文章が書けたらと後悔しても既に遲い。

子は三界の首枷

三界は慾界、色界、無色界で、此の三界を超越して後に道を悟ることが出來るのである。ところが子供は可愛いため、首枷（首の自由をさせない器具）となつて悟ることが出來ない。此を逆に子供は厄介なものだといふやうにもとる。

えてに帆をあぐ

機會を巧みに利用する。「えて」は追手で、後から吹く順風である。順風を利用して行く船は漕ぐ力も樂で早い。

亭主の好きな赤烏帽子

主人の好むところであつてみれば妻も從者も同意しなければならない。「好きに赤烏帽子」ともいつて、昔、義教將軍の時に、ある人が赤烏帽子をかぶつて來た處が、將軍は面白がつて繪に書き、それを松平肥後守に賜つた。すると肥後守はこれこそ將軍から賜つた物として長く大切にしてゐたといふ。好きは「ものずき」。

頭かくして尻かくさず

一部分の惡い事をかくして、其の他をかくすことが出來ないこと。雉は頭をかくしても尻まではかくされぬから、尾が見えて直ぐ居處が知れる。

三遍廻つて煙草にせう

三遍働いて休んで煙草を吸はうといふので、三遍は煙草一服に對して言つたのである。これを、話が遲く廻りくどい意味にもとつてゐる。

聞いて極樂、見て地獄

話に聞くと美しさうであるが、一度踏みこむと地獄へ落ち入つたと同じで出て來られないとの意であるが、之を一般には、話には善く聞いてゐても實際行つて見ると反對であるといふやうにとる。

油斷大敵

これはよく言はれる語で、意味も明瞭である。この下に「火が燃える」とつゞけて特に火事に注意してゐる。

目の上のたん瘤

自分の上にあつて邪魔になるもの。出世の妨げになる同僚などをたとへる。

身から出た錆

自業自得、災厄にあふのは自分でした原因からである。人を怨むことは出來ない。

知らぬが佛

事情を知らないから良い氣なもので、知れば怒るであらう。餘りに探求して氣にかけると暮すことも出來なくなる。

緣は異なもの味なもの

夫婦の緣は不思議なもので、全く知らない者が思はぬところから夫婦になる。考へれば分らぬものだが、それでゐて一緒になれば嬉しいものだ。

貧乏暇なし

貧乏人はその日の生活に追はれて金もなく暇もない。

門前の小僧、習はぬ敎を讀む

環境による影響の大きいこと。寺の門前の子供は殊更習はなくとも、聞き覺えて經を讀む

やうになる。

背に腹はかへられぬ

人は助けたくても自分の困難を見捨てるわけにはゆかない。

粋が身を食ふ

粋は通のことで、通人は金がいる。そのために資産を失ひ遂には身を滅すやうになる。

京の夢大阪の夢

夢の話をする時にかういつてから始めるものだといふが、とりとめもなく空想する意に解する。

二、俚諺

（あ）

明日の百より今五十

當てにならない將來の百よりも、今五十貰つた方がよい。「あの世千日、此の世一日」と

いふのと同じ。

虻蜂とらず

あまりに慾張り過ぎて、兩方とも取れなくなる。

開けてくやしい玉手箱

期待は大きかつたが、結果は案外であつた場合にいふ。浦島太郎の話から出た句である。

暑さ忘れてかげ忘れる

人の恩惠を忘れてしまふ。

あの聲で蜥蜴(とかげ)食らふか時鳥

共角の句であるが、なか〳〵面白い。人は見かけによらぬものである。

惡事千里

惡い事は直ぐ人に知れる。然も千里の遠くまで傳はるから、惡事をせぬやう注意せよ。

惡錢身につかず

不正で得た金は直ぐなくなる。盜人がその金を持つてゐず、直ぐに遊興に使つてしまふの

は良心が咎めるからである。

悪女の深情（ふかなさけ）

よくない女のしつこさ。

足もとから鳥が立つ

思ひもよらぬ事が起る。不意に近くから鳥が飛び立つて驚く。又、急がせる聲。

商ひは牛の涎

商賣の祕訣は、ねばり強くやるのがよい。

秋茄子（あきなす）は嫁に食はすな

姑が嫁を憎む心から、旨い秋茄子を食べさせるなといつたのである。

過の功名

仕損じたことが却つて都合よくなる。

案ずるより產むが易い

婦人のお產の事であるが、一般にも適用する。思つたよりも實際に當ればそれ程でもない。

後の雁が先になる

後進者が先輩を追ひ拔いて出世する

當つてくだけろ

失敗を覺悟で事に當つて見よ。

合せものは離れもの

無理に合せたものは、結局離れるやうになる。夫婦などの場合に言ふ。

雨霽れて笠忘る

要がなくなると忘れ勝ちであるが、困難が去るとその當時世話になつた恩を忘れてしまふのは現代では殊に多い。よき誡めである。

雨降つて地固まる

雨後は却つて地面が固るやうに、一度紛擾のあつた後はよく治まる。

有りがた迷惑

親切が却つて迷惑となる。

頭剃るより心を剃れ

頭を剃つて洒落れるよりも、心の修養をつとめよ。

足駄をはいて首つたけ

足駄をはいても首まで浸る程深く思ひこむ。

足がなくては動かれぬ

足と銭とをかけたのである。

後腹(あとばら)が病む

お産の事から譬へたので、事がすんだ後になつて疚しい事が起つたり、費用のつぐなひをするやうになつたりする。

朝駈(あさがけ)の駄賃

朝は人も馬も勢ひがよいので、少しの荷物は心にとめない。

朝風呂、丹前、長火鉢

安楽な生活の様子を並べあげた。

家鴨の火事見舞

丈の低い人がちよこ〳〵と急いで歩く姿。

急がば廻れ（い）

「武夫の矢橋のわたり近くとも急がば廻れ瀬田の長橋」といふ歌もあつて、急いで近道をすると、却つて失敗する。

生馬（いきうま）の目を抜く

非常に敏捷なことの譬で、生きた馬の目さへ抜きとる江戸の様子を言つた。

痛くない腹をさぐられる

覺えのない疑をかけられる。

一寸の虫にも五分の魂

小さい者でも、魂はあるから蔑ることは出來ない。

一富士、二鷹、三茄子（なすび）

吉夢を順に並べたので、この夢を見ると良い事があると言はれてゐるが、眞僞は分らぬ。
年中行事の「初夢」を參照せられよ。

一文吝しみの百知らず

少しの金を惜しんで、却つて大損を招くやうになる。

一寸先は闇

禍と福とは常に順に廻つて來るので、今はよくても、先はどうなるか分らない。

痛し痒し

どうしてよいか分らず、困つたこと。

鶍の嘴の食ひ違ひ

もの事が齟齬することを譬へた。

石の上にも三年

石の上でも三年もつゞけて居ると暖まるといふ意で、つらくても忍耐して勤めて居れば自然に他の同情や信用を得て成功する。

石が流れて木が沈む

物ごとが顚倒すること。

石を抱いて淵に入る

石を抱いては浮き上ることが出來ないので、危いことや必ず亡びることを譬へる。

石橋をたゝいて渡る

堅固な石橋を壞はれてゐないかと杖で叩いて渡るといふので、用心深いことをたとへる。

「念には念を入れ」は、これより輕い意味である。

命あつての物種

命が何より大事である。

命長ければ恥多し

永生きはよいが、それだけいろ〳〵の事に出會ふので恥にもあふ。

命の洗濯

平常忙しい勞苦を慰めるための氣ばらし。

命を的にする

命を捨てる覺悟で事をする。

井の中の蛙、大海を知らず

狹い井戸の中にゐる蛙は、これが我が天下と思つてゐる。見聞や見識のせまい人もこれと同じである。

陰德あれば陽報あり

人の見ぬ處でも人のため世のためにつくせば、いつかはよい報いがある。

犬の糞で敵を討つ

卑怯なやり方で怨をはらすこと。

犬の遠吠

遠くから人を攻擊する卑怯なやり方をたとへた。

犬の川端步き

川端を步いても餌物は水に流されてある筈もない。其處を犬が步いても得るものはないで

あらう。同じやうに得ることのないたとへ。

いや〳〵三杯十三杯

嫌だと思つても、さゝれるまゝに飲む盃は、初は三杯位でと思ふものゝ、何時しか數を重ねる。物事は知らず〳〵ひかされて深入りし易い。

鰯の頭も信心から

信仰の心があれば、神や佛に限らない。つまらぬものでも、靈あるやうに考へられる。

（う）

氏より育ち

人格の養成は家柄よりも修養や家庭の美による。

氏なくして玉の輿

女は卑しい家に生れても、美しければ高貴の人に迎へられて立派な輿に乘るやうな身分となれる。昔は平民では名はあつても氏はなかつたので、「氏なくして」といつたのである。

內辨慶の外すぼり

「内廣がり」ともいふ。内では威張つても、外に出ては意氣地がない。

内股膏藥

内股につけた膏藥が、あちこちにつくやうに一定の節義のない人。

内兜を見すかされる

兜の内、即ち心の中を見すかされる。

鵜の目鷹の目

この二つの鳥は目が鋭い處から譬へたので、氣を配つて物を探すこと。

馬は馬づれ

同じ者が集つて連れとなる。

馬の耳に念佛

いくら言ひ聞かせても道理のわからないこと。

生れぬ先の襁褓(つむぎ)定め

物事の早計なこと。

牛にひかれて善光寺詣り

他人に誘はれて事をさせられること。善光寺の近くに住んでゐた老婆が洗濯して干して置いた布を隣りの牛が角にひつかけて善光寺の方に逃げた。老婆は追ひかけて遂にお寺に行き、お詣りしたといふ話から出た句である。

牛を馬に乗りかへる

にぶい者を捨てゝ早いものにかへる。

後髪（うしろがみ）を引かれる

未練が殘ること。

後辨天（うしろべんてん）、前板額（まへはんがく）

後姿は辨天のやうに美しいが、顔は醜い。板額は鎌倉時代の初めにゐた勇婦の名で、容貌は醜かつたといふ。

魚心あれば水心

人が好意をよせてくれゝば、自分も好意をつくす。これを「心あつたから實際にもやつ

た」ともとる。

運は天にあり、牡丹餅は棚にあり

棚にある牡丹餅を取らうとすれば容易であるが、天にある運はとることは出來ぬので、時の來るのを待つより外はない。

海とも山ともつかぬ

物事がどうなるか見當のつかないこと。

海に千年川に万年

多年世間の苦勞をしたため世なれて社交等に長じてゐること。「海千山千」ともいふ。

瓜の蔓には茄子はならぬ

子供の賢愚は、其の親の賢愚に從ふもので、凡庸の親ならば子供も賢くないのは當然だ。

瓜二つ

瓜を二つに割つたやうに、よく似てゐる。

歌を作るより饅(ぬた)でも作れ

下手な歌を考へるよりも實用になる饅を作つた方がよい。

上見ぬ鷲

悠々何物にも畏れず飛揚する鷲。しかし世の中は、さうとばかり行かぬ。とかく高慢な鼻は折れ易い。

裏の裏ゆく

「裏をかく」者があれば更にその裏をかゝうといふ。

（え）

緣の下の力持

何事でも人の目につかぬ處で力をつくす者はあるものである。「緣の下の舞」ともいひ、これは能樂で一段ひくい處で、舞つても人から見えないので譬へた。

緣の下の筍

いつまでも出世の出來ないもののこと。

緣と浮世は末を待て

良い緣と好い機會とは無理に急いでもだめで、ゆつくり將來にかけて待つものである。

蝦で鯛を釣る

つまらぬものを贈つて、返しに鯛のやうなよいものを貰ふ。小資本で大利を得ること。

（お）

奥齒に劍

やさしい言葉の中に害意のこもつてゐること。

奥齒にものが挾まる

ほんとに打解けないで、まだ何處か隔て心のあるやうに思はれる。又、幾分の不足があるやうに思はれること。

啞の問答

話し會つてゐても要領がよく通じないこと。

お里が知れる

言語や動作でその人の素性や經歷が分ること。

落武者は薄の穗に怖ぢる
　ひけ目のついた者がつまらぬ物事にもびく〳〵するやうになること。
同じ穴の貉
　同じ仲間。主に悪い意味に用ひる。
鬼の霍亂
　鬼のやうな壯健の者が急に病にかゝる。
鬼の念佛
　鬼のやうな無慈悲な者が、殊勝らしく振舞ふこと。
鬼の目に涙
　無慈悲な者にも時には慈悲心がある。又鬼のやうなたけ〴〵しい者が流す涙。
鬼の留守に洗濯
　一番遠慮しなければならぬ人の留守を利用して、氣樂に休息すること。
鬼も十八、番茶も出花

番茶も入れたてはうまい。どんな女も年頃になれば美しくなる。「鬼も十八、蛇も廿」ともいふ。

帯に短し襷に長し

中途半ばで何の用にも立たない。

帯紐解く

安心して警戒を解くこと。

負うた子に教へられ淺瀬を渡る

子供に正しい道を教へられる。老練家も時によると未熟者から導かれることがある。

負ふ子より抱く子

背中に負うた子よりも抱いた子の方が可愛い、離れてゐる者より近い者ほど愛らしい。

重荷に小づけ

ある上に更に過重の負擔をさせること。

老いたる馬は路を忘れず

代々恵を受けた者が長くその恩を忘れないこと。

小田原評定

意見がまち〳〵で評議が定まらないこと。天正十八年に秀吉が小田原征伐の時に、北條氏康が臣下を集めて和戰の評定をしたが、なか〳〵定まらなかつた事から出來た語。

お爲(ため)ごかし

親切らしく見せかけて自分の都合のよいやうにする。

落ちれば同じ谷川の水

初めはそれ〴〵異つてゐても、海に入れば同じとなる。最後に歸着する所が一つである。

親に似ぬ子は鬼子

子は必ずその親に似るべきで、似ない子はよくない子といふ意。

親の心子知らず

限りない親の愛情を知らずに子は氣まゝに振舞ふ。

親の脛をかじる

一人前になつて、まだ獨立して生活が出來ず、仕送りを受ける。

親の光は七光

親の財産や名聲等のため、子供もお蔭を受ける。

親はなくとも子は育つ

親はなくとも人情により子は育つもので、世間はすべて案じる程のことはない。

親方思ひの主倒し

主人のためだといつて却つて不埒をする。

尾鰭をつける

事實のまゝではなくていろ〱つけ足して誇張する。

思ひ立つ日が吉日

吉凶などいふ迷心にとらはれず、思ひ立つた事は直ぐその日から實行せよ。

遲かりし由良之助

時機が遲れて間に合はない。これは忠臣藏の芝居で判官切腹の時に、由良之助の來邸が遲

いので切腹しかけた處に來るところから出た句である。

（か）

蝙蝠も人の數の中

「餓鬼も人數」と同じで、つまらぬ者も人の中には入る。

垣堅くして犬入らず

家がとゝのつてゐれば亂さうとしても出來ない。

隱すより現はる

物事をかくすと却つてあらはれる。

影の形に從ふごとし

何時も、つき從つて離れることがないこと。

蔭で絲をひく

操人形のやうに、かげで人を操縱して言動をさせる。

籠で水を飲む

水を汲まうとしても籠では直ぐ漏れてしまふ。勞力をつくしても効はない。

駕籠に乘る人擔ぐ人、その又草鞋を作る人

世の中はさま〴〵で貴賤貧富、職業や地位等限りがないが、互に持ちつ持たれつして立ってゆくのである。

可愛いは憎いの裏

繼子などのやうに憎いが、口では可愛いといふ。

可愛い子には旅をさせよ

子供が可愛いければ苦勞させて立派な人とせよ。

可愛さ餘つて憎さが百倍

愛情が厚い程嫉妬心も強く、一度叛いた時などは非常に憎く思ふ。

風上に置けぬ

臭いものを風上に置いては臭氣は甚しい。性行の惡いものゝこと。

稼ぐに追ひつく貧乏なし

常に働けば貧乏に苦しむことはない。

刀の刄を歩く

非常に危いことのたとへ。刄の上を歩くやうに危い。

勝てば官軍、負ければ賊軍

維新當時の語である。勢力のあるところに名譽も集るといふこと。

門松は冥途の旅の一里塚

一休禪師の作。老人には芽出度い門松も一歩死期に近づく標とも思はれる。

河童の川流れ

上手なものが却つて失敗する。

蟹の念佛

くど〳〵と分らぬことをつぶやくことが、蟹の泡をふくに似てゐる。

蟹は甲に似せて穴を掘る

身分に相應して行動したり、考へを持つたりする。

金が敵

金錢のためには道にはづれた行ひをし、友とも袖を分つこともあるので敵とも見られる。

金がものを言ふ

金錢の力の大きいこと。

金に絲目はつけぬ

惜し氣もなく金錢を費すこと。

金の切れ目が緣の切れ目

金錢のある中はなか〳〵うまい事を言つて御機嫌をとるが、なくなつたと見るとそろ〳〵手を引く人は多い。人情の輕薄さをよく譬へてゐる。

金の世の中

何事も金の威力で出來ないものはない。

金持と灰吹は溜る程きたない

金をためるもよいが、溜れば溜る程、慾の皮が厚くなる。

皮一重（かはひとへ）

美醜も皮一重のことで、これを剝げば誰も異るところはない。

飼犬に手を嚙まれる

恩恵をほどこした者に叛かれる。この頃は「叛く」程でもないが、世話になる時は追従して、さてこれで良いとなると見向きもしないやうな者が多い。

兜の緒をしめる

勝利の後に油斷はしがちである。緒をしめて、ゆるむ心を引き締めたい。

兜を脫ぐ

降參する。降服する。

壁に塗られた田螺

土の中に混つて壁に塗りこめられた田螺。時がたつ程動きがとれなくなる。

壁に耳

どんな處で聞いてゐるとも分らず、又洩れやすい。

蛙の子は蛙

子供は親よりも出世するかと思つても、矢張り親に似て愚かである。

蛙の面に水

蛙の面に水をかけても平氣である。少しも感じないことに譬へる。

蛙の頰冠り

蛙は後脚で立つと目は背にあつて前は見えない處から目先の見えないこと。

南瓜に目鼻

圓顏で醜い人のこと、かういふ女が嫁に行くのが多い年を「南瓜の當り年」といふ。

神の正面、佛のましり

神棚は正面に、佛壇はかげに作れといふ意。「ましり」は眞尻で後方のこと。

鴨の水搔

身はゆつたり見えても水中では游ぐために常に水を搔いてゐる。外見は穩でも、心の中は安らかでない人の譬。

堪忍袋の緒が切れる

堪忍もこれまでといふ場合に用ひる。

枯木も山の賑ひ

用には立たなくても、ないよりはよい人のたとへ。

（き）

木仏金仏石仏（きぶつかなぶついしぼとけ）

情味のうすい人もあるもので、そんな人をこの三つに譬へ並べた。

木に竹をつぐ

物事のそろはないこと。木に竹をついでも、つかない。

雉も鳴かずば打たれまい

無用の言葉をきいたがため、思はぬ禍を受ける。

狐に小豆飯（あづきめし）

狐は小豆飯を好くので、前に出して置くと直ぐ食べられてしまふ。このやうに安全だと保

證の出來ないものゝ譬。此の頃は保證の出來ない者が多くなつた。

昨日は人の上、今日は我が身の上

禍福の變轉は限りがない。「世の中は何か常なる飛鳥川、昨日の淵は今日の瀬となる」と嘆じさせてゐる。

窮すれば通ず

物事が行き詰り、どうとも仕方なくなつた時に、却つて切り開く道が考へ浮ぶものである。

京にも田舍あり

立派な地にも、開けない靜かな土地はある。

兄弟は他人の始まり

兄弟も幼時は睦じいが、一家をなすとそれ〴〵妻や子にひかされ、思はず疎遠がちになる。

義理と褌かけねばならぬ

褌を常にかけるやうに義理を少しでもかくやうなことがあつてはならない。

近所に事なかれ

近くの變事は自分の身にも及び易いので、無事平穩であれと願ふ。

苦は樂の種（〱）

苦勞する事は後の安樂のもとである。

苦しい時の神頼み

無事平穩の時は不信心であつても、困難に出會ふと神を頼る。平常訪ねもせぬ家に、苦しい時には依頼に出かける。

櫛の齒をひく

次から次へと續いて絕えないこと。

腐り目に爛れ目

災難の上に重る災難。こんな事は兎角起り易い。

腐つても鯛

元來よい品は老朽しても何處かよい處はあつて、何か用にたつ。

糞も味噌も一緒
　何も彼も一緒で、是非善悪の區別をしないこと。
口では大阪の城も建つ
　言ふことは易い、が實行はなか〳〵困難である。
口から先に生まれる
　口の達者で上手な者や多辯の者のこと。
口に税はかゝらぬ
　勝手なことをいふのは人の情である。しかし、よく注意してしやべりたい。
口も八挺、手も八挺
　八挺の機械を使つて物事をなすところから、口と手と共に上手なことをいふ。
口で身を滅ぼす
　言葉を注意するのは大切である。愼しまないために、遂に身を滅ぼすやうになる例は多い。
　「口は禍の門」といふのも同じこと。

國に盜、家に鼠

新築した家に最初に入るは鼠といはれる程、家と鼠はつきものである。支那の歴史を見ても分るやうに、國を捕らうとする者も多い。害を與へようとする者は常につきまとつて來る。

首と引きかへ

首のやうに大事なもの。「首をかける」といへば、萬一間違つた場合の代償といふ意である。これを外國人が聞いて、「日本人の首はそんなにやすいか」と疑つたといふが、國民性を知らぬためである。

雲に懸橋

浮ぶ雲に橋をかけようとしても無理である。達成出來ぬ望みのこと。

雲を霞と逃げる

雲や霞は去つてしまへば影もなくなるところから、早く逃げることに譬へた。

暗闇の頰冠

暗闇では誰の顔も見えないのに頬冠りするとは無駄なこと。無用のこと等に譬へる。

車の兩輪

二つそろつて大切なものである。

果報は寢て待て

運命は天にまかせて、あせつてはいけない。

（け）

藝は身の仇

藝事のために身を滅す例も多い。藝のためとなると金を惜しまない人もあらう。

桂馬の高あがり

桂馬は飛んであがるが下せない。身分不相應の位置に急いで進んでも、却つて失敗する。

げすの一寸、のろまの三寸

障子を閉めるにもげすは一寸餘し、のろまは三寸あける。注意の行きとゞかない者は實用にはたゝない。

げすの後思案

げすの者はその場でよい考へは出ないもので、事が過ぎてから良い思案が出る。

毛を吹いて疵を求む

他人の不利につけ入つて利益を得ようとして、却つて失體を暴露すること。

結構毛だらけ、猫灰だらけ

すぐれた事を滑稽化していふ。

今日の情は明日の仇

人情は實に薄氷のやうである。

蹴る馬も乘手次第

乘手によつて上手に乘りこなすことが出來る。物事はそれを扱ふ人次第でどうにでもなる。

喧嘩すぎての棒千切れ

川柳に「知盛は喧嘩すぎての棒を振り」とある。源平の戰ひ終つて義經が兄賴朝にいれられず、鎌倉を遁れて上京したが、其處にも賴朝の手は及んでゐた。義經主從は四國に落ちの

びんとして大物浦から舟を出した時、一天俄かに掻き曇つて現れ出たのは知盛の靈であつた。長刀をふりかざして義經に打つてかゝるので辨慶は念佛を誦して靈を靜めたといふ。そこで出來たのがこの川柳であるが、これから變つたのがこの句である。事がすんでからでは何にもならない。

喧嘩兩成敗

兩方に惡いところがあるためである。兩方とも處罰するのが公平である。

（こ）

郷に入つては郷に從へ

風俗習慣は土地により異る。他國に行つてはその地に從ふは當然である。

好事魔多し

よい事にはきつと防害するものが入るものである。

弘法も筆の誤

弘法大師は嵯峨天皇、橘逸勢と共に三筆と稱せられた能筆家。どんな巧みな者でも時には

失敗があるといふ意。

碁敵は憎さも憎し懐しゝ

負けると憎くゝも思ふが、また對局しようとの懐しさもあるといふ人情の機微を現した。

事ある時は佛の足を戴く

平常は不信心でも、變事にあふと信心によつて救濟を得ようとする。

事が延びれば尾鰭がつく

物事は延引すれば故障が起りやすい。よいと思つたことは早くせよといふ意。

言葉は國の手形

どんなにごまかしても言葉の訛りは生地をあらはすので、何處の生國かゞすぐ分る。

言葉に花實をまぜる

花は飾り、實は眞實。この二つをうまく混ぜてとりあはせる。

言葉多きは品少し

言葉の多い人は品格も少く、信實味も疑はれる。殊に自己宣傳の多辯は見苦しい。

田作の齒軋

小さい田作が齒軋しても聞えるわけもない。力の及ばぬ者が憤慨しても始まらぬ。

轉ばぬ先の杖

前から用心せよ。準備してかゝらぬと失敗することがある。

轉んでも只は起きぬ

轉んでも何か落ちてゐぬかと地面を探すとは貪慾な者。

後生大事や金欲しや、死んでも命のあるやうに

これも前と同じやうに貪慾者が利益に目がくらむ樣をたとへた。

子は夫婦の鎹

夫婦に愛がなくなつても子に對する愛情によつてつながれる。

子故の闇

子の愛にひかされて、分別のなくなるのは親心である。この意を輕く言つたのが「子に引かるゝ親心」といふ。

子供の喧嘩に親が出る、人立中立醫師立つ

子供の喧嘩にその親が大人氣もなく出て來て遂に親同士の喧嘩が始まり、人が集り立つ。そして仲介者として醫者が出るといふ騷ぎの大きくなる樣子を言つた。これを指であらはすので、兩手の小指は子供同士。母指と母指をうち合せて親の爭ひを示し、次の外の指全部を立てゝ人立の意をあらはす。

子供は風の子、年寄は火の子

子供は元氣で外に出て風に吹かれても何でもない。年寄は火の側による。

子供隱された鬼子母神

鬼子母神は子供を大切にする神。子供が見えなくなつてうろたへ騷ぐ樣をいふ。

此處まで御出で、醴進上

巧餌を以つて人を誘ふ意味。

心の鬼が身をせめる

心のやましさが我と我が身をせめたてる。こんな時によく寢るとうなされる。

心に笠を着せよ

笠をかぶれば上が見えない。兎角上を見ると現在の地位身分に不滿がちである。

乞食をすれば止められぬ

その氣樂さ、そして遊惰の風が身に泌みてやめられなくなる。

乞食の系圖話

乞食が自分の系圖について自慢話をしても何にもならぬ。即ち役にも立たぬ昔話をする。

乞食の朝謠

乞食であればこそ朝から世間かまはず謠も出來る氣樂なことを譬へた。

乞食も場所

何事でも場所を選ばぬと効はない。乞食でも場所によつて貰ひ物が違ふ。

五七は雨に九は病、六つ八つ風に、四つ日照(ひでり)

數は昔の時間を指すので、別項の「昔の時間」のところを見られたい。地震のあつた時間に依つて結果がいろ／＼にあらはれるといふのである。

紺屋の明後日（あさつて）

紺屋は明後日出來るといつて延しがちなものである。約束を延期する譬。

（さ）

細工貧乏、人寶

細工する者は人の物はいろ〳〵作つてやるが、自分は何の貯へもない。人に重寶がられて自己に利のないたとへ。

酒は憂ひの玉箒

箒で塵を拂ふやうに憂愁な心を忘れさせる。「玉」とはほめていふ。

酒なくて何のおのれが櫻かな

櫻見にも酒なくには興がない。

酒屋へ三里、豆腐屋へ二里

邊僻な土地のことをたとへた。酒屋や豆腐屋は何處にもある店であるが、それさへ遠いといふこと。

五月の鯉の吹流し

端午の吹流しの鯉は空胴である。口先きばかりで言語が粗略で眞實味のないこと。又江戸の人の俠客的の性質もたとへる。

指せ乾せ傘

傘を永く使ふ要領であるが、このやうに大いに働けとすゝめる意である。

里腹三日

嫁にとつては姑は何事につけても心苦しい。姑の前では食事も十分出來ないが、里に歸るとうまいので澤山食べるから歸つても三日位は大丈夫である。

猿の人眞似

猿が人の眞似をするとは不相應である。身分不相應の人の行動をすること。

猿に烏帽子

猿は不似合の烏帽子をかぶらせても仕方がない。ふさはしくない樣子をすること。

猿の尻笑ひ

稍〻下品な言ひ方であるが、よく眞理を表してゐる。自分の欠點は見えぬが、同じやうな人の欠點を見て笑ふといふのである。

山椒は小粒でも辛い

身は小さくても、負けぬ氣があつて侮り難い。

三人よれば文珠(もんじゆ)の智惠

どんな者でも三人よればよい考へも出來る。文珠は大智の佛。

去る鳥後をにごさず

去つて行くから後はどうなつてもよいといふのではなく、よく整理して行くといふ、立派な心懸けで、誰でもかうありたい。

去る者日々に疎し

親しい者も別れると次第に疎くなるといふ人情の常を表した。

三拍子そろふ

すべての條件がよく備はること。

（し）

姑の涙汁

ほんの少しといふ意。姑が嫁に對して同情の涙を流すことは少いものである。

地獄の沙汰も金次第

金の世の中である。地獄でさへ金の額によつて難易の差をつけるといふ。

獅子身中の蟲

百獸の王たる獅子は死んでもその威を怖れて他の獸はその肉を食はうとしないが、獅子の身中に生ずる虫は平然とその肉を食ふ。それから佛弟子でありながら佛教の害をなすものゝ譬となり、尙、味方でありながら災害をなすものとか、恩を受けた者に叛く意にする。

獅子食つた報い

怖るべき獅子を食つた報いが直ぐにあらはれる。悪い結果のあらはれること。

地藏の顏も三度

いかに地藏でも顏を三度も撫でられては怒る。溫和な人でも度々侮辱されては怒る。

親しき仲にも垣

親し過ぎるのは却つて疎遠のもとになるので、互に或る程度までは敬意をつくせ。

沈む瀨あれば浮む瀨あり

世の中は變轉極りなく、浮ぶこともあり沈むこともあるものである。

死んで花實がなるものか

死んでしまつては花が咲き實がなるやうな幸福は得られぬ。生前に生命を大切にすべきである。

死んだ子の年を數へる

親心である。數へても効のないこと。愚痴をこぼすこと。

死んでの長者より生きての貧乏

貧乏してゐても生きてゐるのが何より大切といふこと。

芝居は無學の早學問

無學の者には芝居はよい教訓を與へる。昔の芝居は勸善懲惡を主眼として筋が作られて

ゐたからいへる。

四百四病の病より、貧ほどつらいものはない

病苦よりも貧乏が苦しい。外國では「健康が資本」といふ。

自慢の糞は犬も食はぬ

自慢話など相手にされぬ。

親は泣きより、他人は食ひより

不幸のお通夜に親しい者は心から涙を流すが、他人は御馳走が目あてで集る。

蛇の道はへび

その道の者は、その道の事をよく見抜くことが出來る。

釋迦に說法

無用のこと、要らぬ世話といふ意。

朱に交れば赤くなる

人は交る友によつて善惡の感化を受けるので、友を選ぶことが大切である。

重箱の隅を揚子でほじくる

隅から隅まで細かい事に干渉されてはたまらない。

上手の手から水が漏る

手品師がどんなに上手だとはいへ、時には失敗もあつて手から水が漏れて來る。「猿も木から落ちる」ともいふ。

虱の皮を槍で剝ぐ

小さな虱の皮を槍で剝がうとしても出來るものではないが、そのやうに小さな事を大袈裟にして騷ぐこと。

白川夜船

よく眠つてゐて何も知らないことの譬へ。京都見物をした振りをする者が、「白川は」ときかれて返事が出來ず、「白川は夜中船で通つたので眠つてゐて知らなかつた」と返事をした處から出た。

尻くらい觀音

物事をやりつぱなしにして始末しないこと。さういふしまりのない人。觀音の縁日は舊暦の十八日から廿三日までゝ、昔の暦では月末に近くなる程月がかけて闇に近くなるので「尻が暗い」とたとへた。

尻から燒ける

非常にあわてる様子をたとへる。

詩を作るより田を作れ

金にもならぬ遊びより、實利になる事を勵むがよい。

（す）

好きこそ物の上手

ものが好きになれば自然上手になる。將來の目的を定むる場合もよき參考となる句。

雀百まで踊忘れず

子供時代の習慣は老人になつた後でも忘れない。

据膳（すゑぜん）食はぬは男の恥

婦人の所望に應じないのは男子の面目にかゝはるといふ意であるが、今はなか〳〵油斷がならぬ。

寸を曲げて尺を伸ぶ

小利を捨てゝ大利を得るといふこと。

寸前尺魔（せきま）

世の中はよい事は少い、惡いことは多い、それ故に善は急げと教へてゐる。

（せ）

せいては事を仕損ずる

「急がば廻れ」と同じ意であるが、一方には「せかねば事が間に會はず」と教へてゐる。

雪隱（せっちん）で槍

雪隱は便所、狹い處では十分の働きは出來ないし、折角の腕を見せることも出來ない。

雪隱で饅頭

臭い處でも平氣で饅頭を食ふといふのは、場所をかまはずに利を得ようとすること。

善は急げ

善しと思へば急いで實行せよ。

千疊敷で寢るも疊一枚

金持を羨んでも寢る時同じ一枚の疊の廣さだ。又、慾張つても有り餘つては仕方がない。

船頭多くて舟、山へ登る

指揮者が多く命令がまち〳〵で、却つて自然の進歩をさまたげ、思はぬ方に行く。

（そ）

袖の下からでも廻る子は可愛い

上に立つ者の心持である。裏から顏を出し機嫌をとる者を、追從者とは思ふものゝ、たび重なると遂に心ひかされて惡い氣はしなくなり、公事の上でもその者のすることを善意にとるやうになる。

損して德とれ

一寸考へると甚しい矛盾のやうであるが、小利を捨てゝ大利を得よといふこと。

（た）

大は小を兼ねる

大きい物は小さいもの丶効用を兼ねて持つといふ意。「過ぎたるは及ばず」は此の反對。

大疑は大悟のもと

特に學問上のことは常に疑問を持つて見なければ眞理は決して開けない。

太鼓も桴の當りやう

やり方次第で相手はどうにでも動く。

大山鳴動して鼠一匹

騒ぎは大きかつたが、その割に結果は小さくてとるに足らない。

大事の前の小事

大きな事をする前には小事を先づ注意せよ。小事のために失敗する事がある。又大事の前には小事などかまつてゐられないといふ意にもとる。

唐人の寝言

唐人の言葉は通じない、寝言もわけがわからない。とるに足らぬつまらぬ事にたとへる。

鷹は飢ゑても穗をつまぬ

節義の士は、どんなに窮しても不義の財をとらない。今は飢ゑなくとも穗をつまうとする。

寶の持ち腐れ

折角の利用價値の多いものを持ちながら、その方法を知らぬために使用しないこと。

寶の山に入りながら手を空しくして歸る

よい機會に遭遇しながら、利用せずに無駄に逃す。

疊の上の水錬

方法は知つてゐても實際に應用しなくては役にはたゝぬ。

立ちよれば大樹の影

權力の大きい者や大金持に賴つてゐれば何かと便宜が多い。賴るならさういふ人。

立つてゐる者は親でも使へ

物事は早く用をするがよい。傍に立つてゐる者ならば誰でも使へ。

たつ鳥跡を濁さず

立ち去る者は、彼これ言はれぬやうにして置くべきである。水鳥が飛び立つ時は靜かにとぶものである。「去る鳥」ともいふ。

蓼食ふ虫もすき〲

蓼は葱より臭氣が強くてからい。それを好む虫もある。人も好むところはまち〲であるから、他からかれこれいふべきではない。

棚から牡丹餅

思ひがけない幸ひや好機が突然くること。

他人の疝氣をやむ

自分に關係のない者の身の上について餘計な心配をすること。

狸の睾丸八疊敷

下品ではあるがよく用ひられる。金箔を延ばすのには狸の皮の間に挿んで上から金槌でたゝくと良いといふ。かくして、一匁の金を八疊の面積に延せる。

伊達の薄着

美しく見せようために薄着する。めかすこと。

旅の恥はかき捨て

誰も知らぬ處なら、どんな事をしてもかまはぬ。恥は意とするに足らぬといふのであるが、之は今は通用しない。

倒れても土をつかむ

「轉んでもたゞは起きぬ」と同じ。

短氣は損氣

短氣を出して怒るのは損であるから忍耐せよ。

短氣は未練の始め

短氣を出すと後悔が多い。忍んでゐよ。後になつて未練が殘る。

（ち）

血で血を洗ふ

兄弟、親子同士が爭ふこと。

智慧の持ち腐れ

折角の智慧も實際に用ふることがないこと。

近い火で手をあぶる

目前の利を得ようとすること。

祖父(ちゞ)は辛勞、子は樂、孫は乞食

折角、祖父は辛苦して身代を作つても、子はそのため安樂に暮して費し、孫の代には乞食のやうな境遇になるといふので、よく世の樣を言つた。「長者は三代續かず」と同じ。

提燈で餅をつく

明りが十分でないのでよくつけない。思ふやうに手がゆきとゞかない意。

提燈に吊鐘

懸隔があまりにありすぎることのたとへである。提燈も吊鐘も提げるもの。

沈香もたかず屁もひらず

平凡な人のことで、別に功を立てたこともない、又失敗や惡事もしないといふ意。

月と鼈（つ）

非常なちがひのたとへである。

月夜に提灯

月夜に明りはいらぬ。無用のものを重ねる意である。

角を矯めて牛を殺す

牛の角の曲つたのを直さうとして、餘りにやりすぎたゝめに牛を殺してしまつたといふ。缺點を矯めんとしてあまり度を過す事は考ふべきなり。

爪で拾つて箸でこぼす

爪で拾ふことはなかく辛苦を要する。それを箸で無造作にこぼしてしまふのは惜しい。

爪で火をともす

自分の爪に火をともして明りをとるといふ意で非常に儉約すること。

面の皮の千枚張

顔面が厚いので何とも思はないこと。恥を恥とも思はないこと。

つり合はぬは不緣のもと

男女雙方の身分や位置が適合してゐてこそ安心であるが、之が餘りに違ひすぎると、一時はよくても結局はこの緣も長くはつゞかぬ。

杖の下に廻る犬は打てぬ

打たうとする杖に縋る犬はどうしても打てない。縋りつく者に殘酷な處置は出來ない。

鶴の一聲

目上の人の一言には誰も異存なしに服從するといふことで、鶴を目上の人に譬へてゐる。

（て）

手のない將棋は負け勝負

「手」は手段方法である。なすべき方法のない將棋は必ず負けるといふので、將棋は廣く通じる。事に當つて主義方針のない者は失敗に終るのである。

點のうち處がない
　點は歌などの添削のことで、その場所がない程よいといふ意。人を賞める時等にいふ。
出る杭は打たれる
　出しや張つたり、先に立つたり、頭角をあらはしたりする者は人から怨まれたり、羨ましがられたりして災難にあふ事が多いといふ意。
敵を見て矢を矧ぐ
　「泥繩」と同じで目前に迫つてから、その準備をする。何事もこれでは遲い。矧ぐは作る
出物腫物所嫌はず
　場所をかまはず出て來ること。「出物」はこゝでは放屁のことである。
天の網
　惡い事をした者は自然にまた惡い報いがある。天は天の神。
天下は廻り持ち
　好運は一人で獨占出來るものでなくて、順に廻るものである。それ故悲運を嘆くに及ばぬ

傳家の寶刀

家に傳はる寶刀。これは平常は祕藏して置くが何か大事の時は用ひる。

（と）

豆腐にかすがひ

どんなに意見しても効力が少しもないこと。

時の代官、日の奉行

代官も奉行も官名。その當時に權勢をふるつて、どうにも仕方がないものゝこと。

時の用には鼻を殺ぐ

必要にせまられるとどんな方法でもとつて處理する。鼻を殺ぐ位は何とも思はないこと。

時に會へば鼠も虎

時機に遭遇するとつまらぬものでも虎のやうに幅をきかせる。

時の花を挿す

その時季〳〵の花を頭に挿すといふ意で、時の權力者に從ひへつらふこと。

毒にもならず藥にもならず

害にもならぬが利にもならぬ。あつてもなくてもよいやうなこと。

毒を食はゞ皿まで

毒を食ふ以上は少し位殘しても別に被害がそれだけ少い理由はないから、皿まで殘さず食ふ。一度罪惡を犯した以上少しでも澤山でも歸する處は同じである。

毒を以て毒を制す

惡人を押へるのに他の惡人をうまく利用してする。

處かはれば品かはる

その土地によつて風習はそれぐ\ある。何でも場所により違ふものである。

隣の疝氣を頭痛にやむ

隣家の事など直接の關係はないのにいろ\/\と氣にやむ。無關係の事は手出しせぬがよい。

鳶が鷹を生む

平凡な親から生れた立派な子供。

鳶に油揚をさらはれる

思ひもよらぬものが現れて來て、自分のものをさらつて行かれ、呆然とすること。

鳶もゐずまひから鷹に見える

鷹は鳥類の王である。賤しい者も居常が正しければ立派なものに見える。

問ふに落ちず語るに落ちる

人からきかれる時は注意して答へるからなか〳〵祕密なことは打ちあけないが、自分から進んで話す時はうつかりすると口をすべらして失敗する。

遠くの火事背中の灸

小さな事でも自分に直接利害のある事だといろ〳〵と心をつかふ。他人の火事など、どうでもよいとはあまりに利己的である。「遠くの火事」は「火事よりも」である。

遠くの親類近くの他人

近くゐる他人の方が急な場合はより以上に間に合ふ。「親類より」と比較の意である。

土用布子（ぬのこ）に寒帷子（かたびら）

暑い土用に布子は不要であり、寒い時の帷子も用をなさない。時節の用をしない事の譬へ

鳥なき里の蝙蝠

蝙蝠でも鳥のゐない處では威張つたものだ。つまらぬ者でも偉い人のゐない處ならば幅がきく。

燈臺もと暗し

遠くの事は知つてゐるのに、手近の事は却つて知らない。

同病相憐れむ

同じ困苦にゐるもの同志は同情しあふ。

團栗(どんぐり)の丈較べ

同じやうな平凡なものが並んでゐて優劣を定め難いこと。

捕らぬ狸の皮算用

まだ手に入らないのに、捕つた狸をどう處分しようかと思案すること。

十で神童、十五で才子、廿過ぎてはたゞの人

子供の時代に神童といはれてほめられ大事にされる子は、あまりに、ちやほやされるので良い氣になつて次第に平凡人になつてしまふ。

（な）

名のない星は宵から出る

つまらぬものが、他の先にあることを譬へる。

名をとるよりは得をとれ

名譽より利益といふので、これはあまりに利己的な心である。

泣く子と地頭には勝たれぬ

「地頭」は頼朝が諸國に配置した守護地頭のことで、勢力を得てなか〱無理な事を治下の民に要求した。然も權力のある者の命に從はぬことも出來ない。泣く子もその通りにしてやらぬと、尙泣くので止むなく要求を入れてやる。

泣く猫は鼠をとらぬ

よく泣く猫は鼠をとらぬものであるが、同じやうに口達者な者は却つて實行はしないもの

である。

情に刃向ふ刃なし

人情や慈悲に對して抗することは出來ないものである。

ない袖は振れぬ

持ち合せがなくてはどうともしようがない。

なくて七癖

誰にも癖はあるもので、ないといつても七つはあると極端にたとへたのである。

七重の膝を八重に折る

願ふ時、謝る時などに頭をさげて謙遜して叮重な様子をいふ。

七轉び八起

幾度失敗しても勇氣を出して努力せよ。

怠け者の節句働き

平常怠けてゐる者が、いよ〳〵となつて仕方がなく、人が遊ぶ節句に働くといふのである。

生兵法大きずのもと

少しばかり知つてゐる者は、知つてゐる事に頼るので、却つて大失敗を招くやうになるといふ意。

七度尋ねて人を疑へ

人を無闇に疑ふものではない、靜かに何度も尋ねてみてからにせよ。

難波の蘆は伊勢の濱荻

同じものでも土地によつて名稱が變るものである。

（に）

苦虫をかみつぶしたやう

非常な嫌な顔つきをすること。

逃がした魚は大きい

人には誰も慾がある。とりそこなつた魚はいかにも大きく見える。

逃げるが勝

つまらぬ口論や爭ひをするよりも、相手にせず逃げる方が結局は勝であるといふ意。

二階(にかい)から目藥

二階からでは肝心な目には入らない。急所にふれないこと。

二足の鞋ははけぬ

一人で二つの仕事をするのは無理である。

女房は流し元から

妻は自分より低い身分の家から貰ふがよい。それでないと、とかく尻にしかれがちである。

憎々(にく)の嫁の腹から可愛い子

姑の心をよくあらはした。困つたものである。

（ぬ）

盜人にも三分の理

どんな者でも相應の理屈はある。

盜人を捕へて見れば我子なり

盗人を捕へて見れば意外にも自分の子であつた。

盗人を見て縄をなふ

盗人を捕へてから縄をつくつたのでは遅い。何事も時機に遅れた準備は用をなさぬ。

盗人に追錢

被害を受けた上に被害を重ねること。

糠に釘

糠に釘を打ちこんでも何の用もなさない。効果のない事のたとへ。

濡れ手で粟

手が濡れてゐれば粟はよくつくのである。何の骨折もなくて利を得ること。

抜かぬ太刀の高名

臆病者で太刀を抜いて向ふ事は出來なかつたが、それが却つて高名となる。

抜け駈けの高名

人の知らぬ間に敵陣に進んで行つて功名する。人を出しぬいて一人功をたてる。

（ね）

猫に小判

猫にとつて小判は有り難くない。何の感じもない事を譬へる。

猫に鰹節

鰹節は猫の大好物なので、直ぐに食べられる。好物を與へること。

鼠とる猫爪をかくす

「能ある鷹は爪かくす」と同じで、漫然と能力をあらはさぬ。

（の）

能書筆を擇ばず

善く字を書く人には筆の善悪など問題ではない。何でもよく書ける。

暖簾と腕押し

暖簾を押しても少しも手答へはない。はり合ひない事を譬へる。

野良の節句働き

「野良」は「なまけ者」である。「怠け者の節句働き」と同じ。

鑿といへば槌

何でも事には必ず附隨するものがある。鑿が入用だといへば必ず槌も必要なのだから、氣をきかして持つて行けとの意。

乘りかゝつた舟

事をはじめて中止が出來ないで、引きずられてしまふこと。

（は）

馬鹿と鋏は使ひやうで切れる

使ひやうによつては何でも役に立つものである。

初のさゝやき、後のどよめき

最初は祕密にしてゐても、後には世間に知れて騷ぎとなる。

恥の上塗（うはぬり）

恥の上に恥をかいて上塗する。

腹も身の內

食べたいと言つて度を過すと胃腸をこはす。

腹八合の醫者要らず

大食漢を誡めた。食物も八合目位にして置けば病にかゝる心配もない。

箱入り娘に虫がつき易い

箱入り娘は大事に育てられた娘であるが、世間知らずであるから間違ひを起し易い。

花は櫻木、人は武士

花の中で第一は櫻、人の中での第一は武士。

八卦判斷噓九段

八卦はやりやうでどうともなる。が、大部分は噓である。八卦と判斷とをかけて九段といつた。九段は九部通り。

（ひ）

火を見たら火事と思へ

何事にも用心が大切である。

火のない處に煙はたゝぬ

噂のあるところ幾分かは事實もあらう。

庇を貸して母屋をとられる

庇は家の一部分である。その庇を貸したがために遂に家までとられるといふ意で、少しの恩惠が却つて仇となるのは稀しくない。

人の口に戸が立てられぬ

世人の噂はうるさいもので、防ぐことは出來ない。

人ごと言はゞ目代置け

人の蔭言をいふ時は番人を置いて、他に聞えぬやうにせよ。目代は番人。

人と入れ物はあり次第

入れ物は道具。人と道具は多ければ多いやう、少ければ少いやうに何とでも融通が出來る。

人を呪はゞ穴一つ

穴一つは同じ穴のことで、人を呪ふと結局は同じやうな運命に陥らねばならぬといふこと。同じ意の句に「人とる龜は人に取らる」いふのがある。

人には添うて見よ、馬には乘つて見よ

乘つて見れば初めてその馬の善惡がわかる。人も近づき交際すると當人の性格が分る

人の一生は重荷を負うて遠き道を行くが如し

家康の有名な格言で、急ぐなといふことを敎へた。家康のやり方をよくあらはしてゐる。

人增せば水增す

家族が增せば費用もかさむは理の當然。

人の噂も七十五日

人や世間の噂も長くはつゞくものでない。

人のふり見て我がふりなほせ

ふりは姿であるが、單に形式上の事に限らない。

人はみめよりたゞ心

みめは容貌である。それにも増して心が大事である。
人の褌で相撲をとる
「人の牛蒡で法事をする」ともいふ。他人のものを利用して自分の用にする。
人は見かけによらぬもの
見たゞけの外觀では人といふものは分らぬ。どんな事をしてゐるか知れぬ。
人は一代、名は末代
人の一生は短いが、名譽は永く傳はる。
人は善惡の友による
人は友によつて善にもなり惡にもなる。「水は方圓の器に從ふ」とも譬へる。
人は惡かれ、我よかれ、後生大事に金欲しや、死んでも命のあるやうに
慾深い者の心をうまく言ひあらはした。
人を見れば盜人と思へ
極端な言ひ方だが、人に油斷をするなといふ誡め。

人の心は九合八合

人の心は大體似たものである。九合も八合も、ただ一合の差である。

一人口は食へぬが二人口は食へる

一人で生活するより二人で、暮した方が經濟的で妻帶してもその點苦にならぬ。

膝とも談合

膝と膝とをつき合せるばかりで、よい意見もいつてくれず、何の役にも立たぬ人だが、それでも相談する方が自分一人よりは勝る。

百日の說法も屁一つ

長い間の苦心を一度の過失で無駄にしてしまふ。

百日の抵當に編笠一つ

貧しくなつて借金を返すことが出來ず、編笠のやうなつまらぬものを返してすませる。

一口物に頰を燒く

一口食べるだけの極く少ないものにも頰を燒かれるので、一寸の事のための大失敗。

一つ穴の貉

同じ悪い事の仲間。

一人娘に婿八人

ほしい者は八人もの多くで相手はたゞ一人である。

瓢簞の川流れ

瓢簞が浮いたり沈んだりするやうに落ちつきのないこと。

瓢簞から駒が出る

瓢簞から駒が出るわけもない。さうした思ひもよらぬ事が起ること。

瓢簞で鯰を抑へる

丸い瓢簞ではなか〳〵抑へられない。要領を得ない譬。

（ふ）

笛吹けども踊らず

笛を吹き拍子をとつてやつてもなか〳〵踊らない。誘つても乘つて來ない。

福徳の三年目

三年目で好運に出會つたといふ意で、久々でよい事にあふ。

夫婦喧嘩は犬も食はぬ

仲裁するは馬鹿らしい。

武士は食はねど高楊子

高楊子はつま楊子を高々と使つて威儀を示す譬。利慾の念のない武士の正しい心得を表す。たつた今、食事をすませたやうな顔でゐる。

布施(ふせ)に似た經を讀む

報酬だけの仕事をするといふので、現金主義なやり方である。

古川に水絶えず

古い川はどんなに晴天つゞきでも水のなくなることはない。以前盛んであつたものは衰へても、まだ幾分の餘力はある。

下手の考へ休むに似たり

下手の考へは用にたゝぬので止めた方がよい。

下手の長談議

話の下手なものは長く、無駄が多い。

（ほ）

棒ほど願うて針ほど

願ひの何分の一しか、いれられぬものであるが、願望はそれ程達せられないといふ譬。

坊主が憎ければ袈裟まで

憎みの心の强い意で、憎いと思ふとその人のみでなく、身につけてゐる物までと譬へた。

佛の顏も三度

「地藏の顏も三度」と同じ。

佛作りて魂入れず

大事なものを爲し殘すことで、佛像を作つて外形が出來ても精神をうちこんで作らなくては死んだ佛である。最も大事な所の工夫がかけてゐること。

（ま）

馬子にも衣裳
　つまらぬ馬子にも衣裳を着せれば立派になる。内容はどうでも、外觀を飾れば見られる。

蒔かぬ種は生えぬ
　原因がなくては結果は生じない。

眞綿で首
　遠廻しにじわ〳〵とせめること。

（み）

木乃伊とりが木乃伊となる
　木乃伊を探しに行つた者が遂に探しあてる事が出來ずに死んで、自分が木乃伊になるといふことで、尋ねに行つた者がなか〳〵歸らず、尋ねられる人となること。

三つ子の魂百まで
　三才の子とは生れて間もない子の意。生れながらに持つて來た根性は一生とれない。

三日見ぬ間の櫻

世の無常のことを言つたので、待ちに待つた櫻が十分見る間もなく散る。

見えはるより頬ばれ

含蓄のある句である。つまらぬ見えをはつて上品ぶるよりも、見たところでは悪くても口一つぱいに頬ばれといふ意。

（む）

六日菖蒲、十日の菊

時期が遲れて役立たないこと。菖蒲の節句は五月五日、六日は既に節句を過ぎてゐる。同じやうに菊の節句は九月九日である。

昔とつた杵柄

昔熟練した事はなか〳〵忘れるものではない。杵とは刀の柄の意である。

（め）

目明き千人、盲人千人

世の中にはいろ〳〵の人がゐるもので、目明き、即ち賢い人も居り、愚な者も居る。

盲人蛇に怯ぢず

目が見えねば何の恐るゝ物もない。ものを知らぬ者が何事も氣にかけず平氣なこと。

盲人の垣のぞき

覗いたところが何も見えない。從つて何の役にも立たない。

（も）

餅屋は餅屋

各々その職分がある、專門がある。

元の木阿彌

元の通りになること。郡山の城主の筒井順昭が死んだ時に、その死を祕して、丁度順昭に似てゐた木阿彌といふ盲人がゐた。そこで此の人を薄暗い室に連れて行つて座らせ病氣中の順昭に似せて人々をだました。三年後に順昭の死を發表すると、木阿彌には用がなくなつたので暇が出て、もと通りの木阿彌になつたといふ。

貰ふものなら夏でも小袖

小袖は綿入れである。夏に要らぬが貰つて置かうとは人間の慾心をよく表した。

燃える火に油をそゝぐ

火に油をそゝいでは一層燃える。尚、勢ひよくすること。

（や）

燒石に水

支拂が多くて、收入があつても何にもならぬ。

燒野の雉（きゞす）

子供の事を思ふ親心。野に巢をつくる雉は野が燒け、火が自分に及んでも子供を庇護する

柳の枝に雪折れはない

「柳に風」ともいつて、柳のやうに強い者に柔くあたつて居れば衝突する處はない。

柳の下にいつも鰌は居らぬ

一度柳の下に鰌がゐたからとて、またゐるだらうと思つても常に居る者ではない。前にゐ

たのは偶然のことで、思ひがけぬ幸ひは常にはない。

藪から棒

突然の言動をたとへる。

藪醫者の藥味簞笥

醫術はそれ程ではないが構へは立派。內容よりも外形の立派なこと。

藪をつゝいて蛇を出す

餘計な事をして、却つて損をすること。「藪蛇」とも言ふ。

病は氣から

病は心の持ちやうで重くも輕くもなるといふ。

闇夜に鐵砲

なか〳〵あたるものではない。

やはり野に置け蓮華草

野にあるからこそ美しい。何物でも本來の場所に置くが一番美しいのである。

山の芋が鰻となる

形は似てゐるが、それが出世して魚の仲間に入るといふので、卑しい者の出世すること。

（ゆ）

行きがけの駄賃

ついでに利を得ること。通りがゝりに人のものをかすめとる。

弓は袋に、刀は鞘

弓は袋におさめ刀は鞘にといふので、世が太平になること。

（よ）

楊枝で重箱の隅をほじくる

細かいことまで探し出して問題とする。

横のもの、を縦にもしない

ものぐさ者のこと。横の物を縦にするは、た易いのに、それさへしない。

横槍を入れる

關係のない者が干渉すること。

夜目遠目傘のうち

實際より美しく見える物に夜見る、遠くから見る。傘の中で見る時。特に婦人の事をいふ。

弱り目にたゝり目

災難の上に又災難が重なること。

宵越しの錢は使はぬ

昨夜から持ちこした金は費はぬといふので、淡白な江戸子氣質をあらはしたのである。

用心に繩を張れ

用心の上にも用心せよ。

（ら）

樂は苦の種

樂があると先には苦があると誡めた。「樂あれば苦あり」も同じ。

來年のことを言ふと鬼が笑ふ

先の事を考へても役に立たぬ。明日は分らぬ人の身で先を考へるとは地獄の鬼に笑はれる。

（り）

理を以て非に落ちる

道理はありながら、やり方の手違ひから非理になることはよくあることである。

兩方聞いて下知

「下知」は命令である。兩方の言ひ分を聞いて處斷しないと不公平になる。

兩雄並び立たず

二人の偉い人は並び立つて行くことは出來ない。どちらか負けねばうまくゆかぬ。

（る）

類を以て集る

同じやうな種類の者同士が集る。惡人は惡人、若い人は若い人同士。そこに弊害もひそむ。

（ろ）

論語讀みの論語知らず

論語はよく讀めても。實行はしない。學理は知つてゐても實際にしないなら役には立たぬ。

（わ）

我が身を抓つて人の痛さを知れ

自分の身にひき較べて人の苦痛を思ひやれとの意。から考へれは無慚なことも出來ない。

笑ふ門には福來る

常に愉快な心で仕事を勵めば、やがて幸福が來る。これは必ずしも物質的に幸ひが來るといふのではなくて、例へば一家團欒して暮すことは、それ自體が幸福であるわけである。

若木の下で笠を脫げ

若い木はやがて成長し立派な木になるのである。人も同じであるから輕んじてはならぬ。

十一、地名奇談

一、驛　名

東北本線の盛岡の少し先、「沼宮内」といふ驛に汽車が停ると、大きな驛にはつきものゝ立賣が車窓に近づいて、「辨當、壽司、ビール」と呼びかける。空腹を覺えた者は言はずもがな、それでなくとも車窓に見る東國の荒凉たる風景に飽き〳〵した乘客は、旅のつれ〴〵にキヤラメルでも買はうかと窓から首を出して、辨當にしようか、壽司か、それともパンでもと考へてゐる時、「うまくない、うまくない」と呼ぶ聲に、「さうか」と出しかけた財布をしまふので、立賣は癪に障るが驛名が「沼宮内」で何とすることも出來ず、つく〴〵誰が名づけたか、自分の村の名を怨んだといふ。また、上野から赤羽行きの省線に乘つて三つ目に、「田端」といふ驛がある。夕方、一日の仕事に疲れと飢ゑとで、やうやく此處まで來た人々が「たべた、たべた」と聞えたので元氣を取り戻したといふ。その反對に「五反田」では「御飯だ、御飯だ」といはれるので、まだ降車驛ではないのにふら〳〵として降りてしまつたといふ話がある。

これは何れも落語家の小咄であるから事實あつたとは思はれず、又、沼宮内は一小驛であるので、停車したからとて立賣が來るわけもない。けれども聞き方が惡いと妙に感じる驛名や地名はいくらもある。北海道の函館から小樽に行く中頃にある「倶知安」は「くちや、めちや、

くちや」と聞える。上越線の清水トンネルを出て間もなく、「小千谷」も空腹黨をいら立たせる。山陽線福山から分れる支線の「萬能倉」は喧嘩早い人は直ぐ胸ぐらをつかみさうだ。倶知安の一つ手前は「比羅夫」、安部比羅夫を思ひ出されるが、驛はそんな英雄的な感じも起らず車窓に見る町も寂しい。が、この邊から見える蝦夷富士の景觀は雄大である。汽車は此の山麓を縫ひ谷川のせゝらぎに沿うて行くのであるが、そんな山中にも「昆布」といふ驛がある。「海を距る幾十里、それでも昆布とはこれいかに?」といひたくなる。危篤の病人に心ひかれて急ぐ旅、狩勝峠の絶景も眼に入らない。憂愁にとざゝれた心には汽車の速度は牛の歩みだ。時計を見ると、もう十分で釧路に着くと思つて停車した驛からの呼び聲は「大樂毛」。これでは一つそ、汽車などに乘らなければよかつたと言つても後の祭。

「辨當がありますか」。「いや、ない」。立賣のかついでゐる箱の中には澤山あるではないかと思つてよく見れば「柳井(山陽線)」であつた。どんなに白髮の老人ばかりゐる處かと思つて行つて見ると、別に變つたことのない「白老(室蘭線)」。驛名ではないが「洞爺湖」。眠らうといつても此處が終點で誰でも起されて降車を命ぜられるのは「根室」。

山陽線の「戸田」をヘタと讀むのは面白い。下手に讀んだら笑はれてしまふ。高山線の「上枝」は何といふか。これはまた非常に古典的な讀み方で「ホヅエ」、頬杖ではない。ほづゑとは純粹の我が國の言葉で、意味は「上の枝」であるから「上枝」でよいのだが、いかにも風流人がつけたに違ひなからう。下の枝は「しづえ」だが、これはまだ見當らぬ。山陽線には「下松」がある。

「帶解け」、何といふ失禮な驛夫と思ふが、これは櫻井線の「帶解」といふ驛だから致し方がない。尤も驛夫は慣れた心で呼んでゐるのだ。山陰線は、トンネルが多いが日本海の怒濤を眺めながらの旅は目先きが變つて慰められるところが多い。然るに汽車が通る、即ち、鐵路を「馬路」といふは妙だ。何と解くかと考へる間もなく停ると、突然「はし、はし」。箸でもなくして探してゐるのかと思ふと、これは「波子」。次は、「下府」。どうも變なのがつゞいて煩はしいと思つてゐると果して「特牛」。

海の國立公園瀬戸内海を横斷して高松に上陸、乘車。海の景にもやゝ飽いた氣持でゐると、やがて停つた驛。何氣なく窓から見ると目にうつるは「鬼無」。鬼がゐてたまるものか。殊更

から斷つてあるからには鬼はゐたのかも知れない。地獄にだけゐると聞いてゐたのに、やはり實在するのかと思つてゐると、「きなし、きなし」と驛夫は叫ぶ。「鬼無」と讀むのであつた。

「丸龜」を間にはさんで「宇多津」に「多度津」は煩はしい。

富山縣の高岡から日本海の「伏木」に出る。何が不思議かと大いに不思議がつてゐると、雨もないのに常に「雨晴」。これで分つた。驛夫は「あまはらし」と呼んでくれるので、梅雨のやうな時に聞くと定めし氣晴しになるであらう。人は降りても馬の姿は見えぬのに「馬下」。これは磐越西線。千葉縣には「馬來田」がある。

吉野から高野への車中「隅田」とは東京の川と同じと思ふが、驛夫の聲は「すだ」といふ。さうだ、和歌山縣だと合點が行く。

以上、「沼宮內」に引かされて漫談的になつたが、次に分類して見よう。

「舞坂」「辨天島」等は名も風光も共に優美でよく調和してゐる。これは景勝地といふ先入主から驛名も優しく響くのか、又は文字の聯想から感ずる景色であらうか。兎に角、この邊を走る時、窓外に眼をうつさぬ者はないのである。

須磨　明石　舞子　宮津（宮津線）　由良（同）　天ノ橋立（同）　松島　萩（山陰線）

等、何れも風光を想はせ、又、何處か懷しさを抱かしめる。驛名ではないが博多近くの「千代の松原」等もさうである。尤も、松島は美景の海岸から一里も離れた處に驛があるので、車窓から目に入るは田畑と丘で何の樂しみもなく、落膽させられる。

象潟（羽越線）　平泉（東北線）　石山（東海道線）　笠置（關西線）　奈良（同）　道成寺（紀勢線）　畝傍（和歌山線）

は、懷古的情緒にかられる。京都は殊にさうであるが、之等は何れも和歌や歴史によつて得てゐる豫備知識があるためであらう。

しかし、これに反して名にひかされて行つて見ると全く失望落膽させられる處もある。

草薙（東海道線）　鶯谷（東北線）　桔梗（函館線）　紅葉山（夕張線）

桔梗も咲かず、紅葉もなく、勿論、鶯など聞えるどころでない。所謂位倒れである。これと全く反對で、驛名からの聯想や語呂は惡いが實質の勝れてゐる處もある。

蒲郡（東海道線）　親不知（北陸線）　熊野池（紀勢線）　下呂（高山線）

で、いかつく聞えても、車窓の景はなか〳〵よい。

アイヌ語を、そのまゝ漢字にあてはめた北海道では振つた名が隨分多い。

　舌辛　美唄　苗穗　琴似

一體、此の地方のは漢字だけではなか〳〵讀めない。切符を買ふにも骨が折れる。東京や大阪等大驛の出札掛でも果して言葉だけで通じるかどうか。字を示さないと分らなくはないだらうか。さうなると筆談といふ事になるのである。二三その例をあげると、

　長萬部　七飯　安足間　音威子府　譽平　安平　弟子屈　錦多峯　佐留太　止若　妹脊牛
　長流　美流渡　雲谷　稚内

昭和十一年春の皆既食は北海道北部でよく見られたので各國から天文學者が集つたが、その中心地は「女滿別」で、新聞紙上にいろ〳〵記事がのせられても、その地名については暫く讀假名がなかつた。つけられなかつたのであつた。女は誰しもジョと讀んでしまふ。メと讀むならばまだ「芽滿別」の方がよくはないだらうか。

「札幌」「釧路」「函館」等も讀みつけてゐるからそれ程にも感じないが、單なる國漢文の知

識だけでは讀めない。數年前に北海道内でも不自由するといふので、どうせ宛字であるから、もつと分り易いのに變へたらといふ説をなす者もあつたが、結局、影響するところも大きく實行にも難關があるといふので中止されてしまつた。

しかし、これは何も北海道に限つたことではない。アイヌ語に近いと思はれる驛名は他にもある。

生保内（奥羽線の支線）　撫牛子（奥羽線）　毛馬内（花輪線）

まだ他にも多い。

矢作（彌彦線）　行縢（日豊線延岡の支線）　土師（因美線）　東雲（宮津線）

これ等は古い語で、地名をはなれても立派に意味があるのである。

神足（東海道線）　上狛（奈良線）　坂祝（高山線）　文挾（日光線）　大更（花輪線）
階上（八戸線）　綴（常磐線）　網田（三角線）　築城（日豊線）　印南（和歌山線）

以上は訓讀みや訓讀みの音便等から出來てゐて讀み難い名である。

尙、終りに讀み難く、又珍らしい驛名をあげる。

東海道、山陽　用宗(もちむね)　英賀保(あがほ)　厚狭(あさ)　埴生(はぶ)
東北、常磐　小牛田(こごた)　小鳥谷(こづや)　我孫子(あびこ)
房總　安食(あじき)　譽田(こんだ)　周西(すさい)　東浪見(とらみ)
九州　雜餉隈(さつしよの)　三納代(みなしろ)　大畑(おばこ)
北陸　杉津(すいづ)　石動(いするぎ)　生地(いくぢ)
山陰　養父(やぶ)　御來屋(みくりや)　五十猛(いそたけ)

二、地　名

驛名も地名からとつたので殊更二つに區別する要もないのであるが、前には全國鐵道圖の中から拾つたもの、こゝには鐵道の引かれてない地や、たとへ開通してゐても驛のない處などから見ようといふのである。地名といつても前述のやうに北海道や朝鮮、臺灣などには珍しい、又難しい名は澤山あつてもこれは特別な關係があるので省略する。

それから地名も村や町の字(あざ)等を探すと限りがない。

東京にも牛込に破損(はそん)町、或は燒餅(やきもち)坂等といふのがあつたが今ではなくなつてしまつた。又、同じ字でも「一口(いもあらひ)坂」といふのが正しいのに「ひとくち坂」と電車の車掌は呼んでゐる。であるから地名も幾分の變遷をまぬがれぬ。

現に「明治」「大正」「昭和」等といふ町村名が各地にあるが、これは改名したのか、新しく名づけたのか、兎に角新しい名であるに違ひはない。また、「高麗」と書く村があるがこれは朝鮮系統の人が住んだ地方である。しかし、同じ此の字でも處に依つて讀み方が違つてゐるので、東京の武藏野鐵道沿線のは「コマ」といひ、京都近くのは「コウライ」、鳥取縣では「コウレイ」と讀んでゐる等はなか／＼煩雜である。同じ字でも三通りも讀むのであるから外國人が日本語は難しいといふのも、尤なことである。

「等々力」にも東京府のは「トヾロキ」で、山梨縣では「トヾリキ」である。こんな例はあげれば限りがない。

飽田	あきた	熊本縣	豐島	としま	東京府
	あいた	茨城縣		てしま	大阪府

枇梨｛くはなし　廣島縣
　　　むくなし　廣島縣

萬木｛よろぎ　滋賀縣
　　　よるぎ　滋賀縣

蒔田｛まきた　岐阜縣
　　　まいた　埼玉縣

十三｛じふさん　青森縣
　　　じふさう　大阪府

七戸｛なゝと　高知縣
　　　しちのへ　青森縣

機織｛はたおり　秋田縣
　　　はとり　福島縣

菊田｛きくた　神奈川縣
　　　くくた　福島縣

清水｛しみづ　靜岡縣
　　　すんづ　鳥取縣

大福｛おほふく　福岡縣
　　　だいふく　奈良縣

又、同じ發音で漢字は別なのがある。

あき｛安藝　廣島縣
　　　阿木　岐阜縣

あさ｛厚狹　山口縣
　　　麻　香川縣

すゑの｛末野　新潟縣
　　　　陶野　京都府

たもん｛他門　新潟縣
　　　　多門　兵庫縣

たかの
- 高野　京都府
- 竹野　京都府

はとり
- 服部　大阪府
- 羽鳥　滋賀縣

ちぐさ
- 千種　愛知縣
- 千草　兵庫縣

しみづ
- 清水　靜岡縣
- 志水　新潟縣
- 冷水　和歌山縣

おほふけ
- 大更　岩手縣
- 大瀁　新潟縣

さうかと思ふと同じ字、同じ讀み方の町村がいくつもある。

清水（しみづ）
- 滋賀縣
- 茨城縣
- 靜岡縣
- 栃木縣
- 宮城縣

古川（ふるかは）
- 東京府
- 宮城縣
- 栃木縣
- 山形縣
- 新潟縣

草津（くさつ）
- 群馬縣
- 滋賀縣
- 廣島縣

箕輪（みのわ）
- 長野縣
- 群馬縣
- 栃木縣
- 茨城縣

福岡
- 埼玉縣
- 石川縣
- 茨城縣
- 宮城縣
- 福岡縣

全國の町村名の中で一字のが大分ある。附近の中心をなしたといふ意味から「本町」「元町」等といふのはよく見る名であるが、中にはなか〳〵面白いのがある。

東京府　志(し)　砂(すな)　霞(かすみ)　金(かな)　大(おほ)　扇(あふぎ)
大阪府　鳳(おほとり)　巽(たつみ)　中(なか)
京都府　田(た)　篠(しの)
神奈川縣　寄(やどりき)　岩(いは)　川(かは)
兵庫縣　藍(あゐ)　芝(しば)　社(やしろ)　廣(ひろ)　市(いち)　畑(はた)　浦(うら)
長崎縣　琴(きん)　宮(みや)　峯(みね)
千葉縣　都(みやこ)　睦(むつみ)　土(つち)　源(みなもと)　環(たまき)　丸(まる)　柏(かしは)　明(あきら)
茨城縣　圷(あくつ)　要(かなめ)　巴(ともえ)　玉(たま)　文(ふみ)　林(はやし)　靜(しづ)　大(おほ)
栃木縣　姿(すがた)　桑(くは)　絹(きぬ)　菱(ひし)　中(なか)
群馬縣　島(しま)　新(しん)
埼玉縣　平(たひら)　靜(しづか)　芝(しば)

奈良縣　都(みやこ)　多(おほ)

三重縣　鵲(かさゝぎ)　縣(あがた)　椿(つばき)　榮(さかえ)　明(あきら)

愛知縣　園(その)　起(おこし)　奥(おく)　楠(くすのき)

新潟縣　乙(きのと)　卷(まき)　燕(つばめ)　今(いま)

和歌山縣　廣(ひろ)

靜岡縣　熊(くま)　中(なか)

山梨縣　寶(たから)　甲(かぶと)　岡(をか)　祝(いはひ)　錦(にしき)　英(はなぶさ)　山(やま)　榊(さかき)　源(みなもと)　巖(いはほ)　忍(しのぶ)

滋賀縣　稻(いね)　宮(みや)　苗(なへ)

岐阜縣　鶉(うづら)　岩(いは)　時(とき)　玉(たま)　結(むすぶ)　鶯(うぐひす)　中(なか)　陶(すゑ)　上(かみ)　乾(いぬゐ)　宮(みや)　灘(なだ)

長野縣　長(をさ)　上(かみ)　梓(あづさ)　壽(ことぶき)　大(おほ)　溫(ゆたか)　倭(やまと)　縣(あがた)　和(かなふ)　鼎(かなへ)　柵(しがらみ)

宮城縣　櫻(さくら)　北(きた)

福島縣　旭(あさひ)

岩手縣　盛(さかり)

青森縣　館(たて)　向(むかひ)　中(なか)

山形縣　齊(いつき)　中(なか)　泉(いづみ)

福井縣　棗(なつめ)　鶉(うづら)　豐(ゆたか)

石川縣　直(たゞ)　牧(まき)　額(ぬか)　鄉(がう)　兜(かぶと)　端(はし)

富山縣　下(しも)　泊(とまり)　野(の)　平(たひら)

鳥取縣　隼(はやぶさ)　大(おほ)　社(やしろ)　泊(とまり)　渡(わたり)　縣(あがた)

島根縣　久(く)　園(その)　谷(たに)

岡山縣　今(いま)　庄(しやう)　富(とみ)　鄉(がう)

山口縣　串(くし)　萩(はぎ)　陶(すゑ)　通(かよひ)

廣島縣　安(やす)　伴(とも)　沖(おき)　市(いち)　高(たか)　奧(おく)　坂(さか)　鞆(とも)　牧(まき)　廣(ひろ)

德島縣　脇(わき)　辻(つぢ)　椿(つばき)

香川縣　麻(あさ)　林(はやし)

愛媛縣　鏡(かゞみ)　來(く)

高知縣　岩田　鏡

福岡縣　劍　開　赤　中　岬

大分縣　谷　上　荻

佐賀縣　鏡　麓

熊本縣　鍋　綠　轟　砦　阿　上　浦　川　陣　大　渡　濱

宮崎縣　妻　憶　綾

鹿兒島縣　里

以上は珍らしいものばかりをあげたのであるが、長崎縣の「琴」等は讀み方が珍しい。茨城縣の「圷」は讀めない。

田、土、畑、苗、桑、野、園、里、豊等はいかにも農村にふさはしい名である。又、名からして地境が分るやうなのは、浦、灘、麓、岬、濱等であらう。

この一字名の町村は、廣、大、久等とそれだけ言つたのでは町村とは聞えないが廣村、大町、久村とつゞけると普通に聞える。

「大」を書くのは各縣にあるやうだが、「多」は少い。熊本縣の「砦」は茨城縣では「取手」と二字にしてゐる。色からつけた名としては、赤、綠。鳥の名をとつたのには、隼、鵲、鶉、鶯等がある。

「上」と「下」とは字の名としてはあるが、一つの町村名としては少い。しかし、「中」は澤山ある。

山梨縣の「谷村」は町であるので、「谷町」とはいはずに「谷村町」といつてゐるが、之は谷がもとで、村がつき、町が加つたのであらう。

數を意味した名は隨分多いが、之も珍らしいものだけをあげて見よう。

一　一身田（三重）　一宇（徳島）　一勝地（熊本）　一貴山（福岡）　一日市（秋田）　一町田（熊本）

二　二見（熊本）　二江（同）　二子（岩手）　二つ井（秋田）　二郷（三重）

三　三（茨城）　三朝（鳥取）　三川（和歌山）　三角（熊本）　三里（高知）
三毛門（福岡）　三財（宮崎）　三納（同）　三名（徳島）

四　四（和歌山）　四つ合（新潟）　四方（富山）　四屋（長野）　四海（香川）
　　四郷（三重）

五　五（和歌山）　五箇（京都）　五城目（秋田）　五台（茨城）　五泉（新潟）
　　五ヶ谷（三重）

六　六榮（熊本）　六角（佐賀）　六ヶ所（青森）　六郷（同）

七　七箇（香川）　七川（和歌山）　七戸（青森）　七瀧（熊本）　七折（宮崎）
　　七福（千葉）

八　八（福井）　八戸（青森）　八里（茨城）　八原（同）　八知（三重）

九　九幡（岡山）　九鬼（三重）　九會（兵庫）　九箇莊（大阪）　九重（和歌山）

一〇　十（福井）　十市（高知）　十全（新潟）　十社（三重）

一二　十二鏑（岩手）　十二所（秋田）　十二里（青森）

一三　十三（青森）

一四　十四山（愛知）

一五　十五濱（宮城）

一六　十六（高知）

十位　五十猛（島根）　五十市（宮崎）　九十九（群馬）

百位　百枝（大分）　百引（鹿兒島）　百塚（富山）　五百石（同）

千位　千歳（山形）　千里（福島）　千種（千葉）　千城（同）　千疋（岐阜）　千年（青森）　八千代（德島）

萬位　萬歳（岡山）　萬世（鹿兒島）　萬倉（山口）　二萬（岡山）　八萬（德島）

數字を頭に入れた名で多いのは、八幡と一宮である。この外、たゞ地名となると限りがない。

一（奈良縣）　九鬼（三重縣）

九上（新潟縣）　三財（宮崎縣）

七石（栃木縣）　七栗（三重縣）

七尾（石川縣）　三成（島根縣）

六手（千葉縣）　八十島（宮城縣）

八十一鱗（岐阜縣）　十八成（宮城縣）
十八女（栃木縣）　七五三場（栃木縣）
二十六木（山形縣）　二十五里（千葉縣）
廿九日（石川縣）　九十九（石川縣）

千葉縣に「白里」といふ處がある。銚子から房州の太平洋に面した海岸は九十九里濱といつて雄大な眺望である。この「九十九」は「百」に一つ足らない。そこで「百」から一畫とり去ると「白」となる。この「白」に九十九里の「里」をとつて出來たのが「白里」だといふ。元來、「九十九」は古來「白」に緣のある句として用ひられるので、「つくも」と讀むのも「白髮」から來てゐる。老人らしい村は高知縣の「波介」である。

佛敎に緣のある町村も隨分多い。お寺がある處から出來たのでは香川縣の「善通寺」等は最も有名であるが、その外にもそれらしいのがある。

大聖寺（石川縣）　正院（石川縣）　大光寺（青森縣）
紫雲寺（新潟縣）　本城寺（新潟縣）　平泉寺（福井縣）

文　殊（岐阜縣）　綠僧都（愛媛縣）　吉祥院（京都府）
大善寺（福岡縣）　念珠關（山形縣）　普賢寺（京都府）
地藏寺（高知縣）　般　若（富山縣）　六條院（岡山縣）
觀音寺（香川縣）　帝　釋（廣島縣）　西大寺（岡山縣）
法勳寺（香川縣）　青　墓（岐阜縣）　雲林院（三重縣）
大生院（愛媛縣）

此等は町村名であるが、單に地名となると限りがない。その中で珍しいのは

佛　崎（高知縣）
三途河（愛知縣）
三途川（富山縣）

等である。日本アルプスの槍ヶ嶽には「殺生小屋」があり、箱根の芦ノ湖畔には「殺生河原」があるし、各地の温泉がすさまじく、出てゐる處は「地獄」と名づけ、別府には八つある。これに對して神社に緣のある名は割に少い。

神社（かみやしろ）（三重縣）
大社（たいしや）（島根縣）
宮（みや）（滋賀縣）
神（かみ）（廣島縣）
切目（きりべ）（和歌山縣。切目王子神社がある）
社（やしろ）（長野縣）
總社（そうじや）（岡山縣）

最も長いのは、長野縣の「五郎兵衛新田村」である。これは勿論、五郎兵衛といふ人が新しく開墾したといふので名づけられたのであらうが、よくその村の由來を現してゐる。

同じ長野縣にある「鬼無里（きなさ）村」は無事だが、熊本縣の「鬼池村」となると、今は鬼無でも何處となく恐ろしく感じる。同縣には優しい村もあつて「乙女」といふの等は鳥取縣の「若櫻」「花見」「春日」と共に優美だ。これが岩手縣の「姉帶（あねたい）」になると見た字から稍々なまめかしくなるが、奈良縣の「帶解（おびとけ）」に至つては、聞いても字を見ても甚しい。大阪府の地名に「三犬（みぬ）

女」といふのがあるが、何か傳説的である。福岡縣の「山川」は平凡なやうでも珍しい。廣島縣の「上下」も同じである、熊本縣の「健軍村」は勇ましい。徳島縣の「宍喰」は字だけでは大した感じも起らないが、「獅子喰」とすると「鬼池」以上である。長崎縣には「獅子村」がある。香川縣の「檀氏」は風雅である。同じ縣に「象郷」があるが、別に象がゐるわけでもあるまいし、「富熊」「栗熊」等面白いのが多い。

神奈川縣の大根はダイコンではなくて、オホネである。之は聞けば合點がゆくが、讀みにくい。同じものに奈良縣の「鴨公」がある。公は公達等と熟語してキミと讀むが、鴨公は一寸分るまい。

また、大きな區域を二分三分したと見られる處も可成あるが、その中で特殊な名は、

徳島縣　上分上山　下分上山　上木頭　中木頭　下木頭
大分縣　西眞玉　中眞玉　上眞玉
岩手縣　上有住　下有住
廣島縣　口北　口南

山口縣　東厚保　西厚保

鹿兒島縣　東方　西方

香川縣では人の姓とも思はれるのが多い。

大野　淺野　安田　林　田中　池田　桑山　坂本　岡田　和田　山田　南　神田　辻

千葉縣にも多い。

戸田　內田　市川　白鳥　野田　中山　福田　關　塚田　源　福岡　森山　大倉　豊田

豊岡　大森　川上　白井　本野　和田

聯想の面白いのを拾ふと次のやうなのがある。

東京府　狛江(こまえ)　簞笥(たんす)町　袋(ふくろ)町　佃(つくだ)町

京都府　羽束師(はつかし)（恥し）　五十河(いかが)（如何）

大阪府　孝子(けうじ)（熟語）　寢屋川(ねやがは)（寢る部屋）

神奈川縣　座間(ざま)（ざま）

兵庫縣　大芋(おくも)（お芋）　三椒(さんしやう)（山椒）　道場(だうぢやう)（稽古する道場と同じ）

群馬縣　剛志（人の名に似る）

茨城縣　瓜連（瓜面）　雨引（雨を引きよせる）　安中（饅頭）

埼玉縣　精明（淸明）　久下（公卿）

千葉縣　御宿（お泊り所）　本納　八生（藪）

栃木縣　鍋掛（食べかけ。鍋をかけ）　益子（女の名）　部屋

山梨縣　大目　休息（休む）

奈良縣　大福（菓子の名と同じ）　國巣（屑）

三重縣　太郎生（太郎生るでいかにも作った名）　阿保（阿呆）

愛知縣　海老

靜岡縣　戸田（下手）　熊切　氣多（下駄）

岐阜縣　帷子（着物の名）　下呂（汚い）　小熊

長野縣　讀書（學者らしい名）　夜間瀬（讀ませる）　川柳

宮城縣　文字　荒雄（荒い男）　鶴巣

福島縣　針道（針の道）

岩手縣　附馬牛（字に對する讀み方）　御返地　薄衣　日頃市（平常の市場）

青森縣　車力（車屋）　猿邊（猿のゐる所）　大鰐

山形縣　蠶桑　柏倉門傳

秋田縣　强首（恐い首）　飯詰（飯のつまり）

福井縣　大虫　殿下　神明（神）

新潟縣　小千谷（粥のおぢや）　女川　新組

滋賀縣　玉緒（玉の緒。いのち）　鬼郷

石川縣　蝶屋

富山縣　碁石　赤丸（赤の丸）　伏木（不思議）

鳥取縣　手間（手間がいるの手間）　遙堪（菓子の名）　智頭（地圖）

島根縣　大家（大家）　灘分（多分）

岡山縣　茶屋（お茶屋）　胸上（胸の上）

廣島縣　熊野跡（熊のゐた跡）　田頭（澤山のたんと。田の長）

山口縣　於福（女の名）　殿居（殿がゐる。宿直）　戸田（下手）

和歌山縣　仁義（俠客らしい名）　萬呂（人の名の麿）

德島縣　長生（長いき）　晝間（晝）

香川縣　美合（見合）　圓座（まどゐ）

愛媛縣　舌田（只）　二名（二人の名。二人）　弓削（道鏡の姓と同じ）

高知縣　和食（日本の食事）　後免（御免）

福岡縣　田主丸（田の所有者）　延永（信長）

佐賀縣　嬉野（嬉しい）　呼子（呼び笛）

長崎縣　土井頭（土井といふ者の首）　竹松（人の名に近い）　今福（今が幸福）

大分縣　夜明（夜のあける時）　草地（草の原）　朝來（朝來る）

熊本縣　須子（壽司）　八分字（八分の字）

宮崎縣　飫肥（帶）　生目（生きた目）

鹿兒島縣　求名(くな)（來るな）　入來(いりき)（入り來る）

その他、難讀の名や珍しい名は多いが、その主なるものをあげる。但し北海道や臺灣、朝鮮等は別である。

東京府　碑衾(ひぶすま)　拜島(はいしま)　田無(たなし)　忠生(たゞを)　恩方(おんかた)　福生(ふつさ)　古里(こり)

京都府　上六人部(かみむとべ)　上夜久野(かみやくの)　當尾(たうのを)　美豆(みつ)　彌榮(いやさか)　豊榮(とよさか)　栗田(くんた)　餘內(あまりうち)　雀部(さゝべ)

大阪府　止々呂美(とゞろみ)　百舌鳥(もず)　孔舍衙(くさか)　孝子(けうじ)　瓜破(うりわり)　高向(たかう)　雄信達(をのこんだち)　嵯跎(さだ)

神奈川縣　金目(かなめ)　千木良(ちぎら)　依知(えち)　眞鶴(まなづる)　柿生(かきを)

兵庫縣　妻鹿(めか)　建屋(たきや)　射添(いそふ)　神美(かむよし)　斑鳩(いかるが)　有年(うね)

群馬縣　綿打(わたうち)　六合(くに)　采女(うねめ)　西牧(さいもく)　伊參(いさま)

茨城縣　行方(なめかた)　潮來(いたこ)　源淸田(げんせいた)　黑子(くろこ)　蚕飼(こかひ)　生子菅(をごすげ)　逆井山(さかゐやま)　志子庫(しゝくら)　弓馬田(ゆまた)

千葉縣　府馬(ふま)　八都(やつ)　公津(こうづ)　八生(やぶ)　公平(たかひら)　正氣(まさき)　八街(やちまた)　犢橋(こてはし)　南白龜(なはき)

埼玉縣　安行(あんぎやう)　鴻巢(かうのす)　川通(かはどほり)　小手指(こてさし)　越生(おごせ)　毛呂(もろ)　寶珠花(ほうじゆはな)

栃木縣　箒根(はうきね)　眞名子(まなご)　祖母井(うばがゐ)　久下田(くげた)　馬頭(ばとう)

奈良縣　安堵（あんど）　都介野（つげの）　白銀（しろおね）　針ケ別所（はりべつしよ）　御所（ごせ）　宇賀志（うがし）　耳成（みゝなり）　天川（てんのかは）　當麻（たいま）

三重縣　阿下喜（あげき）　御座（ござ）　粥見（かゆみ）　天白（あましろ）　加太（かぶと）　明合（あけあひ）　村主（すぐり）　安乘（あのり）　入鹿（いるか）　大三（おほみつ）

愛知縣　幡豆（はづ）　天白（てんぱく）　七寶（しつぽう）　祖父江（そぶえ）　志段味（しだみ）　知立（ちりふ）　足助（あすけ）　猿投（さなげ）

靜岡縣　於保（おほ）　地頭方（ぢとうがた）　須走（すばしり）　足柄（あしがら）　有度（うど）　向笠（むかさ）　神久呂（かぐろ）　熊切（くまきり）

山梨縣　木賊（とくさ）　石橐（いしくら）　金生（きんせい）　相興（あひおき）　飯富（おぶ）　右左口（うばぐち）　平等（ひらしな）　禾生（かせい）

岐阜縣　春近（はるちか）　大湫（おほくて）　各務（かゞみ）　西郡（さいぐん）　洞戸（ほらど）　下石（おろし）　上枝（ほづえ）　明世（あきよ）

長野縣　安茂利（あもり）　三水（さみつ）　錦郡（にしごり）　會地（あふち）　知里（ちさ）　廊田（なかた）　富士山（ふじやま）　手良（てら）　美篶（みすゞ）　信級（のぶしな）　更府（かうふ）

洗馬（せま）　安曇（あづみ）　七二會（なにあひ）　外様（とざま）

宮城縣　箟嶽（のだけ）　氣仙沼（けせぬま）　利府（りふ）　色麻（しかま）

福島縣　檜枝岐（ひのえまた）　坂下（ばんげ）　睦合（むつみあひ）　門田（もんでん）

岩手縣　江釣子（えづりこ）　相去（あひさり）　立根（たつこん）　安家（あつか）　鵜住居（うのすゐ）　輕米（かるまい）　姉帶（あねたい）　爾薩體（にさつたい）　越喜來（おつきらい）

青森縣　笹子（ちねこ）　階上（はしかみ）　見前（みるまへ）

山形縣　安樂城（あらき）　及位（のぞき）　日向（にちかう）　余目（あまるめ）

秋田縣　早口　大曲　阿仁合　象潟

福井縣　高椋　乾側　鹿蒜　石徹白

新潟縣　鹿峠　大面　味方　米納津　五十公　新發田　高道祖

滋賀縣　祇王　多羅尾　雄琴　膳所　老上　金勝　仰木　葉枝見　久徳　春照　日撫
　　　　神照　余呉　安曇　饗庭　劍熊　息長

石川縣　蛸島　羽咋　根上　分校　動橋　御手洗　寶立　三馬

富山縣　卯花　熊無　大鋸屋　船峅　下夕　仁歩　作道

鳥取縣　丹比　智頭　逢束　根雨　阿毘縁　江尾

島根縣　母里　志々　乙立　溫泉津　吾郷　御來屋

岡山縣　牛窓　神根　鹿忍　日生　粒江　呉妹　宇甘東　公文　讃甘

廣島縣　常金丸　甲奴　吉舍　小奴可　美古登　土生　宜山

山口縣　嘉年　紫福　菱海　生雲　束荷　衣市

和歌山縣　生石　五西月　周参見　學父路　船着　三田　根來　應其

徳島縣　多家良　生比奈　鬼籠野　撫養

香川縣　雌雄島　羽床　奥庭　土器　井戸　長炭　比地二

愛媛縣　千足山　伊台　喜須木　雄群　乃萬　五十崎　三間　父二峰　妻鳥　二木生
　成妙　遊子　千丈

高知縣　介良　奈半利　徳王子　長者　具同　甲浦　宿毛　馬路　富家　御疊瀬
　曉霞　久禮田

福岡縣　幸袋　勾金　怡土　企救　大莞　飯江　邊春　銀水　雷山　安德　忠見
　猪位金　兩開　伊良原　黑土　苅田　安眞木　大分　席内

佐賀縣　嚴木　値賀　打上　須古　巨勢　金立　三日月

長崎縣　七釜　式見　野母　多似良　彼杵　千綿　崎針尾　有喜　武生水　雞知
　豆酘　生月　三會　上井首

大分縣　由布川　賀來　一尺屋　因尾　玉來　封戸　山移　玖珠　安心院

熊本縣　乙女　不知火　田迎　腹赤　網田　百濟來　八嘉　來民

宮崎縣　新田（にうだ）　都於郡（とおこほり）　上野（かみの）　大束（おほつか）　鵜戸（うど）

鹿兒島縣　隼人（はやと）　姶良（あひら）　清水（きよみづ）　阿久根（あくね）　東襲山（ひがしそふやま）　喜入（きいれ）　指宿（いぶすき）　志布志（しぶし）　小根占（こねじめ）

一二、漢字の構成

漢字は一、人、手、月といふやうに單一なものもあるが、大部分は此等をもとにして、いろ〳〵に組み立てられてゐる。これを分解すると七つになる。

一、偏（へん）（字の左につくもの）

人（にんべん）　信　仙　保　　彳（ぎやうにんべん）　行　往　後

冫（にすゐ）　冴　冷　凄　　氵（水）（さんずゐ）　泳　流　河

口（くちへん）　咲　咽　喫　　土（どへん）　坪　埋　堵

女（をんなへん）　奴　如　姪　　山（やまへん）　岨　崎　屹

忄（心）（りつしんべん）　恨　恃　恤　　扌（手）（てへん）　持　掘　探

木（きへん）　梅　松　櫻
日（ひへん）　昭　昨　明
月（肉）（にくづき）　脂　胸　脚
玉（たまへん）　現　珍　琢
石（いしへん）　硯　碓　磯
禾（のぎへん）　稼　稻　稚
糸（いとへん）　織　細　約
ネ（衣）（ころもへん）　袴　初　裾
貝（かひへん）　賄　賤　賊
阝（阜）（こざとへん）　隔　陽　除
食（しよくへん）　飯　飲　飽
骨（ほねへん）　體　髓　髑
𧾷（足）（あしへん）　踏　蹄　距

角（つのへん）　解　觴　觸
犭（けものへん）　獨　猛　獲
月（つきへん）　朦　朧（期）
火（ひへん）　燭　燈　煙
目（めへん）　眼　睡　眠
ネ（示）（しめすへん）　禮　神　祝
米（こめへん）　粹　精　粉
虫（むしへん）　虹　蛟　蛾
言（ごんべん）　語　訪　許
金（かねへん）　鐵　銅　銀
革（かはへん）　鞋　鞘　鞭
馬（うまへん）　驛　馳　馴
魚（うをへん）　鯉　鮒　鮑

車（くるまへん）　輕　軸　軒
耳（みゝへん）　職　聰　聯
羊（ひつじへん）　羝　羚（群）
牜（牛）（うしへん）　牧　犧　特
巾（はゞへん）　帷　帆　帳
矛（ほこへん）　矜　矠
歹（歺）（がつへん）　殊　歿　殉
豕（ゐのこへん）　豬（象　豚）
舟（ふなへん）　航　船　舳
耒（すきへん）　耕　耗　耦
酉（とりへん　ひよみのとり）　酌　配　酸
釆（のごめへん）　釋　釉
鼻（はなへん）　鼾　齁

爿（しやうへん）　牆　牀
牙（きばへん）　雅
方（かたへん）　旅　於　旗
欠（あくびへん）　欣　次　欺
矢（やへん）　短　矩　知
子（こへん）　孤　孫（季）
弓（ゆみへん）　弛　弦　强
立（たつへん）　竝　竣　端
豸（むじなへん）　貉　豹　貌
豆（まめへん）　豌（豐）
舌（したへん）　舐（舍）
身（みへん）　躬　躶　軀
里（さとへん）　野（量　重）

鳥（とりへん）　鳴　鳴　鳩　　田（たへん）　町　畔　略

齒（はへん）　齟　齡　齲　　止（とめへん）　武　歲　正

片（かたへん）　版　牌　牒

二、旁（つくり）（字の右につくもの）

刂（刀）（りつたう）　劍　利　到　　殳（るまた）　段　殺　殿

阝（邑）（おほざと）　都　郊　邸　　頁（おほがひ）　額　頭　頗

隹（ふるとり）　雞　雛　雜　　斤（をのづくり）　斷　斬　新

羽（はねづくり）　翊　翔（翁）　　力（ちから）　勅　助（加）

彡（さんつくり）　形　彫　彰　　聿（ふでづくり）　肆　肇　肅

三、冠（かんむり）（字の上にあるもの）

冖（わかんむり）　冠　家　冥　　山（やまかんむり）　嵩　嵐　崩

穴（あなかんむり）　窪　窮　突　　ヨ（彑）（けいがしら）　彖　彙　彝

艹（艸）（くさかんむり さうかう）　草　花　苑　　爪（つめかんむり）　爭　爲（爬）

癶（はつがしら）　發　登　癸　　亠（けいさん）　亡　交　亭

耂（おいかんむり）　老　者　耄　　戸（とかんむり）　戻　房　扇

麻（あさかんむり）　麿　麼　靡　　虍（とらかんむり）　虎　虚　虞

宀（うかんむり）　字　室　官　　四（网、罓、罒）（あみがしら）　置　罪　羅

竹（たけかんむり）　竿　筍　籍　　髟（かみかんむり）　髮　髻　髷

雨（あめかんむり）　雪　霞　霜　　八（はちがしら）　公　兼（兵）

四、構（かまへ）（字の外にあるもの）

門（もんがまへ）　開　關　閑　　勹（つゝみがまへ）　包　匈　匂

口（くにがまへ）　國　園　圓　　匚（はこがまへ）　匡　匠　匪

鬥（とうがまへ）　鬪　鬨　鬧　　匸（かくしがまへ）　匹　區　匿

气（きがまへ）　氣　氛　　卩（㔾）（ふしづくり）　卯　印　却

行（ゆきがまへ）　衍　街　衡

五、遶（ねう）

辶（辵）（しんねう）　辻　途　通　　夂（すゐねう）　夏　夐

走（さうねう）　趨　越　趣　　廴（いんねう）　延　建　廻

麥（ばくねう）　麭　麩　麴　　支（しねう えだねう）　攲

儿（にんねう）　允　元　兄　　攴（攵）（ぼくねう）　改　收　故

文（ぶんねう）　斐　斑　斐　　乙（おつねう）　乞　乾

鬼（きねう）　魄　魁　魅

六、垂（たれ）

厂（がんだれ）　雁　厄　原　　疒（やまひだれ）　病　癡　療

广（まだれ）　麻　度　廢　　尸（しかばね）　尾　屍　居

七、脚（あし）（字の下につくもの）

灬（火）（れんくわ）　煮　燕　熟　　心（したこゝろ）　忠　恙　忌

皿（さら）　盆　盟　益

漢字は以上のものが基となつて出來てゐるが、なほ其を九つの線で組織されてゐる。

一、點又側　二、勒又盡　三、努又直　四、趯又鈎　五、策　六、掠又疋　七、啄
八、磔又抜　九、戈

この中で八までを「永」の字にあてたのが、書道の「永字八法」である。それは次のやうである。

漢字の數は時代が經つに連れて增加してゐる。支那の字書にどの位の字が載つてゐるかを時代によつて見ると、發達の樣子が分つて面白い。

漢代	九三五三
魏代	一八一五〇
唐代	二六一九四
明代	三三一七九
淸代	四二一七四

唐の時代には「唐宋八大家」等といつて、次の宋時代と共に有名な文章家が澤山出た。その中の代表者が八人で、即ち次のやうである。

唐代――韓退之、柳宗元

宋代――歐陽修、蘇洵、蘇軾、蘇徹、曾鞏、王安石

從つてこの時代には學問も盛んとなつたので字數も急激な增加を示してゐる。

淸は我が德川時代に當り、四萬二千百七十四字を載せてゐるのは有名な「康熙（かうき）字典」で、之

は家宣將軍時代に出來た事になる。之を漢代の數に較べると誠に今昔の感に堪へぬといふところであらうが、文化の發展はこれだけでは止まない。康煕字典はその後に補修を加へて四萬八千六百四十一字にした。

現在、我が國の辭書にのつてゐるのは俗字、國字、僞字等を合せると五萬を越えてゐるが、實際用ひるのは約一萬位で、（小學校の讀本には二千五百餘である。）その他は辭書にだけ載つてゐる字である。昭和六年五月に文部省の臨時國語調査會で常用漢字として定められたのは、略字も合せて一千八百五十八字である。これだけを常用して、他は假名でもよいといふ事であるが、實際、新聞、雜誌等に出て來るのはこれだけではない。又、文を作る時にも不足である。例へば「鮒」「笹」「芋」等は入れてない。

文字と言ふのは支那では古く名といつたが、春秋時代以前までは文といひ、秦の時代から文字といふやうになつた。

一三、略字

劃が多くて書きにくい字は略して用ひられるが、これは次第に多くなる傾向をもつてゐる。

ア 圧（壓）

イ 医（醫） 虽（雖） 逺（遠） 為（爲） 壱（壹） 囲（圍）

エ 円（圓） 駅（驛。沢、択、釈、訳） 塩（鹽） 営（營） 塩（鹽）

オ 応（應） 瓮（甕） 於、扵（於）

カ 斈（學） 画（畫） 仐（傘） 寉（鶴） 仮（假） 関（關）
勧（勸） 厂（雁） 会（會） 広（廣）

キ 巨（距） 気（氣） 旧（舊） 亀（龜） 器（噐） 挙（擧） 胁（脇） 教（敎） 帰（歸）

ク 区（區） 躯（軀） 駆（驅）

ケ 献（獻） 径（徑） 継（繼） 軽（輕） 経（經） 倹（儉） 険（險）

コ　口、国（國）　号（號）　们（個）　广（廣）　黒（黑）　扣（控）

サ　筭（算）　雑（雜）　済（濟）　斉（齊）　斎（齋）　参（參）　蚕（蠶）　残（殘）

シ　辞（辭）　糸（絲）　尔（爾）　玺（璽）　貭（質）　状（狀）　実（實）

　　写（寫）　昏（書）　条（條）　歯（齒）　縄（繩）　処（處）　児（兒）　寿（壽）

　　渋（澁）　従（從）　粛（肅）　听（所）　称（稱）　尽（盡）　乗（乘）　釈（釋）

ス　数（數）　酔（醉）

セ　戋（錢）　浅（淺）　声（聲）　势（勢）

ソ　双（雙）　続（續）　属（屬。囑）　卆（卒。倅）　桒（桑）　鼡（鼠）　捜（搜）

タ　択（擇）　沢（澤）　対（對）　担（擔）　断（斷）　胆（膽）　体（體）

チ　昼（晝）　汐（潮）　珎（珍）

ツ　図、啚（圖）

テ　鉄（鐵）　点（點）　逓（遞）

ト　党（黨）　独（獨）　当（當）　稲（稻）　徒（徒）　読（讀）

ハ　废（廢）　発（發）　蛮（蠻）　拝（拜）　麦（麥）
ヒ　浜（濱）　羙（美）　㳽（瀰）
フ　払（拂）　仏（佛）　普（普。譜）　売（賣）
ヘ　辺（邊）　弁（辯）　変（變）　并（幷。迸。併。塀。餅）　並（竝）
ホ　宝（寶）　豊（豐）
マ　万（萬）　満（滿）
ミ　脉（脈）
ム　梦（夢）
メ　麺（麵）
ヤ　尔（爾。称。弥）　訳（譯）
ユ　史（臾。諛）
ヨ　与（與）　様（樣）　舁（舁）
ラ　乐（樂）　乱（亂）　耒（來）　栾（欒）

リ　竜（龍。滝）　离（離）

ル　褛（褸）

レ　厂（歴）　礼（禮）　联（聯）　恋（戀）　丽（麗）　灵（靈）　励（勵）　蛎（蠣）

猟（獵）

ロ　炉（爐）　楼（樓）　労（勞）　蝋（蠟）　芦（蘆）　馿（驢）

ワ　湾（灣）

一四、類似の字

川柳に「お手紙には狸、台には鯉をのせ」といふのがある。これは使に持たせてやつた手紙には「今日とれた狸をお目にかける」とあるので、狸をもらつては大變だと恐る〳〵包みを解いて見ると、中には鯉が台にのつてゐたといふので、狸と鯉とを書きちがつたのであつた。數多い漢字の中にはよく似た字があるので、注意を要する。それには漢字の意味を明瞭に知る必要がある。次には普通使はれる字で誤り易いものをあげよう、

〔ア〕

挨（アイ）　うつ。ゐしやく　　挨拶
埃（アイ）　ほこり　　塵埃
哀（アイ）　かなしみ　　悲哀
衷（チウ）　まごゝろ　　衷心

衰（スヰ）　おとろへる　　衰弱
隘（アイ）　せまい　　狹隘
溢（イツ）　あふれる　　腦溢血
縊（イ）　くびる　　縊死
靄（アイ）　もや　　和氣靄々

靉（アイ）　たなびく　靉靆
幄（アク）　四方をとりまく幕　幄舍
握（アク）　にぎる。つかむ　握手
渥（アク）　水にひたる。手あつい　優渥
斡（アツ）　めぐる　斡旋
幹（カン）　みき　根幹
翰（カン）　てがみ　書翰
軋（アツ）　きしる　軋轢
糺（キウ）　たゞす　糺問
粟（ゾク）　あは　邊地粟散
栗（リツ）　くり　栗子
按（アン）　おさへる。かんがへる　なでる　按排
桉（アン）　案と同じ。かんがへる　思案

闇（アン）　やみ　闇然
暗（アン）　くらい　暗黑
諳（アン）　そらでいふ　諳記

〔イ・ヰ〕

欹（イ）　かたよる。倚と同じ　欹側
猗（イ）　あゝと嘆く意　猗嗟
椅（イ）　いす　椅子
倚（イ）　よる。もたれる　依倚
帷（ヰ）　まく。とばり　帷幕　帷幄
唯（ヰ）　たゞ。そればかり　唯一
惟（ヰ）　おもふ　思惟
維（ヰ）　これ。たゞ。つな　維新
意（イ）　わけ。こゝろ　意味

竟（ケイ キヤウ）しまひまで。遂に　畢竟
偉（ヰ）なみ〳〵でない　偉大　偉功
緯（ヰ）よこのいと　緯度
慰（ヰ）なぐさめる　慰安
熨（ヰ）皺をのばす　熨斗
違（ヰ）ちがふ　相違
逢（ホウ）であふ　逢遭
遣（ケン）つかはす　派遣
圯（イ）はし。土の橋
圮（ヒ）やぶる。もと　摧圮
因（イン）よる。ちなむ　原因
囚（シウ）つみびと　囚人
回（クワイ）めぐる　回春

困（コン）こまる　困苦
陰（イン）ものにおほはれたところ　日光のあたらぬところ　山陰道
蔭（イン）陰と同じ　樹蔭
影（エイ）ものゝうつつたかげ。すがた　影像

〔ウ〕

芋（ウ）いも　芋田
芊（セン）しげる
雨（ウ）あめ　降雨
兩（リヤウ）二つ　兩方
于（ウ チウ）こゝにといふ發語
干（カン）をかす。たて　干犯

〔エ・ヱ〕

曳（エイ）ひく　曳航

洩（エイ） もれる 漏洩
殪（エイ） たふれ死ぬ 殪仆
曀（エイ） くもる 陰曀
瑩（エイ） 玉の一
塋（エイ） はか 塋域
搖（エウ） ゆれる 動搖
徭（エウ） 政府の土木等の役につく 徭役
疫（エキ） はやりやまひ 疫病
疾（シツ） やまひ 疾病
掖（エキ） わきのした。わき 掖下
棭（エキ） 木の名
繹（エキ） 意味をたづねる ならべる 演繹
譯（エキ ヤク） わけをとく 譯解

鐸（タク） すゞ 木鐸
懌（エキ） よろこぶ 悅懌
謚（エキ） 笑ふさま
諡（シ） 死人に贈る名 諡號
婉（エン） しとやか。美し 婉麗
蜿（エン） うねりゆくこと 蜿蜒
苑（エン） 花ぞの 花苑
宛（エン） あだかも 宛然
捐（エン） すてる 義捐金
損（ソン） そこなふ 損失
緣（エン） ゆかり。ふち 緣故 緣側
椽（テン） たるき 椽大の筆
掾（エン） したやくのもの 書掾

〔オ、ヲ〕

謳（オウ）たゝへほめる　謳歌

毆（オウ）うつ　毆打

嘔（オウ）はく　嘔吐

甌（オウ）かめ。はち　金甌無缺

憶（オク）おもふ。考へる　憶測　記憶

臆（オク）むね。こゝろ。氣おくれ　臆病

億（オク）萬の千倍　億兆

穩（ヲン）おだやか　穩健

隱（イン）かくれる　隱遁

溫（ヲン・ウン）あたゝかい　溫暖

慍（ヲン・ウン）いかる　慍色

縕（ヲン・ウン）さかんなさま。ふるわた　縕袍

褞（ヲン・ウン）ぬのこ

〔カ〕

叚（カ）かる。かす

假（カ）かり　假定

鍜（カ）冑のしころ

鍛（タン）きたへる　鍛錬

乂（ガイ）かる。をさめる　乂安

艾（ガイ）よもぎ。もぐさ。かりとる　艾康

槪（ガイ）あらまし　槪要

慨（ガイ）なげく　憤慨

摡（ガイ）あらひすゝぐ　摡滌

漑（ガイ）そゝぐ　灌漑

街（ガイ）　まち　街路
衙（ガ）　役所　官衙
衛（エイ）　ふせぎまもる　衛兵
衝（ショウ）　つきあてる　衝突
崕（ガイ）　がけ　斷崕
涯（ガイ）　はて　生涯
咳（ガイ）　せき　咳痰
該（ガイ）　そなはる。あたる　該當
諧（カイ）　かなふ　諧和
階（カイ）　きざはし　階段
楷（カイ）　てほん。書體の一　楷書
校（カウ）　學問をするところ　學校
挍（カウ）　はかる。くらべる

恪（カク）　つゝしむ　恪勤
挌（カク）　うつ。たゝかふ　挌鬪
格（カク）　たゞしい　正格
豁（クワツ）　ひろい　豁達
轄（カツ）　ものごとのとりしまり　統轄
刊（カン）　きざむ。けづる　發刊
刋（セン）　きる
杆（カン）　手すり　欄杆
扞（カン）　水を入れるもの　ふせぐ。あたる　扞格
幹（カン）　木のみき　もとになるもの　幹線
乾（カン）　かはく　乾燥
堪（カン）　たへる。こらへる　堪忍
勘（カン）　かんがへる　つき合せてしらべる　勘考

湛（タン）　たゝへる。水等を滿たす　湛碧

〔キ〕

麾（キ）　さしまねく　麾下

摩（マ）　こする　摩擦

羇（キ）　たび　羇旅

覊（キ）　前と同じ。羈は俗字

羈（キ）　たづな。つなぐ　羈束

覉（キ）　前と同じ。

祇（キ／シ）　かみ　天神地祇

祗（シ）　つゝしむ　祗伺

季（キ）　とき　季節

李（リ）　すもゝ　桃李

記（キ）　しるす　記述

紀（キ）　すぢみち。とし　紀元

氣（キ）　いき。ありさま　氣管

汽（キ）　ゆげ　汽車

糺（キウ）　たゞす　糺明

糾（キウ）　前と同じ　糾斷

吃（キツ）　どもる　吃音

屹（キツ）　山がそばだつ　屹立

忔（キツ）　よろこぶ

訖（キツ）　をはる。しまふ

享（キヤウ）　うける　享年

亨（カウ／キヤウ）　とほる。すゝむ　亨通

虐（ギヤク）　つらくあたる　虐待

虛（キヨ）　むなしい。から　虛妄虛無

鄉（キヤウ）むらざと　鄉里
卿（ケイ）　執政の大臣　公卿

協（キヤウ）かなへる　協同
愶（キヤウ）おびやかす
脅と書くのが正しい　劫愶

彊（キヤウ）強い弓。つとめる　自彊
疆（キヤウ）さかひ。かぎる　疆域

均（キン）ひとしい　平均
鈞（キン）三十斤の重みのことであるが、均と同じ意にも用ひる　鈞衡
釣（テウ）魚をつる　釣魚
鉤（コウ・ク）かぎ。まがる　鉤曲

〔ク〕

軀（ク）からだ　體軀
驅（ク）かける　疾驅

虞（グ）うれへる。そなへる　危虞
虔（ケン）つゝしむ　敬虔

隅（グウ）かたすみ　一隅
偶（グウ）二でわれる數　偶數
寓（グウ）かりずまひ。よせる　寓居

掘（クツ）ほる　發掘
堀（クツ・コツ）あな。ほり　堀割

菅（クワン）かや。すげ　菅笠
管（クワン）くだ。つかさどる　管理

快（クワイ）氣持がよい　快樂
怏（アウ）うらむ。あきたらない　怏々

懷（クワイ）ふところ　懷中
壤（ジヤウ）つち　土壤

攘（ジヤウ）はらふ　攘夷
誨（クワイ）をしへる　教誨
晦（クワイ）くらい　晦闇
悔（クワイ）くいる　後悔
獲（クワク）とらへる。魚鳥を捕る　捕獲
穫（クワク）とり入れる　農作物をとり入れる　收穫
喚（クワン）さけぶ　叫喚
渙（クワン）ちる。水の盛な様　渙散
煥（クワン）光りかゞやく　煥發
換（クワン）とりかへる　交換
歡（クワン）よろこぶ　歡迎
觀（クワン）みる　觀察
勸（クワン）すゝめる　勸業
鑵（クワン）つるべ。かま　汽鑵
罐（クワン）鑵と同じに用ひる　罐詰
灌（クワン）そゝぐ　灌漑
懽（クワン）よろこぶ　懽喜

〔ケ〕

經（ケイ）たていと。をさめる　經營
徑（ケイ）小さい道　小徑
谿（ケイ）たに。たにがは　谿谷
㨙（ケイ）もとる　㨙勃
皎（ケウ）月がしろい。きよい　皎々
皓（カウ）白く光る。あきらか　皓々
澆（ゲウ）うすい　澆季
僥（ゲウ）さひはひ　僥倖

撓（タウ）　たはむ。まがる　不撓不屈
檄（ゲキ）　てがみ。通告　檄文
撽（ゲキ）　うつ　擊撽
激（ゲキ）　はげしい　激流
穴（ケツ）　あな　洞穴
宂（ジョウ）　むだ。冗と同じ　宂漫
訣（ケツ）　わかれる　訣別
袂（ベイ）　たもと　分袂
缺（ケツ）　かく　缺席
欠（ケン）　あくび。不足する　欠伸
協（ケフ）　あはせる。かなふ　協力
愶（ケフ）　脅、脅と同じ。おそれる
狹（ケフ）　せまい　狹隘

峽（ケフ）　山の間　峽谷
元（ゲン）　もと　根元
亢（カウ）　あたりふせぐ。たかぶる　亢進
舷（ゲン）　ふなべり　舷側
弦（ゲン）　弓のつる　弦月
絃（ゲン）　いと　管絃樂
泫（ゲン）　涙を流すこと　泫然
遣（ケン）　つかはす。やる　派遣
遺（キ）　のこす　遺言
驗（ケン）　ためす　經驗
儉（ケン）　つゝましい　儉約
嶮（ケン）　けはしい　嶮岨
險（ケン）　あやふい　危險

撿（ケン）　とらへる　とりしまる　撿束　撿校
檢（ケン）　しらべる　檢査
倦（ケン）　あきる　倦怠
捲（ケン）　まきあげる　捲土重來
卷（ケン・カン）　まく　一卷
券（ケン）　てがた　債券
劵（ケン）　つかれる
硯（ケン）　すゞり　筆硯
碩（セキ）　おほい　碩學

〔コ〕

孤（コ）　ひとりもの　孤兒
弧（コ）　圓の一部分　弧線
狐（コ）　きつね　狐狸

壺（コ）　つぼ　金壺
壼（コン）　宮中の道　奧壼
悞（ゴ）　あざむく。あやまる
娛（ゴ）　たのしむ　娛樂
誤（ゴ）　あやまり　誤解
侯（コウ）　大名。侯爵　王侯
候（コウ）　うかゞふ　伺候
亙（コウ）　わたる　連亙
亘（クワン）　もとむ。桓と同じ
構（コウ）　かまへる　結構
搆（コウ）　ひつぱる
腔（カウ）　内のからのこと　腔腸
控（コウ）　ひかへる　控除

寇（コウ）あだ。害を加へる　寇敵
冠（クワン）かんむり　加冠
恆（コウ）つね　恆久
恒（コウ）前の俗字
悃（コン）まごゝろ　悃望
捆（コン）うつ。たゝく　捆縛
懇（コン）ねんごろ　昵懇
墾（コン）たがやす　開墾

〔サ〕

嵯（サ）山のけはしい様　峨嵯
嗟（サ）なげく　嗟嘆
槎（サ）いかだ
採（サイ）とりいれる　採用
彩（サイ）いろどる　彩色
裁（サイ）たちきる。さばく　裁縫
栽（サイ）うゑる　盆栽
操（サウ）あやつる。みさを　操縦
繰（サウ）手でくる　繰業
噪（サウ）さわがしい　喧噪
燥（サウ）ものがかはく　焦燥　乾燥
藪（サウ）やぶ　藪澤
籔（ス）十六年のこと
莊（サウ）おごそか　莊嚴
壯（サウ）さかん　壯年
槍（サウ）やり。鎗の俗字　槍術
搶（サウ）かすめとる　搶奪

鎗（サウ）　やり

爪（サウ）　つめ　　爪牙

瓜（クワ）　うり　　瓜田

殺（サツ）　ころす　　射殺

刹（サツ）　寺　　名刹

斬（ザン）　きる　　斬罪

慚（ザン）　はぢ　　慚愧

賛（サン）　ほめる。たすける　　賛助

讃（サン）　たゝへほめる　　讃美

鑽（サン）　きる。深くきはめる　　研鑽

〔シ〕

孜（シ）　つとめはげむ　　孜々

牧（ボク）　家畜をかふ　　牧場

侍（ジ）　はべる。貴人の側にゐる　　侍臣

恃（ジ）　たのむ　　矜恃

待（タイ）　まつ。もてなす　待命　　接待

持（ジ）　もつ　　持參

峙（ジ）　山や岩がそばだつ　　峙立

侈（シ）　おごる　　奢侈

移（イ）　うつる　　移轉

紫（シ）　むらさき　　濃紫

柴（サイ）　しば　　柴門

刺（シ）　さす　　名刺

剌（ラツ）　もどる。そむく　　乖剌

市（シ）　まち　　市町

巿（フツ）　ひざかけ

朿（シ）　とげ
束（ソク）　たばねる　束帯
識（シキ）　しる　知識
織（シヨク）をる　織女
職（シヨク）仕事　職業
証（シヤウ）いさめる
證（シヨウ）あかす　證文
場（ヂヤウ）ところ。ばしよ　教場
埸（エキ）　あぜ。くろ　彊場
商（シヤウ）あきなふ　商人
啇（デキ）　滴と同じ
瀉（シヤ）　そゝぐ。はく　吐瀉
潟（セキ）　うら。かた　干潟

藉（シヤ）　草をしく。かりる　なぐさめる　慰藉
籍（セキ・シヤ）　かいたもの。ふみつける　書籍
檣（シヤウ）ほばしら　檣竿
牆（シヤウ）かきね　牆壁
詳（シヤウ）くはしい。つまびらか　詳細
祥（シヤウ）めでたい　祥雲
猖（シヤウ）あばれくるふ　猖獗
猩（サウ・シヤウ）獣の一　猩々　猩紅熱
粛（シユク）つゝしむ　粛正
蕭（セウ）　ものさびしい　蕭條
俊（シユン）すぐれる　俊才
悛（シユン）心を改める　改悛
竣（シユン）をはる　竣工

浚（シユン）さらふ　浚渫
峻（シユン）けはしい　急峻
醇（ジユン）きよい　清醇
諄（ジユン）くりかへし說く　諄々
塵（ヂン）ほこり　塵埃
麈（シユ・ス）大きい鹿。この尾は塵を拂ふといふので拂子を作る
儒（ジユ）學者。孔子の學問　儒學
濡（ジユ）ぬれる　染濡
襦（ジユ）はだぎ　襦袢
戎（ジユウ）えびす　戎人
戒（カイ）いましめる　訓戒
緖（シヨ）いとぐち　端緖
渚（シヨ）水ぎは

除（ヂヨ）のぞく　除外
徐（ジヨ）しづか　徐行
衝（シヨウ）つく　衝突
衡（カウ）たひらか。はかり　均衡
升（シヨウ）ます。のぼる　一升
舛（セン）そむく。みだれる　舛錯
悚（シヨウ）ぞつとする　戰悚
竦（シヨウ）つゝしむ。そびえる　竦然
植（シヨク）うゑる　植樹
殖（シヨク）ふやす　殖民
屬（シヨク・ゾク）從ひつく　屬官
囑（シヨク）よせつける　囑目
蹤（シヨウ）あしあと　先蹤

蹴（シユウ）ける　蹴球
浸（シン）ひたす　浸水
侵（シン）をかす　侵入
斟（シン）はかる　斟酌
勘（カン）考へる　勘定
迅（ジン）はやい　迅速
訊（ジン）たづねる　訊問
唇（シン）おどろく
脣（シン）口びる　脣頭

〔ス〕

悴（スヰ）つかれる。うれへる　憔悴
淬（サイ）つとめる　淬勵
粹（スヰ）よりぬき　精粹
瘁（スヰ）つかれる　盡瘁
推（スヰ）おす　推量
堆（タイ）うづたかい　堆積
椎（ツヰ）つち　鐵椎
陲（スヰ）國のはて　邊陲
睡（スヰ）ねむる　睡眠
帥（ソツ・スヰ・シユツ）ひきつれる　帥先　元帥
師（シ）先生。軍隊　師父　師團

〔セ〕

晴（セイ）はれる　晴天
睛（セイ）ひとみ　畫龍點睛
齊（セイ）そろふ　一齊
齋（サイ）ものいみ。まつる　齋戒　書齋

渉（セウ）　わたる　　徒渉
陟（チョク）　高い處にのぼる　　進陟
抄（セウ）　うつす。かすめとる　　抄本
杪（ベウ）　木のさき。する　　杪歳
砂（サ）　すな　　砂利
姓（セイ）　名字　　姓名
性（セイ）　うまれつき　　性質
井（セイ）　ゐど　　井泉
丼（タン・トン）　どんぶり　　天丼
脊（セキ）　せなかの骨　　脊髓
背（ハイ・セ）　せなか。うしろ　　背後
惜（セキ）　をしむ　　悼惜
借（シヤ）　かりる　　借家

績（セキ）　てがら。つむぐ　　功績　紡績
蹟（セキ）　昔のあと　　舊蹟　史蹟
漬（シ）　つける　　漬物　浸漬
積（セキ）　つもる　　積雪
磧（セキ）　かはら。砂はら　　磧礫
晢（セツ）　てらす。あきらか　　昭晢
晳（セキ）　はつきり見える　　白晳
哲（テツ）　あきらか。さとい　　哲婦
折（セツ）　をる　　曲折
析（セキ）　わける　　分析
柝（タク）　拍子木　　撃柝
囁（セツ）　さゝやく　　囁語
攝（セツ）　とりいれる　　攝政　攝取

渫（セツ）　さらふ　浚渫
諜（テフ）　しめしあはせる　間諜
喋（テフ）　しやべる　喋々
潜（セン）　かくれしのぶ　潜伏
橬（テツ）　わるがしこい
僭（セン）　分限をこえる。みだす　僭越
膳（ゼン）　料理。食事の臺　食膳
繕（ゼン）　なほす　修繕
選（セン）　えらぶ　選擧
撰（セン）　詩や文を作る　撰文
錢（セン）　ぜに　金錢
踐（セン）　ふむ　實踐
餞（セン）　別れの時の送りもの　餞別

賤（セン）　いやしい　卑賤
棧（サン）　かけはし　棧道
宣（セン）　のべる　宣言
宜（ギ）　よろしい　便宜

〔ソ〕

粗（ソ）　あらい　粗末
租（ソ）　ねんぐ　租税
阻（ソ）　はゞみとめる　阻止
岨（ソ）　けはしい　險岨
疎（ソ）　うとい　疎遠
疏（ソ）　とほす　疏通
蔬（ソ）　野菜　蔬菜
訴（ソ）　うつたへる　訴訟

詐（サ）　いつはる　詐僞
漱（ソウ）　うがひをする　含漱
嗽（ソウ）　せき。うがひをする　嗽咳　含嗽
則（ソク）　すなはち。のり。てほん　則度
惻（ソク）　かなしむ　惻隱
測（ソク）　はかる　測量
側（ソク）　そば。かたはら　側近
卒（ソツ）　おへる。しもべ　卒業　兵卒
率（リツ・ソツ）　ひきつれる。したがふ　さきだつ。さつぱりする　率直　率先
損（ソン）　少くなる。へる　損害
捐（エン）　すてる　義捐
噂（ソン）　うはさ
樽（ソン）　たる
撙（ソン）　へりくだる。おさへる

〔タ〕

惰（ダ）　なまける　怠惰
楕（ダ）　ほそながい　楕圓
台（タイ）　星の名　台鼎
臺（タイ）　うてな　土臺
體（タイ）　からだ　體格
体（ホン）　あらい
態（タイ）　ありさま　形態
黨（タウ）　たぐゐ。なかま　政黨
党（タウ）　人の名
橈（ダウ・ゼウ・ネウ）　たわむ。くだける　橈敗
撓（タウ）　みだれる。たゆむ　撓亂

澆（ゲフ・ガウ）　うすい。そゝぐ　澆季　澆弛
棹（タウ）　舟のさほ　棹舟
悼（タウ）　いたむ　悼惜
掉（タウ）　ふるふ　掉尾
綽（シャク）　ゆるやか　綽々
擢（タク）　ぬき出る　抜擢
濯（タク）　あらふ　洗濯
潭（タン）　ふち。ふかい　深潭
譚（タン）　談と同じ。はなし　物譚
暖（ダン）　あたゝかい　溫暖
緩（クワン）　ゆるい　緩滯
煖（ダン）　あたゝまる　煖房
歎（タン）　悲しんでなげく　悲歎

嘆（タン）　感じてなげく　感嘆
疸（タン）　身が黄色になる病　黄疸
疽（ソ）　惡性のはれもの
端（タン）　はじ　尖端　末端
湍（タン）　水流の急なところ　湍瀬　急湍
喘（セン・ゼン）　あへぐ。ぜんそく　喘々　喘息
探（タン）　さぐる　探偵
深（シン）　ふかい　深遠
擔（タン）　になふ　擔任
膽（タン）　きも　膽力
澹（タン）　うすい　澹泊
檐（エン）　のき　檐端
瞻（セン）　みる　瞻望

簞（タン） はこ　簞笥
簟（テン） 竹のむしろ　簟牀
段（ダン） きざはし　階段
叚（カ） かりる。かす
鍛（タン） きたへる　鍛冶
鍜（カ） しころ
旦（タン） あさ　元旦
且（ショ） から。しばらく　苟且
但（タン） たゞ。たゞし
狙（ソ） ねらふ　狙撃
坦（タン） たひらか　平坦
垣（エン） かきね　垣內

〔チ〕

智（チ） ちゑ。さとい　智勇
知（チ） しる　知覺
畜（チク） やしなふ　家畜
蓄（チク） たくはへる　蓄音機
茶（チャ） お茶　茶屋
荼（ト） 野の草の名
嫡（チャク） 長男　嫡男
謫（タク） とがめる　謫居
仲（チユウ） なか。第二　仲兄
沖（チユウ） やはらぐ。おき　冲天の勢
冲（チユウ） 沖と同じ
注（チユウ） そゝぎこむ　注入
註（チユウ） ときあかす　註解

冢（チョウ）もりつち。墓　冢子
冢（ボウ）覆ひかぶせる

徵（チョウ）めしあつめる。しるし　徵兵
微（ビ）かすか　微細
懲（チョウ）こらす　懲戒

著（チョ／チャク）本を作る。つく　到著　著作
箸（チョ）はし

飭（チョク）とゝのへる。いましめる　戒飭
飾（ショク）かざる　裝飾

沈（チン）しづむ　沈沒
枕（チン）まくら

〔テ〕

邸（テイ）やしき　邸宅

低（テイ）ひくい　低級
抵（テイ）さからふ　抵抗
底（テイ）そこ　底流
柢（テイ）根の先　根柢
牴（テイ）さはる　牴觸

呈（テイ）あらはす。すゝむ　呈上
呈　狂ゝの古い字

締（テイ）しめる　締結
諦（テイ）あきらか　諦視
啼（テイ）なく　啼鳴

挑（テウ）いどむ　挑戰
佻（テウ）かるはづみ　輕佻
桃（トウ）もゝ　桃花

摘（テキ）　つまむ。えりとる　摘出　摘要
滴（テキ）　水のしづく　雨滴
嫡（テキ/チャク）　あとゝり　嫡子
迭（テツ）　かはる　交迭
軼（テツ/イツ）　なくなる。ちる　亡軼
徹（テツ）　とほる　徹夜
撤（テツ）　とり除く　撤去
轍（テツ）　車のあと　車轍
擢（テキ）　ぬき出す　抜擢
曜（エウ）　ひかり　明曜
傳（デン）　つたへる　傳聞
傅（フ）　かしづく　傅育
天（テン）　そら　天上

夭（エウ）　わかじに　夭折
諂（テン）　へつらふ　諂諛
謟（トウ/タウ）　うたがふ
轉（テン）　ころぶ　轉倒
囀（テン）　さへづる

〔ト〕

睹（ト）　みる　睹視
賭（ト）　かける　賭博
屠（ト）　ころす　屠殺
堵（ト）　かきね　堵列
渚（シヨ）　なぎさ。みぎは　渚岸
怒（ド）　おこる　怒號
恕（ヂヨ）　おもひやる　仁恕

藤（トウ）　ふぢ　藤花
籐（トウ）　竹に似た蔓生の植物　籐椅子

偷（トウ）　ぬすむ　偷安
愉（ユ）　たのしい　愉快

騰（トウ）　あがる　騰貴
謄（トウ）　うつす　謄寫

僮（トウ ドウ）　子供。しもべ　僮僕
憧（ドウ シヤウ）　心がひかれる。あこがれる　憧憬

訥（トツ）　話が下手 吶と同じにも使ふ　訥辯
納（ナフ）　をさめる　納入

〔ネ〕

嚀（ネイ）　寧と同じ。ねんごろ。やすらか　安寧 丁嚀
濘（ネイ）　ぬかるみ　泥濘

撚（ネン）　よる　紙撚 撚糸
燃（ネン）　もえる　燃燒

〔ノ〕

惱（ナウ）　なやむ　惱殺
腦（ナウ）　頭の中のもの　頭腦

膿（ナウ）　うみ　蓄膿症
濃（ノウ）　こい　濃厚

〔ハ〕

徘（ハイ）　さまよふ　徘徊
俳（ハイ）　藝人　俳優
排（ハイ）　おしのける　排斥

廢（ハイ）　すたれる　廢止
癈（ハイ）　なほらぬ病　癈疾

賠（バイ）　つぐなふ　賠償
陪（バイ）　かさなる。はべる　陪臣
澎（ハウ）　水の盛な様子　澎湃
膨（バウ）　ふくれる　膨脹
貌（バウ）　かたち　形貌
貎（ゲイ）　しゝ。猊と同じ
傍（バウ）　かたはら。そば　傍側
搒（バウ）　舟をこぐ　搒人
榜（バウ）　むち。ふだ　榜札
薄（ハク）　うすい　薄情
簿（ボ）　帳面　簿記
柏（ハク）　かしは　松柏
拍（ハク）　うつ　拍手

粕（ハク）　かす　糟粕
沫（バツ／マツ）　あは　水沫
沬（バイ）　うすあかり
伐（バツ）　うつ　討伐
筏（バツ）　いかだ
茷（ハイ）　しげる
伴（ハン）　とも。なかま　伴侶
絆（ハン）　なは。つなぐ　系絆　絆創膏
袢（ハン）　したぎ　襦袢
氾（ハン）　水があふれる　氾濫
犯（ハン）　罪をおかす　犯罪
挽（バン）　ひく　挽車
俛（ベン）　つとめる

娩（ベン） 子供を生む 分娩
班（ハン） くみ。れつ 班長
斑（ハン） ぶち。まだら 斑點
播（バン） まく 播種
燔（ハン） やく。あぶる 燔肉
繙（ハン） ひもとく。本をあける 繙讀

〔ヒ〕

庇（ヒ） かばふ 庇護
疵（シ） きず。そこなふ 疵瑕
祕（ヒ） かくす 祕密
秘（ヒ） 祕の俗字
披（ヒ） ひらく 披見
波（ハ） なみ 漣波

縻（ビ） なは。つなぐ
糜（ビ） たゞれる 糜爛
賓（ヒン） お客 貴賓
擯（ヒン） おしのける 擯斥
顰（ヒン） 顏をしかめて心配する 顰蹙
頻（ヒン） しきり 頻繁
貧（ヒン） まづしい 貧困
貪（ドン） むさぼる 貪慾

〔フ〕

訃（フ） 死の通知 訃電
仆（フ） たふれる 仆伏
撫（ブ） なでる 撫育
憮（ブ） ぼんやりする 憮然

腹（フク） はら 立腹
腸（チヤウ） はらわた 胃腸

復（フク） かへる。ふたゝび 回復
複（フク） かさなる 重複

輻（フク） 車の中心からの矢 輻輳
幅（フク） はゞ 幅員

赴（フ） ゆく 赴任
趣（シユ） おもむき 趣味

沸（フツ） わく 沸騰
拂（フツ） はらふ 拂底
佛（ブツ） ほとけ 佛教

枌（フン） 木の名
扮（フン） かきまぜる。いでたつ 扮裝

刎（フン） はねる 刎頸
吻（フン） くちびる 吻合

噴（フン） ふき出す 噴出
憤（フン） 立腹する 憤激

紛（フン） 入りみだれる 紛擾
粉（フン） こな 白粉

〔ヘ〕

弊（ヘイ） やぶれる 弊害
幣（ヘイ） ふだ。ぬさ 貨幣

慓（ヘウ） すばしこい 慓悍
漂（ヘウ） たゞよふ 漂流
標（ヘウ） しるし 標示
飄（ヘウ） ひるがへる 飄然

縹（ヘウ）うすい藍色。ひるがへる様
壁（ヘキ）かべ　壁間
璧（ヘキ）たま　雙璧
劈（ヘキ）つんざく　劈頭
癖（ヘキ）くせ　悪癖
僻（ヘキ）かたよる。ひがむ　僻遠
蔑（ベツ）あなどる　侮蔑
篾（ベツ）竹の皮
辯（ベン）のべる　辯論
辨（ベン）わきまへる。わける　辨別
瓣（ベン）はなびら　花瓣
辮（ベン）むすぶ　辮髪
偏（ヘン）かたよる　偏側
遍（ヘン）あまねくゆきわたる。たび　遍歴
篇（ヘン）一つゞりの本　文の数をあらはす　短篇
編（ヘン）あむ。あみつくる　編纂

〔ホ〕

舗（ホ）みせ　店舗
晡（ホ）午後四時。夕方　晡時
浦（ホ）うら
捕（ホ）とらへる。つかまへる　捕縛
輔（ホ）たすける　輔佐
補（ホ）おぎなふ　補充
哺（ホ）やしなふ。たべる　哺乳
戊（ボ）つちのえ　戊夜
戌（ジュツ）いぬ

戍（ジュ）　まもる　衛戍
暮（ボ）　くれる。くらす　歳暮
募（ボ）　つのる　募集
慕（ボ）　したふ　敬慕
母（ボ）　はゝ　父母
毋（ブ・ム）　なし。打消の意　毋望の福
拇（ボ）　おやゆび　拇指
栂（國字）　つげ
逢（ホウ）　であふ　逢會
逄（ハウ）　人の名の一
崩（ホウ）　くづれる　崩壞
萠（ホウ）　もえ出る　萠芽
朴（ボク）　表面を飾らない　素朴

仆（フ）　たふれる　仆臥
扑（ボク）　うつ。たゝく　扑撻
撲（ボク）　うつ。たゝく　撲殺
樸（ボク）　飾らない　樸實
僕（ボク）　自分。しもべ　下僕
璞（ボク）　玉
牧（ボク）　牛馬等をかふ　牧畜
枚（マイ）　數へる時に用ひる　枚數
浡（ボツ）　さかんにおこる　滂浡
悖（ボツ・ハイ）　もどる　悖戻
歿（ボツ）　死ぬ　戰歿
沒（ボツ）　沈む　埋沒

〔マ〕

摩（マ）　なでる　摩擦
磨（マ）　みがく　練磨
邁（マイ）　すぐれる　英邁
遇（グウ）　あふ　遭遇
孟（マウ）　ものゝはじめ　孟春
盂（ウ）　おわん　盂蘭盆
昧（バツ）　くらい
昧（マイ）　おろか　愚昧
末（マツ）　する　末代
未（ミ ビ）　ひつじ。いまだ　未明
抹（マツ）　なでる。こな　抹茶
沫（マツ）　しぶき　飛沫
秣（マツ）　まぐさ　糧秣

靺（マツ）　支那の地名
鰻（マン）　うなぎ
曼（マン）　ひろい。ながい　曼衍
僈（マン）　おそい
嫚（マン）　あなどる　嫚罵
鏝（マン）　こて
幔（マン）　まく　幔幕
慢（マン）　たかぶる　自慢
漫（マン）　そゞろ。あてもない　漫歩
蔓（マン）　つる。のびる　蔓延
滿（マン）　みちる　滿腹
瞞（マン）　くらます。だます　瞞着

懣（マン） もだえる　憂懣

〔ミ〕

味（ミ） あぢ　美味
昧（マイ） おろか。　昧者
巳（ミ） へび。十二支の一
已（イ） すでに。やむ。のみ　已然
己（コ） おのれ。つちのと十干の一　自己
密（ミツ） ひそか　祕密
蜜（ミツ） みつ　蜂蜜

〔メ〕

暝（メイ） くらい　暝晦
瞑（メイ） 目をつぶる　瞑默
妙（メウ） たへ。りつぱ　妙案

眇（ベウ） すがめ　眇視
免（メン） ゆるす。のがれる　免許
兎（ト） うさぎ　野兎

〔モ〕

模（モ・ボ） てほん。かたどる　模範
摸（モ） さぐる。まねをする　摸擬
濛（モウ） こさめ　濛雨
朦（モウ） おぼろ　朦朧
曚（モウ） くらい　曚昧
艨（モウ） 軍艦　艨艟
們（モン） など。等と同じ
捫（モン） さすりもつ。なでる　捫著

〔ヤ〕

揶（ヤ） からかふ　揶揄
椰（ヤ） 木の一種　椰子
陽（ヤウ） ひ。ひなた　太陽
楊（ヤウ） やなぎの一種　楊柳
揚（ヤウ） 上にあがる　飛揚
暢（チヤウ） のびる　悠暢
洋（ヤウ） 大きい海　太洋
佯（ヤウ） いつはる　佯言
徉（ヤウ） さまよふ　彷徉

〔ユ〕

喩（ユ） たとへる　比喩
諭（ユ） さとす　諭告
偷（ユ） かすめる　偷盗
愉（ユ） こゝろよい　愉快
揄（ユ） からかふ　揶揄
渝（ユ） かはる　渝易
隃（ユ） こえる
瘉（ユ） 病がなほる　平瘉
游（ユウ） およぐ　游泳
遊（ユウ） あそぶ　遊覧
融（ユウ） とける　融解
隔（カク） へだてる　隔離

〔ヨ〕

與（ヨ） あたへる　贈與
輿（ヨ） こし　輿丁　輿論
予（ヨ） 自分　予輩

矛（ム）　ほこ　矛盾
痒（ヨウ）　かゆい　痛痒
庠（シヤウ）やしなふ。學校　庠序
慾（ヨク）　のぞむ心　慾望
欲（ヨク）　のぞむ　欲求
抑（ヨク）　おさへる　抑制
仰（ギヤウ）上をむく　仰視

〔ラ〕

來（ライ）　くる　來遊
徠　來の古い字
萊（ライ）　あかざ。草むら　荒萊
剌（ラツ）　もどる。そむく
刺（シ）　さす。とげ　諷刺

瀨（ライ）　せ。早い流　急瀨
瀨　誤字
懶（ライ）　きらふ
嬾（ラン）　おこたる。なまける　懶惰
洛（ラク）　洛陽といふ支那の都
烙（ラク）　やく　炮烙
咯（カク）　喀と同じに誤用する　喀血
絡（ラク）　くゝる。からむ　連絡
落（ラク）　おちる　墜落
埒（ラチ）　低い垣　放埒
捋（ラツ ラチ）　とる
攬（ラン）　とり行ふ　總攬
欖（ラン）　木の名

纜（ラン）　ともづな　解纜
藍（ラン）　あゐ　藍色
籃（ラン）　かご　揺籃
襤（ラン）　ぼろ　襤褸
濫（ラン）　みだり　濫伐

〔リ〕

裏（リ）　うら。なか　裏面　庫裏
裹（クワ）　つゝむ　包裹
俚（リ）　さと。ゐなか　俚謡
狸（リ）　たぬき　狐狸
理（リ）　をさむ。すぢ　理論
裡（リ）　うち。裏と同じ　庫裡　腦裡
貍（リ）　たぬき。狸と同じ　虎貍

鯉（リ）　こひ　鯉魚
蘺（リ）　草の名
籬（リ）　まがき　草籬
溜（リウ）　したゝる。たまる　溜飲
榴（リウ）　ざくろ　榴花
瑠（リウ）　寶石の一種。琉と同じ　琉瑠
瘤（リウ）　こぶ
騮（リウ）　馬の一種
凉（リヤウ）　すゞしい　清凉
諒（リヤウ）　まこと。思ひやる　諒承
掠（リヤク）　かすめとる　掠奪
蘆（ロ）　あし
盧（ロ）　爐、蘆等と同じに用ふ

廬（リョ・ロ）　いほり　廬舎
良（リヤウ）　よい　良才
艮（コン）　とゞまる。うしとら　止艮
禀（リン）　次の俗字
稟（リン）　米ぐら。うける　倉稟　天稟
躪（リン）　ふみにじる　蹂躪
轔（リン）　きしる
隣（リン）　となり　隣家
磷（リン）　石の間を流れる水
燐（リン）　鬼火。怪火。鑛物の一　燐火
璘（リン）　玉の光　班璘
淋（リン）　さびしい。ながあめ　淋雨
琳（リン）　玉の一。玉の音

淪（リン）　しづむ　沈淪
論（ロン）　のべる　議論
倫（リン）　たぐひ。人の道　人倫
綸（リン）　ふとい糸。おほづな　綸言

〔ル〕

縷（ル）　糸の筋　縷述
樓（ロウ）　たかやぐら　高樓
累（ルイ）　かさなる　累計
壘（ルイ）　とりで　堡壘

〔レ〕

燎（レウ）　かゞりび　庭燎
憭（レウ）　こゝろよい。あきらか
瞭（レウ）　あきらか　明瞭

繚（レウ）　みだれる　繚亂
療（レウ）　なほす　治療
僚（レウ）　なかま　同僚
怜（レイ）　すぐれる　怜悧
冷（レイ）　涼しい　寒冷
櫟（レキ）　くぬぎ
擽（レキ・リヤク）　くすぐる
礫（レキ）　こいし　砂礫
躒（レキ）　うごく。こえる
冽（レツ）　さむし。つめたい　凜冽
洌（レツ）　きよい　清洌
楝（レン）　木の一種
煉（レン）　ねる。火でとかしてねる　修煉
練（レン）　ねりぎぬ。ねる　練達
鍊（レン）　やきを入れてねる　鍊磨

〔ロ〕

櫓（ロ）　やぐら。舟を漕ぐもの　櫓聲
艪（ロ）　舟の後の方　舳艪
濾（ロ）　こす　濾過
櫨（ロ）　はぜ。はじ　黄櫨
爐（ロ）　ゐろり　爐邊
蘆（ロ）　あし。よし　蘆荻
艫（ロ）　舟の後。とも
轤（ロ）　ろくろ　轆轤
鑪（ロ）　ゐろり。爐と同じ
鑢（ロ）　やすり

驢（ロ） 馬の一種 驢馬
鱸（ロ） すゞき
樓（ロウ） たかどの 高樓
摟（ロウ） ひきあつめる。ひきよせる
蔞（ロウ） 草の名
曨（ロウ） 日の出
朧（ロウ） おぼろ 朧月
錄（ロク） しるす 記錄
祿（ロク） さひはひ 福祿
碌（ロク） 少いこと 碌々
簶（ロク） やなぐひ。矢を入れるもの
簏（ロク） 本箱

ワ

枉（ワウ） まげる 枉駕
旺（ワウ） さかん 旺盛
汪（ワウ） 水の廣い様子 汪洋
捥（ワン） ねぢる
椀（ワン） 木製の小さい器物
腕（ワン） うで 腕力
彎（ワン） ひく。まがる 彎曲
灣（ワン） 海の入江 灣入

一五、難讀の漢字

大抵の漢字には「音」と「訓」、即ち「音讀み」と「訓讀み」とがある。音とは字の音で支那で發音された通りの讀みである。訓とは漢字を我が國の言葉にあてはめた讀みである。例へば、

黒｛音　こく
　｛訓　くろ　・　群｛音　ぐん
　｛訓　むれ

記｛音　き
　｛訓　しるす　・　助｛音　じよ
　｛訓　たすく

音について言ふと、時代に依つて同じ一つの字の音にも變遷がある。これは我が國でもあることで、昔の言葉と今のとは違つてゐるのがある。例へば、今は「歩く(ある)」といふが、昔は「ありく」であつた。殊に現在支那で用ひられてゐる漢字の音は全く違ふので、地名にしても、北(ペー)

平（ピン）、上海（シャンハイ）、漢口（ハンカオ）等と發音してゐる。それ故に、いくら漢文の力があつても其のまゝの發音をしたのでは現在の支那人には通じない。即ち支那語は別に習はねばならぬのである。

普通使用されてゐる字音は次のやうである。

種類＼例	明	行	京	經	東
呉音	みやう	ぎやう	きやう	きやう	とう
漢音	めい	かう	けい	けい	とう
唐音	みん	あん	きん	きん	とん

一、呉音は我が國に最も古く傳來した音で、呉といふのは楊子江以南の地の總稱である。我が國に文字を初めて傳へた百濟はこの時代は呉の地方に屬してゐたので、呉の音は百濟に傳はり、やがて我が國にも傳つたのである。しかもその後、我が國と呉とは交通が盛んであつた事實もあるので、傍々呉音が傳來したのである。呉から來たので「呉服」「呉竹」など今にその名を殘してゐる。

二、漢音は呉音についで傳つたもので、漢土、即ち日本に對して支那本國全體を漢と稱し、その漢土の音といふ意である。元來、漢は呉に對して北方地域の稱である。そしてこの音が初めて傳つたのは支那北方と交通するやうになつてからなので、北方即ち、洛陽、長安あたりの音であるともいはれてゐる。我が國では時によつては呉音を排して漢音を奬勵したので盛んに用ひられるやうになり、今の漢字の多くはこの音である。

三、唐音は鎌倉時代以後に支那との交通によつて傳つたものなので、唐とは唐土で、平安朝以後德川時代に至るまで支那を唐土と稱した。これは前の漢土と同じことである。これが我が國に初めて傳つたのは鎌倉時代に僧が當時の支那は宋といつてゐたが、その宋に行き、禪宗を傳へると共に、多くの新しい發音を持つて來たのが最初である。それ故に、或場合は宋音ともよんでゐる。これは禪僧が佛敎に關係のある名稱上の發音を傳へたものなので、一般の文章上には影響は少なかつた。

椅子　普請　行脚　提灯

等、皆佛敎に關係のあるものゝ唐音である。

漢字が二つ以上組み合はさると、所謂熟語が出來るが、之の發音は上の字が漢音であれば下の字も漢音に、上が呉音なら下も呉音といふのが至當である。然るに年を經ると共に相互に混用されて、漢音と呉音、呉音と漢音、宋音と漢音といふやうに亂れてしまつたので、音讀みもなか〳〵難しくなつた。二三の例をあげると、

難讀の例

通（ツウ・呉音）行（カウ・漢音）（ツウは呉音のツを延した音。通は漢音ではトウ）

功（コウ・漢音）名（ミヤウ・呉音）（名は漢音ではメイ）

境（キヤウ・呉音）遇（グウ・漢音）（グウは漢音のグを延した音。境は漢音ではケイ）

數（スウ・呉音）行（カウ・漢音）（スウは呉音のスを延した音。數は漢音ではシユ）

訓は日本讀みである。別項にも說明したやうに、字は支那から傳來したもので、我が國では言葉だけしかなかつたので、文字が渡來すると、此の言葉をいかにして字で書き表すかに苦心

したのである。その結果が言葉の現はす意義と漢字とが同じである時にそのまゝ宛てたり、又は訓を宛てたりしたのである。即ち

網代（あじろ）　總角（あげまき）　雨滴（あまだれ）（垂）

厚司（あつし）　利目（きゝめ）　晦日（みそか）

等である。此等の中には讀むのに相當苦しまされるものがある。又音と訓とそれ〴〵は別のものであるのに、場合に依つてはこれを混同して讀まねばならぬ例もある。

重（ちゆう）（音）箱（はこ）（訓）　新（しん）（音）柄（がら）（訓）　底（そこ）（訓）意（い）（音）

此等を普通に音と訓を重ねるので「重箱讀み」と稱してゐる。

我々が日常、新聞雜誌書籍で見る漢字の中には以上のやうなものがいろ〳〵に交叉し、讀み難く、讀み誤り易い字が多い。殊に名詞、卽ち木や魚等の名稱に用ひた字は隨分多い。さういふものは、別に一括して述べることにして、先づ主なものをあげよう。

〔ア〕

嗚呼、噫、嗟呼、干嗟　あゝ

咄嗟　あはや　（非常に危い事を見てゐる時、驚き恐れて出る聲）

雨滴　あまだれ

厚司　あつし　（和泉國から出る厚い平地の木綿で作つた着物。勞働者が仕事着にする）

按察使　あぜち　（昔、諸國の政治を巡察させた役）

胡坐　あぐら　（熟語の意味にあてた字）

家鴨　あひる　（意味の宛字）

海人　あま　（意味の宛字。海で魚をとる人。主に女）

淺葱　あさぎ　（うすい水色。普通は誤つて淺黄と書く）

網代　あじろ　（アミシロが略された。竹や木を組んだ網の代りに用ひるから此の字を宛てた）

閼伽　あか　（佛に供へる水）

總角　あげまき　（昔、子供が左右に分けて結つた髮）

欠伸　あくび

四阿　あづまや　（庭に建てた休屋）

生憎　あいにく

灰汁　あく　（意味の宛字）

行脚　あんぎや　（佛道修業のため諸國を巡ること。）行火（あんか）、行宮（あんぐう）、行在所（あんざいしょ）、行燈（あんどん）

足搦　あしがらみ　（倒すために足をからめる）

足掻　あがき　（アシカキの略。もがく）

鹽梅　あんばい　（味を調理すること）

有體　ありてい　（訓と音との混用音。ありのまゝ）

合圖　あいづ　（訓と音との混用音）

阿闍利　あじやり　（師となる僧）

阿修羅　あしゆら　（佛敎に傳はる鬼神）

〔イ・ヰ〕

五布蒲團　いつのふとん　（表裏とも五布で仕立てた布團）

尻當　ゐしきあて　（着物の裏に尻のあたるところに縫ひつける布。意味の宛字）

十六夜　いざよひ　（十六日の夜）

刺青　いれずみ　（身に字や畫をほりつける）

逸物　いちもつ　（すぐれたもの）

稲荷　いなり　（五穀の神として倉稲魂を祭つた神）

田舎　ゐなか

一途　いちづ　（ひたすら）

因業　いんごう　（佛敎で惡い結果になるもと。又、慘酷）

所謂　いはゆる　（普通にいふ漢文の所レ謂の意を訓讀みにした）

異口同音　いくどうおん　（別の人々で言ふ事は同じ）

一言半句　いちごんはんく　（ほんの少しの言葉）

〔ウ〕

不產女　うまずめ　（意味の宛字。子供のない女）

泡沫　うたかた　（熟語にあてた字。ハウマツ。水のあは）

空蟬　うつせみ　（蟬の脫けがら。蟬の枕詞）

産土　うぶすな　（生れた處を守る神）

團扇　うちは

優婆塞　うばそく　（俗人で佛門に入つた男。女ならば優婆夷（うばゐ）といふ）

點頭く　うなづく　（承諾の意で頭を下に動かす）

饂飩　うどん

有卦　うけ　（幸福の年まはり。これは干支によつてきまる。一般ではよい事がつゞいた時にいふ）

有無　うむ　（あるとないと）有緣（うえん）

初陣　うひぢん　（初めて戰場に出ること）初産（うひざん）

埋木　うもれぎ　（地中に長く埋れてゐた木）

蘊奥　うんのう　（學問、技藝の奥義。オクの音便でオウと假名はつけて發音する時はノウである。上の字が撥音である時は下が變つて讀まれる例は多い。觀音、安穩、元和等である）

〔エ・ヱ〕

干支　えと　（十干十二支のこと）

胎盤、胞衣　えな　（胎兒を包んでゐるもの）
海老　えび
烏帽子　ゑぼし　（昔の人のかぶりもの）
惠方　ゑはう　（吉の方。正月元日にこの方にあたる社寺を參拜することを「惠方詣り」といふ）
回向　ゑかう　（死者を弔ふこと）
繪圖　ゑづ　（訓と音との混用音）
會釋　ゑしやく　（輕く禮をすること）

〔オ・ヲ〕

白粉　おしろい　（意義からの宛字）
和尙　おしやう　（坊さん）
母屋　おもや　（その家の主なる建物。意味の宛字）
花魁　おいらん　（遊女）
思惑　おもわく　（考へ。利を得ようと工夫すること。訓と音との混用）

音頭　おんど　（音樂や踊の時に調子をとる事）

遠流　をんる　（遠い島に流されること）

澤瀉模様　おもだかもやう　（澤瀉は芋の一種で、この葉を模樣にしたもの）

怨靈　をんりやう　（怨を持つて死んだ人の靈魂）

越年　おつねん　（年をこすこと）

〔カ〕

土器　かはらけ　（うは藥をかけない陶製の盃）

水夫　かこ
すゐふ　（船頭）

甲高　かんだかい　（聲の調子が高いこと）

乞食　こじき
かたゐ

固唾を飲む　かたづ　（息をこらして、どうなるかと覗ふ）

彼誰時　かはたれどき　（意味にあてた字。彼は誰かと尋ねなくては分らぬ頃。夕方）

河童　かつぱ　（水中にゐるといふ動物）

冠木門　かぶきもん　（意味に宛てた字。門の兩柱の上に横にかゝさぎをつけた門）
剃刀　かみそり
垣間見る　かいまみる　（カキマミルの音便。垣の間から覗く）
恰好　かつかう　（姿。かたち）
界隈　かいわい　（あたり。附近）
苟且　かりそめ　（熟語の意味にあてた字。たゞ假りのこと）
飛白　かすり　（織物の一つ。うまく宛てた字）
首途　かどで　（熟語の意味にあてた字。戰や旅等に出發すること）
徒歩　かち　とほ
神樂　かぐら　（神前に行ふ舞樂）
蚊帳　かや　（帳はまく）
骨牌　かるた
陽炎　かげろふ　（日光のために上るきらきらするもの）

雁擬　がんもどき　（油揚の一。雁の肝は油が多いので、それに似せて作つたといふ）
蒲鉾　かまぼこ
鍛冶　かぢ　（金をきたへること）
金巾　かなきん　（織物の一つ）
金佛　かなぶつ　（金で造つた佛像。感情の冷やかな人を譬へることもある）
合併　がつぺい　（二つ以上のものを合せること）

〔キ〕

利目　きゝめ　（効果）
如月　きさらぎ　（舊の二月のこと。あて字）
公達　きんだち　（貴人の子供）
切手　きつて　（キリテとよむと切る人）
牛車　ぎつしや　ぎうしや　（牛の曳く車。昔の貴人が乘つた車）
急須　きふす　（茶道具の一）

香車　きやうしや
　　　きやうす　　（將棋の駒の一つ）

脚絆　きやはん　（歩行を樂にするため足に卷いたもの）

黄粉　きなこ　（訓と音とを混用して訛る）

犧牲　ぎせい
　　　いけにへ　（人のため世のために身をなげ出すこと）

歸依　きえ　（佛教を信仰し、極樂淨土を願ふ事）

「ク」

工合　ぐあひ　（ものゝ調子。）工面（くめん）。工夫（くふう）

公家　くげ　（朝廷。朝廷に仕へる人）

公卿　くぎやう　（攝政、關白、大臣、大納言、中納言、參議をいふ。これはクゲとは讀まない）

公坊　くばう　（將軍のこと。）公事（くじ）

供奉　ぐぶ　（陛下の御供をすること。）供御（くご）

紅蓮　ぐれん　（紅の蓮）

庫裏（裡）　くり　（僧侶の居間）

草臥れる　くたびれる

熊襲　くまそ　（昔、九州に住んでゐた人種）

曲者　くせもの　（怪しい者）　曲舞（くせまひ）

功德　くどく　（よい事をしたゝめのめぐみ）

口授　くじゆ　（口で授け敎へること）　口傳

〔ケ〕

怪我　けが

檢非違使　けびゐし　（昔あつた役で、警察官と裁判官とを一つにしたやうなもの）

希求　けく　（願ひ求めること）

稀有　けう　（まれなこと。珍らしいこと）

懈怠　けたい　（なまける）

假病　けびやう　（僞りの病）

夏至　げし

境内　けいだい　（神社の垣の内）　内裏(だいり)、參内(さんだい)

結緣　けちえん　（佛道に緣を結ぶこと）

決定　けつてい　（古くはケッヂャゥと讀んだ）

〔コ〕

巨細　こさい　（大と小と。殘らず全部）

小札　こざね　（意味の宛字。鎧を作る小さな板。これを綴ぢ合せて一枚にする）

木枯　こがらし　（秋の末に木の葉を吹き散らす風）

功名　こうみやう　（てがら）

居士　こじ　（男の法名の下につける稱號。又佛教を信ずる男の稱號）

東風　こち　（意味の宛字。東から吹く風。春風）

金米糖　こんぺいとう　（昔の菓子で砂糖で作つてある）

垢離　こり　（神佛に祈念するため水を浴びて身の垢(あか)をとる）

炬燵　こたつ

虚空　こくう　（そら）

虚無僧　こむそう　（普化宗の僧。修業して廻つたので薦僧（こもそう）といふ意から出たといふ）

獨樂　こま　（宛字）

聲色　こはいろ　（人の聲のまねをする）

金色　こんじき　（金のいろ。キンイロ、キンショクともよむ）

今昔　こんじやく　（昔から今まで）

黑白　こくびやく　（もの丶黑と白）　白虎（びやくこ）

權化　ごんげ　（佛が人を救ふために權（か）りに姿をあらはしたもの）

建立　こんりう　（ものをたてること）

献立　こんだて　（料理の品）

田作　ごまめ　（年中行事の正月のところに詳述）

〔サ〕

小波　さゞなみ　（小さい波の意味にあてた漢字）

小枝　さえだ　（小さい枝）

五月　さつき　（舊暦で五月のこと）

五月雨　さみだれ　（梅雨）

三途川　さんづのかは　（死後行く途中にあると傳へられる川）

三下　さんさがり　（三味線の調子の一つで、本調子より三つ低い音）

三枝　さいぐさ　（サキグサ、即ち幸草で、一本の莖から三本の枝のあるものといふが實際には分らない）

刺子　さしこ　（布を細かによく縫つて丈夫にしたもの）

指貫　さしぬき　（袴の一つで、裾を糸で貫しふくらしたもの）

流石　さすが　（さうは思ふものゝ。支那の故事から出來た熟語）

催馬樂　さいばら　（我國に古來傳はる音樂）

遮莫　さもあらばあれ　（この上はどうともなれ。宛字）

雜魚　ざこ　（いろ〳〵混つた小魚。こは子の意）

雜色　ざうしき　（身分のひくいもの）

月代　さかやき　（意味の宛字。昔、男子は定年に達し元服すると、頭の前部を月の形に丸くそつた）

白湯、素湯　さゆ　（たゞの湯）

私語　さゝやき　（意味からの宛字）

防人　さきもり　（昔、九州等に置いて邊防の備へをなした人。意味のあて字）

棧敷　さじき　（物見の臺）

參內　さんだい　（宮中に參上すること）內裏雛（だいりびな）

差別　さべつ
　　　しやべつ

〔シ〕

竹刀　しなひ　（劍術練習のために作つた竹の棒）

加之　しかのみならず　（こればかりではなく。加之の漢字を訓讀みにした）

下枝　しづえ　（下の方の枝）

東雲　しのゝめ　（夜明けの東の空）

枝折戸　しをりど　（木の枝を折りかけて作つた戸）

注連縄　しめなは
注連飾　しめかざり
信夫摺　しのぶずり　（忍草を布にあてゝ、すりつけて模様としたもの）
師走　しはす　（意味の宛字。十二月の舊名）
時化　しけ　（海が荒れること）
時雨　しぐれ　（秋の雨。時雨は實は「雨のほしい時に降る雨」の意が轉化した）
珠數　じゆず
　　　ずず
繻子　しゆす　（織物の一種）
繻珍　しちん
　　　しゆちん　（繻子地で模様美しく織つたもの）
上戸　じやうご　（酒の好きな者）
上手　じやうず
不知火　しらぬひ　（九州の有明灣で見える火）
撞木　しゆもく　（鐘を打つ棒）

入魂（昵懇）　じつこん　（呉音と漢音の混用。親しいこと）
入内　じゆだい　（天皇、又は皇太子の妃となられる方が宮中に入つて御慶事を結び給ふこと）
所化　しよけ　（呉音と漢音との混用。僧侶の弟子）所作
執着　しふちやく　（とりついてはなれないこと）
四時　しいじ　（シの音便でシイとなる。春夏秋冬。常に）
詩歌　しいか　（シの音便。詩と歌）
弑逆　しいぎやく　（シの音便。君父等を殺すこと）
色代　しきたい　（挨拶すること）
紫宸殿　しゝいでん　（京都の御所内にある御殿）
上下　（ジヤウゲ——上り下りの意）（シヤウカ——上と下の意）
洒落　しやれ　（座興にいふ滑稽な句）

〔ス〕

寸白　すばこ　（病氣の一）

主基　すき　（即位の年の大嘗會の時に西方にまつるところ）

數寄　すき　（風流の道）

數奇　すうき　（不運なこと）

雙六　すごろく

駿府　すんぷ　（靜岡の舊名）

〔セ〕

先達　せんだつ　（道案内者。先輩。センダッテと讀むと「此の間」の意）

千生　せんなり　（澤山群りなること）

競賣　せりうり　きやうばい　（澤山の買手の中で、一番高價に値をつけた者に賣ること）

雪駄　せつた　（革で作つた草履の一）

雪隱　せつちん　（便所。セツキンの訛り）

臺詞　せりふ　（芝居で俳優のいふ言葉）

節會　せちゑ　（昔、朝廷で定つた公事の後に行はれた宴會）

刹那　せつな　（その瞬間）
女衒　ぜげん　（遊女の口入れ業）
殺生　せつしやう　（生き物を殺すこと）

〔ソ〕

卒都婆　そとば　（墓場に立てる細長い板のやうなもの）
征矢　そや　（戰場に用ひる矢）
反齒　そつぱ　（外にそつてゐる齒。ソリハの音便）
僧都　そうづ　（僧の官で僧正の次位）

〔タ〕

反物　たんもの　（織つた布）
手向　たむけ　（神佛にものを供へる）
大極殿　だいごくでん　（昔、宮中にあつた正殿）
帝釋　たいしやく　（佛敎信者を守るといふ神）

炭團　たどん
黃昏　たそがれ　（夕方。「誰そ彼は」といふ意から出來て、漢字の意から宛てた）
澤庵　たくわん　（タクアンの轉訛。品川東海寺の澤庵和尙が考へたものといふ）
玉章　たまづさ　（手紙のこと）
伊達　だて　（派手にふるまふこと。みえをはること）
竹光　たけみつ　（竹で作つた刀。又切れない刀のことを蔑つていふ）
足袋　たび
斷食　だんじき　（食物を一切食はぬこと）

〔チ〕

丁髷　ちよんまげ
中風　ちゆうぶ　（腦溢血）
提燈　ちやうちん
地下　ぢげ　（昔、昇殿を許されぬ人。殿上人でない人）

地方　ぢがた　（舞踊の時の囃しをするもの）

地口　ぢぐち　（語の讀みを合せた文句）

鎭西　ちんぜい　（九州のこと）

〔ツ〕

九十九　つくも　（九十九のこと。又百に一つ不足のところから白でつくもがみとは白髪のこと）

土筆　つくし　（春に萠え出る草。形から宛てた字）

旋毛　つむじ（曲り曲つた毛といふ意の宛字）

梅雨　つゆ　（年中行事を見よ）

釣瓶　つるべ　（意味の宛字）

黄楊　つげ　（木の一。櫛や印版を作る）

葛籠　つゞら　（意味の宛字。葛で作つた籠）

厨子　づし　（佛像を安置して置く入れもの）

築地　ついぢ　（土塀。ツキヂ、即ち土を盛つた塀）

頭巾　づきん　（頭にかぶるもの。頭の巾と宛てた）

頭陀袋　づだぶくろ　（僧が家々で貰つたものを入れるために頭からかけてゐる袋）

月次　つきなみ　（平凡で陳腐なこと）

氷柱　つらゝ　（意味からの宛字）

杜漏　づろう　（やりつぱなしで始末をつけないこと）

杜撰　づさん　（あやまりの多いこと。支那の故事から出來た熟語）

都度　つど　（その度毎に。音にあてはめた字）

〔テ〕

丁稚　でつち

挺子　てこ　（物をこじ上げて、動かす時の道具）

天秤　てんびん　（天秤はかり）

天邊　てつぺん　（一番上のこと）

手水　てうづ

殿上人　てんじやうびと　（昔、宮中の御殿に昇ることを許された人）
弟子　でし　（門人）
庭訓　ていきん　（家庭のしつけ。支那の故事から出來た熟語）

〔ト〕

刀自　とじ　とうじ　（老女の尊稱。又、家事をする婦人）
刀禰　とね　（昔の村長、里長等）
舍人　とねり　（宮中に仕へる下賤のもの。又、馬丁）
常盤　ときは　（永久不變。常磐が正しい）
緞子　どんす　（織物の一）
獨鈷　とつこ　（僧が修業の時に持つて歩く銅又は鐵製の杵の一）
蠹魚　とぎょ　しみ　（着物や書物を食ふ虫）
外樣　とざま　（徳川時代に將軍の一家や今までの家來でなく、後から從つたもの）

〔ナ〕

奈落　ならく　（地獄。舞臺の下のことにも用ひる）
直衣　なほし　（昔、貴人の常服）
直會　なほらひ　（祭禮の後に供物をいたゞく宴）
長刀　なぎなた　（長い刀と、字の意を宛てた）
長押　なげし
南殿　なでん　（南向きの御殿。紫宸殿。天皇の御殿）
南面　なめん　なんめん　（昔はなめん、なんめんと讀んだ）
苗代　なはしろ
海鼠　なまこ　（海中にゐる動物）
納得　なつとく　（よく諒解して承知すること。音便のための讀み方。）納所。納屋
崩雪　なだれ　（意味にあてた字）
仲人　なかうど　（ナカビトの音便）
名簿　なづき、めいぼ　みやうぶ　（ナヅキ、ミヤウブは昔の讀み方）

就中　なかんづく　（その中でも）

〔ニ〕

仁王　にわう　（佛教でいふ金剛神のこと）

荷足船　にたりぶね　（運送船）

鈍色　にぶいろ
にびいろ　（薄黒い染色）

女房　にようばう　（妻。ニヨの延音）

女人禁制　によにんきんせい　（女は身に汚れありとして靈場に入られない）

〔ヌ〕

射干玉　ぬばたま　（からすあふぎといふ木の實。黒いので夜や星、闇、月にかゝる枕詞となる）

〔ノ〕

能書　のうしよ
のうがき　（ノウショは字の上手なこと。ノウガキは効能書きのこと）

長閑　のどか　（熟語の意に宛てた讀み。のんびりしてゐること）

海苔　のり　（巧く宛てた字）

狼煙　のろし　（意義に宛てた字。合圖の時にあげる花火）
祝詞　のりと　のつと　（神前に奏する文）
熨斗　のし

〔ハ〕

刷毛　はけ
法度　はつと　ほつと　（規則のこと）　法被（はつぴ）
旅籠　はたご　（宿屋）
疾風　はやて　しつぷう　（勢よく吹く風）
破風造　はふづくり　（屋根の兩端が山形になつてゐる造り方の一つ）
藐姑射山　はこやのやま　（支那で仙人の居る山。我國では上皇の御所を譬へる）
土師　はじ　（ハニシの略で土器を造るもの）
羽振　はぶり　（人に對する面目）
般若　はんにや　（佛敎では智慧といふ意。一般では恐しい顔の鬼女のこと）

頒布　はんぷ　（廣く分ち與へる）

〔ヒ〕

拍子　ひようし　（歌や音樂の節をたすけるために調子をとること）
引板　ひた　ひきた　（田畑にあるなるこ。ヒキイタがつまつてヒタとなる）
直垂　ひたゝれ　（昔は一般人民の平服、後には武士の禮服）
柄杓　ひしやく　（水などをすくふもの）
終日　ひねもす　（意味に宛てた字）
領布　ひれ　（昔の婦人が顔を蔽ふための薄い布）
檜皮　ひはだ　（檜の皮）
日和　ひより　（天氣のよい日）
日向　ひなた　（意味の宛字。日のあたるところ）
左利　ひだりきゝ　（左手がきく者。酒のみ）
尾籠　びろう　（汚いこと）

必定　ひつぢやう　（きつと、たしかに。呉音と漢音との混用）
比丘尼　びくに　（出家した男は比丘、女は比丘尼）
白衣　びやくゑ　（白い着物）
一向　ひたすら　いつかう　（意味にあてた字）

〔フ〕

不便　ふびん　（可哀さう。フベンとよむと便利が悪いといふ意。漢文の不レ便をつゞけて讀んだ）
不束　ふつゝか　（至らぬ者、愚か者）
不斷　ふだん　（平常、漢文の不レ斷をつゞけて音讀した。）
分銅　ふんどう　ふんどん
文月　ふづき　（舊の七月）
文机　ふづくゑ　（文を書き本をのせる机）
吹雪　ふゞき　（フクユキをつめた。）
普請　ふしん

蒲團　ふとん
不如意　ふによい　（思ふやうにならないこと。不レ如レ意をつづけて讀んだ）
無頼　ぶらい　（行ひのよくない者。）無禮

〔ヘ〕

下手　へた
兵兒帶　へこおび
糸瓜　へちま

〔ホ〕

時鳥　ほととぎす　（定つた時節に鳴くから宛てた）
雪洞　ぼんぼり　（紙で張つたおほひのある手燭）
黒子　ほくろ　（意味の宛字）
上枝　ほづえ　（上の枝）
孑孑　ぼうふら

反故　ほご
　　　ほぐ　（むだ）

文身　ほりもの　ぶんしん　（意味の宛字）

火口、引火奴　ほくち　（何れも意をあてた。昔、火をうつす綿のやうなもの）

發起人　ほつきにん　（呉音と漢音との混用音。最初に案を出した人。）發端。發心。發意

〔マ〕

呪禁　まじなひ　（意味の宛字）

眞砂　まさご　（砂のこと）

賣僧　まいす　（宋音の讀み方。僧を罵ること）

勾玉　まがたま　（彎曲した飾りもの）

萬葉集　まんにようしふ　（我が國最初の歌集）

眞向　まつかう　（眞正面）　眞中。眞最中

〔ミ〕

兎缺　みつくち　（兎の口のやうに割れてゐる意味の宛字）

御手洗　みたらし　（神社にある手洗場）

陸奥　みちのく　むつ　（奥羽地方一體のこと。陸の奥をつめて讀んだ）

巫女　みこ　かんなぎ　（意味の宛字。神に仕へる女）

未曾有　みぞう　（イマダ曾テ有ラズといふ漢文を音讀した）

晦日　みそか　（毎月の終り。晦は暗いの意味で、昔はこの夜は月がこもつて闇夜であるからである）

〔ム〕

睦月　むつき　（意義のあて字。舊暦の正月）

矛盾　むじゆん　（前後のあはぬこと。故事から出來た熟語）

謀叛　むほん　（叛くこと）

〔メ〕

夫婦　めをと　ふうふ　（意味の宛字。夫と妻）

〔モ〕

木綿　もめん

最中　もなか　（菓子の一）

萠葱（黄）　もえぎ　（水色のうす色。葱の生えたてのやうな色のことで、萠黄と書いたのでは全く意味が違ふ文句。）

文盲　もんもう　（呉音と漢音の混用音。字の讀めぬ者）

文珠　もんじゆ　（智慧を掌る佛の名）

〔ヤ〕

山賤　やまがつ　（意味の宛字。木こり）

火傷　やけど　かしやう　（意味の宛字）

流鏑馬　やぶさめ　（意味に宛てた字。馬を走らせながら鏑矢を放つて的を射ること）

胡簶　やなぐひ　（矢を入れるもの）

彌生　やよひ　（イヤオヒがつまつた讀み方。舊暦の三月）

夜叉　やしや　（佛道に傳はる猛惡な鬼神）

〔ユ〕

遺言　ゆゐごん　（臨終に言ひのこした言葉）　遺誡

唯一　ゆゐいつ　（たつた一つ）

浴衣　ゆかた　（意味に宛てた字）

結納　ゆひなふ　（訓と音との混用音）

弓手　ゆんで　（ユミテの音便。弓を持つ方の手。即ち、左手）弓勢。弓杖

悠紀　ゆき　（大嘗祭の時の東の祭場）

由緒　ゆゐしよ　（いはれ）

湯桶　ゆとう　（湯を入れるもの）

所以　ゆゑん　（ユヱニの音便。この故に）

〔ヨ〕

米琉　よねりう　（米澤琉球紬といふ織物の略稱）

終夜　よもすがら　（意味の宛字。一晩中）

黄泉國　よみのくに　（死後の世）

〔ラ〕

禮拜　らいはい　（神や佛を拜むこと）

禮讃　らいさん　（ほめたゝへる）

〔リ〕

苹果　りんご　（意味の宛字。林檎とも書く）

兩　りやんこ　（二つといふ意で、二本指し。即ち町人が武士のことをいつた）

龍頭　りゆうづ　（龍の頭に似たもので、釣鐘の上にあるもの。水道の口、時計のねじの頭等もいふ）

六合　りくがふ　（天地四方）　六衛府。六親。六藝

律義者　りちぎもの　（實直な者）

〔ル〕

流布　るふ　（世にひろまる）

流浪　るらう　（さすらふこと）　流罪。流人。流轉

〔ロ〕

綠青　ろくしやう　（銅の銹）

〔ワ〕

和琴　わごん　（我が國在來の琴）

皺臭　わきが　（意味の宛字）

草鞋　わらぢ　（形から出來た宛字）

山葵　わさび

我御料　わごりよ　（昔、婦人に對して言つた尊敬語）

一六、書き誤り易い字

前說の類字で大體は諒解出來るのであるが、實際にどんなやうに誤るか。日常用ひる中から誤り易い字の例をあげて簡單に解說を試みよう。これは熟語のみに限らないのである。

〔ア〕

相憎　（生　相かは互にといふ。互に憎み合ふのではない。）

狭溢（隘（せまい）　溢はイッであふれる。）
安身立命（心　佛教の語で心の憂をなくして安らかに天命を全うするといふ意である。身を安んずる意でもあるが、安身とは書かない。）
愛憎がよい（想　愛憎では「愛と憎」の意である。もてなしぶりがよいといふ意であるから「愛想」である。）
跡方がない（形　「あとの形がない」といふ意である。方では方向である。）
合棒（相　「相手になる棒」である。）
安の條（案（かんがへる）　思つてゐた通りといふ意であるから案を書く。）
暗記（諳（そらにおぼえる）　暗はくらい意である。諳一字で意味は明かである。）

〔イ〕

意久地（氣　「いきごみ」とか「いきはり」の意で、意氣に地をつけた。）
意味伸長（深　詩や文の意味が讀めば讀むほど奥深いといふ意であるから深である。伸はのびるといふ意。）

一卒◎にする（律　音の調子　音を同じ調子にするといふ意から出來たのである。）

慰籍◎（藉　なぐさめる　籍は書物とか札の意である。）

威赫◎（嚇　おどす　赫は「かゞやく」である。）

威巖◎（嚴　いかめしい　巖は岩である。）

意味深重◎（長　「奥深い」とか「含蓄が多い」といふ意である。）

引卒◎（卒　下級のもの　「卒を引いて行く」のである。）

陰◎蔽（隱　かくす　陰は「くもる」である。「かくしおほふ」では違ふ。）

意氣昇◎天（衝　つく　天に昇るのではなくて、天をも衝くやうな意氣である。）

倚◎頼（依　たよる　倚は「よりかゝる」である。「たよりたのむ」の意は依がよい。）

一等◎地を抽く（頭　一つの頭が地面からぬき出てゐるといふ意で、一等、即ち一番抜き出てゐるといふ意ではない。）

遺◎趣（意　こゝろ　「おもふ様子」であるから「意の趣く」と書く。尚意趣には「うらみ」といふ意もある。）

一蓮託生（蓮(はす)　一と組の連中ではない。元來、佛教の句で、一つ蓮葉の上にならび生れることで、多くの人が運命を共にすることである。）

意恨（遺(のこ)す　「忘れられない、即ち後にのこされた恨み」である。）

一生懸命（所　一ケ所の領地を命にかけて頼みとするといふのが元來の意である。これから「命がけ」といふ意に用ひられるので、一生涯ではない。）

〔ウ〕

打入（討(う)つ　同じうつでも意味は違ふ。うちこみに入るのであるから討である。）

打死（討　これも戰場で死んだのであるから討である。）

〔エ〕

椽側（緣　椽はテン、たるき。椽大の筆といふ熟語がある。緣(へり)の方といふ意である）

得安い（易(たや)すい　手に入れやすいといふ意である。「安い」はやすらか。）

英氣を養ふ（鋭(する)どい　この場合は鋭氣で「するどい」氣象である。英氣では「すぐれた才氣」となる。）

俺護（掩護 おほひかくす かばふといふ意である。援護とも書く。援はたすけるである。）

〔オ〕

憶面（臆する心 面は有様。氣おくれしたやうす。憶は「おもふ」であるから違ふ。）

横様（鷹 たか 鷹が空に飛ぶやうにゆつたりした様。横様は「よこざま」とよむ。）

憶病（臆 おぢる心 びく〳〵しておぢ恐れる。）

憶却（億劫「めんだう」とか「ものうく」思ふの意。）

毆歌する（謳。謳はオウ、なぐる。毆打。）

謳吐（嘔 謳はタタヘル。謳歌。）

〔カ〕

勘忍（堪 こらへる 我慢してこらへしのぶのである。勘は「かんがへる」。）

邂合（逅 めぐりあふ 邂も逅も同じ意である。）

確固（乎 確固でも悪くはないが、「しつかりした様子」の場合は乎がよい。乎は形容の勢をつける時に下につける。炳乎。）

渇を癒す（醫す なほす　癒はイとは讀まなく、ユで「病がなほる。」醫は一般に救ふといふ意がある。）

畫龍點睛（睛 ひとみ　龍を書いて最後に眼のひとみを入れると始めて生き〳〵する。肝心な一點に手を入れて成就することに譬へるので、晴ではない。）

伽藍（籃　佛教の語にあてはめた字である。）

諧級（階　諧もカイ、と讀むが、意味はかなふであつて、その熟語の一例は諧調。）

形身（見・「思ひ出の種となる遺物」といふ意で「身を別けたもの」といふ意ではない。）

喝仰（渇 のどがかはく　非常に待ち迎へることで、喉がかはくやうにと譬へたのである。）

渇采（喝 大聲をあげる　ほめはやす聲のことであるから、喝である。）

煥發（渙 ものゝちる様　煥は「光り輝く」こと。水が八方に散るやうに險難を散解して天下に發布するといふ意である。）

凱戰（旋 めぐりかへる　凱歌をあげてかへるといふ意である。）

介胞（抱 だく　「たすけだく、世話する」であるから抱。胞は腹といふ意である。）

感概◎（慨なげく　慨は「おほむね、大體」である。感じてなげく意でなくてはいけない。）

看◎視（監みはりをする　看は「見る」である。語の意は「みはつてみる」といふ意である。）

勸◎迎（歡よろこぶ　勸はクワン、すゝめる。勸工場などと熟語する。）

間◎暇（閑しづかひま　間暇でも意味は通るが、ひまの意のある閑が正しい。）

含畜◎（蓄たくはへる　畜は家畜の畜である。「含み持つ、即ち意味が深い」のであるから、蓄である。）

回◎復（恢　恢は意味が強くなる。それは恢は「大きい、ひろい」といふ意であるから、「小さくなつたものを再びもとに戻す」ことである。回復はたゞ「元のやうにすること。」）

〔キ〕

氣◎車（汽ゆげ　湯氣で動く車である。）

起原◎（源みなもと　起原では「起る原」である。）

奇◎與（寄よせる　「よせあたへる」といふ義。寄寓、寄託等も奇と誤り易い。奇はめづらしいの意。）

奇◎略（機たくむこと　奇は「めづらしい」義である。たゞ「はかりごと」の意は機略である。）

氣笛◎（汽　ゆげ　汽罐の蒸汽で鳴らす笛といふところから出來た。）

寄遇◎（奇　ふしぎ　思ひもよらずに不思議に出會ふことであるから奇。）

義損金◎（捐◦　たすける　損はソン、そこなふ。損害。）

紀念◎（記◦　しるす　紀はキ、年號の初め。心によくしるす意であるから記。よく誤り易い。）

記元◎（紀◦　記はキ、しるす。記述。）

危機一發◎（髮　「一本の髮のやうだ」と極めて微細なものをとつて譬へた。）

强固◎（鞏　かたい　强く固いのではなくて、しつかりして動かない意である。）

奇麗◎（綺　あや　「美しい」といふ意で奇しい（めづらしい）ではない。）

凝問◎（疑　凝は「こらす」である。疑ひ問ふ意。）

欣喜雀濯◎（躍　をどる　うれしさに雀のやうに躍りあがるといふ意である。）

驚歎◎（嘆　感心してなげく　歎は悲しむ場合に用ひる。）

僞瞞◎（欺　あざむく　僞は「いつはる」である。）

伎巧◎（技　わざ　うでまへ　「細工」とか「わざ」が巧いといふのである。）

據金◎（醵　かねを出しあふ　據もキョと讀むが、意味はよる）

恐惶◎（慌　あわてる　恐惶とも書くが、經濟界が打撃のために不安の狀態になる場合などは「おそれあはてる」意である。惶はをのゝく。）

〔ク〕

苦腦◎（惱　なやむ　腦は頭中の腦である。）

草苅◎（刈　かる　苅は俗字であるから草刈が正しい。）

玩强◎（頑　かたくな　玩は「もてあそぶ」である。）

岩固◎（頑　岩のやうにかたいといふ意でなく、「かたくなでかたい意である。」）

我張る◎（頑　强く抵抗する意である。）

〔ケ〕

澆季◎（澆　うすいかろ〴〵しい　道德風俗の輕薄な世といふ意である。）

澆倖◎（僥　さひはひ　澆はゲウ、うすい。）

亨年◎（享　うける　生をうけて生きてゐた年齡の意である。亨は「とほる」「あまる」の意である。）

檢束◎（撿(とら)へる　檢はしらべるである。）

決審◎（結(むす)ぶ　審査が終る意味で、刑が定るのであれば判決である。）

共力◎（協(かな)へる　力をあはせる。共にするではない。又脅(おびや)かすと誤り易い。共同事業は「ともぐ」で、協同一致は「心をあはせる」意である。）

見界◎（解(と)く　みこみとか意見の意であるから解である。見える範圍なら限界である。）

輕擧盲動◎（妄(みだ)り　「見えずに動く」ともとれるが、「出たらめ」とか「わけもなく」動く意である。）

〔コ〕

根醵◎（據　醵はキョ、金を出し合ふ。醵出。）

剛情◎（强　剛は柔の反對の意である。强は弱の反對である。「堅い心」ではなくて「强い心」である。）

講和◎（媾　和睦する　交戰國が敵對行爲をやめて仲直りするのである。）

互格◎（角　くらべる　互ひに相當る意である。）

五里夢中（霧（きり）見えない意であるから霧にかこまれたやうといふのである。）

言語同斷（道（い）ふ言ふことを斷つ、即ち言ふことが出來ないといふ意である。同じく斷つではない。）

行路病者（旅　行旅は旅人である。旅人が途中で病氣になる意で、「路を歩行する」ではない。今はよく通行者の病氣として行路病者とも書く。）

交代（任期が滿ちて入れかはる意はこの方がよい。「交り合ふ」なら交替。）

懲り固まる（凝（かた）まる　懲（い）は「こりる」）

〔サ〕

妻君（細　小君と同じで諸大名の夫人といふ意であつたが、漢の東方朔（とうはうさく）が自分の妻のことをいつたので、他人に自己の妻のことをいふ意となり、更に今は他人の妻と誤り用ひる。）

三弦（絃　弦（い）は弓のつる（い）であり、絃（い）はいと（い）である。）

骸子（骰（さい）ころ　骸（い）はガイでほね（い）である。骰（い）は一字でもさいころ（い）の意である。）

裁下（可　裁いて下すのではなくて、可（よ）しとするのである。）

詐僞◎（欺す(だます)　いつはつてだますこと。）

栽培◎（栽る(うゑる)　栽は布などを「たちきる」の意である。）

壯重◎（莊か(おごそか)　壯は「さかん」である。それ故に壯厳も同じく誤りである。）

最後◎をとげる（期　一番終りの時である。最後では一番あと。）

〔シ〕

深切◎（親　親は「いつくしむ、かはゆがる」意である。）

衆知◎（周ねし(あまねし)　衆は「大くのもの」である。周はもつと廣い意で「あまねく全部」である。）

主旨◎（趣(わけ)むね(おもむね)　「主なる旨」ではなく「わけの旨」である。）

除行◎（徐ろ(おもむろ)　おもむろ、即ち靜かに行くことである。）

植民◎（殖す(ふやす)　植はうゑるで、此の場合は人民をふやす意味である。）

七轉八倒◎（顚倒(くつがへる さかさまになる)　顚倒は「さかさまになる」ことで、之に七と八をつけた。）

若冠◎（弱　支那では男子二十才を弱といふので、若ではない。禮記(らいき)に「人生十年曰ㇾ幼、學。二十曰ㇾ弱、冠。三十曰ㇾ壯、有ㇾ室。四十曰ㇾ强、而仕」とあるから出た語で、二十になると元

服するので「二十才位のもの丶こと」である。）

充◎分（十　充分でも「充(み)ちる」で誤りではないが十分の方が正しい。）

指揮◎（揮(ふる)ふ　字は似てゐるが全く違ふ。）

實踐窮◎行（躬(みからだ)　自分から行ふのである。窮では「きはまる」）

收◎況（狀(ありさま)　收は「おさめる」で、似てゐるが全く異る。）

眞◎髓（神　事物のほんとのもの、即ち正味といふ意で、精神と骨髓といふ意から出たのである。）

刺激◎（刺(さ)す　刺は「そむく、はねる」等の意である。刺戟でもよい。）

賞◎揚する（稱(たゝ)へあげる　ほめあげて、いひたてる意。）

純◎厚（醇(濃いさけ)　人情や風俗が手厚いといふ意で、純(まじりけないこと)ではない。）

進涉◎（陟(のぼる)　仕事が進みのぼることである。涉はセウとよむ。）

狀體◎（態(ありさま)　體は「からだ」である。）

收獲◎（穫(とりいれる)　農作物を取入れる義の時は穫である。獲は魚鳥を捕へること。）

唱導◎（道ふ　唱へいふ意である。）

紹會◎（介（とりつぐ）　紹はセウで「うけつぐ」。會ふのではない。）

照介◎（會　「問ひ合せる」意である。照はセウ。）

終極◎（局　局は圍碁等の勝負の場面といふ意。「局が終る」である。「終り極まる」ではない。

〔ス〕

推考◎（敲（たゝく）　詩や文の句をねることであるが、これは故事のある語である。即ち唐の詩人賈島が敲と推とどちらにしようかと考へ、韓退之の意見で敲にしたといふのである。）

數奇◎（寄　これは誤りではなくて字によつて讀みも意も異るのである。數奇はスウキで「ふしあはせ」である。この場合、數は運命、奇は相合はないといふ意。數奇は我が國でスキとよんで、「ものずき、風流」の意である。）

推選◎（薦（すゝ）める　推し選ぶではない、すゝめるのである。）

推賞◎（奬（すゝ）める　推賞は「推しほめる」といふ意に用ひ、全く誤りといふわけではない。奬と書くと「推しすゝめる」となる。）

〔セ〕

撰擧◎（選ぶ　撰は文や詩をつくる。）

接迫◎（切（さしせ）まる　接は接近などゝいつて近づきふれる意である。）

切角◎（折　郭林宗が雨にあつて巾の角が折れたのを、他の人がまねた故事）

接◎衝◎（折衝　敵が衝いて來るのを挫く意から、敵と交渉して我が體面を全くする義に變つた。）

專問◎（門　專ら問ふではない。或ることを主とする意である。）

正◎服（制（さだ）める　「正しい」といふのではなくて、「さだめた」即ち制式の服である。）

絶對絶命◎（體（から）だ　體も命も絶えようとする意から出來たのである。）

絶體◎（對つゐ　他に對立するものがないといふ意である。）

戰々競々◎（兢（安んじない樣）　兢は競爭の競できそふである。「びく〳〵恐れる」義にはならない。）

生存競走◎（爭　生存することを走りくらべるのではなくて、爭ふのである。）

前◎後策（善　「後日のためによいやうに今から仕向けて置く計畫」といふ意であり、又「不結果のあとしまつ」といふ意にも用ひる。それ故に「前後の計畫」ではない。）

〔ソ〕

速時（即ぐ　速時は早いといふ意になるが、普通では即座の意に用ひる。）

速進（促す　早く進めるではなく、ぐづ／＼してゐるのを進めるのである。）

卒直（率りする　卒は「おへる」である。）

卒先（率　率は「ひき從へる」といふ意味から出來て、「さきだつ、さきだてとなる」義。）

粗製亂造（濫り　「みだして造る」のではなくて、「やたらに造る」のである。）

齟齬（咀く　齟は「かむ」の意もあるが、齒がくひちがふの意である。齟齬。）

〔タ〕

探險（檢べる　危險を探るのではない。探りしらべるのである。）

多少の緣（他生　佛教でいふ語で、この世ばかりではなくて他の世、即ち前世でも緣があつたといふ意である。）

短刀直入（單　たゞ一刀で直ぐに敵陣に切りこむといふのが元來の意で、それから本物に直ぐ入りこむ意味に用ひるやうになつたのである。短い刀ではない。）

〔チ〕

註文（注ぐ　註は「意味をときあかす」といふことである。）

注告（忠ゝろ　誠實の心で告げるといふ意で、告を注ぐではない。）

直經（徑小さい　まつすぐの道である字はよく似てゐるので書き誤り易い。）

哀情（衷ゝろ　哀はあはれである。）

〔ツ〕

頭骸骨（蓋ふた　骸なほねである。頭をふたしてゐる骨の意。）

追懲（徵しめつめる　後から懲すのではなく、とりたてゝ集めるのである。）

釣三昧（昧くらい　佛教に夢中になる事を三昧といふ事から、何でも、もの事に熱中する意となつた。）

〔テ〕

低腦（能はたらき　能力が低いといふ意である。）

天空開濶（海　海のやうに濶いので、開けて濶いのではない。）

敵愾心◎（愾いきどほる　これは「君主をうらみ怒る者に手むかひあたる」といふ意であるが、「敵と爭はうとする意氣」といふ意に用ひる。それ故に慨くのではなくて「いかる」の意である。）

低抗◎（抵さからふ　低は「ひくい」である。）

巓末◎（顚もと　巓は山の頂上である。顚には「くつがへる」といふ意もあるが、こゝでは「もと、根本」である。即ち顚末は事物の始と末。始から終までの有樣の意。）

〔ト〕

特志家◎（篤あつい　「特別」の意味ではなく、あつい志を持つた人といふ意。）

吐瀉◎（瀉はく　字は似てゐるが全く違ふ。）

同巧異曲◎（工しわざ　巧は上手。この意味は「した結果は同じでも趣は異る」）

同朋◎（胞はら　同じ腹から生れた兄弟といふのが元來の意である。）

〔ナ〕

難波船◎（破やぶれる　荒天の海上で破れるのである。波にくるしむではない。）

〔二〕

日新◎月歩（進　日新といふ句もあるが、意味が別である。この場合は日進と月歩とは、大體同じことで對句である。）

二足◎三文（束 たばねる　二足で三文といふのではなくて、二つの束(たば)で三文の値である。）

肉身◎（親　非常に親しいものといふ意である。肉と身とたとへたのではない。）

〔八〕

澎◎脹（膨 ふくれる　澎は水が盛な様子のことである。）

陪◎償（賠 つぐなふ　陪では「かさなる、したがふ」の意。）

波亂◎（瀾 大きいなみ　「波瀾を起す」は大きい波を生じる意で、波のやうに亂れるのではない。）

萬善◎（全 まつたし　善いのではなくて、すべてが完全の意である。）

潑刺◎（剌 魚のはねるさま　刺は「さす」である。これはよく似てゐて、よく誤る。）

放從◎（縱 ほしいまゝ　從は「したがふ」で意味をなさない。）

發動汽◎船（機　これは「發動の汽船」ではなくて「發動機の船」である。）

〔ヒ〕

畢世（生　世を畢るのではなくて、生涯を畢る意である。）

非認（否　非ㇾ認ムルニではなくて、否と認めるといふ意である。）

必迫（逼る　逼も迫も同じ義である。「必ず迫る」ではない。）

〔フ〕

粉骨碎心（身　「骨を粉にし、身を碎く」と對句になつてゐるので、骨に對して心では通らない。）

不思儀（議る　「思ひ議ることが出來ない」ことゝいふのがこの字の元來の意で、それから現在のやうに變つて來たのである。）

不則不離（即く　「即かず離れず」といふ意である。則はきまりで全く別。）

腹臣（心　氣が合つて賴みとなるといふ意である。）

復雜（複なる　重つていろ〳〵まじる意である。）

〔へ〕

變屈（偏るではなくて、一方にかたよつてゐるのである。）

避易（辟る　避も「さける」であるが、辟を書く。）

辯當（辨　我が國であてた熟語で「そなへて、食事に當る」意である。）

〔ホ〕

翻弄（弄ぶ　弄は「はしる」である。風にひるがへるやうに、思ふまゝにもてあそぶのである讀み方も違ふ。）

坊備（防ぐ　敵をふせぐために備へる意である。）

〔ミ〕

見倣す（倣す　倣は「まねをする」、倣は作と同じである。）

〔ム〕

無我無中（夢　夢の中にあるやうに自分を忘れてしまふ意である。）

〔モ〕

盲動（妄り　何も知らずにめくらのやうに動くのではなくて、みだりに動くのである。妄信

も同じ。）

妄従◎（盲ら　理由も知らずに従ふのである。）

〔ユ〕

勇姿◎（雄姿　勇姿でも意味は通じるが、「男らしい姿」の方がよい。）

勇飛◎（雄飛　これは雄飛である。）

〔ヨ〕

餘世◎（生餘つた生涯、即ち殘りの年である。）

〔ラ〕

亂用◎（濫り　むやみに用ひるので、亂雑ではない。濫は「みだりに」といふ副詞に用ひる。）

亂費◎（濫　前と同じである。）

一七、俗字

正しくはないが、普通に廣く用ひられてゐる字を俗字といつてゐる。中には、俗字の方が餘りに一般に用ひられるので、正字と信じて使つてゐるやうなのもある。その反對に、俗字と思つてゐたのが、案外、正字であつたりする。それ故、正俗と對照して見ることは、認識を新にする意味から必要であらう。

これも、全部となると限りがないので、一般に使用されるものに止める。（上が俗字。下が正字）

ア 亜―亞（惡）

イ 異―異　陰―陰　懿―懿　韻―韵

ウ 欝―鬱

エ 衛―衞　焔―焰　塩―鹽

オ 徃―往　奥―奧　温―溫（慍）

カ 間―閒（門の間から月を眺めるといふ意）觧―解　隔―隔　葢―盖　凾―函　寛―寬　濶―闊　攺―改（攺は誤字）篏―箝（別字と思はれてゐる）舘―館　碍―礙（全く別字と思はれてゐる）慤―愨　囬―回（正しくは囘）卧―臥

菓—果（菓子、果物と區別してゐる） 斈—學 鰐—鱷（正字を知るものはない） 戞—戛（正字は忘れられてゐる）

桿—杆（別字と思はれてゐる） 岩—嵒（正字を知る者はない） 覆—履

キ 強—強 况—況 戯—戲 毀—毁 卉—卉 滊—汽（滊は誤字） 寄—寄（崎、騎） 旣—既（厩）

虚—虛 却—卻 脇—脅（今は脇はワキ、脅はオビヤカスに區別してゐる） 欹—攲 棋—棊 規—䂓（正字を知る者はない）

熙—熈 器—噐 羇—覊 羈—覊 宜—宜 脚—腳（正字を知る者はない） 躬—躳（竆） 去—厺

恭—恭 叫—呌

ク 群—羣 勳—勲

ケ 減—减 決—决 懇—懇 献—獻 兼—兼 刑—刑（研、幷、妍） 劍—劒 隙—隟

携—擕 彦—彥

コ 寇—寇 戸—户 拘—拘（枸） 皐—臯 光—灮（正字を知るものはない） 甦—甦 皷—鼓 昂—昻

敲—敲 石—斛 剋—刻 今—今 鉤—鈎 効—效 衡—衡 号—号（號） 冴—冱

恒—恆

サ 殺—敍 歳—歲 賛—贊（讃、鑽） 做—作 左—𠂇 冊—册

シ　姉—姉　尋—尋　澁—澀　准（準）—準　衆—眾　晋—晉　真—眞　竪—豎　墻—牆
稱—偁　冗—宂　及—刃　乗—乘　旨—旨　衛—衞　勗—勖　丈—丈（丈は誤字）
州—州（元來は二字異る）　柿—柹　厠—廁　収—收（敍）　舎—舍　床—牀（正字を知る者はない）　唇—脣

ス　醋—酢

セ　僣（僭）—僣（潛）　窃—竊　青—靑（淸、情）　髯—髥　剪—翦　丗—世　繊—纖

ソ　損—損　挿—插　総—總（聰）　窓—窗　象—象　怱—悤　捜—搜　即—卽　村—邨

タ　躰—體　丹—丹（丹は誤字）　臺—臺（台は別字）　多—多　楕—橢　朶—朵　駄—馱

チ　耻—恥　痴—癡　腸—膓（場）　厨—廚　遅—遲　着—著　猪—豬

テ　揑—揑

ト　鬪—鬭　兎—兔（免とは別）

ナ　軟—輭（正字は知る者がない）　奈—柰（正字を知る者がない）

ハ　半—半　罸—罰　罵—駡　跋—跋（拔）　覇—霸　搬—般（搬入、一般と區別してゐる）　栢—柏　發—發

ヒ　賓—賔　氷—冰　秘—祕　猫—猫　眉—睂（正字は全く用ひない）

フ　噴―噴（墳、濆）　富―富　文―文

ヘ　平―平　別―別　便―便（正字は全く用ひられない）

ホ　旁―傍　褒―褒　冒―冒（帽）　亡―亾　歩―步（歩は誤字）　鋪―鋪　畝―畮　凡―凡

マ　麻―麻（麻は忘れられてゐる）　桝―枡

メ　麵―麪

モ　莽―莽　蒙―蒙

ユ　兪―兪（愉、諭）

ヨ　熔―鎔　羊―芊（正字を知る者はない）

ラ　覧―覽（攬、纜）　頼―賴（兩字異る）　埒―埓

リ　畧―略　両―兩　凉―涼　隣―鄰　亮―亮（亮は誤字）　梨―棃（正字を知る者はない）　悋―吝　良―良

　　留―畱（榴、溜）　裡―裏　隆―隆　稟―稟（凜）

ル　瑠―瑠　類―類

レ　令―令　隷―隸

ロ　窂—牢（穴の中にあるといふ意からの誤）　郎—郞（瑯）

一八、國　字

我が國で特に作つた字がある。これが國字であるが、中では思ひもよらぬ字が國字であつたりしてゐる。國字の中には今は使はぬものもあるが、大體次のやうである。

ア　鮟　あんかう　鯏　あさり　遖　あつぱれ

イ　鰯　いわし（弱い魚である）　鶍　いすか

ウ　鯎　うぐひ　饂（うん）（うどん）

オ　颪　おろし（山から吹き下す風）　俤　おもかげ（兄によく似てゐる）　掟　おきて　縅　をどし（糸の色でをどかす）

カ　苅　かる　桂　かつら（香がよい）　樫　かし（木がかたい）　糀　こうじ（米が花のやうになつたもの）　鎹　かすがひ（二つをうちつけるためのもの）　裃　かみしも（上と下につける着物）　餝　かざり（金属を使つてかざる）　鯑　かずのこ

キ　樵　きこり（山の木をとる者）

ク　椚 くぬぎ（櫟）　粂 くめ（久米の二字を合せた）　俥 くるま（人が曳くから）　喰 くらふ

コ　凩 こがらし（木をふく風）　鯒、鮴 こち　怺 こらへる（心に永くもちこたへる）　込 こみ

サ　榊 さかき（神前に供へる木）　鯖 さば（春に最もとれる魚）　笹 さゝ

シ　樒 しきみ（佛前に供へる木）　躾 しつけ（身を美しくしこむ）　鯱 しやち　鴫 しぎ（田にゐる鳥）

ス　椙 すぎ（盛に繁る）　辷 すべる（足がなめらかでとゞまらない）

セ　腺 セン　躮 せがれ（親の身を分けた者）

ソ　杣 そま（材木をとる山）

タ　峠 たうげ（山を上つたり下つたりする）　鱈 たら（雪のふる頃にとれる魚）　凧 たこ（風に吹かれる巾）
　　襷 たすき（袖を擧げるもの）

チ　鵆 ちどり　狆 ちん

ツ　閊 つかへる（門の前に山があるのでつかへる）　辻 つじ（道が十文字に交つてゐる）　鶫 つぐみ　栂 つが
　　褄 つま（着物の裾）

ト　働（ドウ） はたらく（人がうごく）　鯲 どぢやう　迚 とても　鞆 とも

ナ　凪　なぐ（風がやむ）　鯰　なます

ニ　鳰　にほ（水に入る鳥）　錵　にえ（刀のやきに雲形の美しいあやのあるもの）　匂　にほふ

ヌ　粏　ぬかみそ

ハ　畠　はたけ（水を乾して白くなつた田）　畑　はたけ（火でやいてつくつた田）　硲　たに（岩のきり立つた間）

噺　はなし（新しいことを口にする）

ヒ　鰉　ひがひ　鋲　びやう

フ　梺　ふもと（林のある山の下）

マ　桝　ます（木で作つたもので升る）　柾　まさ（木目の正しいこと）

ム　挘　むしる（手でとる）　毟　むしる（毛をとつて少くする）

モ　杢　もく　大工（木を細工する）　椛　もみぢ（木に花が咲いたやうになる）　籾　もみ

ヤ　鑓　やり

ユ　歪　ゆがむ　裄　ゆき

ワ　枠　わく

十九、特殊な宛字

現在新聞、雑誌等に出て來る宛字は、讀み音をあてたり、意味を無理にあてたり、或は兩方混用したり、さま〳〵であるが中には判じものゝやうなのもある。そんなものはあまりほめたものではないので、寧ろ假名で書いた方が良いのであるが、讀めないのも困るので列擧する。

あ

彼奴　あいつ　　白地　あからさま

鹽梅　あんばい　　呆氣にとられる　あつけ

淺墓　あさはか　　天晴　あつぱれ

淺間敷　あさましい　　厚釜敷　あつかましい

淺猿しい　あさましい　　阿房　あはう

い

日外　いつぞや　　生不好　いけすかない

敦圀く　いきまく

う

浦山敷しい　うらやましい
五月蠅、蒼蠅　うるさい
迂路つく　うろつく
迂路〳〵　うろ〳〵
胡亂　うろん
胡散臭い　うさんくさい

お

奥床しい　おくゆかしい
大雜把　おほざつぱ
女郎花　をみなへし
十八番　おはこ
以爲　おもへらく
烏滸がましい　をこがましい

か

可愛　かはいゝ
可哀さう　かはいさう
空穴　からつけつ
强突張　がうつくばり
可成　かなり
頑丈　がんぢやう
隱坊　かくれんばう
岩疊　がんぢやう
瓦落〳〵　がら〳〵
歌留多　かるた
空繰　からくり

き

屹度　きつと
仰山　ぎやうさん

虚呂〳〵　きよろ〳〵　　彼奴　きやつ

く　愚図〳〵　ぐづ〳〵　　呉々　くれ〴〵

呉れる　くれる

け　剣呑　けんのん　　剣突　けんつく

鳧がつく　けりがつく　　下衆　げす

こ　胡麻化す　ごまかす　　是許　こればかり

業突張　ごふつくばり

さ　薩張　さつぱり　　遉　さすがに

嘸　さぞ　　偖、扨　さて

左程　さほど　　左迄　さまで

三一　さんぴん　　妻惣爺　サイノロジイ

し　素人　しろうと　　鹿爪顔　しかつめがほ

洒蛙〳〵　しやあ〳〵　　冗談　じようだん

悄氣る　しよげる　　洒落る　しやれる

乍併　しかしながら　　白面　しらふ

七面倒臭い　しちめんだらくさい

す

素破抜く　すつぱぬく　　素敵　すてき

素破、驚破　すは　　素晴しい　すばらしい

寸寸　ずた〱　　素寒貧　すかんぴん

擦太揉太　すつたもんだ

せ

世話敷い　せはしい　　切羽つまる　せつぱつまる

そ

十露盤、算盤　そろばん

た

頼母敷い　たのもしい　　大口魚　たら

鱈腹　たらふく　　魂消る　たまげる

ち

一寸、鳥度　ちよつと　　丁度　ちようど

猪口才　ちよこざい　　地團太　ぢたんだ

血塗　ちまみれ

つ

圖々しい　づら〳〵しい
連發　つるべうち

て

手古摺る　てこずる
出鱈目　でたらめ
天麩羅　てんぷら
木偶の棒　でくのぼう

と

兎に角　とにかく
頓痴氣　とんちき
頓珍漢　とんちんかん
心太　ところてん
何奴　どいつ
濁酒　どぶろく

圖太い　づぶとい
手具脛ひく　てぐすねひく
手眞似　てまね
轉手古舞　てんてこまひ
兎角　とかく
頓間、頓馬　とんま
頓狂　とんきやう
左見右見　とみかうみ
泥塗　どろまみれ

な　可成　なるべく　　刀豆　なたまめ

に　二進三進　につちもさつちも

ね　寝腐　ねくたれ

の　野呂間　のろま　　呑氣　のんき

　　野良仕事　のらしごと　　呑平　のんべえ

は　灰殼　はいから　　果敢い　はかない

　　蠻殼　ばんから　　派手　はで

ひ　素見　ひやかし　　只管　ひたすら

　　喫驚　びつくり

ふ　腑甲斐ない　ふがひない　　不貞腐　ふてくされ

　　巫山戯る　ふざける　　不貞寝　ふてね

へ　箆棒　べらぼう　　變挺　へんてこ

ほ　弗々　ぼつ〳〵　　凡藏　ぼんくら

ま

盆槍　ぼんやり
間誤　まご〱
間誤つく　まごつく
豆々しい　まめ〱しい
滿更　まんざら
微醉　ほろよひ
眞逆、豈夫　まさか
間違ひ　まちがひ
眞平　まつぴら

み

不見目、慘め　みじめ
不見轉　みずてん
土産物　みやげもの

む

六ケ敷しい　むづかしい
無闇　むやみ
無鐵砲　むてつぽう
無理矢理　むりやり

め

滅茶苦茶　めちやくちや
滅多　めつた
滅切り　めつきり
目星しい　めぼしい
面喰ふ　めんくらふ
目出度、芽出度　めでたい
丁斑魚　めだか

も　耄碌　もうろく　　勿怪の幸　もつけのさひはひ

や　矢鱈　やたら　　野暮　やぼ

矢張　やつぱり　　躍起　やつき

矢庭　やには

ゆ　由々しい　ゆゝしい

よ　宜敷く　よろしく　　四方山　よもやま

泥酔者　よつぱらひ

ろ　無價　ろは

二〇、外國語に宛てた字

外國語に漢字を宛てるのは隨分無理な話で、かういふ漢字で書かれては讀めなくなる。といつて、假名ばかりで書いても煩しい。普通化してゐるのだけは覺えて置きたい。

地名や藥品、學術上の名稱等に宛てた漢字は、可成多いが廣く使はれないのは省略した。

ア

亞鉛板　アエンばん
亞爾加里　アルカリ
瀝青　アスファルト
亞米利加　（米國）アメリカ
亞剌比亞　アラビヤ（地名）
酒精　アルコール
亞爾然丁　アルゼンチン（國名）
歷山大王　アレキサンダー大王（人名）

イ

吋　インチ
英吉利　イギリス
伊太利　イタリー
印度　インド

ウ

烏龍茶　ウーロンちや
維爾遜　ウイルソン（人名）
維也納　ウイン（地名）

エ

埃及　エジプト
×光線　エツキスくわうせん
越幾斯　エツキス

オ

溫突　オンドル（朝鮮で用ひられる暖をとる裝置）
和蘭　オランダ（國名）
濠太利亞　（濠洲）オーストラリア（國名）
管絃樂　オーケストラ

カ

合羽　カツパ
加奈陀　カナダ

加比丹　カピタン
加濃砲　カノンはう
加特力教會　カトリツク教會
加答兒　カタル
硝子　ガラス
瓦斯　ガス
金糸雀　カナリア
金巾　カナキン
加壽貞羅　カステラ

キ

木栓　キルク
粁　キロメートル
瓩　キログラム
煙管　キセル

幾那　キナ
希臘　ギリシヤ（國名）

ク

瓦　グラム

コ

珈琲　コーヒー
洋杯　コツプ
護謨　ゴム
古倫僕　コロンボ（地名）

サ

朱欒　ザボン（木の名）
珊　サンチ
洋刀　サーベル
桑港　サンフランシスコ（地名）
更紗　サラサ（織物の一）

シ

石鹼　シヤボン

三鞭酒　シヤンペン シヤンパン（佛國製の上等の葡萄酒）
志　シルリング（英貨）
瓜哇　ジヤワ（地名）
暹羅　シヤム（國名）
襯衣　シヤツ
絹帽　シルクハット
沙翁　シエクスピア（人名）

ス

肉汁　スープ ソップ
蘇格蘭　スコットランド（州名）
汕頭　スワトウ（地名）
瑞西　スイス（國名）

セ

糎　センチメートル
錫蘭　セイロン（地名）

仙　セント（米貨）
聖路易　セントルイス（地名）

ソ

曹達　ソーダ

タ

煙草、莨　タバコ
達摩　ダルマ
打　ダース

チ

丁幾　チンキ（藥品）
芝罘　チーフー（地名）
西藏　チベット（地名）

テ

兩　テール（支那貨）
竕　デシリットル
丁抹　デンマーク（國名）
卓子　テーブル（國名）

ト
獨逸(獨國) ドイツ(國名)
隧道 トンネル
土耳古 トルコ(國名)
杜翁 トルストイ(人名)
噸 トン
弗 ドル(米貨)

ネ
螺旋、螺子 ネジ

ノ
諾威 ノールウェイ(國名)

ハ
牛酪 バター
把手 ハンドル
鳳梨 パインアップル
麵包 パン
洋絃 バイオリン
匈牙利 ハンガリー(國名)
巴爾幹 バルカン(地名)
巴奈馬 パナマ(地名)
哈爾賓 ハルピン(地名)
漢堡 ハンブルグ(地名)

ヒ
天鵞絨 ビロード(織物の一)
洋琴 ピアノ
麥酒 ビール
比律賓 ヒリッピン(國名)
短銃 ピストル

フ
呎 フート ヒート
佛蘭西 (佛國)フランス
勃牙利 ブルガリア(國名)

法　フラン（佛貨）
浮標　ブイ
費府　ヒアデルヒア（地名）
伯刺西爾　ブラジル（國名）
刷子　ブラシ

ヘ

海牙　ヘイグ（地名）
調帶　ベルト

ホ

封度　ポンド
喞筒　ポンプ
葡萄牙　ポルトガル
釦　ボタン
磅　ポンド（英貨）
香港　ホンコン（地名）

マ

馬克　マーク（獨貨）
哩　マイル
燐寸　マッチ
馬耳塞　マルセーユ（地名）
麻尼刺　マニラ（地名）

ミ

瓱　ミリグラム
粍　ミリメートル

メ

米利堅粉　メリケンこ
米、米突　メートル
墨其亞哥　メキシコ（國名）
木精　メチール
莫大小　メリヤス
旋律　メロデー

ヤ　碼　ヤード

ヨ　沃度　ヨード（藥品）
沃剝　ヨーボツ（藥品）
歐羅巴　ヨーロッパ

ラ　洋燈　ランプ
喇嘛教　ラマきやう
羅紗　ラシヤ

リ　立　リツトル
里昂　リオン（地名）
兩　リヤン（支那貨）

ル　呂宋　ルソン（地名）
留　ルーブル（露貨）
羅馬尼　ルーマニア（國名）

ロ　露西亞　ロシア

二一、慣用音

漢字には元來の音の外に習慣上の讀みがある。これは正しい音ではないが、長年の慣例から讀みならされてゐるので一般に用ひられてゐる。これを一々あげると限りはないのであるが、普通用ひられてゐるものにつき說明を加へよう。括弧の中の讀みは正しい音、そして意味と熟

語をあげた。

〔ア〕

斡　アツ（ワツ・クワン）　まはる、めぐる　斡旋

〔イ〕

院　ヰン（エン）　かこひ。てら　寺院

〔カ〕

駕　ガ（カ）　のりもの。のる　車駕

佳　カ（カイ・ケ）　よい　佳良

蓋　ガイ（カイ）　かぶせる。おほふ　蓋世

街　ガイ（カイ）　まち。四つ辻　街路

硬　カウ（ガウ）　かたい　硬骨

剛　ガウ（カウ）　こはい　剛健

拷　ガウ（カウ）　むちうつ　拷問

轟　ガウ（クワウ）　とゞろく　轟々

該　ガイ（カイ）　そなへる。あたる　該當

鎧　ガイ（カイ）　よろひ　鎧袖

駭　ガイ（カイ）　おどろく　驚駭

攪　カク（カウ）　かきみだす　攪亂

〔キ〕

岐　ギ（キ）　わかれみち。また　他岐

喫　キツ（ケキ）　くふ。のむ　喫茶

屹　キツ（ギツ）　そばだつ　屹立

〔ク〕

偶　グウ（ゴウ・グ）　二で割れる數　偶數

寓　グウ（グ）　よる。かりのやど　寓居

字	音	訓	例
窟	クツ（コツ）	あな	巖窟
窩	クワ（ワ）	あなぐら	蜂窩
月	グワツ（ゲツ）	つき	月日
〔ケ〕			
鯨	ゲイ（ケイ）	くぢら	鯨波
莖	ケイ（カウ ギヤウ）	くき	細莖
峽	ケウ（カフ ゲフ）	山の間	峽谷
狹	ケフ（カフ ゲフ）	せまい	狹路
驍	ゲウ（ケウ）	すばしこい つよい	驍將
劇	ゲキ（ケキ）	はげしい	劇烈
隙	ゲキ（ケキ）	すきま	寸隙
硯	ケン（ゲン）	すゞり	筆硯
姸	ケン（ゲン）	うるはしい	姸華

字	音	訓	例
〔コ〕			
誇	コ（クワ）	ほこる	誇大
護	ゴ（コ）	まもる	護送
後	コウ（コ）	うしろ。あと	後世
〔サ〕			
罪	ザイ（サイ ゼ）	つみ	罪人
讒	ザン（サン）	かげ口する	讒言
斬	ザン（サン）	きりはなす	斬罪
〔シ〕			
次	ジ（シ）	つぎ	次男
滋	ジ（シ）	しげる 身の養ひになるもの	滋養
璽	ジ（シ）	しるし。印	劍璽
弑	シイ（シの音便）	ころす	弑虐

澁　ジフ（シフ）　しぶい。とゞこほる　澁滯
蹴　シウ（シユク）　ける　蹴球
執　シツ（シフ）　とる。とりもつ　執行
沙　ジヤ（セ・サ）　すな　沙利
娑　シヤ（サ）　あるく姿　娑婆
雀　ジヤク（シヤク）　すゞめ　雀躍
呪　ジユ（シウ・シユ）　のろふ　呪文
守　シユ（シウ・ス）　まもる　守備
充　ジユウ（シウ・ジユ）　あてる　充實
住　ジユウ（チユ・ヂユ）　すむ　住宅
縱　ジユウ（シヨウ）　たて。ゆるす　縱橫
助　ジヨ（シヨ）　たすける　助力

〔ス〕

崇　スウ（シユウ・ソウ）　あがめたつとぶ　崇拜
芻　スウ（ス）　くさかり　芻蕘

〔セ〕

是　ゼ（シ）　よい。この　是非
贅　ゼイ（セイ）　むだ　贅澤
稅　ゼイ（セイ）　ねんぐ　稅率
絕　ゼツ（セツ）　たちきる　絕望
舌　ゼツ（セツ）　した　口舌
染　セン（ゼン）　そめる　染料

〔ソ〕

齟　ソ（シヨ・サ）　くひちがふ　齟齬
瘦　ソウ（シユ）　やせる　老瘦
增　ゾウ（ソウ）　ます。加はる　增加

惻　ソク（ショク）いたみかなしむ　惻隠
屬　ゾク（ショク ソク）したがひつく　屬官
率　ソツ（シュツ リツ スヰ）したがふ。ひきゐる　率先

〔タ〕

汰　タ（タイ）おごる えらびわける　沙汰
兌　ダ（タイ）あつまる。かへる　兌換
掉　タウ（テウ ダウ）ふるふ　掉尾の勇
濁　ダク（タク ドク）にごる　濁流
奪　ダツ（タツ）うばふ　奪還
獺　ダツ（タツ）かはをそ　獺祭
脫　ダツ（タツ タイ）ぬぐ。ぬける　脫退
談　ダン（タン）ものがたる　談話

〔チ〕

除　ヂ（ヂヨ）のぞく　箒除
茶　チヤ（タ サ）お茶　茶器
注　チユウ（シユ チユ）そゝぐ　注入
厨　チユウ（チユ）だいどころ　厨房
註　チユウ（チユ）ときあかす　註釋
椿　チン（チユン）つばき。かはりこと　椿事

〔テ〕

擢　テキ（タク）ぬき出す　拔擢
臀　デン（テン）しり　臀部

〔ト〕

斗　ト（トウ）十升のこと　一斗
登　ト（トウ）のぼる　登山

童 ドウ（トウ） こども　兒童
動 ドウ（トウ） うごく　動作
恫 ドウ（トウ） おどかす　恫喝
慟 ドウ（トウ） なげく　慟哭
憧 ドウ（ショウ） 心がひかれる　憧憬
洞 ドウ（トウ） ほらあな　洞穴
胴 ドウ（トウ） からだの中部　胴體
緞 ドン（トン） 織物の名　緞帳
呑 ドン（トン） のむ　呑吐

〔ニ〕

柔 ニウ（ジウ ニユ） やはらか　柔和
乳 ニユウ（ジユ ニユ） ちゝ　牛乳

〔ハ〕

派 ハ（ハイ ヘイ） わかれ　派出
倍 バイ（ハイ ベイ） ます　倍加
萠 ハウ（バウ ミヤウ） 芽を出す。もえる　萠芽
膨 バウ（ハウ） はれる。ふくれる　膨脹
爆 バク（ハク） はげしく燃える　爆彈
謗 バウ（ハウ） そしる　謗毀
晩 バン（ベン） ゆふべ。くれる　晩年
播 バン（ハ） まく　播種
蕃 バン（ハン） しげる。えびす　蕃人

〔ヒ〕

否 ヒ（ヒウ） いな。あらず　否定
逼 ヒツ（ヒヨク） せまる　逼迫
紊 ビン（ブン） みだれる　紊亂

〔フ〕

埠　フ（ホ）　はとば　埠頭

浮　フ（ブ フウ）　うく　浮木

阜　フ（フウ）　をか　丘阜

佛　ブツ（フツ ブツ）　ほとけ　佛敎

刎　フン（ぷん）　はねる　刎頸

〔ヘ〕

別　ベツ（ヘツ）　わける　別人

鼈　ベツ（ヘツ）　すつぽん　鼈甲

〔ホ〕

戊　ボ（ボウ）　つちのえ　戊夜

母　ボ（モ ボウ）　はゝ　父母

畝　ホ（ボウ）　あぜ。面積の單位　田畝

朴　ボク（ハク ホク）　表面を飾らない　素朴

勃　ボツ（ホツ）　にはか　勃發

發　ホツ（ハツ ホチ）　はなつ　發心

〔マ〕

痲　マ（バ）　はしか。しびれ　痲痺

昧　マイ（バイ）　くらい。おろか　昧者

猛　マウ（バウ ミヤウ）　たけ〴〵しい　猛虎

盲　マウ（バウ ミヤウ）　めくら　盲人

末　マツ（バツ）　すゑ。さき　末尾

抹　マツ（バツ）　なでる。こな　抹茶

沫　マツ（バツ）　あは　水沫

〔ミ〕

密　ミツ（ビツ）　ひそか　密告

眠　ミン（ベン／メン）　ねむる　睡眠

〔メ〕

冥　メイ（ベ／ミヤウ）　くらい　冥途

溟　メイ（ベイ／ミヤウ）　くらい　溟濛

明　メイ（ベイ／ミヤウ）　あきらか　明確

盟　メイ（ミヤウ／ベイ）　ちかふ　盟約

瞑　メイ（ベイ／メン）　目をふさぐ　瞑目

茗　メイ（ベイ／ミヤウ）　茶のこと　茗宴

滅　メツ（ベツ／メチ）　なくなる。ほろびる　滅亡

〔モ〕

濛　モウ（ボウ）　くらい　濛昧

朦　モウ（モ／ボウ）　おぼろ　朦朧

艨　モウ（ボウ／ム）　いくさぶね　艨艟

物　ブツ（モツ／モチ）　もの　物價

〔ユ〕

輸　ユ（シユ）　おくりはこぶ　輸送

〔ラ〕

埒　ラツ（レツ）　かこひ　放埒

〔リ〕

龍　リユウ（リヨウ／ロウ）　たつ　龍虎

虜　リヨ（ロ）　とりこ。えびす　捕虜

稜　リヨウ（ロウ）　かう〴〵しい威光　稜威

〔ロ〕

隴　ロウ（リヨウ）　をか　隴畝

〔ワ〕

賄　ワイ（クワイ）　たから。まじなひ　賄賂

二二、同訓異字

讀み方は同じでも漢字が異るので意味も幾分異るのがある。従つて用ひる場合も異るのであるが、熟語から推して考へると明瞭になるのが多い。普通用ひる字について解説する。

あきる

飽きる　腹一つぱいに食べること、飽食暖衣。

厭きる　あきていやになる、厭世

あげる

擧げる　下にあるものをあげる。ものごとをとり行ふ、擧兵、擧行。

揚げる　飛びあがる、發揚。上に高くあがる、飛揚。

あたる

當る　ことにぶつかる、當局。あてはまる、當選、相當

中る　的にあたる、百發百中。

方る　ちやうど、方今。

あつい

厚い　薄の反對、厚恩。精神上の事にも用ゐる、厚志。

篤い　心を用ひることが確かで專一なこと、篤行。病が重いこと、危篤。

淳い　風俗や性質等がまざりけないこと、淳風。

醇い　まざりけがなくて良い酒、芳醇。

あづかる

預る　金や品物をあづかる、預金。

與る　ものごとに關係する、干與。

あはれむ

憐む　氣の毒に思ふ、花や月をいとしがる。

哀れむ　樂の反對で、死をかなしむ、哀悼。

憫れむ　心にかあいさうに思ふ、憫然(びんぜん)。

あ　ふ

會ふ　集る、會合。

逢ふ　兩方から出合ふ、逢著。

遭ふ　前と同じ、めぐりあふ、遭遇。

遇ふ　思はずあふ。

あぶら

油　ともしあぶら、石油。

脂　肉類のあぶら、脂肪。

膏　前と同じ。

あらはる

現る　かくれたものが出てくる、出現(しゅつげん)。

見る　前と同じ、露見。
顯る　照り輝くやうに出てくる、顯著。
露る　むき出しに出る、露出。
著る　明らかに知れる、名高くなる、著名。書物を作る、著作。
表る　表面に出る、發表。
彰る　ものゝ模様等が外に見えるやうになる、表彰。

ある

有る　無の反對、有給。所有の意にもなる、有志者。
在る　存在する意、在郷軍人。

あやまる

誤る　氣づかずに失敗する、誤字。
過る（あやまち）　惡心なく規則を犯す、過失。
謬る　筋道のゆきちがふこと、謬見。

おこる（いかる）

怒る　喜の反對で、外にまであらはれる、怒號。

忿る　前の反對に、外には出ないがうらみいかる、忿怒。

憤る　今までたまつてゐたのが一度に出る、憤然。

慍る　心におこつて、むつとする事。

恚る　怨みを持つ、恚亂。

いたる

至る　十分の點までとゞく、至極。

到る　出發點から着く、到着。

格る　ゆくべき正しい處までゆきとゞまる。

いたむ

痛む　身が痛い、疼痛。悲しみの深いこと、悲痛。

悼む　人の死を悲しむ、悼惜。

傷む　怪我をする、負傷。怪我のやうに悲しむこと、傷心。
悵む　恨み歎く、惆悵。

いつはる

僞る　こしらへていつはる、僞善。
佯る　表面をいつはる、佯言。
詐る　だます、詐欺。

い　ふ

言ふ　口でいふ、言説。
云ふ　文の終りにつけて用ひる、云々。
謂ふ　人に對していふ、批評的にいふ、又思ふと同じく「謂へらく」と用ひる。
道ふ　言と大體同じ。
曰く　人の言を引用する時に「孔子曰く」と用ひる。

い　れ　る

入れる　出の反對、外から入る、入學。
納れる　受け入れる、納付。
容れる　器の中に受け入れる、容器。

いよ〱

愈々　次第にまさる。
彌々　次第に一つぱいになる。

うかゞふ

伺ふ　ひそかに探り見る、伺察。人を訪ねる、伺候。
偵ふ　前と同じ、偵察。
窺ふ　隙間からのぞき見る、窺知。窺竊。
候ふ　待つてゐて様子を見る、斥候。

うしなふ

失ふ　得るの反對で取り失ふ、失職。し損じる、失策。

亡ふ　全くなくす、死ぬ、滅亡、死亡。
喪ふ　なくなる、喪失。

うつ

打つ　たゝく、打診。
拍つ　手のひらや拍子木等をうち鳴らす、拍手。
撲つ　そつとたゝく、うちあふこと、相撲。
撃つ　手やもので強くうつ、敵や仇をうつ、鐵砲でうつこと、撃破、射撃。
討つ　罪をとがめたてゝうつ、討伐。
征つ　上の者が下の者の罪をとがめてうつ、征夷。
伐つ　討と同じ。
搏つ　手に力を入れてばち〳〵とうつ、兩虎相搏つ。
毆つ　杖で人をたゝく、毆打。
撻つ　鉦や鼓をうつこと、鞭でうつこと。

うつる

寫る　書きうつす、寫字。
映る　光がものにうつること、映寫。
遷る　物事のうつりかはること、左遷、變遷。宮や都がうつるのを宮遷、遷都といふ。
移る　苗を植ゑかへるといふことから、場所をかへること、移植、移轉。

うれひ

憂ひ　心配する、憂慮。
愁ひ　悲しむ、ものさびしい、愁傷、哀愁。
患ひ　病や災難などを苦にする、災患。

うらむ

恨む　くやしがる、殘念に思ふ、遺恨十年。
憾む　恨と同じで、やゝ輕い意、遺憾。
怨む　人を憎む、怨靈。

えらぶ

選ぶ　多くの中から良いものをより出すこと、選擧。
撰ぶ　詩や文章を作る、撰述。譔とも書く。
擇ぶ　よしあしをよること、擇言擇行。

お(を)か

岡　山の背にあたるところ。
丘　四方が高く中が低くなつてゐるところ。
阜　高原のこと。
陵　山の傾斜がなだらかで登り易いところ。

お(を)かす

犯す　規則に叛いて罪ををかす、犯則。
侵す　改めて押し入る、侵略。無理に入りこむ、侵入。
冒す　向ふ見ずに進む、冒險。

おくる

送る　迎の反對で、人をおくること、送別。ものを屆けること、送達。

贈る　人にものを與へる、贈與。

饋る　食物をおくる。

賄る　利益を得ようとして人におくる、賄賂。

おこたる

怠る　敬の反對で心がゆるむ、怠慢。

惰る　心がたるむ、惰氣。

おこる

興る　廢の反對で、衰へたものが盛になる、興隆、復興。

起る　はじまる、事をあげおこす、發起。臥の反對でたちあがる、起居。

おごる

驕る　心におごりたかぶる、驕慢。

奢る　儉の反對で衣食住におごること、奢侈。

傲る　人を輕く見る、傲倨。

お(を)さめる

修める　家の悪い處をなほす、修理。精神的のことにも用ひる、修身。

治める　亂の反對で亂れた事ををさめる、治定。

收める　ものを取り入れる、收益。

斂める　かき集めて取り入れる、收斂。屍を埋めること、斂葬。

お(を)しへる

敎へる　先生が先づ實行して、知らない事を告げさとらせてならはせる、敎育。

誨へる　言つてきかせて導くこと、敎誨。

訓へる　昔からの定めに從つて敎へる、訓導。

おしむ

吝しむ　しわんぼうのこと、吝嗇。

惜しむ　廣く用ひて物を大事にする意。
愛しむ　心におしむ、愛惜。
嗇しむ　無駄につかはないこと。

おそれる

恐れる　將來のことを思つておそれる、人心恐々。
怖れる　わけもなくおそれる、恐怖。
懼れる　びく〳〵する、疑懼。
畏れる　敬ひはゞかる、畏敬。

おちる

落ちる　上から下へおちる、落下。
墮ちる　おちてこはれる。
墜ちる　くづれておちる、墜落。
零ちる　こぼれおちる。

隕ちる　眞直ぐにおちる、隕石。

おはる

終る　始と對してゐて始から終りまでといふこと、始終。

了る　すつかりすむ、終了。

畢る　終と同じで、すべてを盡してしまふこと、畢生。

おもふ

思ふ　ものを思ふことで、廣く用ひる、思案、

想ふ　想像して思ふこと。

憶ふ　過去のことを思ひ出す、追憶。

懷ふ　過去のことや遠くの事等を忘れずになつかしく思ふ、追懷。

惟ふ　よく考へる、思惟。

かげ

影　ものゝかげ、人影。

蔭　日のかげ、綠蔭。

陰　ものにおほはれた處、山陰。

かつ

勝つ　負の反對で勝負にかつ、勝利。

捷　戰爭にかつ、大捷。

克　心にかつ、抑へつける、克己。

かつて

嘗て　もとから。

曾て　前のよりも重い意味で、これまでに、過去に於て。

かなしい

悲しい　喜の反對で痛みかなしむ、悲痛。

哀しい　樂の反對であはれで深くかなしむ、悲しみが聲にまであらはれる、哀悼

かねて

豫て　前から、あらかじめ、豫告。

兼て　二つ以上のものを一つに合はせる、兼職。

かはる

變る　常の反對でうつりかはる、變化。

化る　他のものに全然かはつてしまふ、風化作用。

代る　かはつて役目をはたす、名代。

更る　ものを新にかへる、更生。

換る　他のものと取りかへる、交換。

替る　とりかへる、置きかへる。

渝る　約束をかへる、渝盟。

易　換と同じい、貿易。

かへる

歸る　出て來た場所にかへつて落ちつく、歸鄉。

還る　往くの反對で行き先からめぐりかへる、歸還。

返る　出たものが元へもどる、折りかへる、返事。

反る　前と同じ。

き　く

聞く　自然に耳にきこえる、聞知。

聽く　よくきく、注意してきく、傾聽。

利く　藥がきく、利目（きゝめ）。

き　え　る

消える　なくなるやうにきえる、消滅。

熄える　火がきえる。

滅える　亡びてしまふ、滅亡。

き　る

切る　刀で斷ちきる、切開。

斬る　人をきり殺す、斬殺(ざんさつ)。

剪る　はさみきる。

截る　ばら／＼に斷ちきる、截斷(さいだん)。

斫る　一と息にきる。

きはめる

窮める　行きつまる、窮地。

極める　最上の處でそれ以上ないこと、極地、北極。

究める　奥まで尋ねさがす、研究。

くづれる

崩れる　高い山や岸や岩が一時にくづれる、崩墜。

壞れる　少しづゝくづれて破れる、破壞。

頽れる　くづれおちる、すたれる、頽廢。

くむ

汲む　井戸から水をくむ、汲水。
酌む　酒をくみかはして飲む、晩酌。
斟む　前と同じ。又、くみ足すこと、斟酌(しんしゃく)。

けがす

汚す　人の行爲のことに用ひる、汚染(おせん)。
穢す　前のよりは重い意味できたないこと。元來は畑などが草だらけできたないこと。
瀆す　狎れ近づいてけがす、あなどるやうにする、瀆職(とくしょく)。

こたへる

答へる　質問にこたへる、答辯。
對へる　一つ〳〵あげてこたへる、對質。
應へる　先方に從つてこたへる、應諾。

こえる

肥える　ふとること、肥大。

沃　　土地がよいこと、沃土（よくど）。

越える　飛びこす、踏みこす、越境。

超える　秀でる、超過。

踰　　わたる、のりこす、踰垣。

こ　ふ

乞ふ　ねだつてもらふこと、乞食。

請ふ　禮をつくして、もらふこと、請求。

これ（この）

此　　彼に對して用ひる。「此の本」

是　　上の事情を受けて下を指示する。「是の故に」

之　　上のものを受けて下につゞける。

斯　　此より重い意。

緒　　之に似て稍々強い意。

維　「思ふにこれ」といふ意、又意味を强める時につける、維新。

ころす

刺　さしころす、刺客。

屠　牛馬等をほふりころす、屠牛。

弑　臣下が君主を、子が親をころす、弑逆。

戮　死刑にする。又屍をさらす。

殺　廣く用ひる、殺傷。

誅　罪人をころす、せめころす、誅夷。

さかん

盛　衰の反對。大いに、强く、勢よくの意、盛宴。

壯　氣力がさかん、勇壯。

旺　はなやかでさかん、旺盛。

昌　榮えてさかん、繁昌。

隆　高くもりあがること、隆起。

熾　火勢がさかん、熾灼。又そのやうに氣力が強い、熾烈。

さく

剳く　ゑぐりさく、剳腹。

剖く　わける、剖腹。

析　木をさく、さいて明らかにする、分析。

割く　刀でさく、割腹。

さと

里　むらざと、里人。

鄕　ふるさと、故鄕。

さとる

悟る　我知らず心の迷ひがとれる、悟脫。

覺る　今まで知らなかつたことが知的にわかる、覺醒。

曉る　暗いところから明るいところに出るやうになること、通曉（つうげう）

さびしい

淋しい　元來「さびしい」といふ意はないが、我が國で讀む。廣く用ひる。
寂しい　靜かでさびしい、靜寂。
寥　むなしくさびしい、寥々。

さわぐ

騷ぐ　急いで落ちつかないためにさわぐ、騷動。
擾ぐ　みだしさわぐ、擾亂。
噪ぐ　鳥がさわがしく鳴くやうなこと、喧噪。

しげる

繁る　ごさ〱としげる、繁華。
茂る　草木がしげる、茂生。

しづむ

沈　水中に深く入る、沈溺(ちんでき)。

沒　しづんでなくなる、沒了。

しま

島　大きいしま。

嶼　小さいしま。

しる

知る　眞相を十分知る、知覺。

識る　大體を知る、一面識。

すくない

少　多の反對で數のすくないこと、少數。

寡　衆の反對で人のすくないこと、寡言(くわげん)。

すゝめる

進める　退の反對で、次第にすゝめる、進行。

勸める　說きすゝめる、勸業。
奬める　ほめてすゝめる、奬勵。
薦める　立派な人をすゝめる。ものを人にすゝめる、推薦。

すなはち

則　「……すればい……である」といふやうに「ば」の意。
即　そのまゝ、直ぐに、即座
乃　そこで。
輒　すぐさま。
便　即と同じ。
迺　乃と同じ。

せまい

狹　廣いの反對、狹義（けふぎ）。
隘　ものゝ間がせまい、隘路（あいろ）。

せめる

攻める　敵をせめる、攻撃。
責める　せめなじる、責問。

そそぐ

注ぐ　つぎこむ、流しこむ、注入。
漑　田等に水を入れる、灌漑。
灌　草木に水をかける、灌水。
瀉　勢よくそゝぐ、吐瀉。

その

園　草木を植ゑてあるその、公園。
苑　動物をかつてあるその。その集つたところ。

そ・ふ

添ふ　ある上に加はる、添附。

沿ふ　つき從つてゆく、沿岸。
副ふ　かけがへとして豫めそつておく、副業。
傍ふ　そばにゐる、路傍。

そむく

叛く　人からはなれてそむく、叛賊。
反　前と同じで從つてゐたものがひつくりかへる、反對。
乖　逆ひそむく、乖離。
背　向の反對で今まで從つてゐた人に背をむけて道にもどるやうなことをする、背信。

たくはへる

貯　平常餘つたゞけためて、なくならないやうにする、貯金。
蓄　少しづゝよせ集めておく、蓄藏。

たすける

助ける　力添へをする、助力。

援ける　救つてやる、救援。

輔ける　倒れないやうに左右からさゝへる、輔佐。

弼　惡い點を正しくして救ふ、輔弼。

翼　周圍からかゝへるやうにする、翼贊。

佐　その人の身について手のやうになつてたすける、輔佐。

資　金をやつてたすける。

たゞ

唯　「これだけ」、「たゞひとつ」、唯一。

只　前と大體同じだが稍々輕い意。

但　「それはさうだが、これは」と上の句を受けて反對のことをあげる時に用ひる。

徒　「むだに」。

啻　この下には必ず打消しの語がつく。「たゞ……のみならず」

たゝく

叩く　うつ、叩頭。
拍く　手でたゝく、拍手。
敲く　音を出すやうにたゝく、敲門。

たゞれる

糜れる　できものゝやうにくづれ破れる、糜敗。
爛れる　熟しきつてたゞれる、やけどでたゞれる、くさるやうになる、爛熟。

たつ

斷つ　二つにたちきる、斷線。
絕つ　なくなる、絕無。
裁つ　衣服を縫ふ時に布をきる、裁斷。善惡を分ける、裁判。

たつとぶ

貴ぶ　賤の反對で、身分や官位の高い、貴人。
尊ぶ　卑の反對で、心からたつとび重んずる、尊崇。

尙ぶ　大事にする、尙齒會。

たづねる

尋ねる　廣く用ひる、求めてきく、尋求。
訪ねる　人をたづねる、訪問。
訊ねる　とがめてきゝたゞす、訊問。

たてる

立てる　しつかりたつ、直立。たちあがる、起立。出だす、出立。
起てる　座を立つ、起床。
建てる　組立てる、家をたてる、建築。
樹てる　木を植ゑてたてる、植樹。

たとへ

縱令　「……はないだらうが、さうすることを、まあゆるしてみる」といふ意。
假令　「……はないだらうが、かりにさうする」。

譬　或るものに較べて見るといふ意。この下には「……のやうだ」といふ意味の語がつくのが正しい。

例　先にあつたことを引用する時に用ひる、前例、引例。

たのしむ

樂しむ　苦の反對で、心からたのしみ、樂地。

嬉しむ　子供の遊ぶたのしみ、嬉遊。

娯しむ　なぐさみ、娯樂。

たのむ

頼む　人にたよる、信頼。

恃む　自分で深く信じる、恃頼。

憑む　頼と大體同じ。

たふれる

仆れる　横にたふれる、仆伏。

倒れる　立つてゐるものがたふれる、顚倒。
斃れる　死ぬ、斃死。
顚　ひつくりかへる、顚覆。
蹶　つまづいてたふれる、蹶倒。

たへる

堪へる　我慢して通す、堪忍。
耐へる　もちこたへる、忍耐。

たま

玉　寶玉。
環　わになつたたま。
璧　まるくて、中に穴のあいたゝま。
瓊　美しい色のたま。
璞　山からほり出したばかりで磨かないたま。

珠（しゅ）　まるいたま。

つかへる

仕へる　役目としてつかへる、仕官。
事へる　義務としてつかへる、師事。

つく

附く　そへる、したがはせる、附屬。
著く　ぴつたりつく、附著。ゆきつく、到著。
付く　わたす、交付。あたへる、付與。
就く　職につく、就職。とりかゝる、就業。
即く　位につく、即位。
突く　先でつく、突進。
撞く　うちあてる、撞球。
衝く　つきあてる、衝突。

搗く　臼でつく。

つ　ぐ

繼ぐ　絕えてなくなつたあとをつゞける、繼承。
續づく　つらなりつゞく、續行。
嗣ぐ　あとつぎ、嗣子。

つゝしむ

愼しむ　心をつゝしむ、用心する、愼戒。
謹しむ　心からつゝしむ、謹直。

つとめる

勤める　勵み行ふ、精出すこと、勤勉。
務める　勤と大體同じだが、なすべき仕事をする、執務。
勉める　勵む、勉强。
力める　勉に同じ、主に力わざに用ひる、力行。

つね

常　あけてもくれても、いつも、常備。

毎　そのたびに、毎時。

恒　變ることがない、恒産。

とける

解　ものを分けて明らかにする、分解。

融　とけて消える、融合。

釋　意味を明らかにする、釋義。

溶　水にとける、溶液。

說　言ひきかせる、說明。

鎔　金屬がとける、鎔銀。

とゞめる（とゞまる）

止まる　やめとゞまる、中止。

留まる　とまつて動かない、滞留。
停まる　しばらくとまる、停車。
逗まる　途中に一時とゞまる、逗留。
駐まる　馬をとゞめる、又早く過ぎるものをとゞめる、駐車場。

とゝのへる

調へる　丁度よくする、調和。
斉へる　同じやうにそろへる。
整へる　いろ〳〵のものを一つにして正しくする、整理。

とりこ

虜　いけどり、虜獲。
擒　戰勝の時捕へた者。
俘　軍で捕へた者、俘囚。

とる

取る　捨の反對で、自分のものにする、取得。
採る　とりあげる、拾ひとる、採用。
執る　固くとつてはなさない、執着。心をとり守ること、固執。
把る　手に握りもつ、把持。
捕る　追ひかけてつかまへる、捕獲。
捉る　手でとる、把捉。
撮る　つまみとる、うつしとる、撮映。

ながい

長い　短の反對で時にも形にも廣く用ひる、長時間、長身。
永い　時に關係あることに用ひる、永久。

なく

泣く　聲を出さずに涙を出してなく、涕泣。
哭く　大聲でなく、慟哭。

鳴く　聲がすること、鳥獸等に用ひる、鳴鳥。
啼く　さへづりなく、啼鳥。
號（がう）する　大聲をあげる、號令。
叫（さけ）ぶ　急に聲をたてる。

なげく

嘆く　太息をついてなげく、聲を出さずになげく、嗟嘆。
歎く　怒りなげく、悲しみなげく、ほめなげく、歎聲。
慨く　怒つてなげく、慷慨。

なす

作す　つくり始める、作業。
爲す　ことをする、行爲。
成す　ことをなしとげる、成就。

なほ

尙　その上につけ加へて。

猶　まだやはり……である、猶は獸の名で、これが木から下りて一日を暮すところから出た。

な　み　だ

淚　目から出るなみだ、淚涕。

涕　鼻から出るなみだ、流涕。

な　め　る

舐める　舌でなめる、舐犢の愛。

嘗める　なめて味はふ、臥薪嘗膽。

な　れ　る

慣れる　幾度もくりかへしてなれる、習慣。

馴れる　鳥獸に用ひる、したしんでなつく、馴致。

狎れる　なじむ、狎近。

狃れる　前と同じ、狃恩。

にくむ

惡む　好の反對で、きらふ、いやに思ふ、好惡。
憎む　愛の反對で、理由があつてにくゝ思ふ、憎念。

にげる

逃げる　たちのく、逃走。
遁げる　にげかくれる、遁走。
北げる　戰に敗れて後を見せる、敗北。

にせもの

僞物　眞の反對で、贋は眞物と全く同じやうに似せること。

ぬすむ

盗む　ものをとる、盗賊。
竊　かすめとる、竊取。

のゝしる

罵る　人に惡言を加へる、罵言。
詈る　前より輕い意。

のばす

伸ばす　屈の反對、屈してゐるものをのばす、伸長。
延ばす　長くする、時日をのばす、延期。
展べる　ひろげる、展覽。

のべる

述べる　文章や言葉でのべあらはす、詳述。
陳べる　くはしくのべる、陳上。
宣べる　のべひろめる、宣言。

のぼる

登る　ものゝ上にのぼる、登山。

昇る　降の反對で、進みのぼる、昇級。
上る　下のものが上になるといふ意からのぼるとなつた、「川を上る」。
騰る　をどりあがる、物價騰貴。

の　む

呑む　ものをかまはずに丸のみにする、「呑舟の魚」。かろんずる、「敵を呑む」、
飲む　湯水などをのむ、飲食。

は　か　る

計る　ものゝ數をかぞへる、計算。心に工夫する、計畫。
謀る　人と相談する、謀議。
量る　分量をはかる、分量。
度る　物指ではかる、尺度。心にみつもつて見る、忖度。
諮る　たづねて見る、諮問。
測る　深さや長さをはかる、測量。心におしはかる、推測。

議る　評定する、議案。

はく

吐く　呑の反對で、一口にはく、吐瀉。

喀く　だん〳〵とつゞけてはく、喀血。

嘔く　前と同じ。

噴く　勢よくはく、噴出。

はじめ

初　後の反對で、時のことに用ひる。はじまり、おこり、初夏。

始　終の反對で、事のはじまり、開始。

肇　開きはじめ。

創　新しくつくり出す、創立。

首　尾の反對で、一番のかしら、頭首。

甫　大きくなることのはじめ。

孟　季節のはじめ、孟夏。

は　だ

肌　はだの肉。

膚　身の表面。

は　ち

恥(ち)　心にはぢる。

辱(じよく)　榮の反對で、外聞の惡いこと、命令が降るのを受ける意。「……を辱うす」

愧(き)　自分の見苦しいことを人にはぢる。

慙(ざん)　前と同じ。

羞(しう)　はぢて顏を人に見せられないやうになること。

赧(たん)　赤面すること。

詬(こう)　惡口をいはれてはぢる。

は　れ

晴　空がすむやうにはれる。
霽　雨がやんではれる。

はらふ

掃ふ　箒ではく、一度にはらつてしまふ、掃除。
拂ふ　少しづゝはらふ、はたきではらふ、支拂。
攘ふ　おしのける、攘夷。
祓ふ　禍をのぞき福を求める。
除ふ　かたづける、不潔物をとつてきれいにする、除去。

ひく

引く　弓を引く意で、廣く用ひる、ひきよせる、引力。ひきのべる、延引。
挽く　力を入れてひく、挽回。
曳く　長く尾をひく、ひきづる、曳航。
延く　ひきのばす、延期。

牽く　前の方へひく、牽制。
惹く　心をひく、ひきおこす、惹起。
彈く　琴等のやうに手ではじく、彈琴。
碾く　臼でひく。
退く　しりぞく、退職。

ひくい

卑い　身分や位置に用ひる、卑賤。
低い　高の反對で土地等に用ひる、價がやすい、低地。低廉。

ひそかに

私に　內緒で。「私に行く」
竊に　人目をぬすむやうに。「竊にほゝ笑む」
竊に　前と同じ。
密に　外へもれないやうに、祕密。

陰に　かげで、人に知れない所で。

ひたる

浸る　水にひたる、浸水。
漸る　いつの間にか水にひたる、漸時。
漬る　水につかる、漬物。
涵る　十分にひたる。

ひとし

等し　同じやう、同等。
齊し　そろふ、一度に、齊唱。
均し　等分、高低がないこと、平均。

ひな

鄙　ゐなか、鄙人。
雛　鳥の子、廣く幼少のもの、雛僧。

ひゞき

響　震へ動く音、音響。

韻　音の後のひゞき、餘韻。

籟　穴から出る音、笛のやうな音、天籟。

ひらく

開く　閉の反對で廣く用ひる、開花。

啓く　ものゝ口をあける、知識をひらく、啓發。

闢く　開と同じ。

發く　あばく、急にひらく、發見。

ひろい

廣い　狹の反對で、面積の廣いこと、廣大。

博い　ひろくゆきわたる、博學。

浩い　水が滿ちてゐるやうにひろい、浩然。

ひろびろと

闊　ひろびろと巾が廣くひらけてゐる、闊達。

弘　大きくひろい、學德上の事に用ひる、弘道。

寛　ゆつたりして餘裕あること、寛仁。

ふせる

伏せる　起の反對、地面にうつぶせになる、伏在。伏罪。

俯す　仰の反對で、下をむく、俯瞰。

ふせぐ

防ぐ　前から準備してふせぐ、豫防。

禦ぐ　その場に臨んでふせぐ、防禦。

拒ぐ　こばみふせぐ、拒絶。

ふむ

踏む　足でふむ、舞踏。

履む　定つた通り實行する、履行。
踐む　精神的に行ふ、實踐。

ふるい

古い　今の反對、古代、古昔。
舊い　新の反對、舊家。
陳　物が久しくたつてふるい、陳腐。
故　新の反對、叉死んだもの、故人。

ふるへる

震へる　ゆり動く、震動。
振る　手をふる等のやうに形のあるものをゆり動かす。「旗を振る」
奮ふ　勇む、奮鬪。
慄へる　恐れてふるへる、戰慄。
顫へる　がた〳〵ふるへる、顫動。

揮ふ　鞭や筆等を持つてふること、指揮（しき）。

ほしいまゝ

恣　悪いことを氣まゝにする、専恣（せんし）。

擅　一人で勝手にする。

放　しまりがない、放縦。

縦　規則などを守らないで勝手にふるまふ。

ほめる

褒める　貶（へん）の反對で、善いことをほめる、褒嘉（はうか）。

賞める　罰の反對で、物を與へてほめる、賞與。

頌　善徳善行を文や歌に作つてほめる、頌歌（しやうか）。

美　ほめてあらはす、褒美。

まく

捲く　まきあげる。

播く　種をまく、播種。

撒く　水をまく、撒水。

まこと

信　まちがひがない、信用。

眞　ありのまゝで、つくろつたところがない、眞實。

誠　前と同じで、詐の反對、誠心。

まさる

優る　劣の反對で、ゆつたりと餘裕があつてまさる、優勢。

勝る　負の反對で人の下につかずにまさる、勝。

まさに

正に　正しくその通りに、「正にその通り」

當に　當然さうなる、「當に然り」

方に　今ちやうど、「方に十二時」

将に　間もなくさうなる、「将に來らんとする

また

又　別にまた、その上また、「又失敗」

亦　またこれも同じく、「弟も亦偉い」

復　ふたゝびかさねて、「復行く」

まつる

祭る　いつでも定つた時なく供へ物をしてまつる、祭典。

祀る　定つた時のまつり。

祠る　願ひのためのまつり、願ひがかなつたゝめのまつり、又やしろ、祠禱。

まもる

守る　大事にする、守身。もちこたへる、固守。

衛る　ふせぎまもる、防衛。

護る　たすけまもる、護身。

戍る　國境をまもる、戍邊。

まるい

圓い　四角の反對で、まんまるい、圓形。形の外にも用ひる、圓光。
丸い　玉のやうにまるい、丸藥。
團　まるく集める、團欒。

みがく

磨く　こすりみがく、磨碎。
礪く　といしでみがく。
研ぐ　とぎみがく。
琢く　玉をみがく。

みちる

滿ちる　缺の反對で、一つぱいになる、滿月。
充ちる　端までゆきわたる、充當。

盈ちる　器物に一つぱいになる、月がまるくなつて行く、次第にみちてゆく。
塡める　不足をたす、充塡。

み　な

皆　みな一同。
咸　悉く。

み　る

見る　目につくものを自然に見る、見物。
視る　心をとめて見る、視察。
觀る　視より一層よく見る、關係を調べながらみる、觀察。
覽る　ざつと目を通す、一覽。
瞰る　下を見おろす、瞰下。
瞻る　仰いで見る、瞻望。
閱る　始終を見る、檢閱。

瞥る　ちらと見る、瞥見（べつけん）。

覩る　見通す。

むかふ

向ふ　目的の方に眞直ぐにむく。

迎ふ　出むかへる、奉迎。

邀ふ　待ち受けてむかへる、邀撃（げいげき）。

めぐる

巡る　まはつてしらべる、めぐつて守る、巡回。

旋る　くる／＼まはる。旋回（せんくわい）。

運る　月日や天や時勢がうつりかはる、運行。

循る　ついてまはる、循行。

環る　とりかこむ、環視。

繞る　まとひついてかこむ、繞帯（ぜうたい）。

紆る　まがりめぐる、紆曲(うきよく)。

迂る　とほくまはる、迂回(うくわい)。

廻る　旋と同じ、水が渦をまくやうにめぐる、廻送。

もつとも

最も　多くの中で一番良い、「最もすぐれる。」

尤も　秀れて異つてゐる、「彼が尤もつとめる。」けれども、「尤もよい點もある。」

もてあそぶ

玩　なぐさみとする、玩物(ぐわんぶつ)。

翫　もてあそびなれる、賞翫(しやうぐわん)。

弄　なぶりものにする、飜弄(ほんろう)。

もと

元　もの丶はじめ、元日。

本　末の反對で、同じものでさきが末、もとが本、本志。

素　白い絹といふ意から平素、素行。

原　根元のこと、原因。

も　ど　る

戻る　和の反對で、ねぢまがる、暴戻。

悖る　逆ひもどる、悖惡（はいあく）。

もとめる

求める　ほしがる、さがす、慾求。

需める　買ひもとめる、需要。

索める　さがしもとめる、探索。

覓める　前と同じ。

も　の

物　形のある品物を指す、物品。

者　人か無形のものに用ひる、「夏といふ者は暑い」。

やせる

瘦せる　やせて細くなる、瘦面。

瘠せる　病氣のためにやせる、瘠身（そうしん）。

やぶる

敗る　勝つの反對で敵をまかす、敗戰。

破る　われるといふ意、破竹。

壞れる　くづれこはれる、崩壞。

やまひ

病　やまひが重ること。

疾　急のやまひ。

痼　長い間のやまひ、沈痼（ちんこ）。

痾　深く入りこんだやまひ、宿痾（しゆくあ）。

やめる

止める　仕事をやめる、中止。
已む　すべてが終る。
息む　やめてなくなる。

ゆく

行く　止の反對で、とまらずに進んで行くこと、進行。
往く　來の反對で先方にゆく、往昔。
逝く　再びかへらない、逝去。

ゆるす

許す　願ひをゆるす、許可。
宥す　なだめゆるす、宥免。
免ず　ゆるして自由にする、免許。
赦　罪をゆるす、大赦。
容　忍んでゆるす、容認。

允　承知してゆるす、允許。

よ　い

善い　惡いの反對、立派なこと、善行。
良い　すぐれる、質がよい、選良。
好い　都合がよい、氣に入る、好物。
佳い　美しくよい、佳人。
可い　否の反對、「それで可い」

よ　ぶ

呼ぶ　聲をたてる、呼號。
喚　急に大聲をたてる、喚聲。

よ　り

自り　「……から」、自今。
從り　したがふ、「これ從り西一里」

よる

依る　よりそつてはなれない、依倚。
凭る　ものにもたれかゝる。
倚る　前に同じ。
賴る　たよりとする、信賴。
寄る　ものによつて居る、寄寓。
由る　ことのなりゆき、由來。
因る　或る原因で。
據る　よりどころとする、根據。

よろこぶ

喜ぶ　うれしくよろこばしい、喜々。
悅ぶ　心にうれしく思ふ、悅樂。
歡ぶ　よろこび勇む、歡乎の聲。

欣ぶ　前と同じ、よろこびうきたつ。
懌ぶ　よろこびが心にしみる、和懌。
怡ぶ　なごやかな様、怡々。

わける

別ける　區別する、混ざらないやうにする、差別。
分ける　合の反對で、ものをわける、二分。
頒ける　わけ與へる、頒布。
訣つ　永く別れる、永訣。

わざはひ

禍　福の反對で、ふしあはせ、禍殃。
災　天地のわざはひ、天災。
殃　神のとがめ。
厄　なんぎ、厄難。

わたる

渡る　川をわたる、渡河。
渉る　淺瀬を歩いてわたる、徒渉。
亙る　よくゆきわたる。

わづか

僅か　少しばかり。
纔か　やつと。

われ

我　彼に對して用ひる、「我が國（彼の國）」
吾　對するものなく自分を指す、「吾が兒」

わらふ

笑ふ　よろこんでわらふ、笑聲。
嗤ふ　あざわらふ。

哂ふ　微笑する。

二三、假名の由來

片假名

ア阿　イ伊　ウ宇　エ江　オ於
カ加　キ幾　ク久　ケ氣　コ己
サ散　シ之　ス須　セ世　ソ曾
タ多　チ千　ツ川　テ天　ト止
ナ奈　ニ仁　ヌ奴　ネ禰　ノ乃
ハ八　ヒ比　フ不　ヘ反　ホ保
マ末　ミ三　ム牟　メ女　モ毛
ヤ也　イ　ユ勇　エ　ヨ與

ラ良　リ利　ル流　レ禮　ロ呂

ワ和　ヰ韋　ウ　ヱ惠　ヲ乎

平假名

い以　ろ呂　は波　に仁　ほ保　へ邊　と止

ち知　り利　ぬ奴　る留　を遠　わ和　か加

よ與　た太　れ禮　そ曾　つ鬪　ね彌　な奈

ら良　む武　う宇　ゐ爲　の乃　お於　く久

や也　ま末　け計　ふ不　こ己　え衣　て天

あ安　さ左　き幾　ゆ由　め女　み美　し之

ゑ惠　ひ比　も毛　せ世　す寸　ん无

元來、我が國には言葉はあつても文字がなかつたのが、支那から漢字が傳來して、初めて文字なるものを知るやうになつた。しかし、我が國と支那では言葉は違ふのでそのまゝの文字を

我が言葉に用ひて書きあらはすことは出來ないので、當時の人はいろ〳〵苦心して文字にして書き出した。その有名なものは古事記、日本書紀で、大體は漢文調の文になつてゐるが日本風の語法も用ひてゐる。それが萬葉集といふ歌集になると純日本風の語法、即ち漢字を假名にあてはめて用ひられることが甚しくなり、所謂「萬葉假名」といふものが出來た。これは大體二つの方法で構成されたもので、一つは漢字の音をそのまゝかりてあてはめたのである。即ち、「阿」の音はアなので「あ」といふ發音にあて、「伊」を「い」といふやうにした。又、他は漢字の意味からあてはめたので、「冬」の音は支那でも「フユ」なのだから「ふゆ」といふ語にあてるのである。

かうして出來たのが「萬葉假名」で、萬葉集はすべて漢字で書かれてゐるが、漢字ばかりで書かれてゐても漢文ではない。例をあげると

天皇詔二内大臣藤原朝臣一競二憐春山萬花之艶、秋山千葉之彩一時額田王以レ歌判レ之歌

冬木成、春去來者、不レ喧有之、鳥毛來鳴奴、不レ開有之、花毛佐家禮杼、山乎茂、入而毛不レ取、草深、執手母不レ見、秋山乃、木葉乎見而者、黄葉乎婆、取而曾思奴命、青乎者、置而曾歎久、曾

許之恨之、秋山吾者。

これが純漢文であれば讀むことは容易であるが、前述のやうに漢字の意味と音とを混ぜ合せた文であるから、その當時の人、或はその時代に近い頃では讀めたであらう。しかし、言葉の變遷もあり、次弟によめなくなつた。そこで、天暦年間に宮中の梨壺といふ室に時々召されて歌會の御相手を仰せつけられる歌人が五人ゐた。即ち「梨壺の五人」と言はれてゐるので、源順、大中臣能宣、清原元輔、坂上望城、紀時文である。この人々に命ぜられて訓點をつけさせられた。此の本は今に傳つてゐないがこれを古點といつてゐる。

さて、萬葉假名は前述のやうに出來たのであるが、漢字はいつも楷書でばかり書くのではなく、行書にし、草書にして用ひられるやうになつた。即ち、「以」を草書に書くと「い」と同じやうになるのである。平假名はかうして出來たので、「草假名」ともいひ、その夫々のもとになる漢字は前記のやうである。又、この假名を四十八字としたのは弘法大師だといはれてゐるが、それは疑はしい。が大師の作に次のやうな歌がある。

色は匂へど散りぬるを、　　我が世誰ぞ常ならむ。

有爲の奥山今日越えて、　淺き夢見し醉ひもせず。

これは佛教思想と無常觀を詠じたのであるが、古來「いろは歌」として傳へられてゐる。片假名はどうして作られたかといふと、これは漢字の省劃である。即ち「阿」の字の「可」の部の「丁」をとつて「ア」としたのである。「伊」から偏の「イ」をとつたのである。これは吉備眞備の作ともいはれてゐるが、信じられぬことである。それはもとになつた漢字が「ア」は「阿」からと一つしかないが、或るものによるといろ〳〵に言はれてゐるのである。例へると、「サ」は、散、薩、草、藏と四つの說がある。これは一人の手によつて作られたのではない證據で、數人の手で、然も長い年月の間に、言はず語らず、自然の必要から用ひられるやうになつたのであらう。

尙、中古時代には片假名は男子が、平假名は主に女子が用ひたので、「女文字」等ともよばれた。

かくて、漢字と假名とを混用して現在のやうに文章が作られるやうになつたのであるが、古事記、日本書紀、萬葉集等の文章も假名を振り、或は假名混り文に書き改められて誰でも讀め

るやうになつた。前記の萬葉集の歌を書き改めると次のやうになる。

天皇、内大臣藤原朝臣に詔して、春山萬花の艶と秋山千葉の彩とをあらそはしめ給ふ時、額田王、歌を以つてことはれる歌

冬ごもり、春さりくれば、啼かざりし、鳥も來鳴きぬ。さかざりし、花も咲けれど、山をしみ、入りても聽かず、草深み、とりても見ず。秋山の、木の葉を見ては、もみづをば、取りてぞしぬぶ。靑きをば、置きてぞ歎く。そこし恨めし、秋山われは。

弘法大師の「いろは歌」は次のやうに佛敎思想を詠じたものである。

諸行無常　いろはにほへど、ちりぬるを、
是生滅法　わがよたれぞ、つねならむ、
生滅滅已　うゐのおくやま、けふこえて、
寂滅爲樂　あさきゆめみし、ゑひもせず。

これでは餘りに悲哀の度が强すぎるといふので、改作したものが澤山ある。江戸時代の本居宣長は四十八字の假名を使つて次のやうに作つた。

雨降れば、井堰を越ゆる、水分けて、安く諸人下り立ち植ゑし、群苗、その稻よ、眞穗に榮えぬ

これは農業國日本の姿をよく詠じてゐるが、明治三十六年に「萬朝報」が募集した時に一等に當選したのは坂本百次郎氏の作で、これは明朗潑剌たる元氣に滿ち〳〵てゐる。

鳥鳴く聲す夢覺ませ、　見よ明け渡る東を、
空色榮えて沖つ邊に、　帆船群れ居ぬ靄の中。

二四、假名遣

假名遣は四つに分けることが出來る。

一、字音假名遣——漢字の讀み方に振る假名である。

十人　笑聲　釣魚

二、字訓假名遣——漢字の訓につける假名である。

鰯(いわし)　男(をとこ)　田舎(ゐなか)

三、語尾假名遣——動詞の語尾の假名である。

植ゑる　越える　例へる

四、助動詞、助詞、副詞等

行かう　盆のやう

右の中で、たゞ假名遣といふのは三と四のことをいふので、一と二は普通には漢字を知つてゐれば、手紙やその他の文章等に假名で書くこともないのであるが、何かの場合に漢字の讀み方をつける時などには假名をつけるのに苦しむことがある。殊に音の場合はなか〲難しいが、それも一の音の方は讀めさへすれば假名の方は許容される。即ち、

日光 { につかう / につかふ / につくわう

習慣 { しふくわん / しうかん / しゆふかん / しゆうかん

○印のが正しいが、他の假名をつけても誤ではあるがよいことになつてゐる。

二の訓の方は漢字を知つて居ればよいが、假名も正しく覺えて置きたい。三と四は勿論正しくなければいけない。

一體、假名は何を誤るかといふと、發音が同じでも假名にいろ〳〵あるからである。例へばイと發音する假名にも、イ、ヰ、ヒの三つがある。コウといふのにも、カウ、カフ、コウ、コフ、クワウと五つもある。此等を漢字一つ〳〵について覺えるのは難しい事であるから一と二については少い方の假名を覺えて、多い方は推察するのがよい。三と四とは文法的に覺えると簡單であるが、又少い方を覺えて置いてもよい。

又、音便と言つて續けて發音する時に便宜上他の音にかへて發音されることがある。例へば「白し」が「白い」となる。こんな時には「白ゐ」「白ひ」とは書かないのである。

次に此等の方法に付て記さう。

○語尾の場合

語尾の送假名を誤り易いのは五十音圖の中で左の通りである。

又、送假名を二つに分けることが出來る。

動詞の語尾——動詞は皆活用するが、それは五十音圖の各一行に限られるから、正確に活用を知ることに依つて誤ることはなくなる。（末尾の活用表を參考してほしい）

音便——音便は原音を考へればよい。

次に、この二つに付いて最も簡明に說明しよう。

一、活用語尾の假名遣

前に示した誤り易い行の活用と動詞とを先づ考へて見る。（活用表を參照）

あ行——下二——（え　え　う　うる　うれ　え）

得　これ一語しかない。

は行

四段──(は　ひ　ふ　ふ　へ　へ)
思ふ　追ふ　舞ふ　買ふ等澤山ある。

上一──(ひ　ひ　ひる　ひる　ひれ　ひ)
乾《ひ》(干)る　簸る　この二語しかない。

上二──(ひ　ひ　ふ　ふる　ふれ　ひ)
用ふ　強ふ　生《お》ふ　戀ふ　誣《し》ふ　この位。

下二──(へ　へ　ふ　ふる　ふれ　へ)
迎ふ　教ふ　考ふ　堪ふ　從ふ　備ふ　添ふ　違ふ　貯ふ　捕ふ等澤山ある。

や行

上一──(い　い　いる　いる　いれ　い)
鑄る　射る　この位。

上二──(い　い　ゆ　ゆる　ゆれ　い)
老ゆ　悔ゆ　報(酬)ゆ　此の三語だけ。

下二──(え　え　ゆ　ゆる　ゆれ　え)
生《は》ゆ　冷ゆ　超ゆ　聞ゆ　肥ゆ　聳ゆ　榮ゆ　殖《ふ》ゆ　絕ゆ　映《は》ゆ
消ゆ　覺ゆ　越ゆ等多い。

わ行
- 上一―（ゐ　ゐ　ゐる　ゐる　ゐれ　ゐよ）
  - 居る　率ゐる　この二語だけ。
- 下二―（ゑ　ゑ　う　うる　うれ　ゑよ）
  - 植う　据う　飢（饑）う　この三語だけ。

さ行
- 下二―（ぜ　ぜ　ず　ずる　ずれ　ぜよ）
  - 交ず　この一語一つだけ。
- さ變―（ぜ　じ　ず　ずる　ずれ　ぜよ）
  - 信ず　禁ず　報ず　應ず　感ず　談ず　論ず　歎ず　轉ず　投ず
  - 任ず　判ず　念ず等澤山ある。

だ行
- 上二―（ぢ　ぢ　づ　づる　づれ　ぢよ）
  - 閉づ　恥づ　怖づ　綴づ　攀づ
- 下二―（で　で　づ　づる　づれ　でよ）
  - 秀づ　出づ　撫づ　詣づ　愛づ　擢（抽）んづ　奏づ　茹づ

以上のことを記憶の便宜上、表示すると次のやうである。

	四段	上一	上二	下二	さ變
あ行	—	—	—	得(う) 一つだけ	—
は行	澤山ある	乾(干)る 簸る 二つだけ	割に少い	澤山ある	—
や行	—	鑄る 射る 二つだけ	老ゆ 悔ゆ 報(酬)ゆ 三つだけ	澤山ある	—
わ行	—	居る 率ゐる 二つだけ	—	植う 据う 飢(饑)う 三つだけ	—
ざ行	—	—	—	交ず 一つだけ	澤山ある
だ行	—	—	—	澤山ある	—

以上の表で少い方や、全くないものを覺えて置けば、他は推測出來るのである。例へば四段活用でイと發音するのはハ行だけであるから

友を思う。

彼に乞いて教へを受く

等の誤であることは直ぐ分る。

上一ではハ行二つ、ワ行二つ、ヤ行二つで、この六つの中でハ行のは語の上であるからヒと發音しイとは言はないから、結局四つになる。この四つを覺えて置けば

用いるものなし

等とは誤らない。

尙、形容詞、助動詞の濁音の語尾は「ざ行」である。それ故にヂ、ヅと書くことはない。

例へば

同ぢ日に花見に行く。(形)

同じ日に花見に行く。

凄ぢい働をした。（形）

　凄じい働をした。

言はづに實行する。（助動）

　言はずに實行する。

二、音便による假名遣

音便は次の四種であるが、動詞ばかりではなくて、形容詞にも一つある。

(1) 動　詞

種類	活用	段	例 原音	例 音便
い音便	か行四段	連用	花が咲きた	花が咲いた
	が行四段	連用	海が凪ぎた	海が凪いだ
う音便	は行四段	連用	彼に會ひた	彼に會うた
撥音便	ま行四段	連用	本を讀みた	本を讀んだ
	ば行四段	連用	英語を學びた	英語を學んだ
	な行變格	連用	死にた友を思ふ	死んだ友を思ふ

	種類	段	原音	音便
促音便	た行四段	連用	新しく家を建ちた	新しく家を建つた
	は行四段	連用	買ひた本	買つた本
	は行四段	連用	彼に從ひて行く	彼に從つて行く
	ら行變格	連用	此處に居りてほしい	此處に居つてほしい

四つの音便で促音便は誤ることはない。

(2) 形容詞

種類	段	例 原音	例 音便
う音便	連用	行を正しくする	行を正しうする
い音便	連體	美しき哉	美しい哉
撥音便	連用	重くす	重んず

形容詞の音便は主に文語の場合である。

促音便は誤ることはないが、他の音便の語尾を誤らぬやうに書くのには活用の語尾か音便の語尾かを見分けるのであるが、前にも記したやうに原音になほして見て右の表の何れにか當

てはまるのは音便であり、音便であれば語尾の送假名も、四つの中に限られるのである。

例へば

問ひて

の「問ひ」は本來はハ行四段であるから音便となれば

問うて

となつて

問ふて

ではない。ハ行四段なので「問ふて」で誤りないやうに考へ易いからこの「う音便」の場合殊に注意したい。

言ふて――言うて

競ふて――競うて

等皆同じである。又、

飛むで

とすると「飛む」はマ行の何かの活用になるのであるから、音便である以上は「飛んで」と書かねばならぬ。

○助動詞、助詞副詞等の場合

1、「よう」と「やう」

「よう」は推量又は未來の意味をあらはすのである。之は文語の未來の助動詞「む」を口語にしたのであるから、「む」の意に相當する場合は「よう」と書く。

明日は早く起きよう（起きむ）

出來るかも知れないからやつてみよう（みむ）

行かうか、行くまいか、どうしよう（せむ）

「やう」は「樣」の假名で「……の如し」と譬へる意味である。

同じやうに分ける（如くに）

燕のやうに早い汽車（如くに）

今夜の月は盆のやうだ（如し）

2、「う」

文語の助動詞で「む」となる所は口語では「う」となる。

（イ）む――う

早く行かむ――早く行かう（従つて「行こう」は誤）

明日、話さむ――明日話さう（従つて「話そう」は誤）

（ロ）らむ――らう

花咲くらむ――花が咲くだらう（従つて「だろう」は誤）

雨降るらむ――雨が降るだらう（従つて「だろう」は誤）

3、「かう」

副詞の「かく」は口語で「かう」となる。

かくなさん――かうなさう（従つて「こう」は誤）

かく言ふ我は――かう言ふ私は（従つて「こう」は誤）

4、「御座います」

これは

御座あります（原型）

御座ります（ありがりにつまる）

御座います（りのい音便）

と變つて行つた。それ故に「御座ゐ（居）ます」と書きたいが、誤りである。

5、助詞「は」

私わ行きます――私は行きます

助詞、即ちテニヲハの場合は「は」と書いて「わ」と發音する。

6、助詞「を」

本お讀む――本を讀む

前と同じで、助詞の場合は「を」を用ひる。

7、「さう」

（イ）そうして――さうして

接續詞「さうして」は「左ありて」がつまつて出來た。

（ロ）悲しそう——悲しさう

歩けそうだ——歩けさうだ

副詞「さう」は「然」を延した音である。

8、助詞「へ」

東京え行く——東京へ行く

この「へ」は方向を示すもので、方とか邊から出來た語である。

○訓の場合

一　い　ゐ　ひ

1、「ゐ」と書く語

猪　ゐのしゝ　　井　ゐ

井戸　ゐど　　田舍　ゐなか

藺　ゐ　　藍　あゐ

紅　くれなゐ　　紫陽　あぢさゐ

基　もとゐ　　位　くらゐ

團欒　まどゐ　　慈姑　くわゐ

居る　ゐる　　乞食　かたゐ

參る　まゐる

2、「い」と書く語

（イ）語の上の時は前の「ゐ」の外全部「い」

色　いろ　　今　いま

等、澤山ある。

（ロ）語の中、下の時

擢　かい

3、「ひ」と書く語

語の中、下の場合は以上の「い」「ゐ」の外は全部「ひ」と書く。

4、音便の場合は「い」

白い——白し　　黒い——黒し

憎い——憎し　　多い——多し

朔日（ついたち）——つきたち　　幸（さいはひ）——さきはひ

等多い。

二　え　ゑ　へ

1、「ゑ」と書く語

繪　ゑ　　餌　ゑ

笑顔　ゑがほ　　靨（笑窪）ゑくぼ

槐　ゑんじゆ　　巴　ともゑ

聲　こゑ　　杖　つゑ

末　すゑ　　梢　こずゑ

机　つくゑ　　礎　いしづゑ

故　ゆゑ　所以　ゆゑん

微笑む　ほゝゑむ　刳る　ゑぐる

2、「え」と書く語

（イ）語の上の時は前の「ゑ」の外全部「え」

枝　えだ　獲物　えもの

等多い。

（ロ）語の中、下の時

笛　ふえ　稗　ひえ

蠑螺　さゞえ　鵼　ぬえ

夕映　ゆふばえ

三　お　を　ほ

1、「を」と書く語

尾　を　雄　を　苧　を

小　を
夫　をつと
緒　をどし
伯父（叔父）　をぢ
親父　をやぢ
鴛鴦　をしどり
節　をり
女　をんな
一昨年　をとゝし
烏許（滸）　をこ
魚　うを
芭蕉　ばせを
竿　さを

緒　を
少女　をとめ
尾花　をばな
伯母（叔母）　をば
荻　をぎ
斧　をの
大蛇　をろち
女郎花　をみなへし
遠近　をちこち
栞　しをり
鰹　かつを
操　みさを
教へる　をしへる

男　をとこ
桶　をけ
岡（丘）　をか
甥　をひ
長　をさ
檻　をり
囮　をとり
一昨日　をとゝひ
筬　をさ
青　あを
功　いさを
十　とを
踊る　をどる

戦　をのゝく　終る　をはる　惜しむ　をしむ
折る　をる　居る　をる　犯(冐)　をかす
治める　をさめる　收む　をさむ　拜む　をがむ
薫る　かをる　申す　まをす　萎れる　しをれる
喚く　をめく　をさ〳〵　たをやか
可笑しい　をかしい　幼い　をさない

2、「お」と書く語

語の上にある時は前の「を」の外は全部「お」

御前　おまへ　面影　おもかげ
置く　おく　重い　おもい

等多い。

3、「ほ」と書く語

語の中、下の場合は以上の外、全部「ほ」

顏　かほ　　凍　こほる

等多い。

4、次の「ふ」は「を」のやうに發音されるから注意しなければならぬ。

葵　あふひ　　今日　けふ

昨日　きのふ　　梟　ふくろふ

仰ぐ　あふぐ　　倒れる　たふれる

煽ぐ　あふぐ

四　わ　は

1、「わ」と書く語

慈姑　くわゐ　　鰯　いわし

諺　ことわざ　　腸　はらわた

理　ことわり　　聲色　こわいろ

皺　しわ　　轡　くつわ

浦曲　うらわ　　鶸　ひわ

廓　くるわ　　水泡　みなわ

斷る　ことわる　　慌てる　あわてる

撓む　たわむ　　乾く　かわく

坐る　すわる　　騷ぐ　さわぐ

弱い　よわい　　遽しい　あわたゞしい

爽か　さわやか

2、「は」と書く語

前の「わ」の外は全部「は」と書く

桑　くは　　變る　かはる

等多い。

五、う　ふ

1、「ふ」と書く語

扇　あふぎ　　夕　ゆふべ
尊ぶ　たふとぶ　　候ふ　さふらふ
近江　あふみ　　危い　あやふい
尊い　たふとい

2、「う」と書く語
語の中は前の「ふ」の外皆「う」

六、じ　ぢ

1、「じ」と書く語
目尻　めじり　　貉　むじな
鏃　やじり　　鰍　かじか
聖　ひじり　　蜆　しじみ
網代　あじろ　　交はる　まじはる
馴染む　なじむ　　蹂る　にじる

詰　なじる　　始める　はじめる
弾く　はじく　　旋風　つむじかぜ
施毛　つむじ　　主人　あるじ
蛆　うじ　　虹　にじ
辻　つじ　　髢　かもじ
雉　きじ　　匙　さじ
櫨　はじ　　躑躅　つゝじ
項　うなじ　　羊　ひつじ
籤　くじ　　恭い　かたじけない
辟易ぐ　たじろぐ　　呪ふ　まじなふ
混(雑)る　まじる　　著しい　いちじるしい
短い　みじかい

2、「ぢ」と書く語

前の「じ」の外は全部「ぢ」

藤　ふぢ　縮まる　ちゞまる

等多い。

七、ず　づ

1、「ず」と書く語

数　かず　鈴　すゞ

錫　すず　疵　きず

硯　すずり　涼む　すずむ

佇む　たゞずむ　準へる　なずらへる

漫ろ　すずろ　必ず　かならず

数珠　ずゞ　礎　いしずゑ

蚯蚓　みゝず　雀　すずめ

梢　こずゑ　葛　くず

筈　はず　　鱸　すずき

菘　すずな　　百舌鳥　もず

2、「づ」

前の「ず」の外は全部「づ」

和泉　いづみ　　崩れる　くづれる

等多い。

動詞活用表（語幹に括孤のあるのは語幹語尾の區別のないもの）

	種類		語幹	語尾					
				將然	連用	終止	連體	已然	命令
文語	四段	か行	行	か	き	く	く	け	け
		さ行	增	さ	し	す	す	せ	せ
		た行	立	た	ち	つ	つ	て	て
		は行	買	は	ひ	ふ	ふ	へ	へ
		ま行	汲	ま	み	む	む	め	め
		ら行	祭	ら	り	る	る	れ	れ

	種類		語幹	語尾					
				將然	連用	終止	連體	假定	命令
口語	四	か行	行	か	き	く	く	け	け
		さ行	增	さ	し	す	す	せ	せ
		た行	立	た	ち	つ	つ	て	て
		は行	買	は	ひ	ふ	ふ	へ	へ
		ま行	汲	ま	み	む	む	め	め
		ら行	祭	ら	り	る	る	れ	れ

	行	語						
	が行	漕	が	ぎ	ぐ	ぐ	げ	げ
	ば行	遊	ば	び	ぶ	ぶ	べ	べ
	な行變格	死	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね
	ら行變格	有	ら	り	り	る	れ	れ
	か行變格	(來)	こ	き	く	くる	くれ	こよ
	さ行變格	(爲)	せ	し	す	する	すれ	せよ
上一	か行	(着)	き	き	きる	きる	きれ	きよ
	な行	(煮)	に	に	にる	にる	にれ	によ
	は行	(干)	ひ	ひ	ひる	ひる	ひれ	ひよ
	ま行	(見)	み	み	みる	みる	みれ	みよ
	や行	(射)	い	い	いる	いる	いれ	いよ
	わ行	(居)	ゐ	ゐ	ゐる	ゐる	ゐれ	ゐよ

	行	語						
段	が行	漕	が	ぎ	ぐ	ぐ	げ	げ
	ば行	遊	ば	び	ぶ	ぶ	べ	べ
	な行	死	な	に	ぬ	ぬ	ね	ね
	ら行	有	ら	り	る	る	れ	れ
	か行變格	(來)	こ	き	くる	くる	くれ	こい
	さ行變格	(爲)	せ	し	し	する	すれ	せよ しろ
上	か行	(着)	き	き	きる	きる	きれ	きよ
	な行	(煮)	に	に	にる	にる	にれ	によ
	は行	(干)	ひ	ひ	ひる	ひる	ひれ	ひよ
	ま行	(見)	み	み	みる	みる	みれ	みよ
	や行	(射)	い	い	いる	いる	いれ	いよ
	わ行	(居)	ゐ	ゐ	ゐる	ゐる	ゐれ	ゐよ

上二								
か行	起	き	き	く	くる	くれ	きよ
た行	朽	ち	ち	つ	つる	つれ	ちよ
は行	用	ひ	ひ	ふ	ふる	ふれ	ひよ
ま行	試	み	み	む	むる	むれ	みよ
や行	報	い	い	ゆ	ゆる	ゆれ	いよ
ら行	懲	り	り	る	るる	るれ	りよ
が行	過	ぎ	ぎ	ぐ	ぐる	ぐれ	ぎよ
だ行	恥	ぢ	ぢ	づ	づる	づれ	ぢよ
ば行	延	び	び	ぶ	ぶる	ぶれ	びよ

下一							
か行	蹴	け	け	ける	ける	けれ	けよ

あ行	(得)	え	え	う	うる	うれ	えよ
か行	受	け	け	く	くる	くれ	けよ

一							
か行	起	き	き	きる	きる	きれ	きよ
た行	朽	ち	ち	ちる	ちる	ちれ	ちよ
は行	用	ひ	ひ	ひる	ひる	ひれ	ひよ
ま行	試	み	み	みる	みる	みれ	みよ
や行	報	い	い	いる	いる	いれ	いよ
ら行	懲	り	り	りる	りる	りれ	りよ
が行	過	ぎ	ぎ	ぎる	ぎる	ぎれ	ぎよ
だ行	恥	ぢ	ぢ	ぢる	ぢる	ぢれ	ぢよ
ば行	延	び	び	びる	びる	びれ	びよ

か行	蹴	け	け	ける	ける	けれ	けよ
あ行	(得)	え	え	える	える	えれ	えよ
か行	受	け	け	ける	ける	けれ	けよ

下二

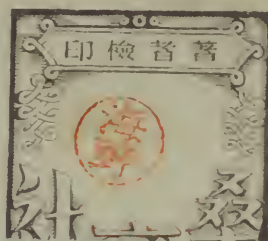
さ行	馳	せ	せ	す	する	すれ	せよ
た行	捨	て	て	つ	つる	つれ	てよ
な行	尋	ね	ね	ぬ	ぬる	ぬれ	ねよ
は行	教	へ	へ	ふ	ふる	ふれ	へよ
ま行	褒	め	め	む	むる	むれ	めよ
や行	越	え	え	ゆ	ゆる	ゆれ	えよ
ら行	流	れ	れ	る	るる	るれ	れよ
わ行	植	ゑ	ゑ	う	うる	うれ	ゑよ
が行	告	げ	げ	ぐ	ぐる	ぐれ	げよ
ざ行	交	ぜ	ぜ	ず	ずる	ずれ	ぜよ
だ行	撫	で	で	づ	づる	づれ	でよ
ば行	述	べ	べ	ぶ	ぶる	ぶれ	べよ

下一

さ行	馳	せ	せ	せる	せる	せれ	せよ
た行	捨	て	て	てる	てる	てれ	てよ
な行	尋	ね	ね	ねる	ねる	ねれ	ねよ
は行	教	へ	へ	へる	へる	へれ	へよ
ま行	褒	め	め	める	める	めれ	めよ
や行	越	え	え	え	える	えれ	えよ
ら行	流	れ	れ	れ	れる	れれ	れよ
わ行	植	ゑ	ゑ	ゑ	ゑる	ゑれ	ゑよ
が行	告	げ	げ	げ	げる	げれ	げよ
ざ行	交	ぜ	ぜ	ぜ	ぜる	ぜれ	ぜよ
だ行	撫	で	で	で	でる	でれ	でよ
ば行	述	べ	べ	べ	べる	べれ	べよ

昭和十二年一月十五日印刷
昭和十二年一月二十日發行

實生活に及ぼす
國語と文字の波紋
改正定價壹圓七拾錢

著者 海野昌平
東京市神田區錦町一ノ三錦ビル
發行者 天野要
東京市小石川區白山御殿町六四
印刷者 新妻乾

發行所
東京市神田區錦町一ノ三錦ビル
振替口座東京三五二二五番
桑文社

關東賣捌元
東京市神田區錦町一ノ一一
振替口座六〇一八三番
照林堂

關西賣捌元
大阪市東區北久太郎町四ノ一六
振替口座大阪二三一番
合資會社 柳原書店

趣味常識
故事と成語